

中国語の文末助詞“了”の意味体系の構築

—認知意味論の観点から—

2021年3月

新潟大学大学院

現代社会文化研究科

氏名 DENG Yuyang

目次

凡例	1
第1章 序論	2
1.1 研究対象	2
1.2 研究目的	2
1.3 研究意義	2
1.4 研究方法	4
1.5 論文構成	4
1.6 新規性	8
1.7 用例の選定と出典	8
第2章 先行研究の検証	12
2.1 はじめに	12
2.2 文末助詞“了”の意味に関する先行研究とその問題点	12
2.2.1 文末助詞“了”の基本的意味を説明するための意味概念	12
2.2.2 文末助詞“了”の三域の意味	13
2.2.3 文末助詞“了”の動相的意味	16
2.2.4 文末助詞“了”の時制的意味	19
2.2.5 文末助詞“了”の意味に関する問題点	21
2.3 文末助詞“了”の構文特徴に関する先行研究とその問題点	22
2.3.1 文末助詞“了”の三域の意味を生み出すための構文的条件	22
2.3.2 「特定の文成分+“了”」構文における文成分の特徴	23
2.3.3 文末助詞“了”と語尾“了”の構文的相違	24
2.3.4 文末助詞“了”の構文特徴に関する問題点	24
2.4 文末助詞“了”の語用論的機能に関する先行研究とその問題点	25
2.5 終わりに	28
第3章 文末助詞“了”の意味体系の様式の提起	31
3.1 はじめに	31
3.2 概念、意味、定義	31
3.3 文末助詞“了”の言語的意味と語用論的意味	32
3.4 文末助詞“了”の内包的意味と外延的意味	33
3.5 文末助詞“了”の意味体系の様式	37
3.6 終わりに	38
第4章 文末助詞“了”の内包的意味	41
4.1 はじめに	41
4.2 イメージ・スキーマ	41
4.3 狭義の「転換」義	41
4.4 広義の「転換」義	42
4.5 先行研究で言及される「転換」義に関する精緻化	44
4.6 精緻化された「転換」義に関する属性	46
4.7 終わりに	46
第5章 文末助詞“了”の内包的意味の意味機能拡張	48
5.1 はじめに	48
5.2 充足感を伝える機能	48

5.3	過度という語感を伝える機能	50
5.4	話題を終了させる機能	52
5.5	前提を提示する機能と結論を導き出す機能	54
5.6	事象が継続していくという語感を伝える機能	56
5.7	終わりに	57
第6章	文末助詞“了”の行為域の外延的意味	59
6.1	はじめに	59
6.2	先行研究で言及される“了2<行為>”の意味に関する精緻化	59
6.3	精緻化された“了2<行為>”の意味に関する属性	63
6.4	終わりに	66
第7章	文末助詞“了”の認識域の外延的意味	68
7.1	はじめに	68
7.2	先行研究で言及される“了2<認識>”の意味に関する精緻化	68
7.3	実例に関する意味解釈	71
7.3.1	発話時間より早く生じる事象に関する「再肯定・再否定」	72
7.3.2	発話時間より遅く生じる事象に関する「再肯定・再否定」	76
7.4	精緻化された“了2<認識>”の意味に関する属性	77
7.5	終わりに	78
第8章	文末助詞“了”の言語域の外延的意味	80
8.1	はじめに	80
8.2	先行研究で言及される“了2<言語>”の意味に関する精緻化	80
8.3	実例に関する意味解釈	81
8.3.1	「体言+“了2”」構文に関する「要聴」	82
8.3.2	「慣用語+“了2”」構文に関する「要聴」	83
8.3.3	命令文に関する「要聴」	84
8.3.4	疑問文に関する「要聴」	85
8.3.5	非未来時制の命題と未来時制の命題に関する「要聴」	86
8.4	精緻化された“了2<言語>”の意味に関する属性	87
8.5	終わりに	89
第9章	文末助詞“了”の意味間の関係	91
9.1	はじめに	91
9.2	文末助詞“了”の内包的意味と外延的意味の「最大察知範囲-直接察知範囲-察知中心」関係	91
9.2.1	際立ち	91
9.2.2	察知範囲	92
9.2.3	「転換」義と「変化」義の関係	93
9.2.4	「転換」義と「出来事生起」義の関係	93
9.2.5	「転換」義と「再肯定・再否定」義の関係	94
9.2.6	「転換」義と「要聴」義の関係	96
9.3	文末助詞“了”の外延的意味間の「重なる」関係	97
9.3.1	先行研究の再整理を踏まえた結論	97
9.3.2	文末助詞“了”を用いるための意味的条件	99
9.4	終わりに	102
第10章	文末助詞“了”の行為域の外延的意味を生み出すための構文的条件の提起	104

10.1	はじめに.....	104
10.2	「瞬間形式」.....	104
10.3	「過程形式」.....	106
10.4	「相対静相形式」と「絶対静相形式」.....	107
10.5	「瞬間/過程/静相」義と「瞬間形式/過程形式/静相形式」の関係.....	108
10.6	焦点連結関係.....	109
10.7	「変化/出来事生起」義を生み出すための構文的条件.....	111
10.8	終わりに.....	111
第11章	文末助詞“了”の行為域の外延的意味を生み出すための構文的条件に関する検証.....	113
11.1	はじめに.....	113
11.2	「メタ発話場面」.....	114
11.3	「述語優先」原則と「焦点争奪」現象.....	115
11.4	「瞬間形式/過程形式/絶対静相形式」の述語に基づく“了2<行為>”構文の分類.....	116
11.5	「瞬間形式の述語+“了2<行為>”」構文.....	116
11.5.1	「メタ発話場面」における「瞬間形式の述語+“了2<行為>”」構文... ..	116
11.5.1.1	非語尾的な補語、連体修飾語、連用修飾語が付与されない場合... ..	116
11.5.1.2	非語尾的な補語/連体修飾語/連用修飾語が付与される場合.....	117
11.5.2	「変化」的信息が明示される発話場面における「瞬間形式の述語+“了2<行為>”」構文.....	126
11.6	「過程形式の述語+“了2<行為>”」構文.....	131
11.7	「絶対静相形式の述語+“了2<行為>”」構文.....	133
11.8	終わりに.....	135
第12章	文末助詞“了”の外延的意味の意味機能拡張.....	136
12.1	はじめに.....	136
12.2	婉曲という語感を伝える機能.....	136
12.3	任意列挙する機能.....	137
12.4	指示・命令する機能.....	139
12.5	聞き手の反応を期待する機能.....	139
12.6	報告する機能と解説する機能.....	140
12.7	対話者共有情報を修正する機能.....	141
12.8	新情報を伝える機能と旧情報を伝える機能.....	142
12.9	他のいわゆる語気や語用論的機能に関する説明.....	145
12.10	終わりに.....	145
第13章	文末助詞“了”の内包的意味と外延的意味からみる動相問題と時制問題..	148
13.1	はじめに.....	148
13.2	文末助詞“了”の内包的意味からみる文末助詞“了”の動相問題.....	148
13.2.1	中国語の動相という文法カテゴリーのイメージ・スキーマ.....	148
13.2.2	文末助詞“了”の動相的意味の語用論的特徴.....	149
13.2.3	文末助詞“了”の動相的意味の形成メカニズム.....	150
13.2.4	動相の視点からみる文末助詞“了”と語尾“了”の相違.....	152
13.3	文末助詞“了”の外延的意味からみる文末助詞“了”の時制問題.....	154
13.3.1	時制の構成と分類.....	154

13.3.2	文末助詞“了”の過去時制の意味に関する問題.....	155
13.3.3	文末助詞“了”の未来時制の意味に関する問題.....	157
13.3.4	文末助詞“了”の「現在関連性」に関する問題.....	158
13.3.5	文末助詞“了”の時制問題の解決策.....	160
13.3.6	終わりに.....	163
第14章	文末助詞“了”の意味体系の最終確立と先行研究の問題点の振り返り....	166
14.1	はじめに.....	166
14.2	文末助詞“了”の意味体系の最終確立.....	166
14.3	先行研究の問題点の振り返り.....	171
14.4	終わりに.....	172
第15章	結論.....	173
15.1	文末助詞“了”の意味体系を構築することの重要性.....	173
15.2	今後の課題.....	174
参考文献	178
1	中国語の文献(アルファベット順).....	178
2	日本語の文献(アルファベット順).....	186
3	欧文の文献(アルファベット順).....	189
謝辞	191

凡例

1 出典無しの内容

出典が付されない例文、訳文、図表は筆者によるものである。

2 例文の冒頭に付される記号

*	非文、つまり統語的に成立しない文を指す。
?	不完全な文法形式を持つ文か、または、それ自体以外の発話場面や文脈が付与されなければ理解し難い文を指す。
#	当該文脈では適切でない文を指す。

3 他の記号

“了”	文末助詞“了”を指す。
“了 2<行為/認識/言語>”	行為域/認識域/言語域の文末助詞“了”を指す。
(用語 A)・(用語 B)	用語 A と用語 B は本質的に共通し、単に呼び方が異なるという同等関係を含意する選択関係「A または B」を指す。
(用語 A) / (用語 B)	用語 A と用語 B は本質的に異なるという対比関係を含意する選択関係「A または B」を指す。
<u>下線</u> / <u>二重下線</u> / <u>波線</u>	際立って注意されたい箇所を指す。1つの例文において、1か所を際立たせるには <u>下線</u> だけを用い、2か所を際立たせるには <u>下線</u> と <u>二重下線</u> を同時に用い、3か所を際立たせるには <u>下線</u> 、 <u>二重下線</u> 、 <u>波線</u> を同時に用いる。

第1章 序論

1.1 研究対象

「中国語の時間的意味を表す文法手段において、“了”が使用頻度が最も高く、用法が最も複雑な文法手段である。第二言語教育において、“了”を教えることは非常に重要であり、非常に難しい」¹(張雪辰 2018:30-31)。通常助詞“了”は語尾“了”と文末助詞“了”に分けられる。中国語学において、語尾“了”は“了1”とも呼ばれ、文末助詞“了”は“了2”とも呼ばれる(呂叔湘 1999:351)。本論文は認知意味論の観点から“了2”の意味を明らかにするものである。認知意味論の観点では、「語の意味を1つの節点(意味)に還元することは不可能であり、複数の節点からなるネットワークを考えることが必要になる」(靱山・深田 2003b:169)。したがって、本論文は“了2”の意味というより、“了2”の意味体系を研究対象とする。

基準によって、“了2”の意味分類が異なる。例えば、基本的意味と派生的意味、内包的意味と外延的意味、命題的意味とモダリティ的意味、認知的意味と形式的意味²、言語的意味と語用論的意味、動相的意味と非動相的意味、時制的意味と非時制的意味などの分類様式がある。本論文は、主に“了2”の意味を言語的意味と語用論的意味という2つのカテゴリーに分類し、また、“了2”の言語的意味を内包的意味と外延的意味という2つのカテゴリーに分類する。このように、“了2”の意味体系を研究対象とする本論文は、“了2”の内包的意味、外延的意味、語用論的意味という3種類の意味を研究対象とするものでもある。

1.2 研究目的

まず、「初学者だけでなく、何年中国語をやってもなかなかとらえきれないものの一つに“了”がある」と指摘される(荒川 1981:70)。「『了』についての大体の法則は、各語法書にも述べられているので、それだけ読んでいれば何も問題はないようなものの、いざ実際に文章を書いたり、読んだりする時に語法書の説明だけでは解決できないことが時々起こってくる。精密に読んだり書いたりする者にとっては、これは大きな悩みである」(高倉 1955:367)。特に“了”は非中国語母語話者に用いられると、往々にして外国人らしい使い方が見受けられる(史有为 2016:126)。また、中国語学習者にとって、「“了2”の意味がわからなければ中国語は読めない」と指摘される(荒川 2010:4)。目下、“了2”の意味は「実現」、「事態の変化」、「新状況の出現」などの「抽象的な文法用語」で記述されるが、それらの文法用語は「学習者の助けになりにくい」(山崎 2010:68)。

そのため、本論文の研究目的は、“了2”の意味体系を原理的に明らかにして非中国語母語話者の“了2”の習得を促進することである。

1.3 研究意義

本論文の研究意義は次の3点でまとめられる。

第一に、“了 2”の諸問題を乗り越えるための決定的な説明は未だに与えられていないと指摘されているため(宋绍年・李晓琪 2000:562-567)、“了 2”の研究を深めることは有意義である。「了 2」が使用頻度が最も高い機能語の 1 つ³であり(何文彬 2013:10)、論争が多くて常に高い話題性を呼んでいる研究対象である(彭小川・周芍 2005:136、陆方喆 2014:43)。“了 2”は「まるで中国語学の『ゴールドバッハの予想』⁴のような存在である。中国で初めて近代中国語文法を検討する著作の《新著国语文法》が発表されたのは 1924 年のことであった。助詞“了”に関する研究もその時から始まった。これまで、研究者らは様々な観点から助詞“了”の研究を展開しており、相当な成果を収めているが、しかしながら、人間の思考力の限界に挑むほど、“了”がもたらす難題はあまりにも多すぎて複雑すぎて、これまで“了”の難題を乗り越えるための決定的な説明は未だに与えられていない⁵(宋绍年・李晓琪 2000:563)。「了 1」、「了 2」についての研究状況は、中国古代のある名言が示す状況に合っているかもしれない。それは、『切っても切れず、整理してもなお乱れている』ということである⁶(刘勋宁 1998:38)。また、“了 1”より、“了 2”のほうがずっと難しく(李大忠 1996:92、周小兵・欧阳丹 2014:8)、「難中の難」(难中之难)(彭小川・周芍 2005:136)である。なぜならば、“了 2”のほうが“了 1”より文法化がいつそう進んでいるからである⁷。「了」の文法的意味については、考察に考察を重ねたが、“了 1”の動相や時制の問題だけでもまだ根本から解明されていない現状において⁸(彭兰玉・吴青峰 2006:102)、“了 2”の問題は解決可能であろうか。

第二に、「中国語学において、文末助詞“了”の意味や属性に対する認識はまだ一致していない」と指摘されているため⁹(张兰英 2005:132)、“了 2”の意味体系を研究することは有意義である。“了 2”の「意味や属性に対する認識はまだ一致していない」ということは具体的に次の 3 点でまとめられる。まず、「了 2」の意味分類に関する先行研究は、その分類様式が単純すぎたり複雑すぎたりするという問題点がある¹⁰(肖治野・沈家煊 2009:518)。例えば、従来の研究において“了 2”の意味は 1 種類だけあるとの分析¹¹、2 種類あるとの分析¹²、少なくとも 6 種類あるとの分析¹³、7 種類あるとの分析¹⁴、8 種類あるとの分析¹⁵、“了 2”の意味は生産性が高いためその意味の種類が数えきれないほどあるとの分析¹⁶まで出されている。また、“了 2”の基本的意味¹⁷を説明するための概念の捉え方や位置づけが曖昧である。歴史的には、“了 2”の主観的意味・モダリティ的意味は“了 2”の客観的意味・命題的意味から生まれてきた¹⁸。そのため、先行研究では“了 2”の客観的意味・命題的意味が“了 2”の基本的意味と捉えられる(肖治野・沈家煊 2009:518-527)。刘勋宁(1998:35-48)、刘月华他(2001:379)、吕文华(2010:548-556)のまとめから明らかなように、“了 2”の基本的意味を説明するためには、通常「変化」(変化)、「出現」(出現)、「実現」(实现)、「発生」(发生)という 4 つの概念が用いられる¹⁹。しかしながら、「変化」、「出現」、「実現」、「発生」という概念は、文字どおりに捉える[+変化]、[+出現]、[+実現]、[+発生]という具体的な意味特徴を示す概念であるのか、それとも、2 つの状態の接点に内包される「転換」²⁰という抽象的な認知様式を示す概念であるのかについて、未だに定説はない(杉村 2009:1-12、周小兵・欧阳丹 2014:8-15)。つまり、「変化」、「出現」、「実現」、「発生」という意味概念の捉え方や位置づけが曖昧である現状である。さらに、「変化」、「出現」、「実現」、「発生」という意味概念に基づく「変化」

義、「出現」義、「実現」義、「発生」義のいずれを“了 2”の基本的意味とすればよいのかについて、国内外においても論争が続いており、統一的な見解はない²¹。

第三に、現時点では、「意味分析を優先する応用型の中国語教授法の新体系」(以语义分析为纲的汉语语法国际教学应用型新体系)の構築が呼びかけられているため(邵敬敏 2020:3)、“了 2”の意味体系を構築することは中国語学習や中国語教育の面においても重要な意義を持つ。李大忠(1996:92)が指摘するように、「留学生の誤用例文の中で、“了”の誤用が一番多かった」²²。郭春貴(2010:39-45)、周小兵・欧阳丹(2014:8)は留学生の誤用例文を分析した結果、日本人留学生にとって“了”の習得は実に難しいと結論している。陈莉・潘海华(2017:107)も「欧米人留学生にとって、“着、过”という機能語より、“了”のほうが捉えにくい」²³と述べている。“了 2”の教授法は非常に重要かつ難しい課題であり²⁴、様々な難しい課題の中で「最大な難関」(張文青 2012:105)、「難中の難」(难点中的难点)(赵立江 1997:123)となっている。そのため、“了 2”の意味をより明らかにすることは非中国語母語話者の中国語学習を促進することに役立つと考えられる。

1.4 研究方法

中国語は「絵画」(绘画)的言語、幼児用言語、混成言語などに例えられ、認知的特徴が非常に際立つとされる(Tai 1985:19, 1989:31)。また、中国語は、統語上の特徴より意味上の特徴が際立つ言語ともされる(任永军 2010:64-71)。そのため、本論文は主に認知意味論の立場から議論を展開する。一方、認知意味論は形式意味論と全く無縁ではなく、共通するところもあるので(束定芳 2008:25)、本論文は“了 2”の意味分析に形式意味論の観点も若干引用する。

本論文の研究方法は、意味論の立場から、認知意味論の三域(three domains)説、典型(prototype、プロトタイプ)説、イメージ・スキーマ(image schema)説、スキヤニング(scanning)説、際立ち(salience・prominence)説、察知範囲(scope)説、概念メタファー(conceptual metaphor)説などの観点と、形式意味論の真理条件(truth condition)、焦点連結(association with focus)などの概念を合わせて、“了 2”の多義性の問題を検討するということである。

1.5 論文構成

次の表 1 が示すように、本論文の主な内容は本章を含めて 15 章から構成される。

表1 本論文の構成

第1章	序論
第2章	先行研究の検証
第3章	文末助詞“了”の意味体系の様式の提起
第4章	文末助詞“了”の内包的意味
第5章	文末助詞“了”の内包的意味の意味機能拡張
第6章	文末助詞“了”の行為域の外延的意味
第7章	文末助詞“了”の認識域の外延的意味
第8章	文末助詞“了”の言語域の外延的意味
第9章	文末助詞“了”の意味間の関係
第10章	文末助詞“了”の行為域の外延的意味を生み出すための構文的条件の提起
第11章	文末助詞“了”の行為域の外延的意味を生み出すための構文的条件に関する検証
第12章	文末助詞“了”の外延的意味の意味機能拡張
第13章	文末助詞“了”の内包的意味と外延的意味からみる動相問題と時制問題
第14章	文末助詞“了”の意味体系の最終確立と先行研究の問題点の振り返り
第15章	結論

第2章は「先行研究の検証」である。本章は、先行研究の成果を紹介する他に、先行研究の問題点を整理する。

第3章は「文末助詞“了”の意味体系の様式の提起」である。本章は、まず、典型説に基づいて“了2”の意味を言語的意味と語用論的意味に分類し、その言語的意味をまた内包的意味と外延的意味に分類する。この分類様式を“了2”の意味体系の様式とする。また、先行研究でよく言及される「転換」義は“了2”の内包的意味であり、肖治野・沈家煊(2009:518-527)が提起している“了2”の行為域、認識域、言語域の意味は“了2”の外延的意味であるということを明らかにする。

第4章は「文末助詞“了”の内包的意味」である。前章は「転換」義が“了2”の内包的意味であることを説明する。本章は、先行研究において“了2”の「転換」義の認知的本質を解釈(construal)²⁵するために提起されてきた「点」的スキーマに補足説明を加えた上で、“了2”の「転換」義をより精緻化(elaboration)²⁶し、「転換」義の属性をより明らかにする。要するに、本章は「転換」義のより厳密な定義・意味記述と意味属性を提示する。

第5章は「文末助詞“了”の内包的意味の意味機能拡張」である。本章は、“了2”の一部の語用論的機能が“了2”の内包的意味の意味機能の拡張、つまり「転換」義を伝える機能の拡張に由来するという主張を論証する。主に充足感を伝える機能、過度という語感を伝える機能、話題を終了させる機能、前提を提示する機能、結論を導き出す機能、事象が継続していくという語感を伝える機能という6つの語用論的機能に絞って論証を展開する。ところで、本章も、前章で規定する「転換」義の意味記述や意味属性の妥当性を検証する章である。

第6章は「文末助詞“了”の行為域の外延的意味」である。本章は、まず、“了2”の客観的意味・命題的意味に関する先行研究を再整理した上で、“了2”の行為域の外延的意味を「変化」(変化、become)義と「出来事生起」(事件发生、occur)義と規定する。また、「変化/出来事生起」義に関する省略不可能性や客観性などの属性を明らかにする。要するに、本章は“了2”の行為域の外延的意味に関する定義・意味記述と意味属性を提示する。

第7章は「文末助詞“了”の認識域の外延的意味」である。本章は、まず、劉綺紋(2006:201-244)が提起している“了2”の「再選択」意識に基づいて、“了2”の認識域の外延的意味を「再肯定・再否定」(再肯定・再否定、re-affirm・re-negate)義と規定する。また、「再肯定・再否定」義に関する省略可能性や主観性などの属性を明らかにする。要するに、本章は“了2”の認識域の外延的意味に関する定義・意味記述と意味属性を提示する。

第8章は「文末助詞“了”の言語域の外延的意味」である。本章は、まず、“了2”が「主観近距離対話式文体」(主観近距交互式语体)であるという王洪君他(2009:312-333)の主張に基づいて、“了2”の言語域の外延的意味を「要聴」(请求聆听、listen)義と規定する。また、「要聴」義に関する省略可能性や間主観性などの属性を明らかにする。要するに、本章は“了2”の言語域の外延的意味に関する定義・意味記述と意味属性を提示する。

第9章は「文末助詞“了”の意味間の関係」である。本章は、まず、察知範囲説に基づいて、“了2”の内包的意味と外延的意味の認知的関係、つまり「最大察知範囲-直接察知範囲-察知中心」関係を明らかにする。また、“了2”の外延的意味間の「重なる」(交叉)(肖治野・沈家煊 2009:518-527)関係も明らかにする。

第10章は「文末助詞“了”の行為域の外延的意味を生み出すための構文的条件の提起」である。本章は構文特徴の側面から、「変化」義と「出来事生起」義を生み出すためのそれぞれの前提条件を提起する。具体的には、第2章2.2節で認知意味論の観点に基づいて規定する「瞬間」、「過程」、「静相」という3つの概念と、形式意味論の焦点連結という概念を合わせて、「変化」義と「出来事生起」義を生み出すためのそれぞれの構文的条件を提起する。

第11章は「文末助詞“了”の行為域の外延的意味を生み出すための構文的条件に関する検証」である。本章は、まず、行為域の“了2”が含まれる文を網羅的に次の3種類に分ける。つまり、「瞬間形式の述語+“了2<行為>」構文、「過程形式の述語+“了2<行為>」構文、「絶対静相形式の述語+“了2<行為>」構文である²⁷。また、この3種類の構文に基づいて、前章が提起する、「変化」義と「出来事生起」義を生み出すためのそれぞれの構文的条件の妥当性を検証する。

第12章は「文末助詞“了”の外延的意味の意味機能拡張」である。本章は、“了2”の一部の語用論的機能が“了2”の外延的意味の意味機能の拡張、つまり「変化/出来事生起/再肯定・再否定/要聴」義を伝える機能の拡張に由来するという主張を論証する。主に、婉曲という語感を伝える機能、任意列挙する機能、指示・命令する機能、聞き手の反応を期待する機能、報告する機能、解説する機能、対話者共有情報を修正する機能、新情報を

伝える機能、旧情報を伝える機能という9つの語用論的機能に絞って論証を展開する。ところで、本章は、第6章から第8章までで規定する「変化」義、「出来事生起」義、「再肯定・再否定」義、「要聴」義の意味記述や意味属性の妥当性を検証する章でもある。

第13章は「文末助詞“了”の内包的意味と外延的意味からみる動相問題と時制問題」である。本章は、“了2”の「転換」義、「変化」義、「出来事生起」義、「再肯定・再否定」義、「要聴」義に関する意味記述、意味属性、意味関係に基づいて、“了2”の動相問題と時制問題に統一的な説明を試みる。ところで、本章は、本論文で規定する“了2”の「転換」義、「変化」義、「出来事生起」義、「再肯定・再否定」義、「要聴」義の意味記述や意味属性の妥当性を総合的に検証する章でもある。

第14章は「文末助詞“了”の意味体系の最終確立と先行研究の問題点の振り返り」である。本章は、まず、第3章で提起する“了2”の意味体系の様式に基づいて、“了2”の具体的な意味体系を最終的に確立する。また、第2章で整理する先行研究の問題点をすべて解決したかどうかを再確認する。

第15章は「結論」である。本章は、“了2”の意味体系を構築することの重要性、および今後の研究課題を述べる。

次の表2は、本論文の主な内容と筆者のこれまでの発表論文の対応関係を示す。左の欄は本論文の章を示す。右の欄は、これまで筆者が学術誌や学術大会論文集で発表した論文を示す。本論文の第2章から第13章までの内容は、右の欄が示す論文に大幅な加筆修正を施したものである。

表2 本論文の主な内容と筆者の発表論文の対応関係

第2章	鄧宇陽(2020c:119-136)
第3章	鄧宇陽(2019:117-133)
第4章	鄧宇陽(2020b:61-77)、邓宇阳(2020b:136-153)
第5章	鄧宇陽(2020b:61-77)、邓宇阳(2020b:136-153)
第6章	鄧宇陽・謝珍(2018:233-237)、鄧宇陽(2019:117-133)、Deng(2019:63-68)
第7章	鄧宇陽・謝珍(2018:233-237)、鄧宇陽(2019:117-133)、邓宇阳(2019b:297-301)、Deng(2019:63-68)、鄧宇陽(2021)
第8章	鄧宇陽・謝珍(2018:233-237)、鄧宇陽(2019:117-133)、Deng(2019:63-68)、鄧宇陽(2020d:102-106)、邓宇阳(2021(掲載決定))
第9章	鄧宇陽(2019:117-133)
第10章	邓宇阳(2019a:42-54)
第11章	鄧宇陽(2017:243-247)、鄧宇陽(2018:58-66)、鄧宇陽(2020a:63-90)
第12章	鄧宇陽・謝珍(2018:233-237)、邓宇阳(2019b:297-301)、邓宇阳(2021(掲載決定))
第13章	邓宇阳(2020a:27-33)

1.6 新規性

巨視的にみれば、本論文の新規性は主に次の3点でまとめられる。

第一に、本論文の最も大きな新規性は、“了2”の「言語的意味-語用論的意味」、「内包的意味-外延的意味」という意味体系を提示することである。張蘭英(2005:132)が指摘するように、“了2”の意味に対する認識はまだ一致しておらず、意味の側面から“了2”を議論する余地は多いのである。特に、「典型-非典型」、「内包-外延」という2つの二項対立関係を基準に“了2”の意味を分類する先行研究はまだ見られなかった。

第二に、“了2”の構文的問題や語用論的問題などの非意味論的問題を意味論の立場から分析するということが本論文の重要な新規性の1つである。

第三に、一貫して認知意味論の三域説を用いて“了2”の諸問題を説明するということが本論文の重要な新規性の1つである。Sweetser(1990:11、113-148)は認知意味論の立場から、複文の意味を内容域(real-world content domain)、認識域(epistemic domain)、言語域(speech-act domain)という3つの側面から捉えることが可能であるということを提示している。初めてSweetser(1990:11、113-148)の三域(three domains)説から“了2”の用法を検討したのは王伟(2006:91-100)であるが、初めて三域説から“了2”の意味を検討したのは肖治野・沈家煊(2009:518-527)である。内容域における“了2”は主に何らかの客観的な動態を示すので、肖治野・沈家煊(2009:518-527)は“了2”の内容域を行為域(行域)と呼んでいる。張宝勝(2011:427-429)と鄧思穎(2013:195-200)は方言の側面から“了2”の行為域、認識域、言語域の意味を再考察している。周小兵・歐陽丹(2014:8-15)は第二言語習得の側面から“了2”の行為域、認識域、言語域の意味を再考察している。張杰(2014:133-134)は“了2”の行為域の存在の必要性に疑問を抱いている。李思沅(2019:64-68)は“了2”の言語域に内包される「触発直前の状態」(准触発状態)を提起して論じている。三域説で“了2”を分析する研究は上述の先行研究以外には見られない。そのため、“了2”の研究領域において、認知意味論の三域説はまだ十分に活用されていないということが分かる。

微視的にみれば、次のことも本論文の新規性を示す。例えば、1955年から2020年までの先行研究で見られる“了2”の問題点を網羅的に整理すること²⁸、“了2”の語用論的機能を網羅的にまとめること、“了2”の各語用論的機能の形成要因を意味論の立場から体系的に説明すること、非中国語母語話者のために“了2”の定義・意味記述をより具体化して実用化すること、“了2”の各種類の意味の位置づけと属性を考察すること、“了2”の意味間の関係を究明すること、“了2”の行為域の意味を生み出すための構文的条件を提示すること、“了2”構文²⁹の述語の焦点位置を奪いやすい文成分を明らかにすること、内包的意味と外延的意味の観点から“了2”の時間的問題を解決することなども、本論文の新規性を示す。

1.7 用例の選定と出典

本論文の研究パターンは、ある語の、共時的な側面においてすでに承認されている意味、構文特徴、語用論的機能などを再整理した上で、意味論の立場から関連する問題点を原理的に解明することであるが、ある語の意味、構文特徴、語用論的機能などを通時的に分析

したり、統計的に整理したりすることではない。つまり、本論文は、ある語の歴史的変遷、文化的相違などの要素を除外しての研究パターンである。したがって、本論文の用例について、目下中国社会で常用される表現に絞るが、理解され難い表現や、地方や時代によって意味が大きく異なる表現などは避ける。

本論文の用例は、学術誌、論文集、博士論文、単行本、ネット上のデータによるものもあれば、自作用例もある。ネット上のデータは、コーパスの用例とコーパス以外の用例に分けられる。コーパスの用例は、北京言語大学ビッグデータ言語教育研究所コーパス(略称 BCC: <http://bcc.blcu.edu.cn>)と北京大学中国言語学研究センターコーパス(略称 CCL: <http://ccl.pku.edu.cn>)による。ネット上のコーパス以外の用例は³⁰、《百度贴吧》公式サイト(<http://tieba.baidu.com>)、YouTube 公式サイト(<https://www.youtube.com/>)による。

〈注〉

1. 原文は、“‘了’是使用频率最高，用法最复杂的时体表达手段，它是汉语作为第二语言教学中不可回避的教学难点和重点”である。
2. 本論文において、形式的意味は認知的意味に対して述べる意味である。本論文は何らかの認知様式、例えば、イメージ(image)、イメージ・スキーマ(image schema)などを認知的意味と呼び、特定の言語形式によって表記される意味を形式的意味と呼ぶことにする。
3. 原文は、“现代汉语通常称为‘了2’的助词是使用频率最高的虚词之一”である。
4. 「ゴールドバッハの予想」は、そもそも数学者ゴールドバッハ(Goldbach)が1742年に発表した数学上の問題であり、現在もなお完全には解決されていないとされている。宋紹年・李曉琪(2000:562-567)は「ゴールドバッハの予想」を「完全には解決されていない問題」の直喩として用いているのである。
5. 原文は、“动态助词‘了’的研究仿佛是汉语语法研究里的‘哥德巴赫猜想’。中国第一部完整地描写白话文语法的专著《新著国语法》发表于一九二四年，从那时起，中国学者就开始了‘了’字的研究。七十多年来学者们对‘了’字进行了多角度、全方位的研究，取得了很多成果，不断逼近‘了’字的真谛，但是，‘了’字牵涉的问题实在是太多了，太复杂了，它简直是对人们思维的一个挑战，‘了’字研究至今还没有取得重大的、具有决定性意义的突破”である。
6. 原文は、“要找一段话来概括现有的关于两个‘了’的研究成果的话，大概就是那句有名的‘剪不断，理还乱’”である。
7. 詳細については、太田(1958:351-354)、王力(1980:447-448)、刘勛宁(1998:39-47)、齐沪扬(2003:30-36)、高順全(2006:60-66)、陈鹏飞(2007:138-140)などを参照のこと。例えば、高順全(2006:60-66)は「動詞→結果補語→パーフェクト標識→語気助詞→談話標識」という“了”の文法化の経路を基準に、“了1”と“了2”の文法化の段階を判断する。
8. 原文は、“对‘了’的语法意义也是研究再研究，仅仅是‘了1’就难以说清它是体是时，抑或体兼时”である。
9. 原文は、“语法学界对句末的‘了’的研究，还没有一致性的结论，无论是对它所表示的含义，还是对它的词性认定，都存在差异”である。
10. 原文は、“以往对句尾语气词‘了2’的语义刻画存在过于繁杂和过于概括两种倾向”である。
11. 例えば、竟成(1993:52-57)、王维贤(1997:171-187)は「実現」(实现)義、张立昌(2014:24)は「発生」(发生)義を主張する。
12. 例えば、朱德熙(1982:209-210)は「新状況の出現」(新情况的出現)と「変化」(变化)と定義しており、吕叔湘(1999:351-358)は「事態の変化が出現したことを肯定した」(肯定事态出现了变化)と、「事態の変化が出現しようとしていることを肯定した」(肯定事态即将出现变化)と定義している。
13. 郭锐(2008:5-15)は、少なくとも「実現/変化」(实现/变化)義、「計画変化」(计划改变)義、「条件変化」(条件变化)義、「相違」(相异)義、「過度」(偏离)義、「認識変化」(认识变化)義という6種類に分けられると主張する。
14. Chao(1968:354-356)は「事柄の開始」(事情开始)、「新状況に応じるための命令」(适应新的情况的命

- 令)、「一段落がつくこと」(情节的一个进展)、「過去の事実」(过去的一个孤立的事实)、「発話時間以前に完成したこと」(截至现在为止已经完成的动作)、「結論を表すこと」(用在后果小句里表示一种情况)、「確実なこと」(显而易见)と定義している。
15. 蕭国政(2000:568-576)は「完成」(已然)、「消失」(消失)、「開始」(开始)、「継続」(继续)、「変化」(变化)、「過度」(偏离)、「強調」(强调)、「婉曲」(委婉)と定義している。
 16. 詳細については、何文彬(2013:10-18)、夏炎青(2017:51)を参照のこと。
 17. 基本的意味は典型的意味(prototypical meaning、プロトタイプの意味)とも呼ばれる(靛山・深田 2003b:142、170)。
 18. 詳細については、太田(1958:351-354)、王力(1980:447-448)、刘勋宁(1998:39-47)、齐沪扬(2003:30-36)、高顺全(2006:60-66)、陈鹏飞(2007:138-140)などを参照のこと。
 19. “了2”の「変化」(变化)義、「出現」(出现)義、「実現」(实现)義、「発生」(发生)義などの命題的意味・客観的意味は、“了2”の「肯定」(肯定)義、「決定」(决定)義、「確定」(确定)、「確認」(确认)義などのモダリティの意味・主観的意味に対して述べるものである。第6章6.2節、6.3節で“了2”のモダリティの意味・主観的意味と命題的意味・客観的意味の相違を具体的に説明する。
 20. Huang(1987:184-197、203-220)の「限界描写」(marking a boundary)説、卢福波(2002:109-118)の「過程転換」(过程转换)説、王学群(2003:51-71、2008:75-90)の「限界到達」(达界)説、谭春健(2004:26-31)の「状態転換」(易态)説、劉綺紋(2006:35-53)の「限界達成」説、吕为光(2007:147-149)、张黎(2010:12-21)、张国华(2017:208-209)の「限界変化」(界变)説、石毓智(2015:229-247)の「実現過程」(实现过程)説、税昌锡・胡云晚(2020:192-206)の「事態転化」(事态转化)説などは、いずれも2つの状態の接点が表す「転換」という動的認知様式に関する論説である。
 21. “了2”の基本的意味について、沈开木(1987:4-19)、吕叔湘(1999:351-358)、丁声树他(1999:214)、谭春健(2003:73-80)などは「変化」義、太田(1958:350)、竟成(1993:52-57)、王维贤(1997:171-187)、刘勋宁(1998:35-48)、金立鑫(1998:105-119)、刘月华他(2001:379)などは「実現」義、朱德熙(1982:209)、杉村(2009:1-12)、周小兵・欧阳丹(2014:8-15)などは「出現」義、守屋(1995:259)、张立昌(2014:24)は「発生」義を主張している。
 22. 原文は、“在我们搜索到的大量偏误实例中，‘了’的偏误不仅数量最多，占首位，而且偏误类型也相当多”である。
 23. 原文は、“对欧美留学生来说，‘了’较‘着、过’而言，更抽象也更难以掌握”である。
 24. 詳細については、高倉(1955:367-376)、荒川(1981:70-79)、杉村(2009:1-12)、吕文华(2010:548-556)、卢英顺(2012:23-29)、周小兵・欧阳丹(2014:8-15)、史有为(2016:109-129)、张雪辰(2018:30-31)などを参照のこと。
 25. 認知言語学において、ある概念が指示する意味をイメージ・スキーマ(image schema)、スキヤニング(scanning)、視点配列(viewing arrangement)、メタファー(metaphor)などの認知的方法(束定芳 2008:106-107)で理解して説明することは“construal”と呼ばれる。また、松村(1988:396)から分かるように、通常語句の意味や物事の意味を理解して説明することは「解釈」と呼ばれる。そのため、“construal”という認知言語学の用語は「解釈」と訳されている。この訳し方はLangacker(2008:71)の日本語訳を参照のこと。
 26. 認知意味論によれば、精緻化(elaboration)とはよりスキーマ的な意味や抽象的な意味を具体化(instantiation)する過程である(靛山・深田 2003b:167、Langacker 2008:21、215)。例えば、「[A]、[B]をそれぞれ多義語が持つ抽象度の異なる2つの確立した意味とした場合」,[A]は[B]に対してスキーマ的であり、[B]は[A]を精緻化したものであるとしたら、「[B]は[A]と矛盾しないが、[B]の意味記述は[A]の意味記述よりも詳細である」(靛山・深田 2003b:167)。
 27. 本論文は行為域の外延的意味を表す“了2”を“了2<行為>”と呼ぶ。また、“了2<行為>”が含まれる文を“了2<行為>”構文と呼ぶ。さらに、「瞬間形式の述語」、「過程形式の述語」、「絶対静相形式の述語」が含まれる“了2<行為>”構文をそれぞれ「瞬間形式の述語+“了2<行為>”」構文、「過程形式の述語+“了2<行為>”」構文、「絶対静相形式の述語+“了2<行為>”」構文と呼ぶ。ところで、「瞬間形式」、「過程形式」、「絶対静相形式」という3つの概念については、第10章10.2節から10.5節までを参照のこと。
 28. 本論文は、中国の学術論文や書籍の情報を収録する最大規模の学術情報データベースであるCNKIと、日本国立情報学研究所が運営する学術情報データベースであるCiNiiを通して検出した200本あまりの“了2”関係の論文、また、中国、日本、アメリカ、イギリスなどの国で収集した30冊あまりの“了2”関係の著作をもとに、1955年から2020年までの“了2”の研究成果とその問題点を全面的

- に整理するものである。
29. 本論文は、“了2”が含まれる文を“了2”構文と呼ぶことにする。
30. ここで王灿龙(2012:15-24)の説明を引用して、ネット上のコーパス以外の用例を用いる理由を説明しておく。「普通のコーパスの容量は一定の範囲に限られている。それでは、『天然』の巨大コーパスとしてのインターネットを見てみよう」(一般的語料庫容量比较有限, 我们不妨再看看“天然”的超级语料库——因特网)。「Taylor(2007)が指摘しているように、ある言語表現を特定のコーパスで検出できない場合、インターネットで検出することが可能である。例えば、Taylor(2007)は“the cynic in me would say”という表現を英国国家コーパス(the British National Corpus)で検出できず、インターネットで数多く検出できた」(Taylor(2007)曾讲到, 如果某一语言表达形式不见于某个语料库, 那么就应该到因特网上搜索, 通常都能找到一些用例。比如他举了一个例子, “the cynic in me would say”在英国国家语料库(the British National Corpus)中找不到, 但在因特网上却有许多用例)。「インターネットで検出する言語表現は生のものが多く、生き生きとした現実的な言語に近い」(网民的即使创作少有加工的色彩, 作为语料应更为真实)。「そのため、場合によっては、ネットによる用例の説得力がさらに強いかもしれない」(总之, 如果合理使用, 因特网上的文字材料作为语料不仅是可以的, 而且从某种意义上讲, 说服力可能更强)。以上の理由で、本論文は《百度贴吧》、YouTubeなどの公式サイトによる用例も考慮に入れる。

第2章 先行研究の検証

2.1 はじめに

“了2”の用法を全面的に整理して分類しているのは刘月华他(2001:379-392)である。しかしながら、刘月华他(2001:379-392)による説明は意味論の立場、統語論の立場、語用論の立場が混在しており、分類基準も曖昧である。刘月华他(2001:379-392)の研究成果に対して、中国語学研究者の吕叔湘氏は次のようにコメントしている。

“了2”を7種類に大別して28種類に細別することは細々しくて、学習者にとって覚えにくいのである。確かに、“了2”の用法は複雑なのであるが、もっと工夫を凝らして洗練された内容にすればよいのに(中略)。様々な研究者の立場を折衷しているようであり、矛盾しているところもある¹。(刘月华他 2001:「前書き」の部分)

“了2”の用法が多様であるため、未だに解明されていないところが多いというのが事実である(吕为光 2007:147-149)。本章は、中国の学术论文や書籍の情報を収録する最大規模の学術情報データベースであるCNKIと、日本国立情報学研究所が運営する学術情報データベースであるCiNiiを通して検出した200本あまりの“了2”関係の論文、また、中国、日本、アメリカ、イギリスなどの国で収集した30冊あまりの“了2”関係の著作をもとに、1955年から2020年までの“了2”の研究成果とその問題点を全面的に整理する²。

2.2 文末助詞“了”の意味に関する先行研究とその問題点

2.2.1 文末助詞“了”の基本的意味を説明するための意味概念

歴史的には、“了2”の主観的意味・モダリティ的意味は“了2”の客観的意味・命題的意味から生まれてきた³。そのため、先行研究では“了2”の客観的意味・命題的意味が“了2”の基本的意味⁴と捉えられる(肖治野・沈家煊 2009:524)。“了2”の基本的意味を説明するためには、通常「変化」(变化)、「出現」(出现)、「実現」(实现)、「発生」(发生)という4つの命題的概念が用いられる⁵。例えば、沈开木(1987:4-19)、吕叔湘(1999:351-358)、谭春健(2003:73-80)などは「変化」という概念、太田(1958:350)、竟成(1993:52-57)、王维贤(1997:171-187)などは「実現」という概念、朱德熙(1982:209)、杉村(2009:1-12)、肖治野・沈家煊(2009:518-527)、周小兵・欧阳丹(2014:8-15)などは「出現」という概念、守屋(1995:259)、张立昌(2014:24)などは「発生」という概念で“了2”の基本的意味を捉える。また、上述の命題的概念と「確認」(确认)、「肯定」(肯定)などのモダリティ的概念を組み合わせて“了2”の基本的意味を規定する研究も見られる⁶。例えば、“了2”の基本的意味について、守屋(1995:259)は「状況が変化した、新事態が発生したことを確認した」と定義し、吕叔湘(1999:351)は「事態の变化が出現したことを肯定したか、または、その变化が出現しようとしていることを肯定した」⁷と定義している。しかしながら、“了2”の基本的意味は一体何かという問題をめぐって、目下国内外においても論争が続

いており、統一的な見解はない。例えば、周小兵・欧阳丹(2014:13)は、「中国語学習者にとって、『変化』という概念が示す特徴の有無を基準に“了 2”を使用するということこそが、“了 2”の誤用をもたらす直接的な要因である。そのため、日常の中国語の授業では、『変化』という用語の代わりに、朱德熙(1982)の『新状況の出現』という用語を使用したほうがよい。『変化』という用語は中国語学習者の“了 2”の習得を妨げるため、避けたほうがよい」⁸と述べ、「出現」という意味概念を主張している。杉村(2009:1-12)、肖治野・沈家煊(2009:518-527)も同様に主張する。それに対して、彭小川・周芍(2005:136-141)、陈小红(2007:54-60、2010:54-63、2011:47-51)などは「出現」という意味概念に異議を唱えている。一方、张立昌(2014:24)は「発生」という意味概念を主張しているが、吴凌非(2002:23-27)は「発生」に異議を唱えている。

ところで、“了 2”の基本的意味について論争する際に、「変化」、「出現」、「実現」、「発生」などの概念が指示する意味の共通性を追究する研究もある。例えば、刘勋宁(1998:35-48)によれば、「出現」と「発生」が「用語の違い」(用词的差别)に過ぎず、「対立的概念」(对立性的概念)ではない。肖治野・沈家煊(2009:518-527)、陆方喆(2014:43-47)によれば、「実現」は「出現」に相当する。郭锐(2008:13)によれば、「『変化、新状況の出現』という意味は、もともと『実現』義そのものが何らかの命題(あるいは文)と相互作用することから生まれる二次的効果に過ぎない」⁹。刘月华他(2001:379)によれば、「いわゆる『実現』は『現実になる』という意味を表し、『発生』、『出現』も同様の意味を表す。ただし、『発生』、『出現』より、『実現』の方が意味がやや広い。中国語教材で見られる『新状況の出現』や『変化』はこの『実現』のことを指している」¹⁰。もし「変化」、「出現」、「実現」、「発生」などの概念が指示する意味が本質において共通しているとしたら、次の(1)の“了 2”が明らかに伝えるのが[+変化]の意味特徴ではなく、[+出現]、[+発生]などの[-変化]の意味特徴であるのはなぜであろうか(杉村 2009:5-6)。

- (1) 那天晚上下雨了¹¹。 (杉村 2009:5)
 (その夜に雨が{降った・降ることが発生した}。)

また、次の(2)の“了 2”が明らかに伝えるのが[+変化]の意味特徴であり、[+出現]、[+発生]などの[-変化]の意味特徴ではないのはなぜであろうか(吕文华 2010:552-553)。

- (2) 蔬菜便宜了。 (吕文华 2010:553)
 (野菜が安く{なった・変わった}。)

2.2.2 文末助詞“了”の三域の意味

Sweetser(1990:11、113-148)は、複文の意味を内容域(real-world content domain)、認識域(epistemic domain)、言語域(speech-act domain)という3つの側面から捉えることが可能であるということを提示している。初めて Sweetser(1990:11、113-148)の三域の観点から“了 2”の用法を検討したのは王伟(2006:91-100)であるが、初めて三域の観点から“了 2”の意味を検討したのは肖治野・沈家煊(2009:518-527)である。内容域にお

ける“了2”は主に何らかの客観的な動態を示すので、肖治野・沈家煊(2009:518-527)は“了2”の内容域を行為域(行域)と呼んでいる。肖治野・沈家煊(2009:518-527)は“了2”の行為域、認識域、言語域の意味をそれぞれ「新しい行為状態の現れ」(新行态的出现)、「新しい認識状態の現れ」(新知态的出现)、「新しい言語状態の現れ」(新言态的出现)と記述している。「新しい行為状態の現れ」とは何らかの命題的客観性を持つ動態が生じたということであり、「新しい認識状態の現れ」とは発話者の何らかの認識や意識が生じたということであり、「新しい言語状態の現れ」とは発話者の何らかの言語行為が生じたということである。肖治野・沈家煊(2009:518-527)が提示している“了2”の三域説は“了2”の多義性の問題の解決に有効性を示している。ただし、肖治野・沈家煊(2009:518-527)の“了2”の三域の意味に関する意味記述には次の5つの問題点が残されている。

第一に、“了2”の三域の意味は「新しい行為状態の現れ」、「新しい認識状態の現れ」、「新しい言語状態の現れ」と記述されているが、実際には、“了2”は必ずしも「新しい」状態を示すとは限らない。例えば、次の(3)の下線部を考えよう。

(3) A: 那个是谁?

B: 那个是我女儿。

A: 不可能, 我看不像你女儿。

B: 不会吧?让我再看看……哎呀!没错了!那个是我女儿了!

(<https://tieba.baidu.com/p/6209479319> 閲覧日:2019年7月29日)

(A: あの人は誰?)

(B: あれは私の娘だ。)

(A: 嘘、あなたの娘に似ていないし。)

(B: 何?ちょっと確かめさせて……ほら!間違いないわよ!あれは確かに私の娘だよ!)

(3)の“那个是我女儿”(あれは私の娘だ)という内容は、命題的客観性を持つ動態が生じたということを示さず、発話者の何らかの判断や認識か、または何らかの発話や言語行為が生じたということを示すので、肖治野・沈家煊(2009:518-527)が述べている「認識状態」と「言語状態」として扱うべきである。また、“那个是我女儿”(あれは私の娘だ)という内容は2回現れている。もし、「認識状態」または「言語状態」として扱うとすれば、2回目に現れている“那个是我女儿”(あれは私の娘だ)という判断または発話はもはや新しく現れたものではなく、「古い認識状態」または「古い言語状態」になったということが分かる。通常“了2”に未知情報または新情報を伝える機能があるとされる一方¹²、既知情報または旧情報を伝える機能もあるという指摘も見られる¹³。したがって、「新しい」という意味記述の妥当性に疑問が生じる。

第二に、「新しい行為状態/認識状態/言語状態の現れ」という意味記述は大まかであり(陈前瑞・吴继章 2019:58)、非中国語母語話者にとって実用的な定義・意味記述ではない。次の(4)を考えよう。

(4) a. 昨天收到妈妈的信, ?我很高兴了。 (赵立江 1997:114)

(昨日母の手紙が届いて、?とても嬉しかった。)

b. 昨天收到妈妈的信, 我很高兴。 (赵立江 1997:115)

(昨日母の手紙が届いて、とても嬉しかった。)

例えば、日本人学生が「昨日母の手紙が届いて、とても嬉しかった」という日本語の文を中国語に訳す場合、もし「とても嬉しかった」という情報を「新しい行為状態の現れ」または「新しい認識状態の現れ」として捉えたら、(4a)に訳してしまう可能性がある。しかし、赵立江(1997:114)が指摘するように、別の発話場面や文脈が付与されなければ、(4a)は(4b)より容認度が低い文として捉えられやすい。そのため、「新しい行為状態/認識状態/言語状態の現れ」という意味記述は大まかであり、非中国語母語話者にとって実用的な意味記述ではない。また、次の(5)も考えよう。

(5) a. 刚才我在看电视, 现在我在洗衣服了。

(さっき私はテレビを見ていたが、今は服を洗っている。)

b. 刚才我在看电视, 现在我在洗衣服。

(さっき私はテレビを見ていたが、今は服を洗っている。)

「さっき私はテレビを見ていた」という情報と「今は服を洗っている」という情報を比較すれば分かるように、後者は「新しい行為状態の現れ」と捉えられる。後者を「新しい行為状態の現れ」と捉えるとしても、(5a)と(5b)が示すように、後者に“了2”を付与してもしなくても構わない。なぜならば、ある意味で、(5)における“在”(ている)という機能語も「新しい行為状態の現れ」を示すからである。特に、王巍(2010:72)から明らかのように、もし「さっき私はテレビを見ていた」という情報が付与されなければ、(5a)の“现在我在洗衣服了”(今は服を洗っている)という“了2”構文¹⁴は不自然になる。要するに、「新しい行為状態/認識状態/言語状態の現れ」という意味記述は大まかであり、非中国語母語話者の“了2”の習得に役立たないと考えられる。

第三に、肖治野・沈家焯(2009:518-527)は「新しい認識状態の現れ」と「新しい言語状態の現れ」という意味記述を“我想[P]¹⁵了”(私は[P]を考えた)と“我说[P]了”(私は[P]を言った)という2つの意味記述で再解釈しているが、“我想[P]了”も“我说[P]了”も大まかな意味記述であり、非中国語母語話者にとって実用的な定義・意味記述ではない。“我想[P]了”(私は[P]を考えた)における“想”(考えた)と、“我说[P]了”(私は[P]を言った)における“说”(言った)は、日常生活でよく用いられる具体的、狭義的な概念でなく、発話者の各種類の精神活動と言語行為を包括する抽象的、広義的な概念である。例えば、“想”は「考える」、「思う」、「推測する」、「判断する」、「評価する」などの全種類の精神活動・「認識状態」のことを指し、“说”は「言う」、「発表する」、「主張する」、「質問する」、「命令する」、「勧める」などの全種類の言語行為・「言語状態」のことを指す。しかし、通常の会話であれば、どのような会話文でも発話者の広義的な“想”と“说”が働いた上で成

り立つものである。つまり、どのような会話文でも広義的な“想”と“说”が指示する意味を持つということである。これは、広義的な“想”と“说”が指示する意味は“了2”特有の意味ではなく、通常の会話文ならどのような言語形式でも持つべき意味であるということの意味する。こうして、“想”と“说”という広義的な概念で“了2”の意味を再定義・再記述する必要性に疑問が生じる。

第四に、循環定義という問題点も目立つ。肖治野・沈家焯(2009:518-527)は「新しい認識状態の現れ」と「新しい言語状態の現れ」という意味記述を“我想[P]了”(私は[P]を考えた)と“我说[P]了”(私は[P]を言った)という2つの意味記述で再解釈しているが、“我想[P]了”と“我说[P]了”という意味記述自体には“了2”が含まれているので、循環定義の問題を引き起こしかねない。

第五に、1つの文における“了2”は1つの域の意味を表すだけでなく、複数の域の意味を表す可能性もあり、意味間の「重なる状況が想像以上に複雑であり、当該研究の発展がまだ待たれる」¹⁶という問題点も肖治野・沈家焯(2009:518-527)で指摘されている。そのため、“了2”の三域の意味の「重なる」関係を明らかにする必要もある。

2.2.3 文末助詞“了”の動相的意味

動相¹⁷の問題は形式的問題だけでなく、意味的問題でもある(野田 2015:4-6)。

朱繼征(2000:20)において、中国語の動相は、「時間軸に沿って展開されている動作・作用の進み具合と状態を示し、その時間的動きを捉えて表現する文法的カテゴリー」と定義されている。「時間軸に沿って展開されている動作・作用の進み具合と状態」は、ある裸動詞¹⁸が指示する事象の起動的段階、進行的段階、完了的段階、結果的段階、持続的段階などの異なる動的段階を指す(朱繼征 2000:19-26)。朱繼征(2000:20)はそれらの動的段階を表し分ける形式を動相、例えば、起動相、進行相、完了相、結果相、持続相などと呼んでいる。朱繼征(2000:20)や张济卿(1998a:17)において、動相は文法形式と捉えられる。一方、吕叔湘(1982:229)や陈平(1988:420)においては動相は動的段階という意味として捉えられる。このように、中国語学において、動相という概念は形式と意味が混在して論じられてきた。

本論文は次の5点で動相を再規定する。

第一に、王松茂(1981:65-76)の主張にしたがって、動相を動相的意味と動相形式に分ける。

第二に、本論文で規定する動相的意味とは、述語における裸動詞という部分が指示する事象が、ある仮定の時間軸に沿って展開してから表す起動的段階、進行的段階、完了的段階、結果的段階、持続的段階などの異なる動的段階である。つまり、動相的意味は起動的意味、進行的意味、完了的意味、結果的意味、持続的意味などに分けられる。また、本論文で規定する動相形式とは動相標識を指す。起動相標識には“了1”¹⁹、“起”、“起来”などの標識があり、進行相標識には動作の進行を表す“着”があり、完了相標識には“了1”、“完”、完了を表す“过1”があり、結果相標識には“了1”、“成”、“光”、“掉”、“好”、“到”、“死”、“上”、“进”などの標識があり、持続相標識には静的状態の持続を表す“着”などの標識がある。

第三に、本論文で述べる動相標識は語尾的動相標識である。通常動相的意味は特定の動相標識によって表される。王松茂(1981:65-76)は動相標識が裸動詞に後続する語尾でなければならないと規定しているが、朱繼征(2000:7-28)は語尾に限らず、一定の動相的意味を表す語全般に広げている。何伟・马瑞芝(2011:19-27)から分かるように、王松茂(1981:65-76)と朱繼征(2000:7-28)が述べている動相標識はそれぞれ狭義動相標識と広義動相標識である。本論文で述べる動相標識は狭義動相標識、すなわち語尾的動相標識である。“了2”は特定の発話場面や文脈と合わせて動相的意味を表すことができるが²⁰、裸動詞に後続する語尾ではないので、本論文で規定する動相標識ではない。また、将然相標識と見なされる“快”や“要”、起動相標識と見なされる“开始”、進行相標識と見なされる“在”はいずれも語尾ではないので、広義動相標識とは言えるが、本論文で規定する動相標識とは言えない。

第四に、経験的意味を表す“过2”と裸動詞に後続する“有”を持続相標識として位置づける。「……経験がある」や「……経験を持っている」という意味を表す“过2”はいわゆる経験相標識と見なされるが、陈振宇(2006:275)は「経験相」という概念の妥当性に異議を唱えており、“过2”を「経験相標識」というより、パーフェクト²¹(perfect)の標識と捉えたほうがよいと主張している。なぜならば、“过2”は事象時間が参照時間より早いという時間関係を反映するからである。ところで、“过2”は、ある事象の生起に伴って生じる「経験」が事象生起時から発話時間/参照時間まで持続しているという持続的意味も反映するので、陈振宇(2006:275)を踏まえて、本論文は“过2”を持続相標識として位置づける。また、裸動詞に後続する“有”は、語尾的特徴という統語上の特徴を示す他に(孙宏林 1996:21-29)、何らかの参照時間が指示する期間内で何らかの存在が持続するという時間的意味も表す(薛宏武 2008:106)。そのため、本論文は裸動詞に後続する“有”も持続相標識として位置づける。

第五に、本論文は動相の種類を起動相、進行相、完了相、結果相、持続相という5種類に規定する。吕叔湘(1982:227-228)、朱繼征(2000:25)から分かるように、将然相は“快”、“要”などの非語尾的標識によって表されるしかない。そのため、本論文は将然相を動相カテゴリーから除外する。視点によって、反復相、継続相、残存相、程度相などの動相も挙げられるが²²、それらの動相はいずれも起動相、進行相、完了相、結果相、持続相という5種類の動相の下位概念として位置づけられる。そのため、それらの動相も本論文で規定する動相カテゴリーから除外する。

朱繼征(2000:26-28)は静相という概念も提起している。朱繼征(2000:26-28)が定義している静相とは、動相が指示する動的段階に対して言う、裸動詞が指示する何らかの内的属性、現象、態勢という静的特徴である。まず、裸動詞が指示する何らかの内的属性は、その裸動詞が指示する辞書的意味を指す。また、裸動詞が指示する何らかの現象は、よく起こる日常現象を指す。さらに、裸動詞が指示する何らかの態勢は、その裸動詞が指示する事象が生起しようとしている兆しや勢いを指す。次の(6)-(8)を例にとって簡単に説明する。

- (6) 虎吃肉, 羊吃草。 (朱繼征 2000:26)
 (トラは肉を食べるが、ヤギは草を食べる。)
- (7) 我经常看小说。 (朱繼征 2000:26)
 (私はよく小説を読む。)
- (8) 明天他坐船去英国²³。 (朱繼征 2000:26)
 (明日彼は船でイギリスへ行く。)

(6)は、トラの“吃(肉)”((肉を)食べる)という内的属性と、ヤギの“吃(草)”((草を)食べる)という内的属性を示している。(7)は、“看(小说)”((小説を)読む)という事象がよく起こるといふ日常現象を示している。(8)は、“去(英国)”((イギリスへ)行く)という事象が生起しようとしている態勢を示している。つまり、(6)-(8)の下線部の裸動詞は朱繼征(2000:26-28)が定義している静相を示している。

ところで、動相標識を伴う複合動詞、また、体言、形容詞、副詞、前置詞などの品詞はいずれも裸動詞ではないが、各自の辞書的意味を持つべきである。また、文脈によって、それらの語や品詞は何らかの日常現象、態勢を表す可能性もある。こうして、内的属性、現象、態勢という静的特徴は朱繼征(2000:26-28)が述べている裸動詞にだけでなく、裸動詞以外の語や品詞にも内包されるということが分かる。朱繼征(2000:26-28)の定義を踏まえて、本論文は静相を次の5点で再規定する。

第一に、静相を静相的意味と静相形式に分け、静相的意味を「静相」義と呼ぶことにする。

第二に、静相的意味・「静相」義とは、本論文で規定する動相的意味に対して述べる意味である。具体的には、動詞的述語が示す内的属性、現象、態勢、また、動詞的述語以外の文成分が示す意味を指す。

第三に、どの語でも本論文で規定する静相的意味・「静相」義を持つ。

第四に、静相形式とは、静相的意味・「静相」義を表すことができる言語形式を指す。

第五に、静相形式は固定されない。この結論は第3点の規定から導き出されるのである。

戴耀晶(1997:35-38、84-86、101-107)、朱繼征(2000:7-28)は、[+瞬間]と[+過程]の意味特徴を基準に、起動相、完了相、結果相の認知様式を「点」として捉え、進行相、持続相の認知様式を「線」として捉える。本論文において、起動相標識、完了相標識、結果相標識を点的動相標識と呼び、進行相標識、持続相標識を線的動相標識と呼ぶことにする。また、点的動相標識によって表される動相的意味を「瞬間」義と呼び、線的動相標識によって表される動相的意味を「過程」義と呼ぶことにする。つまり、本論文で述べる「瞬間」義は、動詞的述語が指示する起動的意味、完了的意味、結果的意味を指し、「過程」義は、動詞的述語が指示する進行的意味、持続的意味を指す。

そもそも時間軸というのは、変化や発展などの時間的流れを示すものであり、線的認知様式を示す。そのため、起動相、完了相、結果相は時間軸における「点」として捉えられやすく、進行相、持続相は時間軸における「線」として捉えられやすい。しかし、本論文

で述べる「静相」義、すなわち動詞的述語が示す内的属性、現象、態勢と、動詞的述語以外の文成分が示す意味などは、変化や発展などの時間的流れを示さないため、時間軸上の要素として捉えられ難い。こうしてみれば、動相に相応しい認知様式は「点」と「線」なら、静相に相応しい認知様式は何らかの「面」である。

以上、動相と静相を再規定した。次に、動相と“了2”の関係を考えよう。

「中国語の動相体系を築くためのカギは“了”であると言っても過言ではない」²⁴(張黎 2010:20)。それでは、“了2”と動相の関係についての研究はどこまで進んでいるのか。動態助詞と呼ばれる“了1”は動相標識であるということには異論の余地がないが、文末助詞や語気助詞と呼ばれる“了2”も動相標識であるのかについては統一的な見解がない。先行研究から明らかのように、“了2”は動相標識ではないという主張がある。例えば、吳凌非(2002:23-27)、彭小川・周芍(2005:136-141)、石定栩・胡建华(2006:94-112)、彭利貞(2011:198-218)などは、“了1”は動相的意味を表すが、“了2”は純粋な語気助詞であり、動相的意味を表さないと主張している。また、Li 他(1982:135)が指摘するように、動相標識は動詞のカテゴリーに属するが、“了2”は動詞のカテゴリーに属さないため、どうしても動相標識として位置づけられない。“了2”は動相標識ではないにもかかわらず、劉月華他(2001:361-392)によれば、実際の使用では、具体的な発話場面や文脈に用いられると、“了2”は“了1”の動相的意味も表す。また、陳平(1988:401-422)、王維賢(1997:178-179)、朱繼征(2000:25)、金立鑫(2003:38-48)、Lin(2003:259-311)、劉綺紋(2006:92-93)、杉村(2009:1-12)、張黎(2010:18)、税昌錫(2012:44-58)、夏炎青(2017:52-71)などの研究成果も劉月華他(2001:361-392)の主張を直接的もしくは間接的に裏付けている。さらに、史冠新(2011:157-160)は語気助詞のカテゴリーから“了2”を除外しようと呼びかけている。これらの研究成果から明らかのように、具体的な発話場面や文脈を合わせた上で、“了2”も動相的意味を表す。ただし、“了2”の動相的意味に関する先行研究は、どのような動相的意味を表すかという問題の考察だけにとどまり、どのように動相的意味を表すか、つまり、“了2”の動相的意味の形成メカニズム²⁵は何かという問題にはまだ触れていない。また、先行研究において、“了2”と“了1”の動相的意味の相違は何かという問題もまだ考察されていない。

2.2.4 文末助詞“了”の時制的意味

時制の問題は形式的問題だけでなく、意味的問題でもある(石塚 2015:161)。

もともと時制とは、一定の標識や語形変化²⁶によって表される、事象時間(point of event)、参照時間(point of reference)、発話時間(point of speech)の前後関係を指す²⁷。

「一定の標識や語形変化」は時制の形式上の特徴を示し、時間要素間の「前後関係」は時制の意味上の特徴を示す。このように、時制という文法カテゴリーは形式上の特徴と意味上の特徴から構成されるということが分かる。そのため、本論文は時制を時制的意味と時制形式に分ける。本論文で述べる時制的意味とは、事象時間、参照時間、発話時間の前後関係を指す²⁸。時制形式とは、事象時間、参照時間、発話時間の前後関係を指す一定の標識や語形変化などの言語形式を指す。

時制は相対時制(relative tense)と絶対時制(absolute tense)に大別される(Comrie

1985:122-125)。相対時制とは、一定の標識や語形変化によって表される、時間軸における事象時間と参照時間の位置関係である。絶対時制とは、一定の標識や語形変化によって表される、時間軸における事象時間と発話時間の位置関係である。一般に時制というのは絶対時制のことを指す(劉綺紋 2006:25)。本論文で扱う時制もこの絶対時制のことである。また、絶対時制は過去時制、未来時制、現在時制という 3 種類に細別される(Comrie 1985:122-125、劉綺紋 2006:25)。過去時制とは、一定の標識や語形変化によって表される、事象時間が発話時間より早いという時間関係である。未来時制とは、一定の標識や語形変化によって表される、事象時間が発話時間より遅いという時間関係である。現在時制とは、一定の標識や語形変化によって表される、事象時間が発話時間に等しいという時間関係である。本論文は「事象時間が発話時間より早いという時間関係」を「過去時制の意味」、「事象時間が発話時間より遅いという時間関係」を「未来時制の意味」、「事象時間が発話時間に等しいという時間関係」を「現在時制の意味」と呼ぶことにする。

ところで、どの言語であっても、事象時間、参照時間、発話時間という 3 つの時間要素の前後関係、つまり本論文で述べる時制的意味を表すことができるということは否定できない。中国語もそうである。仮に、中国語の時制的意味が一定の標識や語形変化によって表されるとすれば、つまり、中国語が一定の時制形式を持つとすれば、中国語は時制という文法カテゴリーを持つと言っても問題ない。しかし、中国語の時制的意味が一定の標識や語形変化などの時制形式によって表されるかどうかという問題について統一的な見解はない。つまり、中国語が時制という文法カテゴリーを持つかどうかについて定論はない。何伟・马瑞芝(2011:19-27)から明らかのように、この問題をめぐる論争は 2 種類の主張に分かれている。1 つは中国語が時制という文法カテゴリーを持たないという主張であり、もう 1 つは中国語が時制という文法カテゴリーを持つという主張である。本論文は、“了 2” が時制形式としての資格を持つかどうかという問題には触れずに、“了 2” が時制的意味を表すかどうか、表せばどのような時制的意味を表すかなどの時制的意味に関する問題だけを考察する。

“了 2” の時制的意味に関する先行研究から分かるように、過去時制の意味を表すという主張もあれば²⁹、過去時制の意味だけでなく、未来時制の意味も表すという主張もある³⁰。本章の例文(1)、例文(2)の“了 2” 構文は事象時間が発話時間より早いという時間関係、すなわち過去時制の意味を表すが、次の例文(9)の“了 2” 構文は事象時間が発話時間より遅いという時間関係、すなわち未来時制の意味を表す。

- (9) 来了!来了!我这就来了。 (陈前瑞 2005:67)
(来るよ!来るよ!今来るから。)

しかし、王伟(2006:99-100)と彭利贞(2011:198-218)は、一部の“了 2” 構文が示す未来時制の意味は“了 2” に由来するのではなく、特定の文脈に由来するのであり、“了 2” は未来時制の意味を表さないと主張する。先行研究において、“了 2” は未来時制の意味を表すかどうかについてはまだ統一的な説明が与えられていない。

過去時制の意味を表す目的で“了 2” を用いると、文の容認度を低下させる可能性がある

る。例えば、楊凱榮(2013:31-43)、黃瓚輝(2016:42-58)が指摘するように、次の(10)-(13)はいずれも過去時制の意味を表すが、他の発話場面が付与されなければ、“了 2”が用いられる a 例のほうが、“了 2”が用いられない b 例より容認度が低い。

- (10) a. ?我昨晚看一场精彩的电影了。 (黄瓚辉 2016:53)
 (?昨日の夜、私は素晴らしい映画を 1 本見た。)
 b. 她昨晚看了一场精彩的电影。 (黄瓚辉 2016:52)
 (昨日の夜、彼女は素晴らしい映画を 1 本見た。)
- (11) a. ?他随随便便地回答我了。 (杨凱榮 2013:33)
 (?彼に勝手に答えられた。)
 b. 他随随便便地回答了我。 (杨凱榮 2013:33)
 (彼に勝手に答えられた。)
- (12) a. ?弟弟昨天一边看电视，一边做作业了。 (杨凱榮 2013:41)
 (?弟は昨日テレビを見ながら宿題をしていた。)
 b. 弟弟昨天一边看电视，一边做作业。 (杨凱榮 2013:41)
 (弟は昨日テレビを見ながら宿題をしていた。)
- (13) a. ?他 12 点才睡觉了。 (杨凱榮 2013:37)
 (?彼はいつもより遅く 12 時に寝た。)
 b. 他 12 点才睡觉。 (杨凱榮 2013:37)
 (彼はいつもより遅く 12 時に寝た。)

先行研究から分かるように、(10a)-(13a)が示すような文は非中国語母語話者によるものが特に多い³¹。では、過去時制の意味を表す目的で“了 2”を用いると、なぜ文の容認度を低下させる可能性があるのか。また、非中国語母語話者にとって、過去時制の意味を表す目的で“了 2”を用いる際、何に注意しなければならないのか。

“了 2”が現在時制の意味を表すという主張は少ないが³²、“了 2”が常に「現在関連性」(currently relevant state)を表すという主張はよく見られる³³。「現在関連性」について第 13 章 13.3 節で具体的に説明するが、まとめて言えば、「現在関連性」とは、“了 2”構文における事象が常に何らかの形で発話時現在に関係しているという時間的特性である³⁴。発話時現在がもともと絶対時制という文法カテゴリーの重要な構成要素の 1 つであるので、本論文は「現在関連性」における「現在」という時間要素に関する問題も“了 2”の時制的意味の問題に類別する。ところで、なぜ“了 2”が常に「現在関連性」を表すのかについては未だに根本から解明されていない。

2.2.5 文末助詞“了”の意味に関する問題点

以上の分析に基づいて、“了 2”の意味に関する先行研究の問題点を表 1 でまとめる。

表1 “了2”の意味に関する問題点

問題(1)	“了2”の意味体系をどのように規定すればよいのか。
問題(2)	“了2”の基本的意味を説明するための意味概念をめぐって論争が生じる理由は何であろうか。
問題(3)	“了2”が[+変化]の意味特徴を表すための前提条件は何であろうか。
問題(4)	肖治野・沈家煊(2009:518-527)による「新しい行為状態の現れ」、「新しい認識状態の現れ」、「新しい言語状態の現れ」という“了2”の三域の意味記述をどのように具体化・実用化すればよいのか。
問題(5)	“了2”の意味間の関係は何であろうか。
問題(6)	“了2”の各意味はどのような属性を示すのか。
問題(7)	過去時制の意味を表す目的で“了2”を用いると、なぜ文の容認度を低下させる可能性があるのか。
問題(8)	非中国語母語話者にとって、もし“了2”構文以外の文脈的要素を考慮せずに“了2”を用いて過去時制の意味を表そうとすれば、何に注意しなければならないのか。
問題(9)	“了2”はどのように動相的意味を表すのか。つまり、“了2”の動相的意味の形成メカニズムは何であろうか。
問題(10)	“了2”と“了1”の動相的意味の相違は何であろうか。
問題(11)	“了2”は時制的意味を表すのか。
問題(12)	“了2”の時制的意味に関する先行研究においては過去、未来、現在などの時間的要素が混在しているように見えるが、その時間的矛盾を如何に解消すればよいのか。

2.3 文末助詞“了”の構文特徴に関する先行研究とその問題点

2.3.1 文末助詞“了”の三域の意味を生み出すための構文的条件

初めて Sweetser(1990:11, 113-148)の三域説から“了2”の用法を検討したのは王伟(2006:91-100)であるが、初めて三域説から“了2”の意味を検討したのは肖治野・沈家煊(2009:518-527)である。内容域における“了2”は主に何らかの客観的な動態を示すので、肖治野・沈家煊(2009:518-527)は“了2”の内容域を行為域(行域)と呼んでいる。张宝胜(2011:427-429)と邓思颖(2013:195-200)は方言の側面から“了2”の行為域、認識域、言語域の意味を再考察している。周小兵・欧阳丹(2014:8-15)は第二言語習得の側面から“了2”の行為域、認識域、言語域の意味を再考察している。张杰(2014:133-134)は“了2”の行為域の存在の必要性に疑問を抱いている。李思沅(2019:64-68)は“了2”の言語域に内包される「触発直前の状態」(准触発状態)を提起して論じている。三域説で“了2”を分析する研究は上述の先行研究以外には見られない。しかしながら、上述の先行研究において、“了2”の各域の意味に対応する構文的特徴はまだ考察されていない。例えば、特定の域の意味を表すためにどのような構文特徴を備えなければならないのかという問題についてはまだ考察されていない。

2.3.2 「特定の文成分+ “了 2”」構文における文成分の特徴

通常中国語の文成分は主語(主語)、述語(謂語)、目的語(賓語)、連体修飾語(定语)、連用修飾語(状語)、補語(補語)という6種類に分けられる³⁵。刘月华他(2001:533-628)は補語を①結果補語、②方向補語、③可能補語、④状態補語、⑤程度補語、⑥数量補語、⑦前置詞補語という7種類に分けている。中国語の補語体系が複雑であり、意味的に重なったり矛盾したりするところも多い。例えば、刘月华他(2001:533-628)は、程度義を表して①結果補語の言語形式を持つ補語を⑤程度補語の範囲に類別している。そのような補語は“极”(極まる)、“坏”(てたまらない)、“死”(死ぬほど)、“多”(ずっと)などがある。本論文は言語形式の特徴を基準にそのような補語を①結果補語の範囲に類別し直す。また、孙英杰(2006:65-69)から分かるように、①結果補語と②方向補語は複合動詞の語尾として捉えられる³⁶。そのため、①結果補語と②方向補語は本論文において語尾的補語とも呼ばれる。ところで、本論文で述べる結果相標識は主にこの語尾的補語のことを指す。

以上、中国語の補語という文成分を再規定した。次に、“了 2”構文の文成分の特徴を考察する。

通常「複数の文成分+ “了 2”」構文は「特定の文成分+ “了 2”」構文に短縮することができる³⁷(彭利贞 2011:198-218、祁峰 2012:37-39)。例えば、次の(14)において、Aさんの“那天晚上下雨了吗”(その夜に雨が降ったか)という情報以外の情報が付与されなければ、Bさんは“那天晚上下雨了”(その夜に雨が降った)という「複数の文成分+ “了 2”」構文の形でAさんに答えてもよい他に、“下了”(降った)という「特定の文成分+ “了 2”」構文の形で答えてもよい。一方、“那天晚上”(その夜になった)や“雨了”(雨になった)というような「特定の文成分+ “了 2”」構文で答えては不自然になる。

(14) A: 那天晚上下雨了吗?

B: 那天晚上下雨了。 / 下了。 / #那天晚上了。 / #雨了³⁸。 (邓宇阳 2019a:50)

(A: その夜に雨が降ったか?)

(B: その夜に雨が降った。 / 降った。 / #その夜になった。 / #雨になった。)

もし、次の(15)、(16)が示す発話場面や文脈が付与されれば、Bさんは“那天晚上”(その夜になった)や“雨了”(雨になった)でAさんに答えたほうが自然であるが、“下了”(降った)で答えれば逆に不自然になる。

(15) A 和 B 住的地区有这样一个现象:每周三早上必定下雨, 而且都是周三的早上下雨, 周三其他时间段从来不下雨。这种现象持续了很多年。突然, 上周三的下雨时间出现了异常:早上没下雨, 反而变成了晚上下雨。由于 B 还不知道这个事, 于是 A 对 B 说: “上周三出现怪事了!那天虽然下雨了, 但不是早上下雨, 你知道是什么时间吗?” B 问: “不是早上还能是什么时候?” A 说: “那天晚上下雨了!晚上了!”

(AさんとBさんが住んでいる地域にはおもしろい自然現象がある。毎週の水曜日の朝は雨が必ず降り、水曜日の朝以外の時間帯には必ず降らないのである。ところが、先週の水曜日の朝は雨が降らず、夜に降るという珍しいことがあった。Bさん

がその珍しいことをまだ知らないのです、AさんはBさんに教えている。Aさんは、「先週の水曜日は変なことがあったんだよ!その日は雨が降ったけど、降った時間が朝じゃなかったんだよ。」と言った。Bさんは、「朝じゃなかったの?いつのことだったの?」と聞いた。Aさんは、「その夜に雨が降ったよ。夜になったよ。」)

- (16) A和B住的地区有这样一个现象:该地区几乎从来不下雨,但是会经常下沙。不料,上周三的深夜下雨了,而不是下沙。由于B还不知道这个事,于是A对B说:“上周三出现怪事了!那天晚上从天空飘下来的不是沙,你知道是什么吗?”B问:“不下沙那还能下什么?”A说:“雨了!那天晚上下雨了!”

(AさんとBさんが住んでいる地域にはおもしろい自然現象がある。雨はめったに降らないが、砂はよく降るのである。ところが、先週の水曜日の深夜は砂の代わりに雨が降った。Bさんがその珍しいことをまだ知らないのです、AさんはBさんに教えている。Aさんは、「先週の水曜日の夜は変なことがあったんだよ!その夜は降ったのが砂じゃなかったんだよ。」と言った。Bさんは、「砂じゃなかったら、何だったの?」と聞いた。Aさんは、「雨になったよ。その夜に雨が降ったよ。」)

なぜ「複数の文成分+“了2”」構文が「特定の文成分+“了2”」構文に短縮されるという統語的变化が生じるのかについて、彭利貞(2011:198-218)、李文山(2011:104-108)、祁峰(2012:37-39)によれば、その「特定の文成分」が焦点であるからである。しかし、焦点には複数種類がある場合もあるが、その「特定の文成分+“了2”」構文における「特定の文成分」はどのような焦点であろうか。また、彭利貞(2009:506-517)、李文山(2011:104-108)、町田(2015:85-91)、黄瓚辉(2016:42-58)から分かるように、一部の文成分は“了2”構文の焦点になりやすい。しかし、“了2”構文の焦点になりやすい文成分は何種類があるのかについては、彭利貞(2009:506-517)などにおいて説明されていない。

2.3.3 文末助詞“了”と語尾“了”の構文的相違

“了2”と“了1”の構文的相違については、位置関係の視点からみれば、“了2”は文末に生起し、“了1”は動詞の語尾に生起するということが明らかである。しかし、動相の視点からみれば、“了2”と“了1”の構文的相違は何かについては未だに考察されていない。考察されていない理由は、“了2”が動相標識としての資格を持つかどうかという問題についてはまだ統一的な見解がないという現状に関わっていると考えられる。このように、動相の視点から“了2”と“了1”の構文的相違を考察する余地があるということが分かる。

2.3.4 文末助詞“了”の構文特徴に関する問題点

以上の分析に基づいて、“了2”の構文特徴に関する先行研究の問題点を表2でまとめる。

表2 “了2”の構文特徴に関する問題点

問題(13)	“了2”の三域の意味を生み出すための構文的条件は何であろうか。
問題(14)	「複数の文成分+“了2”」構文が短縮された結果としての「特定の文成分+“了2”」構文において、その「特定の文成分」が焦点であれば、どのような焦点であろうか。
問題(15)	“了2”構文以外の発話場面や文脈による影響を考慮しなければ、“了2”構文の焦点になりやすい文成分は何であろうか。
問題(16)	「複数の文成分+“了2”」構文が短縮された結果としての「特定の文成分+“了2”」構文において、その「特定の文成分」は一体何によって決められるのであろうか。
問題(17)	「複数の文成分+“了2”」構文が短縮された結果としての「特定の文成分+“了2”」構文において、その「特定の文成分」と“了2”は一体どのような関係を持つのか。
問題(18)	動相の視点からみれば、“了2”と“了1”の構文的相違は何であろうか。

2.4 文末助詞“了”の語用論的機能に関する先行研究とその問題点

中国語は、「厳密な語形変化規則が乏しく、(中略)その構造が不安定であるように見え、暗に含意するものが多く、人間の語感に頼るところも多い」³⁹と指摘される(龚千炎 1994:5-6)。そのため、中国語は統語上の特徴より、意味上の特徴と語用論上の特徴が際立つ言語であるとされる(刘丹青 1995:10-15)。例えば、“了2”を研究するならば、“了2”の統語上の特徴より、“了2”に関わっている文脈や語用論上の要素を研究したほうがさらに重要であると指摘されている(赵立江 1997:123)。その理由については次の2点で説明される。第一に、「外国人が“了”を習得するという事は、主に“了”をどのような発話場面に使用すれば適切であるのかということの習得である。単に“了2”の文法や構文的特徴だけを勉強しても“了2”の習得にあまり役立たない」という第二言語習得研究領域の結論があるからである⁴⁰(黎天睦 1987:83)。第二に、“了2”が含まれる文と“了2”が含まれない文が同様の命題的意味を表すとすれば、その2つの文の使い分けを制約する要因の中で最も際立つのは語用論的要因であると指摘されているからである(王光全・柳英绿 2006:25-30)。そのため、“了2”を研究するならば、“了2”の語用論的機能を研究しなければならないということが分かる。

それでは、まず、何自然・吴亚欣(2001:10-16)に基づいて語用論という学問に関する歴史、位置づけ、研究対象などを簡単に紹介する。通常、意味論、統語論で説明され難い問題は語用論的問題として扱われる。20世紀60年代まで、言語学において語用論はまだ重要視されておらず、「ぼろ入れ袋」(ragbag)や「ゴミ箱」(waste-paper basket)と例えられていたが、70年代末になってはじめて言語学において独立した研究分野に発達した。語用論が一体どのような問題を研究対象とするのかについては、研究者によって異なる意見が出されている。例えば、言外の意味に関する問題、文脈的意味に関する問題、どのように文脈から推論して意味を得るのかに関する問題、どのように発話者の発話意図を理解

するのかに関する問題、どのように言語を活かして相互理解ができる談話を達成するのかに関する問題、対話者の相互作用に関する問題などの様々な意見がある。とにかく、意味の側面からみれば、語用論が扱うのは言内の意味ではなく、言外の意味である。つまり、発話場面や文脈から導き出される意味である。

次に、姜雅楠(2016:56)の説明を引用して中国語の「語気」というカテゴリーの語用論的本質を説明する。

ここ数年、中国語学で「語気」と呼ばれるものの語用論的本質が認められてきて、「語気」は「談話機能を持つ語用論的内容」と再定義されている。語用論的機能は発話者の何らかの意図や目的を反映する機能であり、中国語の語気というカテゴリーも発話者の何らかの意図や目的に直結するものである。人間はそもそも何らかの意図や目的で発話するので、その発話意図を実現するために特定の発話様式または語気を選択しなければならない。例えば、他人に何らかの事柄を教えるための発話、何らかの事情をたずねるための発話、要求や命令を出すための発話、感嘆や不満の気持ちを伝えるための発話などに伴って、多種多様な語気が表される⁴¹。(姜雅楠 2016:56)

“了2”は語気助詞とも呼ばれるので、“了2”の語用論的特徴は際立つはずである。“了2”の語用論的特徴が際立つことについては、次の3点で説明される。

第一に、どのような場合においても、“了2”は常に言外の意味や発話者の特定の使用意図などを際立たせるということがしばしば指摘される(武果・吕文华 1998:13-21、刘月华他 2001:383)。

第二に、「対話現場の状況に依存しない」「了1」構文⁴²に対して、“了2”構文は「対話現場の状況に依存する」ので(下地 2002:90)、別の発話場面や文脈が付与されなければ、一定の真理条件⁴³・命題的意味さえも伝え難い。つまり、“了2”構文の意味は“了2”構文以外の発話場面や文脈に制約されるということである。例えば、次の(17)に内包される真理条件・命題的意味の曖昧さを考えよう。

(17) 吃饭了。

(17)は、次の(18)に用いられると「ご飯を食べ終わるという出来事が生起した」という真理条件・命題的意味を伝え、(19)に用いられると「ご飯を食べ始めるという出来事が生起した」という真理条件・命題的意味を伝え、(20)に用いられると「ご飯を食べるという出来事はまだ生起しないが、まもなく生起する」という真理条件・命題的意味を伝える。

(18) A: 你吃过饭了吗?

B: 吃饭了。

(王维贤 1997:178)

(A: ご飯を食べ終わったか。)

(B: ご飯を食べ終わった。)

(19) A: 他吃饭了吗?

B: 吃饭了。你看, 他还在吃呢。

(A: 彼はご飯を食べ始めたか。)

(B: ご飯を食べ始めたよ。ほら、まだ食べている。)

(20) 亲属: “来, 吃饭了!”

病人: “好, 吃饭了。” (肖治野・沈家煊 2009:522)

(家族: ね、ご飯を食べるぞ。)

(病人: はいよ、ご飯を食べるから。)

第三に、別の発話場面や文脈が付与されなくても、一定の構文特徴を備えれば、“了2”構文は一定の真理条件・命題的意味を伝える場合もある。つまり、“了2”構文の意味は“了2”構文自体の構文特徴にも制約されるということである。例えば、上述の(17)と次の(21)を比較すれば分かるように、(17)の構文特徴は述語が“吃”(食べる)という動態動詞であるということであるが、(21)の構文特徴は述語が“便宜”(安い)という形容詞であるということである。別の発話場面や文脈が付与されなくても、(21)は「野菜が安くなった」という真理条件・命題的意味を伝えやすい。

(21) 蔬菜便宜了。 (= (2))

(野菜が安くなった。)

このように、“了2”の意味を、“了2”構文以外の文脈的要素から推論する場合もあれば、“了2”構文自体に内在する文脈的要素から推論する場合もある⁴⁴。したがって、中国語が語用論的特徴が際立つ言語であるということを裏付ける重要な証拠の1つは、“了2”という機能語の存在であると言っても過言ではない。

ところで、“了2”の語用論的機能に関する研究は非常に不足している。まず、“了2”の肯定する機能、新情報を伝える機能、旧情報を伝える機能、報告する機能、話題を終了させる機能、充足感を伝える機能、任意列挙する機能、相互作用する機能、聞き手の反応を期待する機能、指示・命令する機能、前提を提示する機能、結果を導き出す機能などの語用論的機能は、刘勋宁(1998:46)、刘月华他(2001:383-384、427-428)、谭春健(2004:26-31)、王光全・柳英绿(2006:25-30)、肖治野・沈家煊(2009:518-527)、金立鑫・邵菁(2010:319-325)、陈前瑞・胡亚(2016:66-74)、刘娅琼(2016:665-677)などの先行研究に散在しているが、“了2”の語用論的機能の種類を網羅的に整理する先行研究は見られない。例えば、1923年から2013年までの90年間の“了2”に関する研究成果をまとめた孙大星(2018:93-102)においても、“了2”の語用論的機能は網羅的に整理されていない。また、先行研究において、“了2”の各語用論的機能の位置づけや形成要因などに関する体系的な考察も見られない。

人間と言語の関係を扱う語用論において、人間はどのように言語を捉えるのかという認知的な問題が非常に際立つのである(何自然・吴亚欣 2001:10-16)。そのため、本論文が

とっている認知意味論の立場が“了 2”の語用論的問題の研究に適合すると考えられる。ところで、本論文は認知意味論の立場であるため、“了 2”の語用論的機能を意味機能の 1 種とも捉える。つまり、“了 2”の語用論的機能を、何らかの言外の意味を伝える機能とも捉える。例えば、“了 2”の「話題を終了させる」という語用論的機能は、本論文では「『話題終了』義を伝える」という意味機能とも理解される。

以上の分析に基づいて、“了 2”の語用論的機能に関する先行研究の問題点を表 3 でまとめる。

表 3 “了 2”の語用論的機能に関する問題点

問題(19)	先行研究において言及される“了 2”の語用論的機能はどのくらいあるのか。
問題(20)	意味論の立場からみれば、“了 2”の各語用論的機能の形成要因は何であろうか。
問題(21)	“了 2”の新情報を伝える機能と旧情報を伝える機能は矛盾するよう見えるが、その矛盾点を如何に解消すればよいのか。

2.5 終わりに

本章は、意味、形式・構文特徴、語用論的機能という 3 つの側面から“了 2”のこれまでの研究成果を系統的に整理し、関連する問題点を全面的に洗い出した。次章は、“了 2”の意味体系の様式を提起した上で、問題(1)の“了 2”の意味体系をどのように規定すればよいのかのための解決策を提示する。第 4 章から第 13 章までは、次章で提起する“了 2”の意味体系の様式に基づいて問題(2)–問題(21)を解決する。第 14 章は、第 4 章から第 13 章までの論述に基づいて問題(1)のための解決策をより具体化する。

<注>

1. 原文は、“‘了 2’分七大项二十八小项，就不免有些烦琐，不便记忆。诚然，‘了’字的用法是复杂的，但能不能在材料的组织上想点办法，执简以驭繁呢。（中略）本书所用的语法间架似乎有点折衷诸家之间的意思，但因此也就不免有些不尽融洽之处”である。
2. 本論文は、収集した先行研究を全部列挙するのではなく、引用するものだけを挙げる。詳細については、参考文献欄を参照のこと。
3. 詳細については、太田(1958:351-354)、王力(1980:447-448)、刘勋宁(1998:39-47)、齐沪扬(2003:30-36)、高顺全(2006:60-66)、陈鹏飞(2007:138-140)などを参照のこと。
4. 基本的意味は典型的意味(prototypical meaning、プロトタイプの意味)とも呼ばれる(靛山・深田 2003b:142, 170)。
5. 詳細については、刘勋宁(1998:35-48)、刘月华他(2001:379)、吕文华(2010:548-556)などを参照のこと。
6. 詳細については、守屋(1995:259)、吕叔湘(1999:351)、高顺全(2006:60-66)、王媛(2011:17-21)などを参照のこと。
7. 原文は、“肯定事态出现了变化或即将出现变化”である。
8. 原文は、“以‘变化’的日常义为标准去判断是否需要加‘了 2’，是学习者出现大量遗漏偏误的直接原因。因此，我们建议在教学中沿袭朱德熙(1982)的说法，将‘了 2’的语法意义描述为‘新情况的出现’，而不是‘变化’。避免‘变化’的日常意义对学生的习得造成干扰”である。
9. 原文は、“‘变化、出现新事态’的意义其实是‘实现’义作用于命题(句子)时产生的附带效应”であ

- る。
10. 原文は、“所谓‘实现’，意思就是‘成为现实’，也就是‘发生’、‘出现’，‘实现’意思更宽泛一些。过去一般汉语教材中说表示‘出现了新的情况’，表示‘变化’，也是这个意思”である。
 11. (1)は杉村(2009:5)の原文“那天晚上下雨了吗?”を書き換えたものである。
 12. 詳細については、Chao(1948:24-25、1968:354)、朱德熙(1982:209)、竟成(1993:52-57)、刘勋宁(1998:46)、刘月华他(2001:383)、王学群(2003:51-71、2008:75-90)、谭春健(2004:26-31)、肖治野・沈家煊(2009:518-527)、杉村(2009:1-12)、金立鑫・邵菁(2010:319-325)、張文青(2012:105-122)、周小兵・欧阳丹(2014:8-15)、陈前瑞・胡亚(2016:66-74)、黄瓊輝(2016:42-58)などを参照のこと。
 13. 詳細については、郭穎侠(2003:215-232)、劉綺紋(2006:180-183)、刘娅琼(2016:665-677)、饶宏泉(2018:77)を参照のこと。
 14. 本論文は、“了2”が含まれる文を“了2”構文と呼ぶことにする。
 15. [P]はフレーズという意味である。
 16. 原文は、“交叉的情形比我们现在想到的要复杂，还可以深入研究”である。
 17. 中国語の動相という概念を説明するために、まずアスペクト(aspect)という概念を説明しなければならない。「アスペクトとは、動詞の表す事態の内部的な時間構造の捉え方に関わる文法カテゴリーであり、事態と発話時との時間関係を表すテンスとは異なる」(野田 2015:4)。また、アスペクトは文法的アスペクトと語彙的アスペクト(lexical aspect)に分けられる(野田 2015:4)。文法的アスペクトは「動詞の屈折や接辞・助動詞などの文法的手段によって表される」(野田 2015:4)。中国語では、文法的アスペクトは動相(动相)とも呼ばれる(吕叔湘 1982:229、朱繼征 2000:20)。例えば、中国語の裸動詞“吃”(食べる)は、接辞“完”(終わる)が後続すると、「食べる」という事態が「終わる」という動的段階に達するという動相的意味を表す。また、語彙的アスペクトは「動詞に内在する時間的特性」である(野田 2015:4)。例えば、中国語の裸動詞“是”(である)、裸動詞“吃”(食べる)、裸動詞“离开”(離れる)に「内在する時間的特性」はそれぞれ「時間上で変化のない恒常的な状態」、「終結点を持たない、継続的な動作」、「固有の終結点を持ち、かつ瞬間的な事態」(野田 2015:4)である。
 18. 裸動詞の定義について、朱繼征(2000:19-26)において説明されていないが、张豫峰(1996:52-56)、彭淑莉(2011:89-92)から明らかのように、裸動詞は狭義裸動詞と広義裸動詞に分けられる。狭義裸動詞の特徴は、その動詞の前に連用修飾語が付与されず、その動詞の後に本論文で規定する動相標識が付与されないということである。広義裸動詞の特徴は、その動詞の後に本論文で規定する動相標識が付与されないということである。朱繼征(2000:19-26)に取り上げられている例文から分かるように、朱繼征(2000:19-26)が述べている裸動詞は広義裸動詞である。本論文で述べる裸動詞も広義裸動詞である。
 19. ここで述べる“了1”は語尾“了”である。马希文(1982:1-30)、木村(1983:22-30)、王维贤(1997:171-187)、郭锐(2015:435-449)などによれば、“了1”は時制を表す“了1”と結果的意味を表す“了1”に分けられる。また、劉綺紋(2006:45-51、92-93)、税昌锡(2012:44-58)、陆俭明(2013:238-239)、张立昌(2014:86-98)などによれば、時制を表す“了1”は起動的意味と完了的意味を表す。つまり、“了1”は起動的意味、完了的意味、結果相的意味という3種類の動相的意味を表すということが明らかにされてきた。
 20. この問題については第13章13.2節で詳しく説明する。
 21. パーフェクトとは、事象時間が参照時間より早いという時間関係である。英語の場合、「have/had+動詞の過去分詞形」という形式によって表される(劉綺紋 2006:27-30)。日本語では「一般には『完了相』や『完了形』と称されている」が(劉綺紋 2006:27)、中国語では“已然体”や“完成体”と称されている(王洪君他 2009:313-314)。パーフェクトの和訳としての「完了相」は本論文で述べる「完了相」とは異なる概念である。
 22. 詳細については、吕叔湘(1982:227-233)、藤堂・相原(1985:73)、朱繼征(2000:25)などを参照のこと。
 23. (8)は、朱繼征(2000:26)の原文“他坐船去英国。”を書き換えたものである。
 24. 原文は、“汉语‘了’的问题是关涉汉语动相体系全局的关键问题”である。
 25. 本論文で述べる「形成メカニズム」とは、ある事物がどのように形成するかを示す仕組み、過程、プロセスである。
 26. ここで述べている「一定の標識や語形変化」は屈折接辞、屈折とも呼ばれる(長屋 2015:54)。
 27. 時制の概念については、陈平(1988:401-422)、龚千炎(1994:1-6)、顾阳(2007:22-38)、何伟・马瑞芝(2011:19-27)、石塚(2015:161)、陈国良(2015:129-130)などを参照のこと。

28. 本論文で述べている「時制的意味」という概念は王伟(2006:12、38)で述べている「テンポラリティ」(temporarily)という概念に相当する。
29. 詳細については、金立鑫(1998:105-119)、李铁根(2002:1-13)、刘勳宁(2002:70-79)、黄瓚辉(2016:42-58)などを参照のこと。
30. 詳細については、陈前瑞(2005:66-73)、陈前瑞・王继红(2012:158-174)、叶琼(2014:85-91)、陈前瑞・胡亚(2016:66-74)などを参照のこと。
31. 詳細については、赵立江(1997:112-124)、金立鑫(1999:1-5)、王洪君他(2009:317)、王巍(2010:18、37-38、73)、周小兵・欧阳丹(2014:8-15)、徐晶凝(2016:74-84)などを参照のこと。
32. “了 2”が現在時制の意味を表すこともできるという主張については、李铁根(2002:1-13)、张黎(2010:12-21)を参照のこと。
33. 詳細については、Li 他(1982:117-138)、孔令达(1990:101-108)、卢英顺(1993:22-24、2012:23-29)、张济卿(1998b:18-26)、望月(2000:12-16)、Lin(2003:259-311)、彭小川・周芎(2005:136-141)、劉綺紋(2006:174-175)、Vandenberg and Wu(2006:60-86)、陈小红(2007:54-60)、张黎(2010:12-21)、張文青(2012:105-122)、何文彬(2013:10-18)、邹海清(2014:34-45)、张立昌(2014:73)、武村(2016:28-35)、陈前瑞・胡亚(2016:66-74)、夏炎青(2017:52-71)などを参照のこと。
34. 「現在関連性」という概念については、学者によって捉え方が異なる。具体的には第 13 章 13.3 節で紹介する。
35. 詳細については、守屋(1995:148)、王亜新(2011:15)、黄伯荣・廖序东(2012:79-81)、陆俭明(2013:62-81)などを参照のこと。ところで、鳥井(2003:75-86)、黄伯荣・廖序东(2012:80-81)から分かるように、文成分分析法に基づけば中国語の文成分は 6 種類に分けられるが、構文分析法に基づけば中国語の文成分は主語と述語という 2 種類だけに分けられる。後者の主語と述語は主部と述部とも呼ばれる。本論文の文成分の分類方法は文成分分析法に基づく。
36. 刘月华他(2001:533-628)が述べている 7 種類の補語のうち、①結果補語と②方向補語が複合動詞の語尾として扱われやすい。なぜならば、「裸動詞+①結果補語/②方向補語」という補語構造は、動詞部と補語部の間のつながりが緊密であり、全体的にみれば 1 つのかたまりとしての特徴が際立つからである(孙英杰 2006:65-69)。一方、「裸動詞+①結果補語/②方向補語」以外の補語構造は、「裸動詞+“得+……”」、「裸動詞+“不得”」、「裸動詞+“不+……”」、「動詞+(目的語+)“个+……”」、「動詞+(目的語+)数量補語」、「裸動詞+『前置詞+……』」という形の補語構造がある。これらの補語構造においては、動詞部と補語部の間のつながりが緩やかである(毕罗莎 2017:55-62)。つまり、これらの補語構造における補語は何らかの動詞の語尾として扱われ難い。
37. 本論文は、複数の文成分が含まれる“了 2”構文を「複数の文成分+“了 2”」構文と呼び、特定の文成分だけが含まれる“了 2”構文を「特定の文成分+“了 2”」構文と呼ぶことにする。
38. (14)の B 文は、邓宇阳(2019a:50)の原文“下了。/?那天晚上。/?雨了。”を書き換えたものである。
39. 原文は、“缺乏严格意义的形态变化，(中略)结构独特，灵活多变，颇多隐含，着重意念”である。
40. 原文は、“一个外国人学习怎么用‘了’，实际上就是要学习在哪情况下用‘了’，单纯学习句子结构对他们不会有多大帮助”である。
41. 原文は、“近些年，学者们逐渐认识到‘语气’的语用功能的本质，‘语气’的概念也被重新定义为‘一种语法范畴’，‘句子身上特有的表示话语功能类型的语用成分’。这里所谓的话语功能指的是话语能够反映说话者的语用目的，进而我们可以这样理解，句子的语气反映了句子的语用目的。人在言语交际过程中，总是要有一定的语用目的，或是向别人陈述事情，或是向别人询问事情，或是向别人提出请求或命令，或是向别人发出感叹或抱怨。诸如此类，多种多样的语用目的都可以借助丰富的语气表达出来”である。
42. 本論文は、“了 1”が含まれる文を“了 1”構文と呼ぶことにする。
43. 形式意味論の立場では、文のモダリティの意味が除外されて残される命題の意味が文の真理条件として扱われる(Lakoff 1987:299-301、Langacker 2008:35、祁峰 2012:177-178、坂原 2015:56、峯島 2015:217、徐烈炯 2017:176)。場合によって、真理条件は、言外の意味、語用論の意味などに対して述べる言内の意味、明言される意味なども指す(陈新仁 2015:838-849、澤田他 2017:33-36)。
44. ここで述べる「(“了 2”の意味を)“了 2”構文自体に内在する文脈的要素から推論する」ということは「語用論的拡充」(pragmatic enrichment・pragmatic embellishment)に関わっている。「語用論的拡充」とは、ある文に含まれる明示的な意味情報から、その文以上の意味情報を導き出すということである(陈新仁 2015:839-840)。

第3章 文末助詞“了”の意味体系の様式の提起

3.1 はじめに

本章は、「典型-非典型」、「内包-外延」という2種類の意味関係を基準に、先行研究で見られる“了2”の意味を分類し、“了2”の意味体系の様式を提起する。

ところで、本論文は肖治野・沈家煊(2009:518-527)が述べている行為域、認識域、言語域の“了2”をそれぞれ“了2<行為>”、“了2<認識>”、“了2<言語>”と呼ぶことにする。

3.2 概念、意味、定義

ソシュールの構造主義言語学によれば、意味が満ちて人間には理解できる語・記号(signe)は能記(signifiant)と所記(signifié)の結合によって形成される(Barthes 1957:90-115、松本 2003a:3-4)。一般的に言えば、能記は音声などの言語形式であり、所記は概念(concept)である(Barthes 1957:99、松本 2003a:4)。構造主義言語学や文化人類学的言語学では「概念」が「意味」と捉えられる(松本 2003a:4)。認知言語学でも「意味が概念的なものであることを何ら抵抗なく受け入れる」(松本 2003a:5)。ただし、認知言語学では「概念」そのものが静的なもの、または客観的に存在しているものと捉えられる一方、「意味」そのものが動的なもの、または主観的に存在しているものと捉えられる(松本 2003a:4-5、Langacker 2008:34-42、56)。本論文は構造主義言語学の意味観を静的意味観と呼び、認知言語学の意味観を動的意味観と呼ぶことにする。動的意味観からみれば、「意味」というのは次のように捉えられる。第一に、「意味は、概念ではなく概念化(conceptualization)である」(Langacker 2008:38)。第二に、「意味は、概念内容とその概念内容を解釈(construal)¹する特定の方法で構成されている」(Langacker 2008:55)。第三に、「意味」は、一般的な世界認識から独立したものや概念内容というより、人間の認識過程を経た概念内容であり、特定の認知様式で解釈された概念内容であり、人間の外界認識の産物である(松本 2003a:5、松本 2003b:49、束定芳 2008:105-107、Langacker 2008:71)。第四に、1つの「意味」は、「一群の対象(知覚的对象)」を1つの「記号」で統括して得る1つの「心的実在」でもある(山本 1985:41-42)。第五に、1つの「意味」は1つの心的概念(mental concept)でもある(Clausner and Croft 1999:1)。要するに、文法的視点からみれば、ある語の「意味」は、その語が指示する客観的な「概念内容」が人間の何らかの主観的な知識によって修飾された結果であると言ってもよい。そのため、ある語の「意味」は完全に「固定」されているものではない(Langacker 2008:46-55)。例えば、「本」の「概念」・「概念内容」は、「本」そのものであり、人間の認識過程を経ずにそのまま存在しているものであり、ぼんやりした存在である。一方、「本」が指示する「意味」は、「本」そのものというより、「ページ数が多い」、「糸や糊などで装丁して製本した」、「何らかの知識が掲載されている」、「通常四角い」などの人間の主観的な知識によって修飾された「本」である。例えば、「何らかの知識が掲載されている」としても、2ページだけの紙が綴じられているものはどうにも「本」として認識されない。人間にとって、『本』

として認識されない」ということは、「『本』であることを『意味』しない」ということになる。「本」として認識されない理由は、「本」そのものが指示する「意味」において通常「ページ数が多い」という主観的な知識が含まれるからである。また、われわれはある四角い形の本を見ると、その本を瞬時に「本」として意識する可能性が大きい、星形の外見を持つ本を見ると、その本を瞬時に「本」として意識しない可能性が大きい。人間にとって、「本」として意識しないということは、「本」としての「意味」がないということになる。瞬時に「本」として意識しない理由は、「本」そのものが指示する「意味」において、「通常四角い」という主観的な知識が含まれるからである。

静的意味観における「概念」というものは「曖昧であり、よく理解できないもの」になり、「20世紀の多くの言語学者はこの考え方に抵抗感を感じてきた」（松本 2003a:4）。一方、認知言語学において、「概念」はよく「カテゴリー」(category)として捉えられる(Estes 1994:4、Clausner and Croft 1999:2、東定芳 2008:67-68、刘晋 2014:64-65)。認知言語学でよく言われる「カテゴリー」というものは様々な具体的な内容や規定を持つ。例えば、典型(prototype、プロトタイプ)的な要素、非典型的な要素、スキーマ(schema)、メタファー(metaphor)、基本レベルカテゴリー(basic level category)、上位レベルカテゴリー(superordinate level categories)などの内容や規定を持つ(東定芳 2008:49-66)。それらの内容や規定が「概念内容」として捉えられるようになり(東定芳 2008:49-66)、もともと「よく理解できない」「概念」を理解しやすいものにさせている。

「定義」というのも「概念」や「意味」と紛らわしい概念である。本論文で述べる「定義」とは、ある語を解釈するために用いられる言葉であり、辞書に記載される解釈的な言葉であり、意味記述のことである。ある側面からみれば、われわれはある語の定義を用いてその語を置き換えることができる。

総じていえば、本論文で述べる「概念」は人間の認識過程を経ずに客観的に存在しているものであり、ぼんやりしてそのまま存在しているものである。本論文で述べる「意味」は人間の何らかの認識過程を経て理解された「概念」である。本論文で述べる「定義」は言語化する「意味」であり、意味記述のことである。

3.3 文末助詞“了”の言語的意味と語用論的意味

「言語的な情報を扱うのが辞書であり、事物に関する知識を扱うのが百科事典である」（松本 2003a:8）。静的意味観は辞書的(dictionary)意味観であり、動的意味観は百科事典的(encyclopedic)意味観である(Langacker 2008:49-50)。

Langacker(2008:47-51)から分かるように、静的意味観・辞書的意味観では、「言語は一般的に、自律した心的『機能』と捉えられており」、「制限された自己完結したシステム」であるので、ある語は「比較的少数の意味素性²と記述的表現で構成されている」。ソシュールの構造主義記号観からみれば、ある語が「比較的少数の意味素性と記述的表現で構成されている」というのは、ある語が比較的少数の所記・概念内容と能記・言語形式で構成されているということである。このように、ある語が指示する概念内容は「固定」されているということが分かる。また、静的意味観・辞書的意味観では、ある語が指示する「言語的な意味」(linguistic meaning)・「辞書的な意味」とその語が指示する「言語外的な

意味」・「語用論的に推測される意味」の間には明確な境界線があるという (Langacker 2008:46-55)。

動的意味観・百科事典的意味観では、ある語が指示する概念内容は「中心」的な概念内容とその「中心」的な概念内容に関する百科事典的な知識から構成される (Langacker 2008:46-55)。そのため、ある語が指示する概念内容は単数や少数の物事ではなく、数えきれないほどの物事からなる概念群であり、「固定」されていないものである (Langacker 2008:46-55)。これは、ある語が指示する意味が単数や少数の物事ではなく、意味群であるということを意味する。その概念群や意味群が及ぶ範囲は認知領域 (cognitive domain・domain)³とも呼ばれる (Clausner and Croft 1999:3-4、松本 2003b:65-71)。また、認知領域は、特定の概念が指示する背景知識としても捉えられ (Clausner and Croft 1999:3)、特定の概念や意味が生じることのできる経験可能な領域としても捉えられる (Langacker 2008:56)。認知領域の視点からみれば、ある語の意味は、その語の認知領域に含まれるすべての要素であると言ってもよい。この理由で、「認知意味論では、語が多義であることを言語の基本的事実として認識する」わけである (松本 2003a:14)。

Langacker (2008:50)によれば、「ある語彙の意味においてきわめて中心に位置する項目は、その言語表現が使用される際、ほぼ常に活性化される。それに対して、周辺に位置する項目はときおり活性化される。その他のきわめて周辺に位置する項目は、ある特定の文脈においてのみ活性化される」。実は、「中心」に位置する意味は典型的意味 (prototypical meaning、プロトタイプの意味)を指す (靱山・深田 2003b:142、169、束定芳 2008:49、68)。典型的意味は、ある語が指示する意味群の中で「最も確立されていて、認知的際立ちが高く、また、最初に習得され、中立的なコンテキストで最も活性化されやすいといった特徴を有する」 (靱山・深田 2003b:169)。そのため、ある側面からみれば、ある語の典型的意味は Langacker (2008:46-55)が述べている「言語的な意味」・「辞書的な意味」として捉えられやすく、その語の非典型的意味は Langacker (2008:46-55)が述べている「言語外的な意味」・「語用論的に推測される意味」として捉えられやすいということが分かる。ただし、動的意味観・百科事典的意味観では、ある語が指示する「言語的な意味」・「辞書的な意味」と「言語外的な意味」・「語用論的に推測される意味」はまったく対立的でもない。その2種類の意味の間には重なっている移行領域はあるが、明確な境界線はない (Langacker 2008:46-55)。

本論文は、Langacker (2008:46-55)が述べている「言語的な意味」・「辞書的な意味」と「言語外的な意味」・「語用論的に推測される意味」をそれぞれ言語的意味と語用論的意味と呼ぶことにする。そして、本論文は「典型-非典型」という意味関係を基準に、“了 2”が指示する意味を言語的意味と語用論的意味に分ける。

3.4 文末助詞“了”の内包的意味と外延的意味

「中国語学において、文末助詞“了”の意味や属性に対する認識はまだ一致していない」⁴(张兰英 2005:132)。例えば、“了 2”の基本的意味⁵を説明するためには、通常「変化」(变化)、「出現」(出现)、「実現」(实现)、「発生」(发生)という4つの概念が用いられるが⁶、第1章1.3節、第2章2.2節で述べたように、「変化」、「出現」、「実現」、「発生」と

いう概念は、文字どおりに捉える[+変化]、[+出現]、[+実現]、[+発生]という具体的な意味特徴を示す概念であるのか、それとも、2つの状態の接点に内包される「転換」⁷という抽象的な認知様式を示す概念であるのかについて、未だに定説はない。また、「変化」、「出現」、「実現」、「発生」という意味概念に基づく「変化」義、「出現」義、「実現」義、「発生」義のいずれを“了2”の基本的意味とすればよいのかについて、国内外においても論争が続いており、統一的な見解はない。一方、“了2”の基本的意味の種類を逐一列挙するのではなく、「変化」、「出現」、「実現」、「発生」などの共通性を追究する研究もある。例えば、刘勋宁(1998:35-48)によれば、「出現」と「発生」が「用語の違い」(用词的差别)に過ぎず、「対立的概念」(对立性的概念)ではない。肖治野・沈家焯(2009:518-527)、陆方喆(2014:43-47)によれば、「実現」は「出現」に相当する。郭锐(2008:13)によれば、『変化、新状況の出現』という意味は、もともと『実現』義そのものが何らかの命題(あるいは文)と相互作用することから生まれる二次的効果に過ぎない⁸。刘月华他(2001:379)によれば、「いわゆる『実現』は『現実になる』という意味を表し、『発生』、『出現』も同様の意味を表す。ただし、『発生』、『出現』より、『実現』の方が意味がやや広い。中国語教材で見られる『新状況の出現』や『変化』はこの『実現』のことを指している」⁹。

もし「変化」、「出現」、「実現」、「発生」などの概念が指示する意味が本質において共通しているとしたら、次の(1)の“了2”が明らかに伝えるのが[+変化]の意味特徴ではなく、[+出現]、[+発生]などの[-変化]の意味特徴であるのはなぜであろうか(杉村 2009:5-6)。それに、次の(2)の“了2”が明らかに伝えるのが[+変化]の意味特徴であり、[+出現]、[+発生]などの[-変化]の意味特徴ではないのはなぜであろうか(邢福义 1984:21-26)。

(1) 那天晚上下雨了¹⁰。 (杉村 2009:5)
 (その夜に雨が{降った・降ることが発生した}。)

(2) 大人了, 还这么爱哭! (邢福义 1984:26)
 (大人{になった・に変わった}から。こんなに泣き虫ではだめだよ!)

実は、杉村(2009:1-12)、周小兵・欧阳丹(2014:8-15)から分かるように、“了2”の先行研究でしばしば言及される「変化」というのを文字どおりに捉える[+変化]という具体的な意味特徴として扱う研究もあれば、2つの状態の接点に内包される抽象的な動的認知様式として扱う研究もある。つまり、“了2”の先行研究でよく見られる「変化」という用語には2種類の捉え方が混在している。张黎(2010:16)はその2種類の捉え方の本質的な相違を次のように説明している。具象的な意味特徴としての「変化」は「2つの状態の比較」(两个界面间的对比)を際立たせるが、抽象的な認知様式としての「変化」は「2つの状態が転換する境目や接点」(两个界面转化的临界点)を際立たせるということである。例えば、萧国政(2000:568-576)、郭锐(2008:5-15)などが述べている「変化」は前者であり、新島(1955:229-241)、张国华(2017:209)などが述べている「変化」は後者である。

张黎(2010:16)の説明に基づいて、(1)、(2)の“了2”の意味の共通性と相違性を考えよう。「2つの状態の比較」を際立たせるかどうかという基準からみれば、(1)、(2)の“了

2”の意味は異なる。例えば、別の発話場面や文脈が付与されなければ、(1)の“了2”は単に「雨が降った」ということだけを際立たせ、「雨が降った」ことと別のことの比較を際立たせない。しかし、(2)の“了2”は「大人」の状態と「子供」などの「非大人」の状態の比較を際立たせる。また、「2つの状態が転換する境目や接点」という認知面からみれば、(1)、(2)の“了2”の意味は共通する。例えば、(1)の“了2”は「雨が降らない」という状態から「雨が降る」という状態に「転換」した接点を示し、(2)の“了2”は「子供」などの状態から「大人」の状態に「転換」した接点を示す。このように、「変化」義、「出現」義、「実現」義、「発生」義は具体的な意味特徴が異なるが、いずれも「2つの状態が転換する境目や接点」を示す。

ところで、劉綺紋(2006:161-169)と張黎(2010:12-21)が論証したように、“了2”の「変化」義、「出現」義、「実現」義、「発生」義などの命題的意味だけでなく、“了2”の「肯定」(肯定)義、「決定」(決定)義、「確定」(確定)義、「確認」(確認)義などのモダリティの意味も「2つの状態が転換する境目や接点」を示す¹¹。次の(3)を考えよう。

- (3) 她一定是王太太了。 (彭小川・周芍 2005:138)
(あの方はきっと王さんだ。 確かめたよ。)

(3)の“了2”は[+変化]の意味特徴を示さず、[+確認]の意味特徴を示す。にもかかわらず、(3)の“了2”は何らかの「転換」した接点を示す。それは、発話者が「あの方はきっと王さんだ」という判断を確かめていないという状態から確かめたという状態に「転換」した接点である。このように、“了2”は具象的な意味特徴としての「変化」を表さなくても、必ず抽象的な認知様式としての「変化」を表すということが分かる。

抽象的な認知様式としての「変化」について、Huang(1987:184-197、203-220)は「限界描写」(marking a boundary)、卢福波(2002:109-118)は「過程転換」(过程转换)、王学群(2003:51-71、2008:75-90)は「限界到達」(达界)、谭春健(2004:26-31)は「状態転換」(易态)、劉綺紋(2006:35-53)は「限界達成」、吕为光(2007:147-149)、張黎(2010:12-21)、张国华(2017:208-209)は「限界変化」(界变)、石毓智(2015:229-247)は「実現過程」(实现过程)、税昌锡・胡云晚(2020:192-206)は「事態転化」(事态转化)と呼んでいる。

このように、先行研究において、具象的な意味特徴と抽象的な認知様式とで混在的に論じられてきたため、“了2”の基本的意味が統一的な見地から明らかにされてこなかったものと考えられる。混乱を避けるため、本論文は具象的な意味特徴として理解されている「変化」、「出現」、「実現」、「発生」をそのまま「変化」、「出現」、「実現」、「発生」と呼び、抽象的な認知様式として理解されている「変化」、「出現」、「実現」、「発生」を「転換」と呼ぶことにする。

ところで、論理学の観点では、ある概念が「一群の対象(知覚的对象)」とその「一群の対象(知覚的对象)」の「共通属性」から構成され、また、その「一群の対象(知覚的对象)」は「外延」と呼ばれ、「一群の対象(知覚的对象)」の「共通属性」は「内包」と呼ばれる(山本 1985:41-42)。つまり、ある概念が指示する意味は外延的意味と内包的意味に分けられる。例えば、「芸術」という概念の外延は「演劇」、「音楽」、「絵画」、「彫刻」、「文学」な

どの「対象」を指すが、「芸術」という概念の内包は、各「対象」の「共通属性」としての「人間活動」、「自己表現」などのことを指す。また、「芸術」という概念と、「演劇」、「音楽」、「絵画」、「彫刻」、「文学」などの概念との関係は上位概念と下位概念の関係に理解されても構わない。通常上位概念を解釈し具体化するためには下位概念を用いてもよい。つまり、上位概念は下位概念で言い換えられるということである。例えば、ある発話者がある絵画を指して「このような芸術は理解できない」という文を発話する場合、この文は「このような絵画は理解できない」という文で言い換えられる。ところで、本節で論じたように、“了2”の動的認知様式としての「転換」は、“了2”の「変化」、「出現」、「実現」、「発生」、「肯定」、「決定」、「確定」、「確認」などの「共通属性」である。そのため、“了2”の動的認知様式としての「転換」は“了2”の内包的意味として位置づけられるべきである。また、(1)の“那天晚上下雨了”(その夜に雨が降った)という文は“那天晚上下雨这件事已经发生”(その夜に雨が降るということが発生した)という文で解釈されてもよい。この解釈関係から分かるように、“了2”が何らかの上位概念と見なされるならば、「変化」、「出現」、「実現」、「発生」、「肯定」、「決定」、「確定」、「確認」などは“了2”に対する下位概念、あるいは“了2”が指示する「一群の知覚的对象」と見なされる。この意味で、「変化」、「出現」、「実現」、「発生」、「肯定」、「決定」、「確定」、「確認」などは“了2”の外延的意味として位置づけられるべきである。

肖治野・沈家焯(2009:518-527)は“了2”の意味を“了2<行為>”の意味、“了2<認識>”の意味、“了2<言語>”の意味に分けている。実は、この3種類の意味は、先行研究で見られる「変化」、「出現」、「実現」、「発生」、「肯定」、「決定」、「確定」、「確認」などの“了2”の意味を三域の分類方法を基準に再分類した結果に過ぎない。例えば、肖治野・沈家焯(2009:518-527)は“了2<認識>”の意味を「新しい認識状態の現れ」(新知态的出现)と記述し、また、「新しい認識状態の現れ」という意味を「考える」、「判断する」、「評価する」、「決定する」、「確認する」などの精神活動に再解釈している。つまり、先行研究でよく見られる「決定」、「確認」などの意味は“了2<認識>”の意味に相当するということが分かる。こうしてみれば、“了2<行為>”、“了2<認識>”、“了2<言語>”の意味も“了2”の外延的意味として位置づけられる。

第2章2.2節で提起した「“了2”の基本的意味を説明するための意味概念をめぐって論争が生じる理由は何であろうか」という問題点を振り返ってみよう。まず、刘勋宁(1998:35-48)、肖治野・沈家焯(2009:518-527)などは、「変化」義を通しては一部の文の“了2”だけを説明することができるが、すべての文の“了2”を説明することは無理であると指摘し、「変化」義に異議を唱える。谭春健(2003:73)は「変化」義、「出現」義が抽象すぎるため、「第二言語の教授法に直接に応用されることは無理である」¹²と指摘し、「変化」義、「出現」義に異議を唱える。刘勋宁(1998:35-48)、谭春健(2003:73)、肖治野・沈家焯(2009:518-527)などが「変化」義、「出現」義を“了2”の基本的意味とすることに異議を唱える理由は、「変化」、「出現」などの概念を外延的意味の立場から考察するからである。もし、「変化」、「出現」などの概念を本論文で述べる「転換」という“了2”の抽象的な認知様式として捉えれば、つまり「変化」、「出現」などを“了2”の内包的意味として考察すれば、異議を唱える理由もなくなると考えられる。また、朱德熙

(1982:209-210)は“了2”の意味を「変化」義と「出現」義という2種類に分類するが、刘月华他(2001:379)は分類せず、「変化」義、「出現」義、「実現」義、「発生」義などを同一視する。朱德熙(1982:209-210)と刘月华他(2001:379)の意見の食い違いは、朱德熙(1982:209-210)は“了2”の外延的意味の立場から“了2”の意味を分類し、刘月华他(2001:379)は“了2”の内包的意味の立場から“了2”の意味を統一するという立場の食い違いによるのである。とにかく、“了2”の基本的意味に関する意味概念をめぐる論争は、内包的意味と外延的意味の立場の食い違いから生まれるということが明らかになった。

3.5 文末助詞“了”の意味体系の様式

3.3節、3.4節で述べたように、「典型-非典型」という意味関係を基準に“了2”の意味を分類すれば、“了2”の意味は言語的意味と語用論的意味に分けられるが、「内包-外延」という意味関係を基準に“了2”の意味を分類すれば、内包的意味と外延的意味に分けられる。論理的には、“了2”の言語的意味も語用論的意味もそれぞれ外延的意味と内包的意味という2種類に再分類することができる。ただし、本論文は“了2”の言語的意味だけを外延的意味と内包的意味という2種類に再分類し、“了2”の語用論的意味を外延的意味と内包的意味という2種類に再分類しない。その理由は次に述べるとおりである。

“了2”の言語的意味は“了2”の典型的意味であり、より「固定」的な属性を示す。そのため、“了2”が指示する複数の「外延」・「対象」と、その複数の「外延」・「対象」の「内包」・「共通属性」は、“了2”の言語的意味の範囲から特定しやすい。一方、“了2”の語用論的意味は“了2”の非典型的意味であり、“了2”特有の意味でないと言ってもよいので、「固定」されていない属性を示す。そのため、“了2”が指示する複数の「外延」・「対象」と、その複数の「外延」・「対象」の「内包」・「共通属性」は、“了2”の語用論的意味の範囲から特定し難い。要するに、“了2”の言語的意味は内包的意味と外延的意味に再分類することに異論の余地がないが、“了2”の語用論的意味は内包的意味と外延的意味に再分類することに異論の余地がある。したがって、本論文は“了2”の言語的意味だけを内包的意味と外延的意味に再分類する。

先行研究でよく見られる“了2”の語用論的意味を網羅的に整理した結果、主に「充足」義¹³、「過度」義¹⁴、「話題終了」義¹⁵、「前提」義¹⁶、「結論」義¹⁷、「事象継続」義¹⁸、「肯定・決定・確定・確認」義¹⁹、「注意」義²⁰、「強調・感嘆」義²¹、「相互作用」義²²、「婉曲」義²³、「任意列举」義²⁴、「旧情報」²⁵、「新情報」義²⁶、「指示・命令」義²⁷、「聞き手の反応の期待」義²⁸、「報告」義²⁹、「解説」義³⁰、「対話者共有情報修正」義³¹という19種類を得た。それでは、本論文は先行研究でよく見られる“了2”の意味を内包的意味、外延的意味、語用論的意味という3種類の意味に類別した上で、“了2”の意味体系の様式を次の表1が示すように提起する。

表1 “了2”の意味体系の様式

言語的意味(言内の意味)	語用論的意味(言外の意味)
①内包的意味	(「肯定・決定・確定・確認」義)
「転換」義	「聞き手の反応の期待」義 「対話者共有情報修正」義
②外延的意味	「強調・感嘆」義 「指示・命令」義
(「肯定・決定・確定・確認」義) ³² 「変化」義 「出現」義 「実現」義 「発生」義	「相互作用」義 「話題終了」義 「事象継続」義 「任意列举」義 「新情報」義 「旧情報」義 「注意」義 「充足」義 「過度」義 「前提」義 「結論」義 「婉曲」義 「報告」義 「解説」義

3.6 終わりに

以上、「典型-非典型」、「内包-外延」という2種類の意味関係を基準に“了2”の意味体系の様式を提起した。ところで、“了2”は中国語の時間構造を反映する重要な機能語でもある。“了2”の動相的意味、時制的意味という時間的意味は“了2”の意味体系においてどのように位置づけられればよいのかについて、表1ではまだ提示されていない。“了2”の時間的意味の位置づけについて第13章で詳しく検討する。次章から第13章までの論述に基づいて、第14章は表1の内容を直したり充実させたりして、最終的に“了2”の具体的な意味体系を確立する。

〈注〉

1. 認知言語学において、ある概念が指示する意味をイメージ・スキーマ(image schema)、スキヤニング(scanning)、視点配列(viewing arrangement)、メタファー(metaphor)などの認知的方法(東定芳 2008:106-107)で理解して説明することは“construal”と呼ばれる。また、松村(1988:396)から分かるように、通常語句の意味や物事の意味を理解して説明することは「解釈」と呼ばれる。そのため、“construal”という認知言語学の用語は「解釈」と訳されている。この訳し方はLangacker(2008:71)の日本語訳を参照のこと。
2. 意味素性は意味特徴、意味成分、意味標識とも呼ばれる(松本 2003b:17)。

3. その概念群や意味群が及ぶ範囲は Langacker には認知領域(cognitive domain・domain)と呼ばれ、Fillmore にはフレーム(frame)と呼ばれる(Clausner and Croft 1999:3-4、松本 2003b:65-71)。
4. 原文は、“语法学界对句末的‘了’的研究，还没有一致性的结论，无论是对它所表示的含义，还是对它的词性认定，都存在差异”である。
5. 基本的意味は典型的意味(prototypical meaning、プロトタイプの意味)とも呼ばれる(靛山・深田 2003b:142、170)。
6. 詳細については、刘勋宁(1998:35-48)、刘月华他(2001:379)、吕文华(2010:548-556)などを参照のこと。
7. Huang(1987:184-197、203-220)の「限界描写」(marking a boundary)説、卢福波(2002:109-118)の「過程転換」(过程转换)説、王学群(2003:51-71、2008:75-90)の「限界到達」(达界)説、谭春健(2004:26-31)の「状態転換」(易态)説、劉綺紋(2006:35-53)の「限界達成」説、吕为光(2007:147-149)、张黎(2010:12-21)、张国华(2017:208-209)の「限界变化」(界变)説、石毓智(2015:229-247)の「實現過程」(实现过程)説、税昌锡・胡云晚(2020:192-206)の「事態転化」(事态转化)説などは、いずれも2つの状態の接点を示す「転換」という動的認知様式に関する論説である。
8. 原文は、“‘变化、出现新事态’的意义其实是‘实现’义作用于命题(句子)时产生的附带效应”である。
9. 原文は、“所谓‘实现’，意思就是‘成为现实’，也就是‘发生’、‘出现’，‘实现’意思更宽泛一些。过去一般汉语教材中说表示‘出现了新的情况’，表示‘变化’，也是这个意思”である。
10. (1)は、杉村(2009:5)の原文“那天晚上下雨了吗?”を書き換えたものである。
11. 命題はモダリティに対する概念である。吴凌非(2002:23-27)、澤田(2009:2)などから分かるように、ある文における命題的要素とモダリティ的要素はそれぞれ文の客観性と主観性を反映するものである。先行研究で見られる“了2”の「変化」、「肯定」という2つの意味概念の命題性とモダリティ性を考えよう。「変化」という動態の担い手は特定の文成分が指示する対象、つまりある文に内在する対象であるが、「肯定」という動態の担い手は特定の文成分が指示する対象ではなく、ある文に外在する発話者である。前者は文成分指向性、つまり命題性を示すが、後者は発話者指向性や精神活動指向性、つまりモダリティ性を示す。客観性と主観性の対立関係からみれば、前者は客観性を示し、後者は主観性を示す。
12. 原文は、“它都不能直接运用到第二语言教学中”である。
13. 詳細については、劉綺紋(2006:131-140)、王光全・柳英绿(2006:25-30)、胡建刚(2007:72-81)、张立昌(2014:139-156)、王珊珊(2014:138-139)などを参照のこと。
14. 詳細については、洪波(1995:10-22)、何洪峰(1998:63-66)、武果・吕文华(1998:13-21)、萧国政(2000:568-576)、刘月华他(2001:386)、高顺全(2006:60-66)、劉綺紋(2006:140-145)、Vandenberg and Wu(2006:87-99)、郭锐(2008:5-15)、張文青(2012:105-122)、何文彬(2013:10-18)などを参照のこと。
15. 詳細については、Chang(1987:120-149)、赵立江(1997:112-124)、武果・吕文华(1998:13-21)、谭傲霜(1999:53-62)、刘月华他(2001:384-385)、劉綺紋(2006:195-197)、何文彬(2013:10-18)、徐晶凝(2014:29-38)などを参照のこと。
16. 詳細については、Chao(1968:354-356)、武果・吕文华(1998:13-21)、刘月华他(2001:383-384)、谭春健(2004:26-31)、劉綺紋(2006:191-195)、徐晶凝(2014:29-38)などを参照のこと。
17. 詳細については、Chao(1968:354-356)、武果・吕文华(1998:13-21)、刘月华他(2001:383-384)、谭春健(2004:26-31)、孙汝建(2005:76-80)、劉綺紋(2006:215-239)、徐晶凝(2014:29-38)などを参照のこと。
18. 詳細については、吕文华(1983:30-39)、竟成(1993:52-57)、卢英顺(1993:22-24)、岳中奇(1997:14-17)、刘勋宁(1998:1-20)、刘月华他(2001:390)、吕叔湘(2002:26-27)、何文彬(2013:10-18)、陈前瑞・胡亚(2016:66-74)などを参照のこと。
19. 「肯定」、「決定」、「確定」、「確認」という主観的動態について、吕叔湘(1982:261)、王力(1984:216-219、1985:228-232)、岳中奇(1997:14-17)、刘月华他(2001:384)、史有為(2002:145-158)、孙汝建(2005:76-80)、张兰英(2005:132-134)、高顺全(2006:60-66)、王伟(2006:89-90)、劉綺紋(2006:201-244)、胡建刚(2007:72-81)、張文青(2012:105-122)、彭小红・侯菲菲(2012:82-85)、陆方喆(2014:43-47)、叶琼(2014:85-91)などでは、“了2”の語気・語用論的意味の一部として扱われる。一方で、守屋(1995:259)、吕叔湘(1999:351)、吴凌非(2002:23-27)、彭小川・周芍(2005:136-141)、张云秋・王赛(2009:119-124)、何文彬(2013:10-18)などでは、“了2”の言内の意味・言語的意味の一部として扱われる。この2つの捉え方の相違に注意されたい。

20. 詳細については、辺勤奮(1996:118-121)、武果・吕文华(1998:13-21)、丁声树他(1999:214)、刘月华他(2001:383)、高顺全(2006:60-66)、王光全・柳英绿(2006:25-30)、劉綺紋(2006:106-109)、張文青(2012:105-122)、叶琼(2014:85-91)、刘娅琼(2016:665-677)、张国华(2017:208-209)、饶宏泉(2018:74-82)などを参照のこと。
21. 詳細については、太田(1958:351)、王力(1985:228-232)、张志公(1991:164)、金立鑫(1998:105-119)、萧国政(2000:568-576)、高顺全(2006:60-66)、卢英顺(2012:23-29)、张立昌(2015:51-59)、娄雅楠(2016:55-56)、刘珍秀(2020:92-93)などを参照のこと。
22. 詳細については、王洪君他(2009:312-333)、肖治野・沈家焯(2009:518-527)、乐耀(2011:121-132)、方梅(2016:67-79)、徐晶凝(2016:74-84)、刘娅琼(2016:665-677)、佟一・罗米良(2016:94-105)、夏炎青(2017:77-78)などを参照のこと。
23. 詳細については、萧国政(2000:568-576)、刘月华他(2001:386)、胡清国(2003:99-104)、张兰英(2005:132-134)、劉綺紋(2006:201-244)、肖治野・沈家焯(2009:518-527)、李洁(2009:89-93)、邓隽(2010:74-77)、彭利贞(2011:211)、張文青(2012:105-122)、何文彬(2013:10-18)、李思沅(2019:64-68)などを参照のこと。
24. 詳細については、吕叔湘(1999:358)、宋绍年・李晓琪(2000:562-567)、刘月华他(2001:427-428)、劉綺紋(2006:239-240)、張文青(2012:105-122)、何文彬(2013:10-18)、李思沅(2019:64-68)などを参照のこと。
25. 詳細については、郭穎侠(2003:215-232)、劉綺紋(2006:180-183)、刘娅琼(2016:665-677)、饶宏泉(2018:77)を参照のこと。
26. 詳細については、Chao(1948:24-25、1968:354)、朱德熙(1982:209)、竟成(1993:52-57)、刘勋宁(1998:46)、刘月华他(2001:383)、王学群(2003:51-71、2008:75-90)、谭春健(2003:73-80、2004:26-31)、肖治野・沈家焯(2009:518-527)、杉村(2009:1-12)、金立鑫・邵菁(2010:319-325)、張文青(2012:105-122)、周小兵・欧阳丹(2014:8-15)、陈前瑞・胡亚(2016:66-74)、黄瓊輝(2016:42-58)などを参照のこと。
27. 詳細については、Chao(1968:354-356)、武果・吕文华(1998:13-21)、丁声树他(1999:211-212)、刘月华他(2001:383)、高顺全(2006:60-66)、肖治野・沈家焯(2009:518-527)、黄伯荣・廖序东(2011:31-32)、張文青(2012:105-122)、何文彬(2013:10-18)、叶琼(2014:85-91)などを参照のこと。
28. 詳細については、武果・吕文华(1998:13-21)、谭春健(2004:26-31)、Vandenberg and Wu(2006:100-137)、王光全・柳英绿(2006:25-30)、叶琼(2014:85-91)などを参照のこと。
29. 詳細については、王光全・柳英绿(2003:25-30)、金立鑫・邵菁(2010:319-325)、何文彬(2013:10-18)、金立鑫・于秀金(2013:3-14)、杨凯荣(2013:31-43)、陈前瑞・胡亚(2016:66-74)などを参照のこと。
30. 詳細については、刘娅琼(2016:665-677)を参照のこと。
31. 詳細については、Li 他(1982:117-138)、沈开木(1987:4-19)、刘勋宁(2002:70-79)、谭春健(2004:26-31)、劉綺紋(2006:207-208)、Vandenberg and Wu(2006:60-86、100-137、169-211)などを参照のこと。
32. 「肯定」、「決定」、「確定」、「確認」という主観的動態を“了2”の言内の意味・言語的意味の1つとして捉える研究もあれば、“了2”の言外の意味・語用論的意味の1つとして捉える研究もある。「肯定・決定・確定・確認」義の位置づけは未確定であるので、ここでとりあえず()をつけてその特殊性を示す。

第4章 文末助詞“了”の内包的意味

4.1 はじめに

第3章3.4節で論じたように、“了2”の内包的意味は動的認知様式としての「転換」義である。本章の目的は、先行研究において“了2”の「転換」義の認知的本質を解釈(construal)¹するために提起されてきた「点」的スキーマに補足説明を加えた上で、“了2”の「転換」義をより精緻化(elaboration)²し、「転換」義の属性をより明らかにするということである。要するに、「転換」義のより厳密な定義・意味記述と意味属性を提示することである。

4.2 イメージ・スキーマ

イメージ・スキーマ(image schema)とは、「日常的、具体的な経験のなかで繰り返し現れる(比較的単純な)パターン、形、規則性」であり(松本 2003b:65)、具象的な経験によるイメージを抽象化した結果としての「認知図式」である(靱山・深田 2003a:101)。イメージ・スキーマの特徴について、二次元的・平面的、三次元的・立体的、トポロジー的³などの幾何学的な特徴があり(松本 2003b:55、靱山・深田 2003b:156-164)、点、線、矢印などの形で表示されるのがほとんどである(靱山・深田 2003b:148-166、李福印 2007:82、朱彦 2016:40)。イメージ・スキーマは概念構造(conceptual structure)、つまり概念内容の1種とも理解され(Clausner and Croft 1999:1)、その概念内容を解釈するための重要な方法の1種とも理解される(束定芳 2008:106-107)。また、「意味は、概念内容とその概念内容を解釈する特定の方法で構成されている」ので(Langacker 2008:55)、イメージ・スキーマは意味の1種、つまり認知的意味⁴として理解されてもよい。Mandler(1992:587-604)によれば、子供が言語を習得する前に知覚や運動感覚を通して作り上げたイメージ・スキーマを用いて事物や事態を理解している。そのため、イメージ・スキーマは「概念以前の」存在(Langacker 2008:41)、概念や概念の骨組みを作り出す「土台」(Langacker 2008:41)、「言語表現の意味の根源」(靱山・深田 2003a:101)と理解されてもよい。

王力(1980:304)、朱繼征(2000:6-28)、張立昌(2014:83-108、139-142)などから明らかのように、“了2”のイメージ・スキーマは「点」の1種である。また、先行研究において、“了2”の「転換」義はしばしば“了2”の「点」的スキーマで再解釈される。したがって、“了2”の「転換」義と“了2”の「点」的スキーマは本質的に共通するということができる。ただし、その両者の捉え方はやや異なる。「転換」義は動的側面から捉えられる認知的意味であり、「点」的スキーマは静的側面から捉えられる認知的意味である。第3章3.4節では「転換」義が“了2”の内包的意味であるということが論じられたので、「点」的スキーマも“了2”の内包的意味であるということが分かる。

4.3 狭義の「転換」義

王力(1980:304)、戴耀晶(1997:35-38)、朱繼征(2000:6-28)は、2つの動相的段階⁵の接

点が示す「転換」という動的認知様式を説明するために、また、動相標識“着”が表す「線的スキーマ」と区別するために、“了2”のイメージ・スキーマは何らかの「点」とであると主張する。言い換えれば、王力(1980:304)、戴耀晶(1997:35-38)、朱繼征(2000:6-28)は、1つの動相的段階からもう1つの動相的段階へ「転換」することを“了2”の「転換」義とするということになる。したがって、王力(1980:304)、戴耀晶(1997:35-38)、朱繼征(2000:6-28)による“了2”の「転換」義・「点」的スキーマは動相枠内の「転換」義・「点」的スキーマである。しかし、このような「転換」義・「点」的スキーマでは「体言+“了2”」構文⁶などの“了2”の意味を説明することが難しい。なぜならば、「体言+“了2”」構文には動詞が含まれず、もともと動相的意味を表し難いからである。本論文は動相枠内の「転換」義・「点」的スキーマを狭義の「転換」義と呼ぶことにする。

4.4 広義の「転換」義

“了2”の「転換」という動的認知様式は、動相枠内から見受けられるだけでなく、動相枠外から見受けられる。“了2”の「転換」という動的認知様式を説明するために、Huang(1987:184-197、203-220)は「限界描写」(marking a boundary)説、卢福波(2002:109-118)は「過程転換」(过程转换)説、王学群(2003:51-71、2008:75-90)は「限界到達」(达界)説、谭春健(2004:26-31)は「状態転換」(易态)説、劉綺紋(2006:35-53)は「限界達成」説、吕为光(2007:147-149)、张黎(2010:12-21)、张国华(2017:208-209)は「限界変化」(界变)説、石毓智(2015:229-247)は「実現過程」(实现过程)説、税昌锡・胡云晚(2020:192-206)は「事態転化」(事态转化)説を提起している。それらの論説も“了2”の「転換」義・「点」的スキーマに関する論説である。ただし、動相枠を突破した論説である。本論文は、それらの論説で述べられる「転換」義・「点」的スキーマを広義の「転換」義と呼ぶことにする。それらの論説では、2つの動相的段階の接点に内包される「転換」様式を説明することができるだけでなく、2種類の体言が示す状態、2種類のモダリティ(modality)、2種類のムード(mood)などの任意の2種類の状態の接点に内包される「転換」様式を説明することもできる。つまり、それらの論説では、“了2”構文において何が「転換」するかという問題を説明することができる。しかし、“了2”構文においてその「転換」する対象はどのように「転換」するか、また、「転換」という動態を生み出すための条件は何かなどの問題を説明することはできない。

张立昌(2014:83-108)はLangacker(1987:102、141-146、248-249)の「スキヤニング」(scanning)説に基づいて、“了2”構文における「転換」する対象はどのように「転換」するか、また、「転換」という動態を生み出すための条件は何かなどの問題を初めて説明した。さらに、「転換」という動態を生み出すための条件に基づいて充足感を伝える機能という“了2”の語用論的機能の形成要因も認知的に解明した。

ところで、Langacker(2008:139)は、「(物体や事態の)構成要素が個別化されていない場合、物体や事態は連続的に知覚されるようになる。この連続性を知覚するには、(中略)ある種の心的操作を行う必要がある。この操作はスキヤニングと呼ぶのが適切である」というように、「スキヤニング」は人間の認知能力の1つであると語っている。また、Langacker(1987:141-146)は「スキヤニング」の方法を「順次的スキヤニング」(sequential

scanning)と「累加的スキヤニング」(summary scanning)という2種類に分ける。Langacker(1987:144)は次の図1を通して、異なる「スキヤニング」の方法でボールの落下運動を観察した結果を示している。

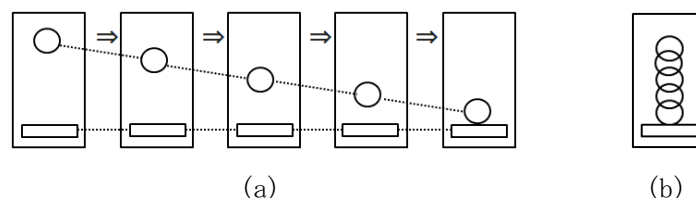


図1 「順次的スキヤニング」(a)と「累加的スキヤニング」(b)で観察したボールの落下運動(Langacker 1987:144)

図1について、張立昌(2014:83-108)は次のように補足説明を加えている。「順次的スキヤニング」の方法を通してボールの落下過程を観察した結果は、ボールの落下過程における複数の瞬間を高速シャッターで個別的に撮影して得た複数の画像である。図1(a)が示すように、その結果は、複数のボールの静止画である。つまり、「順次的スキヤニング」は、物体の運動過程における1つの瞬間をその運動過程から独立させるという機能を果たす。観察者はその独立した瞬間から物体の運動方向と運動過程を捉えることはできない。それに対して、「累加的スキヤニング」の方法を通してボールの落下過程を観察した結果は、ボールの落下過程における1つの瞬間を低速シャッターで撮影して得た1つの画像である。図1(b)が示すように、その結果は単数の画像であるが、ボールが流れた動感を表している。つまり、起点、運動過程、終点という3つの要素が含まれる1つの流れや「線」のようなイメージを表している。観察者はその流れから物体の運動方向と運動過程を捉えることができる。

張立昌(2014:83-108、139-142)は上述の補足説明に基づいて次の段落が示すような主張を提示している。

語尾としての“了1”は「順次的スキヤニング」の結果を表す標識であり、文末助詞としての“了2”は「累加的スキヤニング」の結果を表す標識である。ある状態が「累加的スキヤニング」の過程を経たら、何らかの具体的もしくは抽象的な「最大値」に達するか、または何らかの「臨時終結点」(临时结束点)に達する。「最大値」または「臨時終結点」に達したら、その状態は別の状態に「転換」する。

張立昌(2014:83-108、139-142)の主張から分かるように、いわゆる「最大値」というのは、ある状態から別の状態に「転換」する以前の最大限度の量的変化でもあり、ある状態から別の状態に「転換」するために必要な最小限度の量的変化でもある。そのため、張立昌(2014:83-108、139-142)が述べる「最大値」は、異なる状態を生み出すために必要な「数値」ではあるが、必要以上の「数値」や絶対的な「数値」ではない。

このように、“了2”構文においてその「転換」する対象はどのように「転換」するかという問題については、「累加的スキヤニング」の形で「転換」するということが分かる。また、「転換」という動態を生み出すための条件は何かという問題については、その条件

は、ある状態が何らかの「最大値」または「臨時終結点」に達することであるということが分かる。

しかし、張立昌(2014:83-108、139-142)にも問題点が残されている。第一に、張立昌(2014:83-108、139-142)は主に「累加的スキャニング過程」、つまり「転換」という動態の過程性には関心を持つが、「転換」という動態の方向性には関心を持たない。第二に、張立昌(2014:83-108、139-142)は、“了2”が含まれる言語形式が「転換」前の言語形式であるか、それとも、「転換」後の言語形式であるかという問題には触れていない。第三に、「臨時終結点」という用語自体が誤解を招きかねない。もし、“了2”が何らかの「臨時終結点」の標識として理解されれば、「ある言語形式+“了2”」構文の内包的意味は「ある言語形式+終結点」というように解釈されやすくなる。このような解釈は、“了2”で標記される「ある言語形式」が指示する状態が終わったということを伝えやすい。しかし、“了2”で標記される「ある言語形式」が指示する状態は終わった状態であってもよい他に、始まった状態であってもよい(張黎 2010:18)。

4.5 先行研究で言及される「転換」義に関する精緻化

張立昌(2014:83-108、139-142)が述べる「臨時終結点」は一体どのような「点」であろうか。本論文は、Engels(1878:39-44)が述べる「結節点」(Knoten)であると主張する。「結節点」とは、量の増減による質的变化が発生する場であり、すなわち量的変化と質的变化の接点である(Engels 1878:39-44)。張立昌(2014:139-142)が述べる「臨時終結点」は「結節点」の特徴を示しているので、「結節点」の1種と理解されてもよい。それでは、張立昌(2014:83-108、139-142)が述べる「最大値」とEngels(1878:39-44)が述べる「結節点」という2つの概念に基づいて、“了2”の「転換」という動態を生み出すための条件について次の段落が示すように補足説明を加える。

ある状態が何らかの「結節点」に達すると、その状態は何らかの量化される領域の「最大値」、つまり量的変化の最大限度に達する。「最大値」に達すると、その状態には「転換」という動態、つまり質的变化が生じる。

それでは、“了2”の「転換」義・「点」的スキーマをどのように再規定すればよいのか。まず、「累加的スキャニング」を通して撮影したボールのイメージの内部には、図1(b)が示す何らかの線的過程だけではなく、次の図2が示す何らかの方向性も内包されるということが分かる。

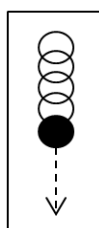


図2 「累加的スキャニング」で観察したボールの落下過程のイメージ

また、図2のボールが指示する「点」は、量的変化と質的变化の接点としての「結節点」である以上、論理的には、量的変化の終わり、つまり質的变化以前の状態の「最大値」を示すことも可能であり、質的变化の始まり、つまり質的变化以降の状態の「起動」を示すことも可能であるということも分かる。以上の2点の分析のもとに、先行研究でよく論じられてきた“了2”の「転換」義・「点」的スキーマを次の図3が示す“了2”の『転換』スキーマに精緻化することができる。

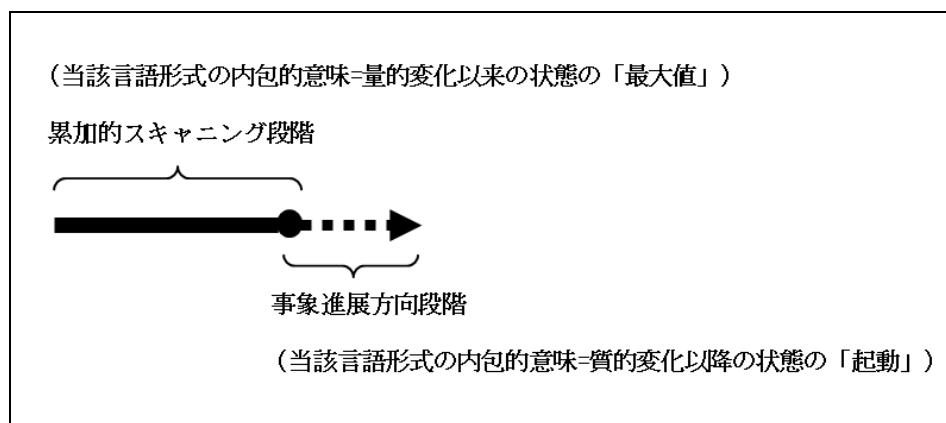


図3 “了2”の「転換」スキーマ

図3が示すように、「累加的スキヤニング段階」は主に「起点」、「累加的スキヤニング過程」、「着点・結節点」という3つの要素を持ち、「事象進展方向段階」は主に「着点・結節点」、「事象進展方向」という2つの要素を持つ。要するに、本論文で規定する“了2”の「転換」スキーマとは、先行研究でよく論じられてきた“了2”の「転換」義・「点」的スキーマの精緻化の結果として、過程性と方向性が内包される「結節点」であり、「起点」、「累加的スキヤニング過程」、「着点・結節点」、「事象進展方向」などの要素から構成される総合的な認知図式である。

ところで、本論文で規定する“了2”の「転換」スキーマは、Langacker (2008:42)が述べている図4の「起点・経路・着点」というイメージ・スキーマの下位スキーマ (subschema) (澤田他 2017:32)として捉えられてもよい。

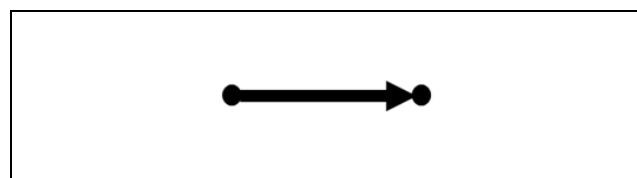


図4 「起点・経路・着点」というイメージ・スキーマ (Langacker 2008:42)

また、“了1”が「順次的スキヤニング」の結果を表す標識であるため、“了1”のイメージ・スキーマは過程性や方向性が内包されない独立した「点」であるということが分かる。さらに、本論文で規定する“了2”の「転換」義・「転換」スキーマは、加藤 (2006:29-42)が提起している“了2”の意味機能の集合論モデルと合致するということが分かる。“了2”

の意味機能の集合論モデルとは、“了 2”によって明示される「量」という「部分」が、予測される「量」や想定される「量」を含んだ『可能な量』全体」という「集合」に属するという「部分集合」モデルである。つまり、発話者は、“了 2”によって明示される内容が何らかの「全体」に属するという意識をはじめて“了 2”構文を用いるということである。前節と本節で述べたように、“了 2”によって明示される内容は何らかの「点」、つまり「結節点」として認識される。その「結節点」は、「結節点」、「起点」、「累加的スキヤニング過程」、「事象進展方向」などの要素から構成される総合的な認知図式という「全体」に属するということが分かる。そのため、本論文で規定する“了 2”の「転換」義・「転換」スキーマは“了 2”の意味機能の集合論モデルと一致するのである。

4.6 精緻化された「転換」義に関する属性

本章の論述と第 3 章 3.5 節で提起した“了 2”の意味体系の様式に基づいて、“了 2”の「転換」義・「転換」スキーマの属性を次の 4 点でまとめる。

第一に、“了 2”の「転換」義・「転換」スキーマは内包性を示す。この内包性というのは、“了 2”の内包的意味のことや内包的意味としての資格を指す。

第二に、第 3 章 3.4 節で述べている“了 2”の「変化」義、「発生」義、「肯定」義、「決定」義などの外延の意味と異なって、「転換」義は“了 2”に関する全体的な認知様式であるので、認知的属性を示す。

第三に、“了 2”の「転換」義・「転換」スキーマは「着点・結節点」の明示性を示す。ここで述べる「着点・結節点」の明示性とは、量的変化以来の状態の「最大値」が現れることと質的变化以降の状態が「起動」することを明示するという属性である。

第四に、“了 2”の「転換」スキーマは「起点」、「累加的スキヤニング過程」と「事象進展方向」の暗示性を示す。ここで述べる「起点」、「累加的スキヤニング過程」と「事象進展方向」の暗示性とは、何らかの「起点」、「累加的スキヤニング過程」と「事象進展方向」を暗に示すという属性である。

4.7 終わりに

本章は、まず、先行研究でよく論じられてきた“了 2”の「転換」義を図 3 が示す「転換」スキーマに精緻化した。また、「転換」義の属性もより明らかにした。このように、“了 2”の「転換」義のより厳密な定義・意味記述と意味属性を提示した。

<注>

1. 認知言語学において、ある概念が指示する意味をイメージ・スキーマ(image schema)、スキヤニング(scanning)、視点配列(viewing arrangement)、メタファー(metaphor)などの認知的方法(東定芳 2008:106-107)で理解して説明することは“construal”と呼ばれる。また、松村(1988:396)から分かるように、通常語句の意味や物事の意味を理解して説明することは「解釈」と呼ばれる。そのため、“construal”という認知言語学の用語は「解釈」と訳されている。この訳し方は Langacker (2008:71) の日本語訳を参照のこと。
2. 認知意味論によれば、精緻化(elaboration)とはよりスキーマ的な意味や抽象的な意味を具体化(instantiation)する過程である(靱山・深田 2003b:167, Langacker 2008:21, 215)。例えば、「[A]、[B]をそれぞれ多義語が持つ抽象度の異なる 2 つの確立した意味とした場合」、[A]は[B]に対してスキ

一面的であるならば、[B]は[A]を精緻化したものである。また、「[B]は[A]と矛盾しないが、[B]の意味記述は[A]の意味記述よりも詳細である」（靱山・深田 2003b:167）。

3. トポロジー的な特徴は主に変化の中における不変性を指す。
4. 本論文は形式的意味に対する意味を認知的意味と呼ぶことにする。本論文は特定の言語形式によって表記される意味を形式的意味と呼び、何らかの認知様式、例えば、イメージ(image)、イメージ・スキーマ(image schema)などを認知的意味と呼ぶことにする。
5. 第2章 2.2節で述べたように、動相的段階とは、述語における裸動詞という部分が指示する事象がある仮定の時間軸に沿って展開してから表す起動的段階、進行的段階、完了的段階、結果的段階、持続的段階などの異なる動的段階である。
6. 本論文は、“了2”が含まれる文を“了2”構文と呼び、体言が述語になる“了2”構文を「体言+“了2”」構文と呼ぶことにする。

第5章 文末助詞“了”の内包的意味の意味機能拡張

5.1 はじめに

前章は、先行研究でよく論じられてきた“了²”の「転換」義を精緻化した結果、次の図1が示す「転換」スキーマを得た。

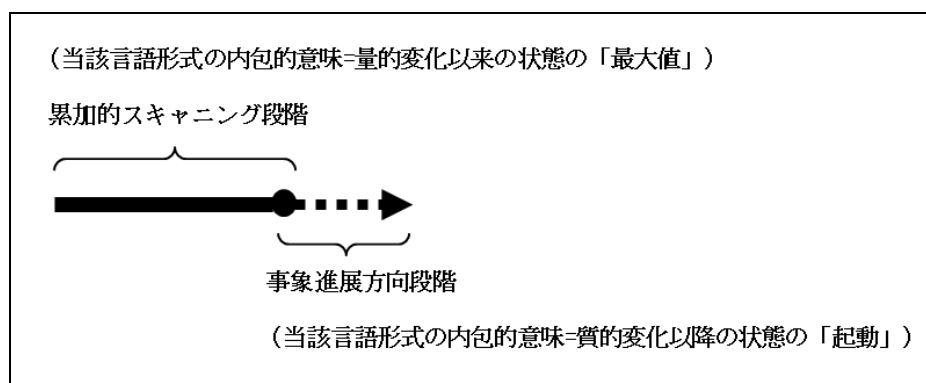


図1 “了²”の「転換」スキーマ

本章は、“了²”の一部の語用論的機能が“了²”の内包的意味の意味機能の拡張、つまり「転換」義を伝える機能の拡張に由来するということを論証する。次節から、主に充足感を伝える機能¹、過度という語感を伝える機能²、話題を終了させる機能³、前提を提示する機能⁴、結論を導き出す機能⁵、事象が継続していくという語感を伝える機能⁶という6つの語用論的機能に絞って分析する⁷。

ところで、“了²”の上述の機能はあくまでも語用論的機能であるため、特定の構文特徴や発話場面と合わせなければ表されない。例えば、「了²に充足感を伝えるという語用論的機能がある」というのは、“了²がどのような場合でも充足感を伝えるということ”を意味せず、“了²が特定の発話場面に用いられてはじめて充足感を伝えるということ”、あるいは、充足感を伝える発話場面や文脈には“了²が用いられやすいということ”を意味する。また、先行研究において、“了²にどのような語用論的機能があるのか”という問題について未だに定論はない。そのため、本章は、上の段落で示した機能が“了²”の語用論的機能としての資格を持つかどうか、それらの機能が互いに矛盾するかどうかなどの問題を扱わず、一部の先行研究においてそれらの機能が“了²”の語用論的機能として位置づけられている理由は何かという問題こそを扱う。

5.2 充足感を伝える機能

次の(1a)-(4a)は自然であるが、(1b)-(4b)は不自然である。その理由は、下線部の“了²”が伝える充足感に関わっているのである。

- (1) a. 少平跑了三十分了, 你追不上了。 (张立昌 2014:32)

(少平さんがもう三十分間走っているから、あなたはもはや追いつけないよ。)

b. #少平跑了三十分了，你追得上了。

(#少平さんがもう三十分間走っているから、あなたは追いつけるよ。)

(2) a. A: 你还饿吗?

B: 不饿，我吃了三碗了。

(王珊珊 2014:139)

(A: お腹はまだすいているの?)

(B: いいえ、もう三杯食べたから。)

b. A: 你还饿吗?

B: #我吃了三碗了，当然饿啦。

(A: お腹はまだすいているの?)

(B: #もう三杯食べたから、もちろんすいているよ。)

(3) a. 我买了书了。你不要给我买了。

(吕文华 2010:550)

(私は本を買ったんだよ。もう買ってもらう必要はない。)

b. #我买了书了。你要再给我买。

(#私は本を買ったんだよ。また買ってもらおう。)

(4) a. A: 来，一起吃饭吧。

B: 我吃过了，主席，您快吃吧。

(CCL)

(A: ね、一緒にご飯を食べようか。)

(B: 私はもう食べました。主席、どうぞ召し上がってください。)

b. A: 来，一起吃饭吧。

B: #我吃过了，主席，一起吃吧。

(A: ね、一緒にご飯を食べようか。)

(B: #私はもう食べました。では、主席と一緒に食べましょう。)

张立昌(2014:139-142)で論じられているように、“了2”が指示する「最大値」と“了2”が伝える充足感の間には正の相関関係がある。(1a)の“三十分” (三十分間)と(2a)の“三碗” (三杯)はもともと客観的な数値の1つに過ぎない。発話者の主観に基づかなければ、“三十分” (三十分間)と“三碗” (三杯)が多いかどうかは判断できない。しかし、“三十分” (三十分間)と“三碗” (三杯)には“了2”が付与されると、「最大値」という意味合いも付与される。その「最大値」の意味合いが働くことから、“三十分” (三十分間)と“三碗” (三杯)という2つの数値は「非常に多い」、「十分である」、「もういい」などの充足感を伝えやすくなる。(1a)、(2a)と同様に、(3a)の“买+了1” (買い+終わった)と(4a)の“吃+过1” (食べ+終わった)という出来事に“了2”が付与されると、「最大値」という意味合いも付与される。そのため、(3a)の“买+了1” (買い+終わった)と(4a)の“吃+过1” (食べ+終わった)という2つの出来事は「ある程度“我”(私)の願いを満たしている」、「“我”(私)にとってもう十分である」などの充足感を伝えやすくなる。この

ように、(1b)-(4b)が不自然である理由は、下線を施した“了2”の前後に、充足感と意味的に相容れないフレーズが配置されているからであるということが分かる。

ところで、“了2”で標記される“三十分”（三十分間）、“三碗”（三杯）、“买+了1”（買い+終わった）、“吃+过1”（食べ+終わった）などの言語形式が表す「最大値」という意味合いは、具体的に図1が示す「量的変化以来の状態の『最大値』」という内包的意味を指すのである。ただし、(3)の“买+了1”（買い+終わった）と(4)の“吃+过1”（食べ+終わった）という2つの出来事はもともと具体的な数値ではないため、「量的変化以来の状態の『最大値』」として理解されることが難しいのである。「量的変化以来の状態の『最大値』」として理解しやすくするために、その2つの出来事を何らかの量化される領域に配置して考える必要がある。例えば、その2つの出来事を動相的時間軸に配置して考えよう。もし、動相的時間軸を通して“买”（買う）と“吃”（食べる）という動作を量化すれば、次の3つの動相的時間値を得る。それらは、「①動作が始まったところの時点」、「②動作が進行している時点」、「③動作が終わったところの時点」である。(3)の“买+了1”（買い+終わった）と(4)の“吃+过1”（食べ+終わった）は両方とも「③動作が終わったところの時点」という動相的時間値に量化されることができる。そのため、“买+了1”（買い+終わった）と“吃+过1”（食べ+終わった）に“了2”を付与するということは、「③動作が終わったところの時点」という動相的時間値に「最大値」という意味合いを付与することになる。このように、(3)の“买”（買う）と(4)の“吃”（食べる）は「動相的時間値①→動相的時間値②→動相的時間値③(最大値)」という時間順で展開すれば、「最大値」と充足感の間に正の相関関係があるため、“我”（私）の満足度は「全然満ち足りない段階→あまり満ち足りない段階→完全に満ち足りる段階(充足)」という順で発展していくのである。

図1が示すように、「最大値」はもともと“了2”の「転換」スキーマの「累加的スキミング段階」に対応する言語形式の内包的意味である。そのため、“了2”の「充足感を伝える」という語用論的機能に対応する認知様式は、「転換」スキーマの「累加的スキミング段階」が示す認知様式である。

5.3 過度という語感を伝える機能

刘月华他(2001:386)によれば、“了2”の過度という語感とは「何らかの基準から外れる」(不合某标准)という語感を指す。つまり、発話者が考えている「適度」という「基準」から外れるということである。過度という語感を伝える“了2”構文⁸の特徴は、その述語が形容詞、または形容詞を含む動詞句である。その形容詞または動詞句に含まれる形容詞は「属性を表す形容詞、例えば『大きい、小さい、高い、低い、太る、痩せる、長い、短い、軽い、重い、太い、細い、しょっぱい、味が薄い、広い、狭い、早い、遅い』などの形容詞」⁹である(刘月华他 2001:386)。次の(5)-(7)を考えよう。

(5) a. 汤很咸。

(スープがとてもしょっぱい。)

b. 汤咸了。

(何文彬 2013:13)

(スープがしょっぱすぎた。)

- (6) a. 您这话相当重!
(あなたは非常に厳しいことを言ってしまったね!)
- b. 您这话重了。 (劉綺紋 2006:140)
(あなたは厳しすぎたことを言ってしまったね。)
- (7) a. 衣服买得真大。
(買った服が本当に大きい。)
- b. 衣服买大了。 (蕭国政 2000:569)
(買った服が大きすぎた。)

(5a)-(7a)において、“咸”(しょっぱい)、“重”(厳しい)、“大”(大きい)などの形容詞はそれぞれ“很”(とても)、“相当”(非常に)、“真”(本当に)などの強い程度を表す副詞で修飾されている。(5a)-(7a)は、“太”(あまりにも)、“过头”(すぎる)、“偏”(すぎる)などの過度の意味を表す用語が配置されていないので、「しょっぱすぎ」、「厳しすぎ」、「大きすぎ」などの意味合いを伝えていない。それに対して、(5b)-(7b)は、過度の意味を表す用語も配置されておらず、強い程度を表す副詞も配置されていないが、「しょっぱすぎ」、「厳しすぎ」、「大きすぎ」などの過度の意味合いをきちんと伝えている。

なぜ“了₂”が過度という語感を伝えるのか。まず、中国語の形容詞の分類から説明しなければならない。中国語の形容詞は状態形容詞と属性形容詞に分けられる(刘月华他 2001:190-195)。属性形容詞というのは、程度副詞によって修飾されることが可能である形容詞である(刘月华他 2001:190-195、沈彤彤 2018:73-77)。程度副詞がもともと程度の強さを表すものであるので、程度副詞によって修飾されるということは程度副詞によって量化されるということに相当する。こうして、属性形容詞は量化されることが可能であるということが分かる。(5)-(7)の形容詞はすべて属性形容詞であるので、量化されることが可能であるということになる。では、(7b)の“大”(大きい)という属性形容詞を例にとって、属性形容詞の量化様式を説明する。もし、“不太”(あまり……ない)、“有点”(ちょっと)、“很”(とても)、“太”(……すぎる)などの程度副詞で形容詞“大”(大きい)を量化すると、次の図2が示す認知様式を得る。

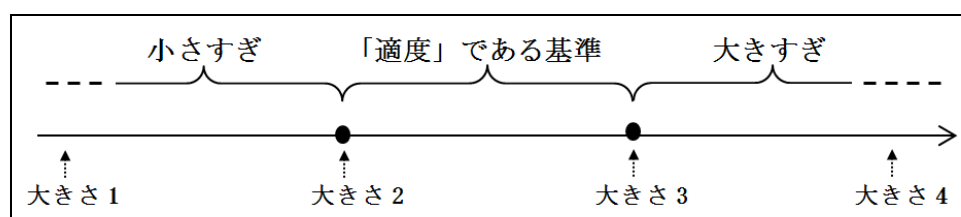


図2 大きさを表す形容詞“大”(大きい)の認知様式の1種

図2が示すように、形容詞“大”(大きい)が量化された結果、異なる大きさ・数値が内包

されている「線」、つまり程度を示す「線」が現れている。もし、「基準-基準以外」という二項対立の意味関係を基準に形容詞“大”（大きい）を考察するならば、形容詞“大”（大きい）が指示する程度は「小さすぎ」、「適切」、「大きすぎ」という3つの意味カテゴリーに分けられるということが分かる。形容詞“大”（大きい）と“了2”が共起すると、“了2”の「累加的スキャニング」という認知的様式が働くことから、形容詞“大”（大きい）が指示する程度は「大きさ1」から「大きさ4」の方向へ積み重なっていき、「累加」していく。どのように「累加」していても、例えば、無制限に「累加」していても、結果としては「大きすぎ」という意味カテゴリーに達するしかない。したがって、別の発話場面や文脈による制約を受けない(7b)において、“了2”の「累加的スキャニング」という認知的様式が働くことから、“大” + “了2”という言語形式は「大きすぎ」という意味合いを伝えやすい。これは“了2”が過度という語感を伝えるメカニズムである。

もし「最小値-最大値」という二項対立の意味関係を基準に形容詞“大”（大きい）を考察するならば、形容詞“大”（大きい）が指示する程度は「最小値」、「平均値」、「最大値」という3つの意味カテゴリーに分けられるということが分かる。この3つの意味カテゴリーは上述の「小さすぎ」、「適切」、「大きすぎ」という3つの意味カテゴリーに対応するのである。そのため、ある意味で、“大” + “了2”という言語形式が伝える「大きすぎ」という意味合いは何らかの「最大値」として捉えられる。図1から明らかのように、「最大値」という意味は「転換」スキーマの「累加的スキャニング段階」によって表される。そのため、“了2”の「過度という語感を伝える」という語用論的機能に対応する認知様式は、「転換」スキーマの「累加的スキャニング段階」が示す認知様式である。

5.4 話題を終了させる機能

「非中国語母語話者向けの中国語教育において、文法書の説明にしたがって、『新状況』、『肯定』の語気、『文終止』の機能¹⁰を表そうとすれば“了2”を使ってくださいというように学生に教えると、提出してもらった日記からほとんどの文に“了2”が配置されているのに気付いた。それらの“了2”において、削除する必要があるものが多い¹¹という教育現場の声が王洪君他(2009:317)に掲載されている。

次の(8)が示す対話は現実にあった対話である(赵立江 1997:117)。Aさんはある中国語教員であり、Bさんはあるイギリス人留学生である。

- (8) A: 昨天你去哪儿了?
B: 我去西单和国贸大厦了。
A: 能不能具体说说?
B: 可以。我先去西单了, 在那儿吃饭了, 买了一些东西, 还去书店了, 然后就去国贸大厦了。(赵立江 1997:117)
(A: 昨日どこへ行きましたか?)
(B: 西单と国贸デパートへ行きました。)
(A: もう少し具体的に教えてくださいませんか?)

(B: はい。まず西単へ行きました。そこでご飯を食べました。ちょっと買い物をしてから、本屋へも行きました。その後は国貿デパートへ行きました。)

(8)では、Bさんの2番目の返事に4つの“了2”が用いられており、いずれも過去に起こった出来事を表す。趙立江(1997:117)が指摘しているように、Bさんの2番目の返事を構成するための単文はいずれも文法的に適格であるが、何だか中国人らしい話し方にならない。次の(9)が中国人らしい話し方に直された結果である。

(9) 可以。我先去了西单，在那儿吃了饭，买了一些东西，还去了书店，然后就去国贸大厦了。
(赵立江 1997:117)

(はい。まず西単へ行きました。そこでご飯を食べました。ちょっと買い物をしてから、本屋へも行きました。その後は国貿デパートへ行きました。)

(9)では、ほとんどの単文に“了1”が用いられ、最後の単文にだけ“了2”が用いられる。最後の単文にだけ“了2”が用いられる理由は、“了2”の「話題を終了させる」という語用論的機能に関わっていると指摘されている(趙立江 1997:117)。まず、AさんとBさんは「昨日Bさんが行った場所」という話題をめぐって会話を展開している。また、“我先去西单”(まず西単へ行く)、“在那儿吃饭”(そこでご飯を食べる)、“还去书店”(本屋へも行く)という3箇所においては「昨日Bさんが行った場所」という話題がまだ終了していない。そのため、その3箇所に“了2”を配置すると、「昨日Bさんが行った場所」という話題をめぐる談話内容全体の一貫性(coherence)¹²を崩す可能性があるのである(朱庆祥 2019:204)。

特定の話題をめぐって展開する談話内容は複数の文からなる。それらの文は一定の論理的方向性と時間的流れに沿って配列されるのである。つまり、発話者の発話は、一定の論理的方向性と時間的流れに沿って最初の文から最後の文へ累加的に発展していき、談話内容の全体を築く。もし、「特定の話題が別の話題に転じる」ということを「質的变化」として捉えるならば、「特定の話題をめぐって談話内容が展開する」ということは「量的変化」として捉えられる。“了2”の「転換」スキーマの観点からみれば、「特定の話題をめぐって談話内容が展開する」という「量的変化」において、「特定の話題を終了させる文」は「量的変化」の「最大値」として捉えられる一方、その文の前の複数の文は何らかの「累加的」な「過程」として捉えられるということが分かる。このように、“了2”の「話題を終了させる」という語用論的機能に対応する認知様式は、「転換」スキーマの「累加的スキヤニング段階」が示す認知様式である。

ところで、特定の話題をめぐって展開する複数の文の中で、「量的変化」の「最大値」と捉えられる「特定の話題を終了させる文」のほうが、「量的変化以来の状態の『最大値』」という意味を持つ“了2”と最も相性がよい。つまり、特定の話題をめぐって展開する複数の文の中で、「特定の話題を終了させる文」のほうに“了2”は最も付与されやすいということになる。この理由で、“了2”に「話題を終了させる」という語用論的機能があると認識されやすいわけである。

5.5 前提を提示する機能と結論を導き出す機能

次の(10a)-(12a)と(10b)-(12b)を比較すると明らかなように、下線の“了”は、“因为”(から、because)、“如果・要是・一旦・的话”(なら・たら・と・ば、if)などの[+前提]の意味特徴を表す用語で置き換えることができる。また、二重下線の“了”は、“所以”(だから、so)、“就・那么”(では・それでは、then)などの[+結論]の意味特徴を表す用語で置き換えることができる。つまり、下線の“了”は前提を提示する機能を果たし、二重下線の“了”は結論を導き出す機能を果たすのである。

- (10) a. (预设: 该孩子成绩一贯不好, 母亲承诺如果得到 100 分就奖赏他。)
孩子: 妈妈, 我得了 100 分了。 (彭小川・周芍 2005:139)
(前提: 前の試験では子供は成績がよくなかった。母親は子供が今度 100 点を取ったらほうびを与えてあげると約束した。)
(子供: ママ、私は 100 点を取ったから。)
- b. (预设: 该孩子成绩一贯不好, 母亲承诺如果得到 100 分就奖赏他。)
孩子: 妈妈, 请兑现你的诺言。因为我得了 100 分。
(前提: 前の試験では子供は成績がよくなかった。母親は子供が今度 100 点を取ったらほうびを与えてあげると約束した。)
(子供: ママ、約束を果たして。私は 100 点を取ったから。)
- (11) a. 你是织女了, 我就是牛郎了¹³。 (肖治野・沈家焯 2009:524)
(あなたは織姫なら、それでは私は彦星だ。)
- b. 如果你是织女, 那么我就是牛郎。
(あなたは織姫なら、それでは私は彦星だ。)
- (12) a. 思想端正了, 自我修养就能完善了; 自我修养完善了, 家庭问题就能处理好了了; 家庭问题处理好了了, 国家就能安定繁荣了; 国家安定繁荣了, 天下就能太平了。
(谭春健 2004:31)
(思想を矯正したら、では人格も高くなる。人格が高くなると、それでは家庭問題もうまく解決できるようになる。家庭問題がうまく解決できるようになれば、では国も安定するようになる。国が安定するから、だから世界も平和になる。)
- b. 要是思想端正, 自我修养就能完善; 一旦自我修养完善, 那么家庭问题就能处理好; 家庭问题处理好的话, 国家就能安定繁荣; 因为国家安定繁荣, 所以天下太平。
(思想を矯正したら、では人格も高くなる。人格が高くなると、それでは家庭問題もうまく解決できるようになる。家庭問題がうまく解決できるようになれば、では国も安定するようになる。国が安定するから、だから世界も平和になる。)

前提を提示する機能と結論を導き出す機能の形成要因は両方とも“了2”の「転換」スキーマに大きく関係しているのである。1つの結果や結論は任意の原因や条件によって導き出されるわけではなく、一定の原因や条件によって導き出されるのである。つまり、因果複文や条件複文がもともと[+一定の前提が満たされてはじめて、何らかの結果が導き出される]というような意味特徴を備えるのである。一方、第4章4.4節、4.5節で論じたように、“了2”の「転換」スキーマは[+量的変化以来の状態の「最大値」に達してはじめて、質的变化以降の状態が「起動」する]というような意味特徴を備える。こうしてみれば、因果複文や条件複文に内包される意味特徴と“了2”の「転換」スキーマの意味特徴は相性がよいということが分かる。そのため、「転換」スキーマそのものが“了2”に内包されるからこそ、“了2”が因果複文や条件複文によく用いられると言っても過言ではない。

上の段落では、因果複文や条件複文の[+一定の前提が満たされてはじめて、何らかの結果が導き出される]という意味特徴は、“了2”の「転換」スキーマの[+量的変化以来の状態の「最大値」に達してはじめて、質的变化以降の状態が「起動」する]という意味特徴に対応するということを説明した。この対応関係が示すのは、“了2”が含まれる前提的な単文に対応する認知様式が「転換」スキーマの「累加的スキヤニング段階」であり、“了2”が含まれる結論的な単文に対応する認知様式が「転換」スキーマの「事象進展方向段階」であるということである。次に、(10a)、(11a)で簡単に説明する。(10a)において、“了2”が含まれる“我得了100分了”(私は100点を取った)という言語形式は前提的な単文と見なされることができ、そのため、「転換」スキーマの「累加的スキヤニング段階」という認知様式を示すことができるはずである。こうして、“了2”が含まれる“我得了100分了”(私は100点を取った)という言語形式は、「得点して以来の『最大値』」という意味合いを伝えやすいということが分かる。(11a)において、“了2”が含まれる“你是织女了”(あなたは織姫だ)は、前提的な単文であるため、「転換」スキーマの「累加的スキヤニング段階」という認知様式を示し、「量的変化以来の状態の『最大値』」という意味合いを伝えるはずである。“了2”が含まれる“我就是牛郎了”(私は彦星だ)は、結論的な単文であるため、「転換」スキーマの「事象進展方向段階」という認知様式を示し、「質的变化以降の状態の『起動』」という意味合いを伝えるはずである。しかし、(11a)の“你是织女了”(あなたは織姫だ)という単文には具体的な数値が含まれないので、この単文は「量的変化以来の状態の『最大値』」として理解されることがもともと難しいのである。そのため、“我就是牛郎了”(私は彦星だ)は「質的变化以降の状態の『起動』」として理解されることも難しいのである。それでは、“你是织女了”(あなたは織姫だ)を「量的変化以来の状態の『最大値』」として理解しやすくするために、何らかの量化される領域に配置して考える必要がある。例えば、「類似性の程度」という量化的領域に配置して考えよう。「類似性の程度」においては、「あなたは織姫と全然似ていない」、「あなたは織姫とちょっと似ている」、「あなたは織姫ととても似ている」、「あなたは織姫と同然である」などの量化された程度が含まれる。「あなたは織姫と全然似ていない」程度から「あなたは織姫ととても似ている」程度までのどの程度に達しても、“我不是牛郎”(私は彦星ではない)という状態の内部には質的变化が容易に生じない。つまり、“我就是牛郎”(私は彦星だ)という状

態は「起動」しないということである。「あなたは織姫と同然である」という「最大値」に達してはじめて、“我不是牛郎”（私は彦星ではない）という状態の内部には質的变化が生じる。つまり、“我就是牛郎”（私は彦星だ）という状態は「起動」するということである。こうしてみれば、“了2”が含まれる因果複文や条件複文と、“了2”が含まれない因果複文や条件複文は、同様の命題的意味を表すにもかかわらず、前者は『因』によって『果』が生み出される、『条件』によって『結果』が生み出されるなどの触発関係または動的認知様式を際立たせるが、後者は『因』対『果』、『条件』対『結果』などの対応関係または静的認知様式を際立たせる。この点において両者は異なる。

5.6 事象が継続していくという語感を伝える機能

李洁(2009:89-93)から明らかなように、「動詞+“了1”+数量+“了2”」構文、「動詞+“了1”+数量+(的)+目的語+“了2”」構文、「動詞+目的語+動詞+“了1”+数量+“了2”」構文、「動詞+目的語+数量+“了2”」構文、「数量+没(有)+動詞フレーズ+“了2”」構文、「動詞+複合方向補語+“了2”」構文、「別+動詞フレーズ+“了2”」構文という7種類の構文における“了2”は、事象が継続していくという語感を伝えやすい。卢英顺(1993:22)は、“了2”の、事象が継続していくという語感を伝える機能に関する研究を次のようにまとめている。

吕叔湘氏は次の問題を提起している。「“这本书我看了三天”（この本を私は三日間で読んだ）という文はもう読み終わったという意味合いを伝えやす一方、“这本书我看了三天了”（この本を私は三日間読んできたが）という文はまだ読み終わらないという意味合いを伝えやす。なぜ1つの“了”が文中に付け加えられる場合は事象が終わるという意味合いを伝えやすく、2つの“了”が付け加えられる場合は事象がまだ終わらないという意味合いを伝えやすいのか」。任学良氏も同様の問題を出し、また、「この問題を根本から解決できたら、現代中国語学にとっては大きいイベントとなるであろう。とにかく、おめでたいことである」と語っている。（中略）吕叔湘氏がこの問題を提起して以来、様々な説明が行われている。例えば、赵淑华氏は、「語尾“了”と数量詞目的語を持つ文、また、語尾“了”と補語を持つ文は、その文末に語気助詞“了”が付け加えられると、事象のこれまでの発展状況だけを表すのではなく、語勢からみれば、その事象が継続していくという語勢も表す。もし、文脈には事象が終わったという情報があったら、語勢にかかわらず、その事象は事実上継続しないのである」と説明している。吕文华氏は、「“他写了三封信了”（彼は手紙を三通書いてきたが）という文は、三通の手紙の完成を表すが、書くという動作自身の完了を表さない。動作が終わったという情報は文脈になかったら、その動作は事実上継続していくことがほとんどである」と説明している¹⁴。（卢英顺 1993:22）

卢英顺(1993:22)から明らかなように、「事象が継続していく」というのは何らかの「語勢」の1つである。認知的には、“了2”構文に含まれる「事象が継続していく」という「語勢」は何らかの方向性を示す。「語勢」というのはあくまでも方向性の1種であるので、

“了2”構文に含まれる事象は実際にその「語勢」が示す方向性に沿って継続していくかどうかは“了2”構文自身の情報から特定し難い。卢英顺(1993:22)から明らかのように、“了2”構文以外の文脈から特定しなければならない。

ところで、“了2”の「転換」スキーマの「事象進展方向段階」も何らかの方向性を示すのである。したがって、「転換」スキーマの観点からみれば、“了2”の事象継続という語感“了2”の「転換」スキーマの「事象進展方向段階」という認知様式によると言っても過言ではない。例えば、“这本书我看了三天了”(この本を私は三日間で読んだ)という文を考えよう。もし「事象進展方向段階」の認知様式が働くとしたら、“了2”が含まれる“这本书我看了三天了”(この本を私は三日間で読んだ)という言語形式は「質的变化以降の状態の『起動』」という内包的意味を伝えやすくなるはずである。つまり、「読む時間の『起動』」などの意味合いを伝えやすいはずである。「読む時間の『起動』」は「読み続ける」ということを意味するが、「読み終わる」ということは意味しない。

5.7 終わりに

以上、前章で提示している「転換」義に基づいて“了2”の一部の語用論的機能を考察した結果、“了2”の充足感を伝える機能、過度という語感を伝える機能、話題を終了させる機能、前提を提示する機能、結論を導き出す機能、事象が継続していくという語感を伝える機能などの語用論的機能が、“了2”の内包的意味の意味機能の拡張、つまり「転換」義を伝える機能の拡張に由来するということが明らかになった。また、前章で提示している「転換」義が“了2”の語用論的機能の形成要因の説明に有効であるということも明らかになった。

<注>

1. 詳細については、劉綺紋(2006:131-140)、王光全・柳英绿(2006:25-30)、胡建刚(2007:72-81)、张立昌(2014:139-156)、王珊珊(2014:138-139)などを参照のこと。
2. 詳細については、洪波(1995:10-22)、何洪峰(1998:63-66)、武果・吕文华(1998:13-21)、萧国政(2000:568-576)、刘月华他(2001:386)、高顺全(2006:60-66)、劉綺紋(2006:140-145)、Vandenberg and Wu(2006:87-99)、郭锐(2008:5-15)、張文青(2012:105-122)、何文彬(2013:10-18)などを参照のこと。
3. 詳細については、Chang(1987:120-149)、赵立江(1997:112-124)、武果・吕文华(1998:13-21)、谭傲霜(1999:53-62)、刘月华他(2001:384-385)、劉綺紋(2006:195-197)、何文彬(2013:10-18)、徐晶凝(2014:29-38)などを参照のこと。
4. 詳細については、Chao(1968:354-356)、武果・吕文华(1998:13-21)、刘月华他(2001:383-384)、谭春健(2004:26-31)、劉綺紋(2006:191-195)、徐晶凝(2014:29-38)などを参照のこと。
5. 詳細については、Chao(1968:354-356)、武果・吕文华(1998:13-21)、刘月华他(2001:383-384)、谭春健(2004:26-31)、孙汝建(2005:76-80)、劉綺紋(2006:215-239)、徐晶凝(2014:29-38)などを参照のこと。
6. 詳細については、吕文华(1983:30-39)、竟成(1993:52-57)、卢英顺(1993:22-24)、岳中奇(1997:14-17)、刘勋宁(1998:1-20)、刘月华他(2001:390)、吕叔湘(2002:26-27)、何文彬(2013:10-18)、陈前瑞・胡亚(2016:66-74)などを参照のこと。
7. 第3章3.5節でまとめたように、“了2”は上述の6つの語用論的機能だけでなく、別の語用論的機能も持つ。ここで、本章が上述の6つの語用論的機能だけを考察対象とする理由を説明する。まず、上述の6つの語用論的機能は“了2”の「転換」義と直接的な派生関係を示すが、別の語用論的機能は“了2”の「転換」義と直接的な派生関係を示さず、“了2”の外延的意味と直接的な派生関係を示す。また、本章は、前章で規定している「転換」義の意味記述の妥当性を検証するものである。そのため、

本章は「転換」義と直接的な派生関係を示す語用論的機能だけ、つまり上述の6つの語用論的機能だけを考察対象とする。

8. 本論文は“了2”が含まれる文を“了2”構文と呼ぶことにする。
9. 原文は、“‘大、小、高、低、肥、瘦、长、短、轻、重、粗、细、咸、淡、厚、薄、宽、窄、早、晚’等表示性状的形容词”である。
10. 第15章15.2節で説明するように、“了2”の「文終止」の機能の位置づけは複雑であり、統語的機能として捉えればよいのか、それとも語用論的機能として捉えればよいのかについては未だに統一的な説明が与えられていない。“了2”の「文終止」の機能を今後の研究課題とする。
11. 原文は、“不少从事对外汉语教学工作的老师说，按照语法书教授学生，在表示‘新情况’、‘肯定语气’、‘成句’时要用‘了2’，结果学生交上来的日记一句一个‘了2’，需要一一删去”である。
12. 一貫性とは、筋がよく通っている談話や文章に含まれるすべての要素の意味的関連性であり(張元武・姚滴洁 2018:176)、談話や文章の整合性や規範性でもある(杜世洪・Cummins 2011:86、90)。談話や文章に含まれるすべての要素の意味的関連性には、明言される意味の間の関連性、暗に含意される意味の間の関連性、明言される意味と暗に含意される意味の間の関連性などがある(杜世洪・Cummins 2011:86)。例えば、明言される意味の間の論理性が高いにもかかわらず、明言される意味と含意される意味がよく整合されなければ、談話や文章の一貫性は高くない(張元武・姚滴洁 2018:177)。
13. (11)は、肖治野・沈家煊(2009:524)の原文“如果你是织女，我就是牛郎了”を書き換えたものである。
14. 原文は、“吕叔湘先生曾经说过：‘曾经有人提出一个问题：‘这本书我看了三天’，意思是我看完了，‘这本书我看了三天了’，意思是我还没看完。为什么用一个‘了’字倒是完了，再加一个‘了’字倒反而不完了呢？’任学良先生也提出过类似的问题，并且说：‘如果彻底解决了这个问题，可以说是现代汉语语法学史的一件大事，值得大书特书。’(中略)自吕先生提出这种延续性问题以后，有些论著对这种延续性原因作了不同的解释。比如赵淑华同志解释说‘带词尾‘了’的动词后面有数量宾语或补语时，句尾再用上语气助词‘了’，则表示到此为止动作进行的情况。但是从语势上来看，这个动作往往还要继续进行，除非有下文表示相反的情况。’吕文华同志也曾指出过：‘(‘他写了三封信了’)表示动作对有关事物所完成的数量，但并不表示动作的完成。即从动作开始到目前为止已完成的数量，这个动作在没有说明将有相反情况发生时，往往将继续下去’”である。

第6章 文末助詞“了”の行為域の外延的意味

6.1 はじめに

第3章3.4節で論じたように、“了2<行為>”、“了2<認識>”、“了2<言語>”の意味は“了2”の外延的意味である。肖治野・沈家煊(2009:518-527)は“了2<行為>”、“了2<認識>”、“了2<言語>”の意味をそれぞれ「新しい行為状態の現れ」(新行态的出现)、「新しい認識状態の現れ」(新知态的出现)、「新しい言語状態の現れ」(新言态的出现)と記述している。「新しい行為状態の現れ」とは命題的客観性を持つ動態が生じたということであり、「新しい認識状態の現れ」とは発話者の何らかの認識や意識が生じたということであり、「新しい言語状態の現れ」とは発話者の何らかの言語行為が生じたということである。肖治野・沈家煊(2009:518-527)が提起している“了2”の三域説は“了2”の多義性の問題の解決に大きな示唆を与えている。しかし、第2章2.2節でまとめたように、肖治野・沈家煊(2009:518-527)の意味記述には次の5つの問題点が残されている。第一に、“了2”の三域の意味は「新しい行為状態の現れ」、「新しい認識状態の現れ」、「新しい言語状態の現れ」と記述されているが、実際には、“了2”は必ずしも「新しい」状態を示すとは限らない。第二に、「新しい行為状態/認識状態/言語状態の現れ」という意味記述は大まかであり、非中国語母語話者にとって実用的な定義・意味記述ではない。第三に、肖治野・沈家煊(2009:518-527)は「新しい認識状態の現れ」と「新しい言語状態の現れ」という意味記述を“我想[P]了”(私は[P]を考えた)と“我说[P]了”(私は[P]を言った)という2つの意味記述で再解釈しているが、“我想[P]了”も“我说[P]了”も大まかな意味記述であり、非中国語母語話者にとって実用的な定義・意味記述ではない。第四に、循環定義という問題点もある。第五に、1つの文における“了2”は1つの域の意味を表すだけでなく、複数の域の意味を表す可能性もあり、意味間の「重なる状況が想像以上に複雑であり、当該研究の発展がまだ待たれる」²という問題点も肖治野・沈家煊(2009:518-527)で指摘されている。

本章の目的は、“了2<行為>”の意味を精緻化(elaboration)³し、“了2<行為>”の意味の属性を明らかにするということである。要するに、“了2<行為>”の外延的意味に関する定義・意味記述と意味属性を提示することである。

6.2 先行研究で言及される“了2<行為>”の意味に関する精緻化

先行研究では、“了2”の意味を説明するために「変化」(变化)、「出現」(出现)、「実現」(实现)、「発生」(发生)、「肯定」(肯定)、「決定」(决定)、「確定」(确定)、「確認」(确认)などの概念がよく用いられる⁴。これらの概念において、「変化」、「出現」、「実現」、「発生」などの命題(proposition)的概念もあれば、「肯定」、「決定」、「確定」、「確認」などのモダリティ(modality)的概念もある⁵。沈家煊(2003:195-204、2008:403-408)、肖治野・沈家煊(2009:518-527)から明らかのように、“了2<行為>”の意味は文を構成するための文法上の要素の1つであり、“了2<認識>”の意味は発話者の思考様式を構成するための

要素の1つであり、“了2<言語>”の意味は発話者の言語行為を構成するための要素の1つである。つまり、“了2<行為>”の意味は文成分指向性あるいは命題的客観性を示し、“了2<認識>”と“了2<言語>”の意味は対話者指向性あるいはモダリティの主観性を示すということになる。そのため、先行研究で見られる「変化」義、「出現」義、「実現」義、「発生」義などの命題的意味を“了2<行為>”の意味として位置づけるべきである。

それでは、「変化」義、「出現」義、「実現」義、「発生」義のいずれを“了2<行為>”の意味とすればよいのであろうか。まず、次の(1a)-(4a)と(1b)-(4b)のニュアンスを比較してみよう。

- (1) a. 他在削着水果了。 (BCC)
 (彼は今度は果物の皮を剥いている。)
 b. 他在削着水果。
 (彼は果物の皮を剥いている。)
- (2) a. 他是我们的儿子了。 (CCL)
 (彼は私たちの息子になった。)
 b. 他是我们的儿子。
 (彼は私たちの息子だ。)
- (3) a. 蔬菜便宜了。 (吕文华 2010:553)
 (野菜が安くなった。)
 b. 蔬菜便宜。
 (野菜が安い。)
- (4) a. 大学生了, 要注意形象! (张国华 2017:209)
 (もう大学生になったのだから、マナーに注意しなさい!)
 b. 大学生, 要注意形象!
 (大学生なのだから、マナーに注意しなさい!)

形式と意味の面から(1a)-(4a)と(1b)-(4b)の相違を考えよう。形式的には、“了2”の有無という点において両者は異なる。意味的には、“了2”が付与されない(1b)-(4b)は何らかの静的な状態を示す一方、“了2”が付与される(1a)-(4a)は何らかの状態の変化を示す。例えば、(1b)は果物の皮を剥いているという状態を示すのに対して、(1a)は果物の皮を剥く前の何らかの段階から果物の皮を剥いているという新たな段階に入ったという変化を示す。したがって、先行研究では、“了2”の命題的意味について、沈开木(1987:4-19)、丁声树他(1999:214)、吕叔湘(1999:351-358)、谭春健(2003:73-80)などは「変化」義を主張している。

しかしながら、刘勋宁(2002:70-79)、彭小川・周芍(2005:136-141)、陈小红(2007:54-60)、杉村(2009:1-12)、周小兵・欧阳丹(2014:8-15)などは「変化」義に異議を唱えている。例

えば、陈小红(2007:54-60)、杉村(2009:1-12)、周小兵・欧阳丹(2014:8-15)は、他の発話場面や文脈が付与されない場合、次の(5)-(8)の“了2”はそれぞれ「結婚する」、「見かける」、「降る」、「教える」という出来事が起こったということだけを表し、何らかの状態の変化を表すとは言い難いと指摘している。

- (5) 他结婚了。(陈小红 2007:58)
(彼は結婚した。)
- (6) 他见到她了。(陈小红 2007:58)
(彼は彼女を見かけた。)
- (7) 那天晚上下雨了⁶。(杉村 2009:5)
(その夜に雨が降った。)
- (8) 你跟她说什么了?(周小兵・欧阳丹 2014:12)
(あなたは彼女に何を教えたのか。)

もし、「変化」でなければ、どのような意味概念を用いて(5)-(8)の“了2”の意味を説明すればよいのであろうか。朱德熙(1982:209)、杉村(2009:1-12)、周小兵・欧阳丹(2014:8-15)などによれば、「出現」という概念で説明することが可能である。太田(1958:350)、竟成(1993:52-57)、王维贤(1997:171-187)、刘勋宁(1998:35-48)、刘月华他(2001:379)、王伟(2006:78-79)などによれば、「実現」という概念で説明することも可能である。守屋(1995:259)、刘月华他(2001:379)、张云秋・王赛(2009:119-124)、张立昌(2014:24)などによれば、「発生」という概念で説明することも可能である。

第3章3.4節で論じたように、「変化」義、「出現」義、「実現」義、「発生」義のいずれを“了2”の基本的意味、つまり“了2”の命題的意味⁷とすればよいのかをめぐった論争は、内包的意味と外延的意味の立場の食い違いから生まれてきたのである。例えば、内包的意味の立場から見た「変化」義、「出現」義、「実現」義、「発生」義は、いずれも2つの状態の接点に内包される抽象的な動的認知様式として扱われるので、共通性を示す。そのため、いずれを“了2”の基本的意味としても構わない。一方、外延的意味の立場から見た「変化」義、「出現」義、「実現」義、「発生」義は、それぞれ文字どおりに示す[+変化]、[+出現]、[+実現]、[+発生]という具体的な意味特徴として扱われるので、相違性を示す。場合によって、“了2”は[+変化]を表す可能性もあり、[+出現]、[+実現]、[+発生]などのいずれかを表す可能性もある。そのため、「変化」義、「出現」義、「実現」義、「発生」義のいずれか一方のみを“了2”の基本的意味としては不適切である。第3章3.4節で述べたように、混乱を避けるため、本論文は具象的な意味特徴として理解されている「変化」、「出現」、「実現」、「発生」をそのまま「変化」、「出現」、「実現」、「発生」と呼び、抽象的な認知様式として理解されている「変化」、「出現」、「実現」、「発生」を「転換」と呼ぶ。

これまでの中国語辞書、中国語教材、中国語文法書などでは、“了 2<行為>”の意味、つまり“了 2”の命題的意味が一体どのように定義されているのであろうか。まず、中国語辞書である《現代漢語詞典(第7版)》(2017:788)には、「変化、または、新しい状況の出現を表す」⁸と記載されている。また、過去の数十年間北京言語大学で利用されている非中国語母語話者向けの中国語教材には、「変化」と「出現」という2つの意味概念が必ず記載されているが、他の意味概念は記載されたりされなかったりしている(呂文華 2010:548-556)。さらに、中国語文法書である《語法讲义》(1982:209-210)と《現代漢語八百詞(増訂本)》(1999:351)にも、「変化」と「出現」という2つの意味概念が同時に掲載されている。こうしてみれば、まず、“了 2<行為>”に関する意味概念において、「変化」と「出現」が常に用いられるということが分かる。また、中国語辞書、中国語教材、中国語文法書などは主に具象的な外延的意味の立場から“了 2<行為>”の意味を定義しているということも分かる。ところで、外延的意味の立場である中国語辞書などにおいて、「変化」、「出現」、「実現」、「発生」という4種類の意味概念は同時に用いられず、単に「変化」と「出現」という2種類の意味だけが用いられるというところに注意されたい。「変化」と「出現」という2種類の意味だけが用いられるということは、“了 2”の行為域の外延的意味を「変化」と「非変化」という2種類の意味に分ければ十分であるということを反映している。なぜならば、外延的意味の立場から見た「変化」という意味概念は[+相違]、[+参照]の意味特徴を示し、外延的意味の立場から見た「出現」、「実現」、「発生」などの意味概念はいずれも[-相違]、[-参照]の意味特徴を示すからである。つまり、「出現」、「実現」、「発生」などの意味概念は[-相違]、[-参照]の意味特徴において共通するからである。例えば、(1a)は、「果物の皮を剥く前の何らかの段階」と「果物の皮を剥いているという新たな段階」という2種類の状態の比較を示し、[+相違]、[+参照]の意味特徴を示す。(2a)-(4a)も同様に[+相違]、[+参照]の意味特徴を示す。しかし、(5)は単に「結婚する」という出来事の生起だけを示し、「結婚する」という出来事以外の別の出来事との比較は示さない。つまり、[-相違]、[-参照]の意味特徴を示す。(6)-(8)も同様に[-相違]、[-参照]の意味特徴を示す。そのため、劉勛寧(1998:35-48)は「出現」と「発生」が「用語の違い」(用詞的差別)に過ぎず、「対立的概念」(対立性的概念)ではないと指摘し、肖治野・沈家煊(2009:518-527)、陸方喆(2014:43-47)は、「出現」は「実現」に相当すると指摘しているのである。

上の段落で論じたように、“了 2”の行為域の外延的意味を「変化」と「非変化」という2種類の意味に分ければ十分であるが、その「非変化」という意味を「出現」、「実現」、「発生」などの概念のいずれで記述すればよいのか。呂文華(2010:548-556)から分かるように、[-相違]、[-参照]の意味特徴を表す意味概念としての「出現」、「実現」、「発生」の中で、「出現」のほうが現在の中国語辞書や中国語教材に最も多く用されている。しかし、本論文は、「出現」、「実現」、「発生」のいずれも非中国語母語話者の“了 2”の正しい使用に役立たないと考えられる。もともと「出現」、「実現」、「発生」という概念は動詞が指示する物事が現れるということも表し、体言が指示する物事が現れるということも表す。そのため、例えば、日本人学生が「先生が現れた」、「夢が実現した」、「問題が発生した」などの文を中国語に訳す場合、“了 2”が「出現」義、「実現」義、「発生」義を持つとい

うことを念頭に置いたら、「体言+“了2”」構文を用いてそれぞれ“老师了”（先生になった）、“梦想了”（夢になった）、“问题了”（問題に変わった）と訳してしまう恐れがある。しかし、先行研究で指摘されるように、通常「体言+“了2”」構文の“了2”は「変化」の意味⁹、すなわち「体言が指示する物事に変わった」という意味を表すが、「体言が指示する物事が{現れた/実現した/発生した}」という意味は表さない。そのため、「出現」、「実現」、「発生」という意味概念は非中国語母語話者の“了2”の正しい使用に影響をもたらすと考えられる。

それでは、どのような意味概念を用いて“了2”の「非変化」の意味を記述すればよいのか。(5)-(8)が示す「出現/実現/発生」は、体言などが指示する「もの」の「出現/実現/発生」でもなく、形容詞などが指示する「属性」の「出現/実現/発生」でもないが、動態動詞が指示する「出来事」の「出現/実現/発生」である。そのため、「出現」、「実現」、「発生」の代わりに、本論文は「出来事生起」というより詳しい意味概念を用いて“了2”の「非変化」の意味を記述する。総じていえば、本論文は“了2<行為>”の意味を「変化」義と「出来事生起」義に再分類する。「変化」と「出来事生起」という2つの意味概念に関する定義・意味記述を次に詳しく再規定する。

本論文で規定する「変化」(変化、become)義とは、何らかの内容から、“了2”構文¹⁰の特定の文成分が指示する「静相」義¹¹にすでに変わったという意味である。具体的には、中国語の“已经变成……”、“已经成为……”、“已经变成……现象/态势”という意味に相当し、日本語の「……に変わった」、「……になった」、「……という現象/態勢になった」という意味に相当し、英語の“became……”、“changed into……”などの意味に相当する。

本論文で規定する「出来事生起」(事件发生、occur)義とは、“了2”構文の述語が指示する出来事(事件¹²、event)がすでに起こったという意味である。具体的には、中国語の“……事件已经发生”という意味に相当し、日本語の「……という出来事が生起した」、「……という出来事が起こった」、「……という出来事があった」という意味に相当し、英語の“(an event)occurred”、“(an event)happened”、“(an event)took place”という意味に相当する。ところで、「出来事生起」という意味概念における「出来事」は、[+動態]、[-均質]、[+限界]という意味特徴を備える「こと」であり、[-動態]という意味特徴を備える「もの」や、[+均質]の意味特徴を備える「属性」や、[-限界]の意味特徴を備える「過程」などではない。この点について注意されたい。

6.3 精緻化された“了2<行為>”の意味に関する属性

本章の論述と第3章3.5節で提起した“了2”の意味体系の様式に基づいて、“了2<行為>”の意味に関する属性を次の5点でまとめる。

第一に、“了2<行為>”の意味は外延性を示す。この外延性というのは“了2<行為>”の外延的意味のことや外延的意味としての資格を指す。

第二に、“了2”の「転換」スキーマという内包的意味からみれば、“了2<行為>”の「変化」義は「着点・結節点」の明示性と「起点」の暗示性を示すが、“了2<行為>”の「出来事生起」義は「着点・結節点」の明示性だけを示す。「変化」義は、1つの要素がもう1つの要素に「変化」したという意味であるので、1つの要素がもう1つの要素を参照要素

とするという特徴を反映する他に、1つの要素がもう1つの要素と異なるという特徴も反映する。この2つの特徴は前節で述べた「変化」義の[+参照]、[+相違]の意味特徴である。第4章4.5節で述べた「転換」スキーマという“了2”の内包的意味からみれば、「もう1つの要素」は「変化」した結果であるので、「転換」スキーマの「着点・結節点」という部分の認知様式に対応するが、「1つの要素」は「変化」する前の状態であるので、「転換」スキーマの「起点」という部分の認知様式に対応するということが分かる。また、第4章4.6節で述べたように、「転換」スキーマは「着点・結節点」の部分のみを明示し、「起点」などの部分を明示せず、暗に示すのである。そのため、「変化」義は「転換」スキーマの「着点・結節点」という部分を明示し、「起点」という部分を暗に示すということが分かる。ところで、「変化」という動態は、2つの要素が互いに参照し合うことに基づいて成り立つが、「出来事生起」という動態は、2つの「出来事」が互いに参照し合うことに基づいて成り立つわけではない。つまり、「出来事生起」義が指示する「出来事」はもう1つの「出来事」を参照要素とする必要はない。あるいは、「出来事生起」義が指示する「出来事」は自分自身を参照要素とすると言ってもよい。そのため、前節で述べたように、「出来事生起」義は[-参照]、[-相違]という意味特徴を示す。もし「転換」スキーマという“了2”の内包的意味からみれば、「出来事生起」義は単に「転換」スキーマの「着点・結節点」の部分のみを明示するだけであるということが分かる。

第三に、“了2<行為>”の意味において、「変化」義は任意文成分指向性を示し、「出来事生起」義は述語指向性を示す。では、次の(9)、(10)を考えよう。

- (9) 今年的话，蔬菜很贵。但根据市场数据分析的结果可知，明年的话，蔬菜便宜了。没错，便宜了。

(今年は野菜が高いけど。市場データ分析の結果が示したように、来年の野菜の値段の態勢はもう高い傾向から安い傾向に変わった。そう、安い傾向に変わった。)

- (10) 今年的话，肉类便宜。但根据市场数据分析的结果可知，明年的话，蔬菜便宜了。没错，蔬菜了。

(今年は肉が安いけど。市場データ分析の結果が示したように、来年安く買えるものは野菜になった。そう、野菜になった。)

(9)の“了2<行為>”の「変化」義は、「文成分“便宜”(安い)の何らかの『静相』義に『変化』した」という意味、つまり“便宜”(安い)という態勢や傾向に『変化』した」という意味であるが、(10)の“了2<行為>”の「変化」義は、「文成分“蔬菜”(野菜)の何らかの『静相』義に『変化』した」という意味、つまり“蔬菜”(野菜)という対象に『変化』した」という意味である。要するに、文脈によって、“了2<行為>”の「変化」義が指向する文成分は異なる。これは「変化」義の任意文成分指向性を反映する。しかし、“了2<行為>”の「出来事生起」義はもともと「動詞的述語によって表される『出来事』が『生起』した」という意味であり、常に動詞的述語という文成分だけを指向する。そのため、「出来事生起」義は述語指向性を反映する。

第四に、“了 2<行為>”の意味は省略不可能性を示す。ここで述べている省略不可能性というのは、“了 2<行為>”が省略されたら、本来の文の命題的意味が変わるか、本来の文の文法形式が不完全になってしまうということである。この点において、第7章で述べる“了 2<認識>”とも異なり、第8章で述べる“了 2<言語>”とも異なる。例えば、上記の(1a)-(4a)と(1b)-(4b)を比較すれば分かるように、“了 2<行為>”が付与される例文はもともと状態変化のを表すが、その“了 2<行為>”が省略されると、もともとの状態変化のを表さない。また、上記の(5)-(8)の“了 2<行為>”が省略されると、次の(11)-(14)が得られる。

(11) ?他结婚。

(?彼は結婚して。/彼は結婚する。/彼は結婚すると思う。)

(12) ?他见到她。

(?彼は彼女を見かけて。)

(13) ?那天晚上下雨。

(?その夜に雨が降って。/その夜は雨の状態だった。)

(14) 你跟她说什么?

(あなたは彼女に何を教えようと思っているのか?/あなたはなぜ彼女に教えたのか?)

(11)の“他结婚”は、“他结婚，……”(彼は結婚して……)という不完全な文法形式として扱われる可能性もあり、“他要结婚”(彼は結婚する)という主語の意志を表す文として扱われる可能性もあり、“他会结婚”(彼は結婚すると思う)という発話者の推測を表す文として扱われる可能性もある。(12)の“他见到她”は、主に“他见到她，……”(彼は彼女を見かけて……)という不完全な文法形式として扱われる。(13)の“那天晚上下雨”は、“那天晚上下雨，……”(その夜は雨が降って……)という不完全な文法形式として扱われる可能性もあり、“那天晚上是下雨的”(その夜は雨の状態だった)という状態的意味を表す文として扱われる可能性もある。(14)の“你跟她说什么”は“你想要跟她说什么”(あなたは彼女に何を教えようと思っているのか)という聞き手の意志に関する質問を表す可能性もあり、“你为什么跟她说呢”(あなたはなぜ彼女に教えたのか)という理由に関する質問を表す可能性もある。総じていえば、(1)-(10)の“了 2<行為>”が省略されたら、“了 2<行為>”の直前の内容は不完全な文や別の意味の文になってしまう。言い換えれば、“了 2<行為>”構文において、“了 2<行為>”の有無は“了 2<行為>”の直前の内容の意味に影響を与えるか、または“了 2<行為>”の直前の内容の、完全な文としての容認度に影響を与える。

第五に、“了 2<行為>”の意味は客観性を示す。具体的には、命題性・文成分指向性を示す。于康(1996:26-33)と彭利贞(2005:67)から分かるように、1つの特定の命題的要素

と別の命題的要素とともに1つの完全な命題を構成する場合、その特定の命題的要素が省略されたら、残された命題的要素の組み合わせは不完全な命題形式¹³になってしまうか、別の命題になってしまう。つまり、于康(1996:26-33)と彭利貞(2005:67)が述べている命題的要素は前述の“了2<行為>”の意味の省略不可能性を示す。こうしてみれば、“了2<行為>”の意味としての「変化/出来事生起」義を于康(1996:26-33)と彭利貞(2005:67)が述べている命題的要素として扱っても構わない。また、もともと文における命題的要素とモダリティ的要素はそれぞれ文の客観性と主観性を反映するものである(吳凌非2002:23-27、澤田2009:2)。「変化/出来事生起」義は客観性を反映するということが分かる。さらに、「変化/出来事生起」義は文成分指向性を持つが、第7章、第8章で述べるように、“了2<認識>”の「再肯定・再否定」義と“了2<言語>”の「要聴」義は文成分指向性を持たず、対話者指向性を持つ。つまり、「変化/出来事生起」という動態の担い手はある文に内在する要素であるが、「再肯定・再否定」と「要聴」という2種類の動態の担い手はある文に外在する発話者や聞き手である。文成分指向性は命題性や客観性に相当し、対話者指向性はモダリティ性や主観性に相当するのである。

6.4 終わりに

以上、“了2”の客観的意味・命題的意味に関する先行研究を踏まえて、“了2”の行為域の意味を精緻化した。また、“了2”の行為域の意味の属性も明らかにした。このように、“了2”の行為域の外延的意味に関する意味記述と意味属性を提示した。

<注>

1. [P]はフレーズという意味である。
2. 原文は、“交叉的情形比我们现在想到的要复杂，还可以深入研究”である。
3. 認知意味論によれば、精緻化(elaboration)とはよりスキーマ的な意味や抽象的な意味を具体化(instantiation)する過程である(靱山・深田2003b:167、Langacker2008:21、215)。例えば、「[A]、[B]をそれぞれ多義語を持つ抽象度の異なる2つの確立した意味とした場合」、[A]は[B]に対してスキーマ的であり、[B]は[A]を精緻化したものであるとしたら、「[B]は[A]と矛盾しないが、[B]の意味記述は[A]の意味記述よりも詳細である」(靱山・深田2003b:167)。
4. 刘勋宁(1998:35-48)、刘月华他(2001:379-392)、吕文华(2010:548-556)などが指摘するように、“了2”の命題的意味を説明するための意味概念には「変化」、「出現」、「実現」、「発生」がある。また、吕叔湘(1999:351)、吳凌非(2002:23-27)、张云秋・王赛(2009:119-124)、何文彬(2013:10-18)などから明らかのように、“了2”のモダリティ的意味を説明するための意味概念には「肯定」、「決定」、「確定」、「確認」がある。
5. 命題はモダリティに対する概念である。吳凌非(2002:23-27)、澤田(2009:2)などから分かるように、ある文における命題的要素とモダリティ的要素はそれぞれ文の客観性と主観性を反映するものである。先行研究で見られる“了2”の「変化」、「肯定」という2つの意味概念の命題性とモダリティ性を考えよう。6.3節で述べるように、「変化」という動態の担い手は特定の文成分が指示する要素、つまりある文に内在する要素であるが、「肯定」という動態の担い手は特定の文成分が指示する要素ではなく、ある文に外在する発話者である。前者は文成分指向性、つまり命題性を示すが、後者は発話者指向性や精神活動指向性、つまりモダリティ性を示す。客観性と主観性の対立関係からみれば、前者は客観性を示し、後者は主観性を示す。
6. (7)は、杉村(2009:5)の原文“那天晚上下雨了吗?”を書き換えたものである。
7. 第1章1.3節で述べたように、歴史的には、“了2”の主観的意味・モダリティ的意味は“了2”の客観的意味・命題的意味から生まれてきた。そのため、先行研究では“了2”の客観的意味・命題的意味が“了2”の基本的意味と捉えられる(肖治野・沈家焯2009:518-527)。

8. 原文は、“表示变化或出现新的情况”である。
9. 「体言+“了2”」構文の“了2”は「变化」的意味を表さない場合もあるが、通常「变化」的意味を表す。詳細については、邢福义(1984:21-26)、贾红霞(2003:112-119)、谭春健・赵刚(2005:16-20)、陆士宇(2007:45-46)、王会琴(2009:101-104)、年玉萍(2009:79-81)、周一民(2011:93-97)、臧晓艳(2013:60-62)、庞加光(2014: 52-60)、佟福奇(2015:46-51)、刘晨(2015:51-53)、毕娇娇(2015:74-78)、闫亚平(2016:57-62)、张国华(2017:208-209)などを参照のこと。
10. 本論文は、“了2”が含まれる文を“了2”構文と呼ぶことにする。
11. 第2章2.2節で規定したように、「静相」義とは「動詞的述語が示す内的属性、現象、態勢、また、動詞的述語以外の文成分が示す意味」を指す。
12. この“事件”という用語は中国語表記であり、「事件」という日本語表記ではない。
13. 不完全な命題形式は容認度が低い文とも言える。

第7章 文末助詞“了”の認識域の外延的意味

7.1 はじめに

本章の目的は、“了 2<認識>”の意味を精緻化(elaboration)¹し、“了 2<認識>”の意味の属性を明らかにするということである。要するに、“了 2<認識>”の外延的意味に関する定義・意味記述と意味属性を提示することである。

7.2 先行研究で言及される“了 2<認識>”の意味に関する精緻化

語用論の立場から、“了 2”は「肯定」(肯定)、「決定」(決定)、「確定」(確定)、「確認」(確認)などの主観的な語気や語用論的機能を表すと指摘する先行研究が数多くある²。先行研究から明らかなように、歴史的には、“了 2”の主観的意味・モダリティ的意味は“了 2”の客観的意味・命題的意味から生まれてきた³。第6章6.2節、6.3節で述べたように、“了 2<行為>”の意味は文成分指向性あるいは命題的客観性を示し、“了 2<認識>”と“了 2<言語>”の意味は対話者指向性あるいはモダリティ的主観性を示す。そのため、“了 2”の認識域と言語域の意味は行為域の意味から生まれるということが分かる(肖治野・沈家煊 2009:518-527)。この意味で、先行研究において、“了 2”の客観的意味あるいは“了 2<行為>”の意味は“了 2”の基本的意味⁴として捉えられる。一方で、文法化が進むにつれ、一部の主観的な語気や語用論的機能がどのような場合においても常に表され、“了 2”の言内の意味・言語的意味として定着し、“了 2”構文⁵以外の発話場面や文脈から推論されなくても捉えられるようになってきた。例えば、「肯定」、「決定」、「確定」、「確認」などの主観的な語気や語用論的機能がその一部である。そのため、意味論の立場から、吴凌非(2002:23-27)、彭小川・周芍(2005:136-141)、张云秋・王赛(2009:119-124)、何文彬(2013:10-18)はそれぞれ「確認」、「肯定」、「確定」、「決定」という語気を“了 2”の言内の意味・言語的意味と規定している。また、「肯定」、「決定」、「確定」、「確認」などの主観的な語気と「変化」、「出現」、「実現」、「発生」などの客観的意味・命題的意味を合わせて“了 2”の言内の意味・言語的意味を規定する研究もよく見られる⁶。例えば、守屋(1995:259)は“了 2”を「情況が変化した、新事態が発生したことを確認した」と定義し、吕叔湘(1999:351)は「事態の变化が出現したことを肯定したか、または、その变化が出現しようとしていることを肯定した」⁷と定義し、张云秋・王赛(2009:123)は「事態の発生が確定した」⁸と定義している。本論文は意味論の立場であるので、意味論の立場の研究成果を踏まえて、「肯定」、「決定」、「確定」、「確認」などの主観的な語気を“了 2”の言内の意味・言語的意味の1種として位置づける。

「肯定」義、「決定」義、「確定」義、「確認」義などは発話者の判断、態度、思考様式を反映し、モダリティ性・主観性を反映するため、モダリティ性・主観性を反映する認識域に位置づければ適切であるが、命題性・客観性を反映する行為域に位置づけては不適切である。また、「肯定」義、「決定」義、「確定」義、「確認」義などは対話者の言語行為を直接に反映しないので、言語域に位置づけても不適切である。このように、本論文は「肯

定」義、「決定」義、「確定」義、「確認」義などを“了 2<認識>”の意味として位置づける。

もともと「肯定」、「決定」、「確定」、「確認」などは、“了 2”に内包される「定着・定まった」(已成定局)(王力 1984:217、1985:230)という抽象な語気を説明するために用いられる意味概念である。先行研究から明らかなように、この「定着・定まった」という語気は「あるようでないような」(空灵的)(王伟 2006:83、王洪君他 2009:314、夏炎青 2017:45)ものであり、具体的に意味化されることは非常に難しい(张立昌 2014:77-78)。つまり、“了 2<認識>”そのものが具体的に意味化されることが難しいということである。そのため、どのような意味概念を用いて“了 2<認識>”の意味を記述すればよいのかについては未だに明らかにされていない。例えば、先行研究でよく見られる「肯定」、「決定」、「確定」、「確認」、「定着・定まった」という用語で“了 2<認識>”の意味を記述すると、次のような問題点が生じる。

まず、「肯定」という意味記述の妥当性と実用性を考えよう。“了 2”が表す「肯定」的な態度と肯定文が表す「肯定」的な態度がどのように異なるのかという問題において、「肯定」という意味記述は紛らわしい。次の(1)を合わせてこの問題を考えよう。

- (1) a. (预设:留学生曾提意见, 说她的语速太快了。)
其实, 刚才她的语速很慢了。 (彭小川・周芍 2005:141)
(前提:留学生たちは、あの方の話し方が速すぎたと文句を言った。)
(実は、さっきあの方の話し方が遅かったんだ。)
- b. 其实, 刚才她的语速很慢。
(実は、さっきあの方の話し方が遅かったんだ。)

形式的には、“了 2”を持つかどうかという点において(1a)と(1b)は異なるが、意味的には、(1a)も(1b)も、「さっきあの方の話し方が速すぎた」ということを否定し、「さっきあの方の話し方が遅かった」ということを肯定するので、同様の言語的意味¹⁰を示す。もし、「肯定」という意味記述で(1a)の“了 2”の意味を解釈すると、『さっきあの方の話し方が遅かった』ということ肯定した」という言語的意味を得るしかない。しかし、このような言語的意味は(1b)の言語的意味と同様であるので、示差的特徴(distinctive feature)¹¹を示さない。つまり、「肯定」という意味記述で(1a)の“了 2”の意味を解釈すると、(1a)と(1b)の意味的相違を説明することはできないということになる。また、(2)-(4)を例にとって、「決定」、「確定」、「確認」、「定着・定まった」などの意味記述の妥当性と実用性も考えよう。

- (2) a. 她一定是王太太了。 (彭小川・周芍 2005:138)
(あの方はきっと王さんだ。)
- b. 她一定是王太太。
(あの方はきっと王さんだ。)

- (3) a. 难怪他不去西湖了。 (肖治野・沈家煊 2009:522)
 (彼が西湖に行かなかったということの背後に潜んでいる事情を確認できた。)
- b. 难怪他不去西湖。
 (彼が西湖に行かなかったということの背後に潜んでいる事情を確認できた。)
- (4) a. 马拉多纳可能已经出院了。 (CCL)
 (マラドーナさんはたぶん退院しただろう。)
- b. 马拉多纳可能已经出院。
 (マラドーナさんはたぶん退院しただろう。)

(2)の“一定”というモダリティ的副詞は、もともと「きっと」、「に決まっている」、「決して」などの意味を表すので、「決定」的、「確定」的な意味合いや「定着・定まった」という語気も表す。しかし、「決定」、「確定」、「定着・定まった」という意味記述で(2a)の“了2”の意味を解釈すると、(2a)と(2b)の意味は示差的特徴を示さない。(3)の“难怪”というモダリティ的副詞は、「背後に潜んでいる事情を確認できた」という意味を表すので、「確認」的な意味合いも表す。しかし、「確認」という意味記述で(3a)の“了2”の意味を解釈すると、(3a)と(3b)の意味も示差的特徴を示さない。(4a)の“可能”というモダリティ的副詞は、もともと「たぶん」という意味であるので、「定着してない・定まっていない」という語気を表す。もし、「定着・定まった」という意味記述で(4a)の“了2”の意味を解釈すれば、“可能”(たぶん)との矛盾を引き起こしかねない。

「肯定」、「決定」、「確定」、「確認」、「定着・定まった」などの意味概念に類似している意味概念、例えば、“保证”(きっと、for sure)、“绝对”(絶対に、absolutely)、“确实”(確かに、indeed)、“真的”(本当に、really)、“毫无疑问”(疑いなく、no doubt)、“当然”(もちろん、of course)などの意味概念の妥当性と実用性も考えよう。

- (5) a. A: 你喝了什么?
 B: 我喝了这瓶酒了¹²。 (石定栩・胡建华 2006:98)
 (A: あなたは何を飲んだのか?)
 (B: 私はこのお酒を飲んだんだ。)
- b. B: 我喝了这瓶酒。 (石定栩・胡建华 2006:98)
 (B: 私はこのお酒を飲んだんだ。)
- c. B: #我{保证/绝对/确实/真的/毫无疑问/当然}喝了这瓶酒。
 (B: #私は{きっと/絶対に/確かに/本当に/疑いなく/もちろん}このお酒を飲んだんだ。)

(5b)は、(5a)の“了2”構文の“了2”を省略した結果である。(5c)は、「定着・定まった」という語気を示す“保证”(きっと)、“绝对”(絶対に)、“确实”(確かに)、“真的”(本当に)、“毫无疑问”(疑いなく)、“当然”(もちろん)などの意味概念を通して(5a)の“了2”の意味を解釈した結果である。(5b)も(5c)も文法的には適格である。ただし、(5b)の文は

(5)が示す発話場面に合うが、(5c)の文は(5)が示す発話場面に合わない。つまり、(5)が示す発話場面では、下線部の“了2”が省略されてもよいが、“保证”(きっと)、“絶対”(絶対に)、“确实”(確かに)、“真的”(本当に)、“毫无疑问”(疑いなく)、“当然”(もちろん)などの意味概念を通してその“了2”の意味を解釈してはならない。これは、“了2”の「定着・定まった」という抽象的な語気を具体的な意味記述で意味化し難いということも意味し、“了2<認識>”の外延の意味を具体化し難いということも意味する。そのため、劉綺紋(2006:201-202)が指摘するように、“了2”の「定着・定まった」という抽象的な語気は、特別な機能や役割を持たず、単なる平叙文の陳述的モードに過ぎないとしばしば誤解される。

劉綺紋(2006:201-244)はLangacker(1987:102、141-146、248-249)のスキヤニング説に基づいて、“了2”の「定着・定まった」という語気の形成メカニズム¹³、すなわち本論文で述べる“了2<認識>”の意味の形成メカニズムを次のように説明している。“了2”の「定着・定まった」という語気の形成メカニズムは、人間が「逡巡」という「心的スキヤニング」(mental scanning)の過程を経てから何らかの結果を「再選択」という認知プロセスである。つまり、心理面における複数の「選択肢」からある「選択肢」を選び出した後、それらの「選択肢」に対して「逡巡」してから再び同一の「選択肢」を選び出すということである。この認知プロセスは発話者の「再選択」意識を示す。本論文はこの「再選択」意識に基づいて“了2<認識>”の意味を「再肯定・再否定」(再肯定・再否定、re-affirm・re-negate)義と規定する。

本論文で規定する「再肯定・再否定」義とは、発話者の思考過程を含意する動態として、発話者はある発話をした後、その発話で肯定・否定されている意味論的内容、統語論的内容、語用論的内容、音韻的内容などの任意のカテゴリーの内容に対して、再び肯定的・否定的な態度を示すという意味である。具体的には、中国語の場合は、ある発話の末尾に添えられる“是的”、“对”、“嗯”、“没错”、“真是这样的”などの間投詞やフレーズの意味を指す。日本語の場合は、ある発話の末尾に添えられる「はい」、「うん」、「そう(なんだ)」などの間投詞やフレーズの意味を指す。英語の場合は、ある発話の末尾に添えられる“yes・no”、“just like I said right now”、“I mean it”などの間投詞やフレーズの意味を指す。

「はい」、「うん」、「そう(なんだ)」などの間投詞やフレーズは文の末尾に添えられると、「自問自答の形で再肯定・再否定する」という意味機能を果たす。そのため、本論文は、ある肯定文、否定文に含まれる何らかの内容を再肯定・再否定しようとするならば、“了2<認識>”を用いてよいという“了2<認識>”の使用条件を主張する。

7.3 実例に関する意味解釈

前節で説明したように、“了2”構文はどのような場合においても常に「定着・定まった」という語気、つまり本論文で規定する「再肯定・再否定」義を表す。つまり、“了2”構文は“了2<行為>”の意味または“了2<言語>”の意味を表すとしても、“了2<認識>”の意味を同時に表すということである。この点について、第9章でまた具体的に説明する。「再肯定・再否定」義を分かりやすく説明するために、本節の用例を“了2<行為>”の意

味を表さない用例に絞る。

7.3.1 発話時間より早く生じる事象に関する「再肯定・再否定」

発話時間より早く生じる事象は、「発話時間より早く存在している状態」と「発話時間より早く起こった出来事」という2種類に分けられる。次の(6)-(8)の“了2”構文は、「発話時間より早く存在している状態」を示し、(9)-(11)の“了2”構文は、「発話時間より早く起こった出来事」を示す。また、(6)-(8)の事象はそれぞれ静態動詞“是”（だ）、形容詞“慢”（遅い）、主節の役割を果たす副詞“难怪”（背後に潜んでいる事情を確認できた）が示す状態であり、(9)-(11)の事象はそれぞれ“出(院)”（退(院)）、“喝”（飲む）、“看”（読む）という動態動詞が示す出来事である。

- (6) a. 她一定是王太太了。 (=(2a))
(あの方はきっと王さんだ。)
- b. 她一定不是王太太了。
(あの方はきっと王さんではない。)
- (7) a. (预设:留学生曾提意见,说她的语速太快了。)
其实,刚才她的语速很慢了。 (=(1a))
(前提:留学生たちは、あの方の話し方が速すぎたと文句を言った。)
(実は、さっきあの方の話し方が遅かったんだ。)
- b. (预设:留学生曾提意见,说她的语速太慢了。)
其实,刚才她的语速不慢了。
(前提:留学生たちは、あの方の話し方が遅すぎたと文句を言った。)
(実は、さっきあの方の話し方が遅くなかったんだ。)
- (8) 难怪他不去西湖了。 (=(3a))
(彼が西湖に行かなかったということの背後に潜んでいる事情を確認できた。)
- (9) a. 马拉多纳可能已经出院了。 (=(4a))
(マラドーナさんはたぶん退院しただろう。)
- b. 马拉多纳可能还没出院了。
(マラドーナさんはたぶん退院していないだろう。)
- (10) a. A: 你喝了什么?
B: 我喝了这瓶酒了。 (=(5a))
(A: あなたは何を飲んだのか?)
(B: 私はこのお酒を飲んだんだ。)
- b. A: 你喝了这瓶酒吗?

B: 我还没喝这瓶酒了。)

(A: あなたはこのお酒を飲んだのか?)

(B: 私はまだこのお酒を飲んでいないんだ。)

(11) a. 这本书我看了三天了。 (吕叔湘 2002:27)

(この本を私は三日間読んできた。)

b. 这本书我还没看三天了。

(この本を私はまだ三日間読んでいない。)

本章で規定する「再肯定・再否定」義で(6)-(11)の下線部の“了2”を解釈すると、次の(12)-(17)の[]の内容が得られる。「再肯定・再否定」義で解釈された結果としての(12)-(17)は、(6)-(11)に内包されている「肯定」、「決定」、「確定」、「確認」、「定着・定まった」などの語気をきちんと伝え、(6)-(11)の意味に相当する。

(12) a. 她一定是王太太。[对・嗯・真是这样的]。

(あの方はきっと王さんだ。[はい・うん・そうなんだ]。/She must be Mrs Wang. [I mean it].)

b. 她一定不是王太太。[没错・嗯・就是这样]。

(あの方はきっと王さんではない。[はい・うん・そうなんだ]。/She can not be Mrs Wang. [I mean it].)

(13) a. (预设:留学生曾提意见,说她的语速太快了。)

其实,刚才她的语速很慢。[是的・嗯・真是那样]。

(前提:留学生たちは、あの方の話し方が速すぎたと文句を言った。)

(実は、さっきあの方の話し方が遅かった。[はい・うん・そうなんだ]。)

/Actually, her speech was slow. [Yes・I mean it].)

b. (预设:留学生曾提意见,说她的语速太慢了。)

其实,刚才她的语速不慢。[是的・嗯・真是那样]。

(前提:留学生たちは、あの方の話し方が遅すぎたと文句を言った。)

(実は、さっきあの方の話し方が遅くなかった。[はい・うん・そうなんだ]。)

/Actually, her speech wasn't slow. [No・I mean it].)

(14) 难怪他不去西湖。[对・没错(就是那个原因)]。

(彼が西湖に行かなかったということの背後に潜んでいる事情を確認できた。[はい・うん(その事情なんだね)]。/I finally figured out why he didn't go to the West Lake. [I mean it].)

(15) a. 马拉多纳可能已经出院。[是的]。

(マラドーナさんはたぶん退院しただろう。[はい]。/Maradona may be discharged. [I mean it].)

b. 马拉多纳可能还没出院。[对]。

(マラドーナさんはたぶん退院していないだろう。[はい]。/Maradona may not be discharged. [I mean it].)

(16) a. A: 你喝了什么?

B: 我喝了这瓶酒。[是的・对・就像我说的这样]。

(A: あなたは何を飲んだのか?)

(B: 私はこのお酒を飲んだだ。[はい・うん・そうなんだ]。/I drank this bottle of wine. [I mean it・Just like I said right now].)

b. A: 你喝了这瓶酒吗?

B: 我还没喝这瓶酒。[是的・对・就像我说的这样]。

(A: あなたはこのお酒を飲んだのか?)

(B: 私はまだこのお酒を飲んでいないんだ。[はい・うん・そうなんだ]。/No, I haven't drunk it. [No・I mean it].)

(17) a. 这本书我看了三天。[是的・没错]。

(この本を私は三日間読んできた。[はい・うん]。/I've read this book for three days. [Yes・I mean it].)

b. 这本书我还没看三天。[是的・对]。

(この本を私はまだ三日間読んでいない。[はい・うん]。/I haven't read this book for three days. [No・I mean it].)

ところで、(6)-(11)の“了2”は具体的にどのようなカテゴリーの内容を「再肯定・再否定」、「再選択」するのかについて、(12)-(17)の[]からは判断し難い。具体的な発話場面を合わせなければ判断できないからである。例えば、まず、(10a)を考えよう。(10a)には、“我喝了这瓶酒了”(私はこのお酒を飲んだんだ)という“了2”構文も含まれ、“你喝了什么?”(あなたは何を飲んだのか?)という疑問文も含まれる。つまり、(10a)は、“我喝了这瓶酒了”という“了2”構文に具体的な発話場面を提供している。“你喝了什么?”(あなたは何を飲んだのか?)という情報から分かるように、“我喝了这瓶酒了”の“了2”が「再肯定」、「再選択」するのは“这瓶酒”(このお酒)という命題の意味である。そのため、(10a)の“我喝了这瓶酒了”という“了2”構文をより具体的に解釈すれば、次の(18)に再解釈しても構わない。(18)の二重下線の内容は“我喝了这瓶酒了”の“我喝了这瓶酒”という部分の意味に相当し、(18)の下線の内容は“我喝了这瓶酒了”の“了2”の意味に相当する。

(18) 何を飲んだのかという命題の内容を聞かれると、私は「このお酒」という命題の内

容を「肯定」、「選択」する。はい、「このお酒」という命題的内容を「肯定」、「選択」する。

次に、(11a)も考えよう。(11a)には、“这本书我看了三天了”(この本を私は三日間読んできた)という“了2”構文だけが含まれる。つまり、(11a)は、“这本书我看了三天了”(この本を私は三日間読んできた)という“了2”構文に具体的な発話場面を提供していない。そのため、(11a)の“了2”が「再肯定」、「再選択」する内容は何か、あるいは(17a)の[是的](はい)が「再肯定」、「再選択」する内容は何かについては判断できない。次の(19)と(20)は、“这本书我看了三天了”(この本を私は三日間読んできた)という“了2”構文にそれぞれ異なる発話場面を提供している。(19)と(20)から、それぞれの“了2”が「再肯定」、「再選択」する内容を特定できる。また、それぞれの“了2”が「再肯定」、「再選択」する内容は異なるカテゴリーの内容である。

- (19) A: 这本书老子看了三天。
B: 这本书我看了三天了。“我”了!怎么能用“老子”这么粗鲁的措辞呢!
(A: この本を俺は三日間読んできた。)
(B: この本を私は三日間読んできたと言うべきだよ。「私」だよ!「俺」なんて乱暴な言葉遣いを使うな!)
- (20) A: 这本书我看(kang)了三天。
B: 你的发音怎么那么奇怪?这本书我看(kan)了三天了。“看(kan)”了!不是“看(kang)”。
(A: この本を私は三日間読んで(yonte)きた。
(B: あの発音はおかしくない?この本を私は三日間読んで(yonde)きたと言うべきだよ。「読んで(yonde)」だよ!「読んで(yonte)」じゃないよ。)

“老子”(俺)と“我”(私)は同様に「第一人称」という命題的意味を表すにもかかわらず、(19)では、“这本书我看了三天了”の“了2”は「第一人称」という命題的意味を「再肯定」、「再選択」するのではなく、“我”(私)という言葉遣いの適切性を「再肯定」、「再選択」するのである。つまり、語用論的内容を「再肯定」、「再選択」するのである。そのため、(19)における“这本书我看了三天了”という“了2”構文をより具体的に解釈すれば、次の(21)に再解釈しても構わない。(21)の二重下線の内容は“这本书我看了三天了”の“这本书我看了三天”という部分の意味に相当し、(21)の下線の内容は“这本书我看了三天了”の“了2”の意味に相当する¹⁴。

- (21) 「この本を私は三日間読んできた」という発話が示したとおり、「私」という言葉遣いを「肯定」、「選択」する。はい、「私」という言葉遣いを「肯定」、「選択」する。

(20)では、Bさんは“看”(読んで)という言葉の命題的内容を「再肯定」、「再選択」するのではなく、“看”(読んで)という言葉の発音である“kan”(yonde)を「再肯定」、「再選択」するのである。つまり、特定の音韻的要素を「再肯定」、「再選択」するのである。そのため、(20)の“这本书我看了三天了”という“了2”構文をより具体的に解釈すれば、次の(22)に再解釈しても構わない。(22)の二重下線の内容は“这本书我看了三天了”の“这本书我看了三天”という部分の意味に相当し、(22)の下線の内容は“这本书我看了三天了”の“了2”の意味に相当する。

(22) 「この本を私は三日間読んで(yonde)きた」という発話が示したとおり、私は「読んで(yonde)」という発音を「肯定」、「選択」する。はい、「読んで(yonde)」という発音を「肯定」、「選択」する。

このように、(10a)、(19)、(20)の“了2”構文において、“了2”によって「定まった」要素はそれぞれ意味論的要素、語用論的要素、音韻的要素であるということが分かる。

7.3.2 発話時間より遅く生じる事象に関する「再肯定・再否定」

“了2<認識>”によって「再肯定・再否定」される、発話時間より遅く生じる事象は、しばしば決断した事象、決意した事象、予定している事象、計画中の事象、見込みのある事象などである。例えば、次の(23)-(25)が示す事象は決断、決意などであり、(26)が示す事象は予定、計画、見込みなどである。

(23) 走了, 走了, 不能再等了。 (张伯江 2018:38)
(行くぞ。行くぞ。もう待てないから。)

(24) 算了, 不买了。 (BCC)
(もういい。買わないことにした。)

(25) 就这样了! (肖治野・沈家焯 2009:521)
(そのままにしまししょう!)

(26) 明天我就调走了。 (CCL)
(明日私は転勤する。)

本章で規定する「再肯定・再否定」義で(23)-(26)の下線の“了2”を解釈すると、次の(27)-(30)の[]の内容が得られる。

(27) 走。[对・没错・就这样]。走。
(行く。[はい・うん・そう]。行く。/Go. [Yes・I mean it]. Go.)

- (28) 不买。[是的・就这样]。
 (買わない。[はい・うん]。/I won' t buy it. [No・I mean it].)
- (29) 就这样。[是的]!
 (そのまま。[うん]!/Let it be. [Yes・I mean it].)
- (30) 明天我就调走。[是的]。
 (明日私は転勤する。[はい]。/I' ll be transferred tomorrow. [Yes・I mean it].)

「再肯定・再否定」義で解釈された結果としての(27)-(30)は、(23)-(26)に内包されている「肯定」、「決定」、「確定」、「確認」、「定着・定まった」などの語気をきちんと伝え、(27)-(30)の意味は(23)-(26)の意味に相当する。

7.4 精緻化された“了2<認識>”の意味に関する属性

本章の論述と第3章3.5節で提起した“了2”の意味体系の様式に基づいて、“了2<認識>”の意味に関する属性を次の4点でまとめる。

第一に、“了2<認識>”の意味は外延性を示す。この外延性というのは“了2<認識>”の外延的意味のことや外延的意味としての資格を指す。

第二に、“了2”の「転換」スキーマという内包的意味からみれば、“了2<認識>”の意味は「着点・結節点」の明示性と「累加的スキヤニング過程」の暗示性を示す。7.2節で述べたように、「再肯定・再否定」義が指示する「再肯定・再否定」という主観的動態は、発話者の思考過程を含意する動態である。つまり、「再肯定・再否定」義は「再肯定・再否定」したという主観的動態を明示する一方、「再肯定・再否定」する前の思考過程、すなわち劉綺紋(2006:201-244)が述べている「逡巡」という「心的スキヤニング」の過程を暗に示す。もし、第4章4.5節で述べた「転換」スキーマという“了2”の内包的意味からみれば、「再肯定・再否定」したという主観的動態は「転換」スキーマの「着点・結節点」という部分の認知様式に対応し、「再肯定・再否定」する前の思考過程は「転換」スキーマの「累加的スキヤニング過程」という部分の認知様式に対応するとうことが分かる。要するに、「再肯定・再否定」義は「転換」スキーマの「着点・結節点」という部分を明示し、「累加的スキヤニング過程」という部分を暗に示す。

第三に、“了2<認識>”の意味は省略可能性を示す。例えば、(1b)-(5b)は(1a)-(5a)の“了2”が省略された結果である。“了2”が付与される(1a)-(5a)と“了2”が付与されない(1b)-(5b)が表す真理条件¹⁵・命題の意味は同様である。“了2<認識>”は単に“了2<認識>”の直前の内容に「再肯定・再否定」という発話者の主観的判断を付与するだけであり、“了2<認識>”の有無はその直前の内容自体の意味にも影響を与えず、その直前の内容の、完全な文としての容認度にも影響を与えない。この点において“了2<行為>”とは異なる。

第四に、“了2<認識>”の意味は主観性を示す。具体的には、モダリティ性・発話者指向性や「再選択」意識を示す。肖治野・沈家焯(2009:518-527)が指摘するように、“了2<

認識>”の意味はある文を構成するための文法上の要素ではなく、発話者の思考様式を構成する要素である。そのため、“了 2<認識>”の意味は文の命題的要素ではなく、モダリティ的要素であるということが分かる¹⁶。この側面からみれば、“了 2<認識>”の意味はモダリティ性、つまり主観性を示す。また、第 6 章 6.3 節で述べたように、“了 2<行為>”の「変化/出来事生起」という動態の担い手は、“了 2<行為>”構文の特定の文成分が指示する要素、つまりある文に内在する要素であるが、“了 2<認識>”の「再肯定・再否定」という動態の担い手は、ある文に外在する対象、つまり発話者である。こうしてみれば、文成分指向性を持つ「変化/出来事生起」義と異なり、「再肯定・再否定」義は発話者指向性を持つ。文成分指向性は命題性・客観性に相当するのに対して、発話者指向性はモダリティ性・主観性に相当する。さらに、「再肯定・再否定」義が示す主観性は、劉綺紋(2006:201-244)が述べている「再選択」意識として理解されても構わない。

7.5 終わりに

以上、本章は劉綺紋(2006:201-244)による「再選択」意識を踏まえて、「再肯定・再否定」という意味記述を提起して“了 2”の認識域の意味を精緻化した。また、“了 2”の認識域の意味の属性も明らかにした。このように、“了 2”の認識域の外延的意味に関する意味記述と意味属性を提示した。

ところで、先行研究でよく見られる「肯定・決定・確定・確認」義と本章で規定した「再肯定・再否定」義の最も大きな相違点は、発話者の同一の態度の繰り返しという操作によって表されるかどうかというところにある。本章で規定した「再肯定・再否定」義は発話者の同一の態度の繰り返しという操作によって表される意味である。そのため、「再肯定・再否定」義は劉綺紋(2006:201-244)が述べている“了 2”の「再選択」意識をきちんと反映する。“了 2”の「再選択」意識をきちんと反映するので、「再肯定・再否定」義を用いて“了 2<認識>”構文を解釈した結果は、解釈しないままの“了 2<認識>”構文の意味と内省的に一致する¹⁷。とにかく、「再肯定・再否定」義の提起が非中国語母語話者の“了 2<認識>”の習得や使用に大きく役立つと考えられる。

<注>

1. 認知意味論によれば、精緻化(elaboration)とはよりスキーマ的な意味や抽象的な意味を具体化(instantiation)する過程である(靛山・深田 2003b:167, Langacker 2008:21, 215)。例えば、「[A]、[B]をそれぞれ多義語を持つ抽象度の異なる 2つの確立した意味とした場合」、[A]は[B]に対してスキーマ的であり、[B]は[A]を精緻化したものであるとしたら、「[B]は[A]と矛盾しないが、[B]の意味記述は[A]の意味記述よりも詳細である」(靛山・深田 2003b:167)。
2. 詳細については、呂叔湘(1982:261)、王力(1984:216-219, 1985:228-232)、岳中奇(1997:14-17)、刘月华他(2001:384)、史有為(2002:145-158)、孙汝建(2005:76-80)、张兰英(2005:132-134)、高顺全(2006:60-66)、劉綺紋(2006:201-244)、王伟(2006:89-90)、胡建刚(2007:72-81)、張文青(2012:105-122)、彭小红・侯菲菲(2012:82-85)、陆方喆(2014:43-47)、叶琼(2014:85-91)などを参照のこと。これらの研究は「肯定」、「決定」、「確定」、「確認」などの主観的動態を語気や語用論的機能の 1 種として捉える。一方で、守屋(1995:259)、呂叔湘(1999:351)、吴凌非(2002:23-27)、彭小川・周芍(2005:136-141)、张云秋・王赛(2009:119-124)、何文彬(2013:10-18)などは、「肯定」、「決定」、「確定」、「確認」などを“了 2”の言内の意味・言語的意味の 1 種として捉える。この 2 つの捉え方の相違に注意されたい。

3. 詳細については、太田(1958:351-354)、王力(1980:447-448)、刘勋宁(1998:39-47)、齐沪扬(2003:30-36)、高顺全(2006:60-66)、陈鹏飞(2007:138-140)などを参照のこと。
4. 基本的意味は典型的意味(prototypical meaning、プロトタイプの意味)とも呼ばれる(靱山・深田 2003b:142、170)。
5. 本論文は、“了2”が含まれる文を“了2”構文と呼ぶことにする。
6. 詳細については、守屋(1995:259)、吕叔湘(1999:351)、高顺全(2006:60-66)、王媛(2011:17-21)などを参照のこと。
7. 原文は、“肯定事态出现了变化或即将出现变化”である。
8. 原文は、“确定事态的发生”である。
9. (1)は、彭小川・周芍(2005:141)の原文“刚才她的语速很慢了”を書き換えたものである。
10. 本論文で述べる言語的意味は、言外の意味・語用論的意味に対する意味である。
11. ここで松本(2003b:19)の説明に基づいて、“man”、“woman”、“boy”、“girl”という4つの概念を例にとって「示差的特徴」を説明する。“man”は[+human]、[+male]、[+adult]という意味特徴を示し、“woman”は[+human]、[-male]、[+adult]という意味特徴を示し、“boy”は[+human]、[+male]、[-adult]という意味特徴を示し、“girl”は[+human]、[-male]、[-adult]という意味特徴を示す。「これらの意味特徴は、他の語との意味の区別に貢献しているという点で示差的特徴(distinctive feature)と呼ばれる」。
12. (5a)が示す対話は、石定栩・胡建华(2006:98)の原文“我喝了这瓶酒了”という単文を書き換えたものである。
13. 本論文で述べる「形成メカニズム」とは、ある事物がどのように形成するかを示す仕組み、過程、プロセスである。
14. 文脈によって、“这本书我看了三天了”の“了2”は「変化」義を表す“了2<行為>”として扱われる場合もある。例えば、刘勋宁(1998:13-16)において、“这本书我看了三天了”の“了2”は本論文で述べる「変化」義を表す“了2<行為>”として扱われている。
15. 形式意味論の立場では、文のモダリティの意味が除外されて残される命題の意味が文の真理条件として扱われる(Lakoff 1987:299-301、Langacker 2008:35、祁峰 2012:177-178、坂原 2015:56、峯島 2015:217、徐烈炯 2017:176)。場合によって、真理条件は、言外の意味、語用論的意味などに対して述べる言内の意味、明言される意味なども指す(陈新仁 2015:838-849、澤田他 2017:33-36)。
16. 于康(1996:26-33)と彭利贞(2005:67)から分かるように、モダリティ的要素の有無は文の命題の意味に影響を与えない。
17. 『再肯定・再否定』義を用いて“了2<認識>”構文を解釈した結果は、解釈しないままの“了2<認識>”構文の意味と内省的に一致する」という判断は、形式的証拠によらず、内省(introspection)、つまり認知言語学において重視される個人の意識体験による。生成文法と同様に、認知意味論の研究方法にも内省がある(松本 2003a:11)。例えば、ある言語形式に対してどのような心理的感覚を表すのかという問題を明らかにするためには、個人の意識体験を追究しなければならない。

第8章 文末助詞“了”の言語域の外延的意味

8.1 はじめに

本章の目的は、“了 2<言語>”の意味を精緻化(elaboration)¹し、“了 2<言語>”の意味の属性を明らかにするということである。要するに、“了 2<言語>”の外延的意味に関する定義・意味記述と意味属性を提示することである。

8.2 先行研究で言及される“了 2<言語>”の意味に関する精緻化

“了 2”は『会話的』助詞(“会話的”助詞)であるとLi 他(1982:125)で指摘されている。“了 2”の会話的特徴を系統的に論述するのは王洪君他(2009:312-333)である。王洪君他(2009:312-333)は“了 2”が「主観近距離対話式文体」(主観近距交互式語体)であると結論づけている。

Beeching and Detges(2014:11)、Traugott(2017:62-63)、澤田他(2017:25)から分かるように、対話式(dialogic)という特徴は発話者による一方的な視点ではなく、発話者と聞き手による双方向的な視点に関わり、間主観的(intersubjective)である。間主観的な特徴は主観的な特徴から生まれるが(Traugott 2003:129-130、澤田他 2017:18)、主観的な特徴の1種と捉えても構わない(徐晶凝 2008:8、10)。ただし、主観的な特徴は意味の焦点がより発話者に置かれ、間主観的な特徴は意味の焦点がより聞き手に置かれる(Traugott 2003:124-139)。「主観的とは、人なら誰でも持っているその人自身の見方・判断・態度を帯びた意味を指し、間主観的とは、主観性を持つ人ともう一人の人の間のことがらを指す。間主観的な意味とは、ふつう話し手の相手(聞き手)に対する配慮や関心を帯びた、聞き手指向的な意味である」(澤田他 2017:4-5)。要するに、間主観性とは、発話者が聞き手のことを意識しながら発話したり、聞き手のために発話したりするということが指示する「話し手-聞き手」関係(澤田他 2017:17)、「対話」関係、「対話」意識、聞き手指向性、相互性などである。

もともと間主観性は語用論的内容の1種として扱われる(澤田他 2017:3-51)。にもかかわらず、間主観的意味や推意などの言外の意味・語用論的意味と、真理条件²や命題の意味などの言内の意味・言語的意味はまったく対立的な関係でもない(陈新仁 2015:839-841)。例えば、文法化が進むにつれ、もともと間主観性などの語用論的な要素であっても、具体的な言語表現に「コード化」³され、つまり、「言語の内部性質である意味に取り入れられ」て、語の言内の意味・言語的意味の一部となる可能性がある(澤田他 2017:18)。例えば、通常“了 2”の対話的特徴は“了 2”の語用論的特徴として扱われやすいが⁴、Li 他(1982:125)と王洪君他(2009:312-333)から明らかなように、文法化が進むにつれ、“了 2”のその対話的特徴はどのような場合においても常に表され、“了 2”構文⁵以外の発話場面や文脈から推論されなくても捉えられるものとなっている。これは、“了 2”の対話的特徴がすでに“了 2”という語の内部に「コード化」され、“了 2”の言内の意味・言語的意味として定着しているということの意味する。本論文は意味論の立場であ

るため、“了2”に内包されるその対話的特徴を“了2”の言内の意味・言語的意味の一部として扱う。肖治野・沈家煊(2009:518-527)から明らかのように、“了2”の言語域が扱うのは対話者の言語行為に関わっている内容である。そのため、“了2”に内包される対話的特徴を“了2”の言語域の意味として位置づけるべきである。

第2章2.2節で述べたように、肖治野・沈家煊(2009:518-527)は“了2<言語>”の意味を「新しい言語状態の現れ」(新言态的出现)と解釈している他に、“我说[P]了” (私は[P]を言った)という意味記述で「新しい言語状態の現れ」を再解釈している。しかしながら、肖治野・沈家煊(2009:518-527)が述べている“说”(言った)は、日常生活でよく用いられる具体的、狭義的な概念でなく、発話者の各種類の言語行為を包括する抽象的、広義的な概念である。例えば、“说”は「言う」、「発表する」、「主張する」、「質問する」、「命令する」、「勧める」などの全種類の言語行為・「言語状態」のことを指す。しかし、会話であれば、どのような会話文でも発話者の広義的な“说”が働いた上で成り立つものである。つまり、どのような会話文でも広義的な“说”が指示する意味を持つということである。これは、広義的な“说”が指示する意味は“了2”特有の意味ではなく、どのような会話文でも持つべき意味であるということの意味する。また、“我说[P]了”という解釈は発話者による一方的な言語行為を明示するが、“了2”の双方向的な「対話」関係などの間主観性は明示しない。さらに、“我说[P]了”という解釈には“了2”が含まれるので、“我说[P]了”を用いて“了2<言語>”の意味を再解釈すると、循環定義の問題を招きかねない。このように、肖治野・沈家煊(2009:518-527)による「新しい言語状態の現れ」であれ、“我说[P]了”(私は[P]を言った)であれ、いずれも“了2”の対話的特徴を十分に伝えない。つまり、“了2”の「主観近距離対話式文体」としての本質を十分に伝えない。そのため、肖治野・沈家煊(2009:518-527)の定義・意味記述をより精緻化する必要がある。

発話者の言語行為と双方向的な「対話」関係を同時に表すために、本論文は“了2<言語>”の意味を「要聴」(请求聆听、listen)義と定義する。本論文で規定する「要聴」義とは、発話を聞くようにと発話者は指示・命令を聞き手に伝えるという意味である。具体的には、中国語の“请你听我说”、“我跟你说”、“你可听好我说的话”、“听好”、“你知道吗”などの意味に相当し、日本語の「あなたは私の発話を聞いてください」、「あなたは私の発話に注意してください」、「いいですか」、「あのう」、「ねえ」などの意味に相当し、英語の“please listen to me”、“listen up”、“if I could have your attention please”、“guess what”、“you know what”などの意味に相当する。

ところで、佟一・罗米良(2016:94-105)はLangackerのステージ・モデル(stage model)理論に基づいて、“了2”の最も基本的な意味機能は「発話者が聞き手の認知的な注意方向を変える」機能であると主張している。本論文で規定する「要聴」義は佟一・罗米良(2016:94-105)の主張と合致するのである。

8.3 実例に関する意味解釈

前節で説明したように、“了2”構文はどのような場合においても常に対話的特徴、つまり本論文で規定する「要聴」義を表す。つまり、“了2”構文は“了2<行為>”の意味を表すとしても、“了2<言語>”の意味を同時に表すということである。この点について、

第9章でまた具体的に説明する。「要聴」義を分かりやすく説明するために、本章の用例をすべて第2人称向けの用例に絞る。つまり、「あなたは私の発話を聞いてください」、「あなたは私の発話に注意してください」などの「要聴」義が際立つ用例に絞る。

8.3.1 「体言+“了2”」構文に関する「要聴」

先行研究から明らかなように、「体言+“了2”」構文⁸の“了2”は通常“了2<行為>”の「変化」義を表す⁹。しかし、「変化」義を表さない場合もある。次の(1)-(3)の下線部は「変化」義を表さない「体言+“了2”」構文である。

- (1) (叫売声) 苹果了, 苹果了。 (周一民 2011:96)
((売り声) リンゴ。 リンゴはいかがですか。)
- (2) 蔡英文对台湾的民主化的贡献, 我可以这样讲, 零。 零了!
(<https://www.youtube.com/watch?v=r02RNuCK0-c> 《夜間打權》 14:00-14:12 閲覧日:2019年3月8日)
(蔡英文政權は台湾の民主化の発展にどのぐらい貢献したかということ、あえて次の結論を出す。それは、ゼロだ。 ゼロだよ!)
- (3) 主持人: 大家都听清楚了吗?好, 抢答开始, 请举手!
嘉宾甲: 这儿, 我第一个举手!选我!
嘉宾乙: 不要选他, 选我!选我!
嘉宾丙: 我了、我了!
(<https://tieba.baidu.com/p/5781801500> 閲覧日:2019年4月10日)
(司会者: みなさん、いいですか。はい、回答スタート。手を挙げてください!)
(参加者甲: こっち。僕が一番はやく手を挙げたぞ!僕を選んで!)
(参加者乙: 彼じゃない。僕を選んで!僕を選んで!)
(参加者丙: 私! 私だよ!)

次の(4)-(6)の[]の内容は、「要聴」義で(1)-(3)の下線部の“了2”を解釈した結果である。意味的には、(4)-(6)は(1)-(3)に相当するのである。

- (4) [你们听好], 苹果, 苹果。
([ねえ]。 リンゴ。 リンゴはいかがですか。 / [Listen]! How about some apples? These apples are for sale.)
- (5) 蔡英文对台湾的民主化的贡献, 我可以这样讲, 零。 [听好]: 零!
(蔡英文政權は台湾の民主化の発展にどのぐらい貢献したかということ、あえて次の結論を出す。それは、ゼロだ。 { [いいですか]。 ゼロだよ! / [Listen up]! It's

zero!}}

- (6) 主持人: 大家都听清楚了吗?好, 抢答开始, 请举手!
嘉宾甲: 这儿, 我第一个举手!选我!
嘉宾乙: 不要选他, 选我!选我!
嘉宾丙: [听我说]:我、我!
(司会者: みなさん、いいですか。はい、回答スタート。手を挙げてください!)
(参加者甲: こっち。僕が一番はやく手を挙げたぞ!僕を選んで!)
(参加者乙: 彼じゃない。僕を選んで!僕を選んで!)
(参加者丙: {[私が言うことを聞いてよ]。私!私!/[Please Listen to me]! Choose Me! Me!})

8.3.2 「慣用語+“了2”構文に関する「要聴」

次の(7)、(8)の下線部の“了2”構文は、“了2”が“谢谢”(ありがとう)、“再见”(さようなら/また)などの慣用語に後続している文である。本論文はこのような文を「慣用語+“了2”構文と呼ぶことにする。

- (7) 谢谢你们, 谢谢家声哥, 有爱的剧组。谢谢, 谢谢了! (BCC)
(みんな、ありがとう。家声兄ちゃん、ありがとう。愛に満ちた映画スタッフの皆さん、ありがとう。ありがとう、ありがとうね。)
- (8) 叙娟: 艳雪, 我先回去, 有空再聊。
艳雪: 嗯, 你开车小心点。阿威, 送送叙娟。
叙娟: 不用了, 我这么大的人了, 还怕半路被劫吗?
艳雪: 是不用怕, 不过谁叫你姿色不凡?
叙娟: 徐娘半老了, 还怕劫色?
艳雪: 难说, 反正小心点。
叙娟: 行, 再见了。
艳雪: 你多休息。
叙娟: 行, 老妈子!
艳雪: 嫌我啰嗦? (BCC)
(叙娟さん: 艳雪さん、私は先に帰るわ。また。)
(艳雪さん: うん、気をつけて。威さん、叙娟さんを家まで送って。)
(叙娟さん: いいよ。私はもう大人だから、途中で強盗に遭うもんか。)
(艳雪さん: それはそうだけど、あなたは美人だから、万が一?)
(叙娟さん: もう若い年じゃないから、すけべの狙いにならないよ。)
(艳雪さん: じゃいいわ。何といても気をつけてね。)
(叙娟さん: はい。またね。)

(艳雪さん： 帰ったらゆっくり休んでね。)

(叙娟さん： はいよ、いいよいいよ。)

(艳雪さん： うるさいと嫌われたの?)

次の(9)、(10)の[]の内容は、「要聴」義で(7)、(8)の下線部の“了2”を解釈した結果である。意味的には、(9)、(10)は(7)、(8)に相当するのである。

(9) 谢谢你们，谢谢家声哥，有爱的剧组。谢谢，[你们听我说・你们听好]:谢谢!
(みんな、ありがとう。家声兄ちゃん、ありがとう。愛に満ちた映画スタッフの皆さん、ありがとう。ありがとう、{[ねえ・いいですか]、ありがとう。/[Listen up]!
Thank you!!))

(10) 叙娟： 艳雪，我先回去，有空再聊。
艳雪： 嗯，你开车小心点。阿威，送送叙娟。
叙娟： 不用了，我这么大的人了，还怕半路被劫吗？
艳雪： 是不用怕，不过谁叫你姿色不凡？
叙娟： 徐娘半老了，还怕劫色？
艳雪： 难说，反正小心点。
叙娟： 行，[听好]:再见。
艳雪： 你多休息。
叙娟： 行，老妈子！
艳雪： 嫌我啰嗦？
(叙娟さん： 艳雪さん、私は先に帰るわ。また。)
(艳雪さん： うん、気をつけて。威さん、叙娟さんを家まで送って。)
(叙娟さん： いいよ。私はもう大人だから、途中で強盗に遭うもんか。)
(艳雪さん： それはそうだけど、あなたは美人だから、万が一?)
(叙娟さん： もう若い年じゃないから、すけべの狙いにならないよ。)
(艳雪さん： じゃいいわ。何とんでも気をつけてね。)
(叙娟さん： はい。{[いいですか]。また。/[Listen up]! Goodbye!!}
(艳雪さん： 帰ったらゆっくり休んでね。)
(叙娟さん： はいよ、いいよいいよ。)
(艳雪さん： うるさいと嫌われたの?)

8.3.3 命令文に関する「要聴」

次の(11)、(12)の下線部の“了2”構文は、“了2”が命令文に後続している文である。

(11) 鹿总管： 三位请随兄弟到西厅奉茶。
孟氏三雄： 鹿总管大概就是江湖上人称追风客的鹿昌麟老哥吧？

- 鹿总管： 不敬，兄弟正是鹿昌麟，三位请了! (BCC)
- (鹿さん： 三名様、どうぞ私と一緒に西側の応接間でお茶を飲みに行きましよう。)
- (孟氏三兄弟： 鹿さんがうわさの鹿昌麟様でしょうかね。)
- (鹿さん： 褒めすぎですが、私が鹿昌麟です。では、三名様どうぞ。)

- (12) 记住，明天别吃掉那个苹果了!吃了我可饶不了你!
 (https://tieba.baidu.com/p/6209374212 閲覧日:2019年7月25日)
 (覚えておいてよ。明日あのリンゴを食べないでください!食べたら許さないぞ!)

次の(13)、(14)の[]の内容は、「要聴」義で(11)、(12)の下線部の“了 2”を解釈した結果である。意味的には、(13)、(14)は(11)、(12)に相当するのである。

- (13) 鹿总管： 三位请随兄弟到西厅奉茶。
 孟氏三雄： 鹿总管大概就是江湖上人称追风客的鹿昌麟老哥吧?
 鹿总管： 不敬，兄弟正是鹿昌麟，[听我说]:三位请!
 (鹿さん： 三名様、どうぞ私と一緒に西側の応接間でお茶を飲みに行きましよう。)
 (孟氏三兄弟： 鹿さんがうわさの鹿昌麟様でしょうかね。)
 (鹿さん： 褒めすぎですが、私が鹿昌麟です。では、{[いいですか]。三名様どうぞ。/[Listen up]! Please follow me!})

- (14) 记住，[你可听好我说的话]:明天别吃掉那个苹果!吃了我可饶不了你!
 (覚えておいてよ。{[いいか]!明日あのリンゴを食べないでください!/[Listen]! Please don't eat that apple tomorrow!}食べたら許さないぞ!)

8.3.4 疑問文に関する「要聴」

次の(15)の下線部の“了 2”構文は、“了 2”が疑問文に後続している文である。

- (15) A: 说了半天，你怎么不问我姓什么?
 B: 贵姓了?贵姓了? (肖治野・沈家焯 2009:521)
 (A: いろいろ話し合いましたけれども、私の苗字さえもまだ聞いてくれないのに。)
 (B: 御苗字は何ですか?何なんですか?)

次の(16)の[]の内容は、「要聴」義で(15)の下線部の“了 2”を解釈した結果である。意味的には、(16)は(15)に相当するのである。

- (16) A: 说了半天，你怎么不问我姓什么?

- B: [对, 那我现在就问,)你听好]:贵姓?贵姓?
- (A: いろいろ話し合いましたけれども、私の苗字さえもまだ聞いてくれないのに。)
- (B: {[そうだ。今すぐ聞く。]いいですか]、御苗字は何ですか?何なんですか?/[(Alright, I' m gonna ask.) Listen up]! Your surname? What' s your surname please?])

8.3.5 非未来時制の命題と未来時制の命題に関する「要聴」

次の(17)、(18)の下線部の“了2”構文は、“了2”が本論文で述べている非未来時制¹⁰の意味を表す命題に後続している文であり、次の(19)、(20)の下線部の“了2”構文は、“了2”が本論文で述べている未来時制の意味を表す命題に後続している文である。

- (17) (博物馆里馆员面对面为观众讲解)对着我这边呢就是一个船首，船首呢坐了三个人，其中中间一位呢就是苏东坡先生了。 (刘娅琼 2016:665)
(博物館でナレーターが聴衆に解説をしている場面)私が直面しているのは船頭です。船頭には三人座っていますよね。その真ん中の方が蘇軾ですよ。)
- (18) A: 那个是谁?
B: 那个是我女儿。
A: 不可能，我看不像你女儿。
B: 不会吧?让我再看看……哎呀!没错了!那个是我女儿了!
(<https://tieba.baidu.com/p/6209479319> 閲覧日:2019年7月29日)
(A: あの人は誰?)
(B: あれは私の娘だ。)
(A: 嘘、あなたの娘に似ていないし。)
(B: 何?ちょっと確かめさせて……ほら!間違いないわよ!あれは私の娘だよ!)
- (19) 你明天开学了，要加油噢。 (BCC)
(明日新学期が始まるぞ。頑張ってね。)
- (20) 明天我就调走了。以后请你多保重吧! (CCL)
(明日私は転勤するよ。これからもお元気でね!)

次の(21)-(24)の[]の内容は、「要聴」義で(17)-(20)の下線部の“了2”を解釈した結果である。意味的には、(21)-(24)は(17)-(20)に相当するのである。

- (21) 对着我这边呢就是一个船首，船首呢坐了三个人，[你们知道吗・接下来你们可要听好]，其中中间一位呢就是苏东坡先生。
(私が直面しているのは船頭です。船頭には三人座っていますよね。{ねえ・注意

してください]。その真ん中の方が蘇軾です。/[Guess what・You know what]? The one in the middle is Su Dongpo.}}

- (22) A: 那个是谁?
B: 那个是我女儿。
A: 不可能, 我看不像你女儿。
B: 不会吧?让我再看看……哎呀!没错了! [你接下来一定要听好]: 那个是我女儿!
(A: あの人は誰?)
(B: あれは私の娘だ。)
(A: 嘘、あなたの娘に似ていないし。)
(B: 何?ちょっと確かめさせて……ほら!間違いないわよ! {[いいですか]。 あれは私の娘だ!/[Listen up]! She's my daughter!}})
- (23) 你明天开学, [你知道吗・听好没・你听好]。要加油噢。
({[いいですか・あとう・注意してください]。 明日新学期が始まる。/[Listen・You know what・If I could have your attention please]. Tomorrow is the first day of the new term.} 頑張つてね。)
- (24) [我跟你説・你知道吗・你可听好我说的话]: 明天我就调走。以后请你多保重吧!
({[ねえ・いいですか・聞いてください]。 明日私は転勤する。/[Listen・You know what・If I could have your attention please]. I'll be transferred tomorrow.}
これからもお元気でね!)

8.4 精緻化された“了2<言語>”の意味に関する属性

本章の論述と第3章3.5節で提起した“了2”の意味体系の様式に基づいて、“了2<言語>”の意味に関する属性を次の4点でまとめる。

第一に、“了2<言語>”の意味は外延性を示す。この外延性というのは“了2<言語>”の外延的意味のことや外延的意味としての資格を指す。

第二に、“了2”の「転換」スキーマという内包的意味からみれば、“了2<言語>”の意味は「着点・結節点」の明示性と「事象進展方向」の暗示性を示す。8.2節で述べた「あなたは私の発話を聞いてください」などの「要聴」義が示すように、「要聴」義は「私が話した内容」と「あなたが聞いた内容」を明示する。「私が話した内容」と「あなたが聞いた内容」は命題的には同様であり、完全に重なるが、属性的には異なる。前者は「私」という属性を示し、後者は「あなた」という属性を示すからである。第4章4.4節から4.6節までで述べたように、「転換」スキーマにおける「着点・結節点」は量的変化と質的变化の接点であり、状態の二重性を示す。そのため、「私が話した内容」と「あなたが聞いた内容」という両者に関する認知様式は、「転換」スキーマにおける「着点・結節点」という部分の認知様式に対応する。つまり、「要聴」義に関する認知様式は、「転換」スキーマにおける「着点・結節点」という部分の認知様式である。また、論理的には、「あな

たが聞いた内容」が「私が話した内容」に由来するのである。つまり、「私が話した内容」と「あなたが聞いた内容」という両者の関係において、「私が話した内容→あなたが聞いた内容」という属性変化方向が含意されるのである。その属性変化方向に関する認知様式は、「転換」スキーマの観点からみれば、「転換」スキーマにおける「事象進展方向」という部分の認知様式に対応する。つまり、「要聴」義は、「着点・結節点」という部分の認知様式を反映するだけでなく、「事象進展方向」という部分の認知様式も反映する。第4章4.6節で述べたように、「転換」スキーマは「着点・結節点」の部分のみを明示し、「事象進展方向」などの部分を明示せず、暗に示す。そのため、「要聴」義は「転換」スキーマの「着点・結節点」という部分のみを明示し、「事象進展方向」という部分を暗に示すのである。

第三に、“了2<言語>”の意味は省略可能性を示す。この点について李思沅(2019:64-68)も説明している。例えば、上述の(1)、(9)、(12)、(15)、(20)の下線部の“了2”を省略したら、次の(25)-(29)が得られる。

- (25) 苹果, 苹果。
(リンゴ、リンゴはいかがですか。)
- (26) 谢谢!
(ありがとうございました。)
- (27) 明天别吃掉那个苹果!
(明日あのリンゴを食べないでください!)
- (28) 贵姓?贵姓?
(御苗字は何ですか?何なんですか?)
- (29) 明天我就调走。
(明日私は転勤する。)

(1)、(9)、(12)、(15)、(20)の下線部の“了2”構文と、“了2”が付与されない(25)-(29)は、同様の真理条件・命題的意味を表す。(1)、(9)、(12)、(15)、(20)の下線部の“了2”は、「聞き手に注意してほしい」という主観的態度を“了2”の直前の内容に付与するだけであり、その“了2”の有無は、その“了2”の直前の内容自体の意味にも影響を与えず、その“了2”の直前の内容の、完全な文としての容認度にも影響を与えない。この点について“了2<行為>”とは異なるが、“了2<認識>”とは同様である。

第四に、“了2<言語>”の意味は間主観性を示す。具体的には、モダリティ性・聞き手指向性・相互性や「対話」意識を示す。“了2<言語>”の「要聴」義の省略可能性の形成要因は、第7章7.4節で述べた“了2<認識>”の「再肯定・再否定」義の省略可能性の形成要因と同様である。つまり、“了2<言語>”の「要聴」義はある文の命題的内容を構成する要素ではなく、ある文のモダリティ的内容、つまり主観的内容を構成する要素である

からである(李思沅 2019:64-68)。そのため、“了2<言語>”の「要聴」義は命題性ではなく、モダリティ性を示す。ただし、前節で論じたように、「要聴」義が表す主観性は発話者による一方的な主観性ではなく、発話者と聞き手の双方向的な主観性である。このような双方向的な主観性は、具体的に聞き手指向性、相互性、「対話」意識を指す。

8.5 終わりに

以上、王洪君他(2009:312-333)による「主観近距離対話式文体」という語用論的概念を踏まえて、「要聴」という意味概念を提起して“了2”の言語域の意味を精緻化した。また、“了2”の言語域の意味の属性も明らかにした。このように、“了2”の言語域の外延的意味に関する意味記述と意味属性を提示した。

ところで、本章で規定した「要聴」義が“了2”の「主観近距離対話式文体」としての特徴をきちんと反映するので、「要聴」義を用いて“了2<言語>”構文を解釈した結果は、解釈しないままの“了2<言語>”構文の意味と内省的に一致する¹¹。そのため、「要聴」義の提起は非中国語母語話者の“了2<言語>”の習得や使用に大きく役立つと考えられる。また、王珏・黄梦迪(2020:3-13)は“了2”の意味構造を「変化+強い主観性+間主観性」(変化+強主観性+交互主観性)と定義している。そのため、第6章から本章までで規定している行為域の「変化/出来事生起」義、認識域の「再肯定・再否定」義、言語域の「要聴」義は、肖治野・沈家焯(2009:518-527)が提起している“了2”の三域の意味記述を精緻化した結果であるだけでなく、王珏・黄梦迪(2020:3-13)が提起している“了2”の意味構造を精緻化した結果でもあるということが分かる。

<注>

1. 認知意味論によれば、精緻化(elaboration)とはよりスキーマ的な意味や抽象的な意味を具体化(instantiation)する過程である(靛山・深田 2003b:167、Langacker 2008:21、215)。例えば、「[A]、[B]をそれぞれ多義語が持つ抽象度の異なる2つの確立した意味とした場合」、[A]は[B]に対してスキーマ的であり、[B]は[A]を精緻化したものであるとしたら、「[B]は[A]と矛盾しないが、[B]の意味記述は[A]の意味記述よりも詳細である」(靛山・深田 2003b:167)。
2. 形式意味論の立場では、文のモダリティ的意味が除外されて残される命題的意味が文の真理条件として扱われる(Lakoff 1987:299-301、Langacker 2008:35、祁峰 2012:177-178、坂原 2015:56、峯島 2015:217、徐烈炯 2017:176)。場合によって、真理条件は、言外の意味、語用論的意味などに対して述べる言内の意味、明言される意味なども指す(陈新仁 2015:838-849、澤田他 2017:33-36)。
3. ある文の意味を捉える手段には、発話場面や文脈から推論して意味を捉えるという語用論的手段もあれば、ある文の言語形式の内部にコード化された真理条件や言内の意味をデコードして意味を捉えるという意味論的手段もある(陈新仁 2015:841)。
4. 詳細については、Li 他(1982:117-138)、武果・吕文华(1998:13-21)、王光全・柳英绿(2006:25-30)、王洪君他(2009:319)、王巍(2010:31-33)、张立昌(2014:77-78、2015:54)、陆方喆(2014:43-47)などを参照のこと。これらの研究は“了2”の対話的特徴を語気や語用論的意味の1種として捉える。“了2”の対話的特徴を“了2”の言内の意味・言語的意味の1種として捉える研究は未だに見られていない。
5. 本論文は、“了2”が含まれる文を“了2”構文と呼ぶことにする。
6. [P]はフレーズという意味である。
7. 原文は、“改变听话者的认知能力的注视方向”である。
8. 本論文は、体言が述語になる“了2”構文を「体言+“了2”」構文と呼ぶことにする。
9. 詳細については、邢福义(1984:21-26)、贾红霞(2003:112-119)、谭春健・赵刚(2005:16-20)、陆士宇

(2007:45-46)、王会琴(2009:101-104)、年玉萍(2009:79-81)、周一民(2011:93-97)、臧晓艳(2013:60-62)、庞加光(2014: 52-60)、佟福奇(2015:46-51)、刘晨(2015:51-53)、毕娇娇(2015:74-78)、闫亚平(2016:57-62)、张国华(2017:208-209)などを参照のこと。

10. 本論文は時制を過去時制、現在時制、未来時制に分ける。時制については、第13章13.3節で詳しく説明する。
11. 『要聴』義を用いて“了2<言語>”構文を解釈した結果は、解釈しないままの“了2<言語>”構文の意味と内省的に一致する」という判断は、形式的証拠によらず、内省(introspection)、つまり認知言語学において重視される個人の意識体験による。生成文法と同様に、認知意味論の研究方法にも内省がある(松本 2003a:11)。例えば、ある言語形式に対してどのような心理的感覚を表すのかという問題を明らかにするためには、個人の意識体験を追究しなければならない。

第9章 文末助詞“了”の意味間の関係

9.1 はじめに

第4章は“了2”の内包的意味としての「転換」スキーマ、すなわち次の図1が示すスキーマを提起し、第5章は語用論的側面からその「転換」スキーマの妥当性を検証した。

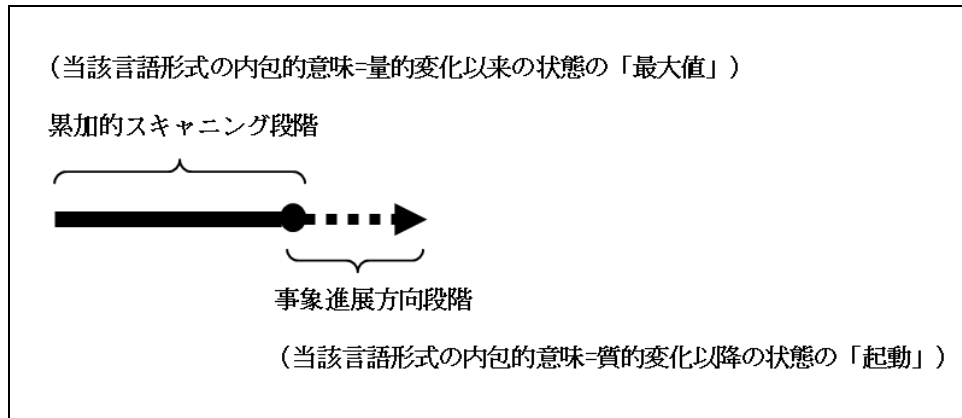


図1 “了2”の「転換」スキーマ

第6章から第8章までは、“了2”の行為域の外延的意味が「変化/出来事生起」義であり、認識域の外延的意味が「再肯定・再否定」義であり、言語域の外延的意味が「要聴」義であるということを論じた。

本章は、“了2”の内包的意味と外延的意味の「最大察知範囲-直接察知範囲-察知中心」関係と、“了2”の外延的意味間の「重なる」関係を明らかにする。

9.2 文末助詞“了”の内包的意味と外延的意味の「最大察知範囲-直接察知範囲-察知中心」関係

9.2.1 際立ち

Langacker (2008:74-95)において、ある範囲における複数の要素から選択された要素、または参照要素に対する要素などは際立ち(salience・prominence)と呼ばれる。要素の所属する範囲によって、「際立ち」というものは別の呼称で呼ばれることもある。例えば、ある語が指示する概念群あるいは認知領域(cognitive domain・domain)¹において、際立っている概念はプロファイル(profile)とも呼ばれる(Dewell 1994:351-380、Clausner and Croft 1999:4-5、松本 2003b:67、Langacker 2008:74-95)。また、文、音節、情報などの範囲において、際立っている語、連語などは焦点(focus)、前景などとも呼ばれる(Langacker 2008:74-78)。何らかの関係的範囲において、最も際立っている関係参与者はトラジェクター(trajector)とも呼ばれ、2番目際立っている関係参与者はランドマーク(landmark)とも呼ばれる(Langacker 2008:91-95)。

ところで、本論文はプロファイルを「察知中心」と呼ぶことにする。本章で扱う「際立

ち」の種類は「察知中心」であるが、次章で扱う「際立ち」の種類は「焦点」である。

9.2.2 察知範囲

本節では、Langacker(2008:81-85)に基づいて察知範囲(scope)、直接察知範囲(immediate scope)、最大察知範囲(maximal scope)、察知中心(profile)などの概念を紹介する。

まず、Langacker(2008:81)の説明に基づいて、人間の物理的「視界」と心的「視界」の類似性を考えよう。

我々が瞬時に心的に取り込める範囲はそれほど広くはない(たとえば、視覚器官は、一度に見ることが出来る範囲を限定している)。経験からも明らかのように、外界を見る際、視覚的に取り込める範囲は定められている。これが「視界」、すなわち視野となる。いつなんどきも、まわりの空間の限られた一部だけが視界の取り込める範囲となる。(Langacker2008:81)

Langacker(2008:81-85)によれば、人間がある語の意味を考える際にも、すべての概念内容でなく、特定の範囲の概念内容だけが人間の「心的な『視界』に現れる」。ある語に関する「心的な『視界』」がその語の察知範囲である。あるいは、ある語が指示する認知領域がその語の察知範囲である。ある語が指示する察知範囲または認知領域には察知中心、直接察知範囲、最大察知範囲が含まれる²。直接察知範囲は察知中心と察知中心の参照要素から構成される。例えば、「手」という語が指示する察知中心は「手のひら」であり、直接察知範囲は「腕」であり、最大察知範囲は「体」である。「腕」という直接察知範囲は、察知中心である「手のひら」と、察知中心の参照要素である「手首」、「肘」、「二の腕」などから構成される。第4章4.6節で述べたように、「起点」、「累加的スキャニング過程」、「着点」、「事象進展方向」などの認知的要素が含まれる「転換」スキーマというのは、“了2”という語に関する全体的な認知様式であり、「着点」の部分を示し、「起点」、「累加的スキャニング過程」、「事象進展方向」などの部分を示さず、暗に示す。察知範囲の観点からみれば、“了2”の全体的な認知様式としての「転換」スキーマは“了2”の最大察知範囲であり、「転換」スキーマにおいて明示される「着点」という部分は“了2”の察知中心であり、「着点」と「着点」以外の何らかの部分“了2”の直接察知範囲を構成するということが分かる。

ところで、“了2”という語に対応する全体的な認知様式は「転換」スキーマであるが、“了2”の「変化/出来事生起」義、「再肯定・再否定」義、「要聴」義などの形式的意味³に対応する認知様式は何であろうか。この問題は第6章6.3節、第7章7.4節、第8章8.4節の論述で説明したのである。次節から、第6章から第8章までの説明に基づいて、“了2”の内包的意味と外延的意味の「最大察知範囲-直接察知範囲-察知中心」関係を説明する。

9.2.3 「転換」義と「変化」義の関係

第6章6.3節で説明したように、“了2<行為>”の「変化」義は「転換」スキーマにおける「着点」という部分を明示する他に、「起点」という部分も暗に示す。つまり、「転換」スキーマの観点からみれば、“了2<行為>”の「変化」義に関する認知様式は、「着点」と「起点」から構成される認知様式であるということが分かる。次の図2において、2つの正方形の小枠が示すのが「変化」義に関する認知様式である。

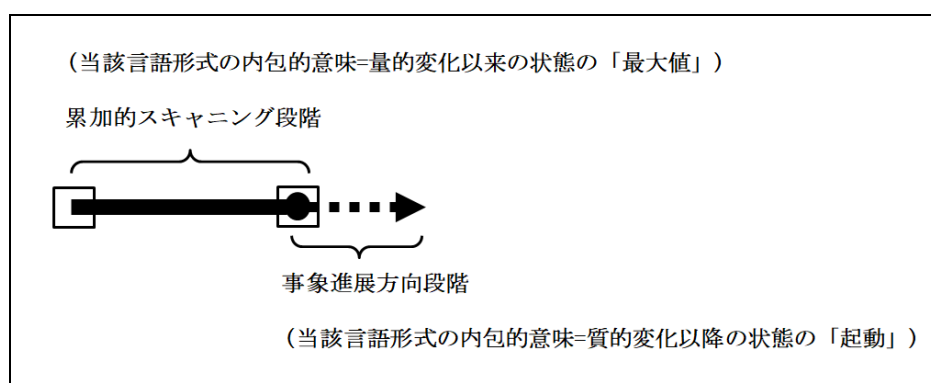


図2 “了2<行為>”の「変化」義に関する認知様式

では、次の(1)を例にとって“了2”の「変化」義に関する認知様式を簡単に説明する。

- (1) 蔬菜便宜了。(吕文华 2010:553)
(野菜が安くなった。)

(1)は「今の野菜は安い」という状態を明示する他に、「この前の野菜は高かった」という状態も暗に示す。そのため、「今の野菜は安い」という状態は図2の「着点」の小枠に当たり、「この前の野菜は高かった」という状態は図2の「起点」の小枠に当たる。

察知範囲の観点からみれば、「転換」スキーマという認知様式全体は最大察知範囲なら、察知中心である「着点」と参照要素である「起点」から構成される認知様式は直接察知範囲であるということが分かる。つまり、“了2”の「転換」義と「変化」義の関係は「最大察知範囲-直接察知範囲」関係である。具体的には、『転換』スキーマという最大察知範囲と、『着点』と『起点』から構成される直接察知範囲の関係を示す。

9.2.4 「転換」義と「出来事生起」義の関係

第6章6.3節で説明したように、“了2<行為>”の「変化」義と異なり、“了2<行為>”の「出来事生起」義は「着点」という部分を明示するだけである。次の図3において、正方向の小枠が示すのが「出来事生起」義に関する認知様式である。

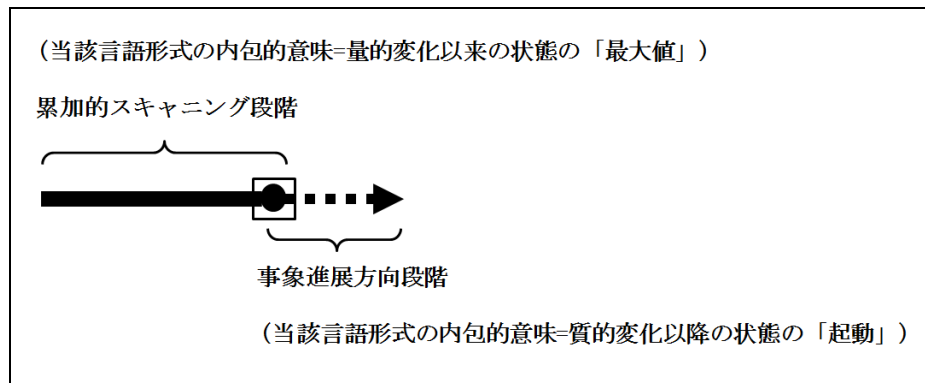


図3 “了2<行為>”の「出来事生起」義に関する認知様式

では、次の(2)を例にとって“了2”の「出来事生起」義に関する認知様式を簡単に説明する。

- (2) 那天晚上下雨了⁴。 (杉村 2009:5)
 (その夜に雨が降った。)

(2)の“了2”によって明示される“下雨”(雨が降ったという出来事)は図3の「着点」の小枠に当たり、「雨が降る前に雪が降ったという出来事」、「雨が降る前の晴れていた状態」、「雨が降った後で生じた影響」などは図3の「着点」以外の不特定の部分に当たるといことが分かる。ただし、別の発話場面や文脈が付与されなければ、(2)は単に“下雨”(雨が降ったという出来事)を明示するだけであり、「雨が降る前に雪が降ったという出来事」、「雨が降る前の晴れていた状態」、「雨が降った後で生じた影響」などは暗にも示さない。そのため、(2)の“了2”の「出来事生起」義に関する認知様式は単に図3の「着点」の小枠が示す認知様式である。

察知範囲の観点からみれば、「転換」スキーマという認知様式全体は最大察知範囲なら、「着点」という部分は察知中心であるということが分かる。つまり、“了2”の「転換」義と「出来事生起」義の関係は「最大察知範囲-察知中心」関係である。具体的には、「『転換』スキーマという最大察知範囲」と「『着点』という察知中心」の関係を指す。

9.2.5 「転換」義と「再肯定・再否定」義の関係

第7章7.4節で説明したように、“了2<認識>”の「再肯定・再否定」義は「転換」スキーマにおける「着点」という部分を明示する他に、「累加的スキヤニング過程」という部分も暗に示す。つまり、「転換」スキーマの観点からみれば、“了2<認識>”の「再肯定・再否定」義に関する認知様式は、「着点」と「累加的スキヤニング過程」から構成される認知様式であるということが分かる。次の図4において、長方形の小枠と正方形の小枠が示すのが「再肯定・再否定」義に関する認知様式である。

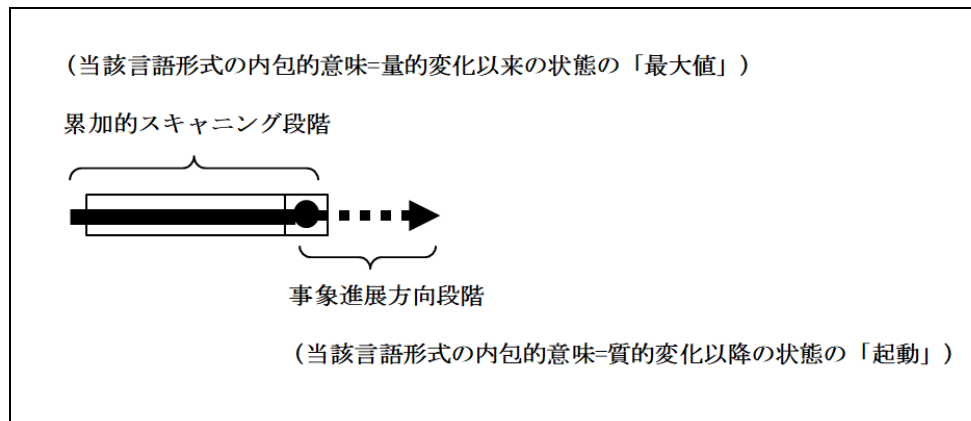


図4 “了2<認識>”の「再肯定・再否定」義に関する認知様式

では、次の(3)を例にとって“了2”の「再肯定・再否定」義に関する認知様式を簡単に説明する。

(3) (预设:留学生曾提意见,说她的语速太快了。)

其实, 刚才她的语速很慢了⁵。

(彭小川・周芍 2005:141)

(前提:留学生たちは、あの方の話し方が速すぎたと文句を言った。)

(実は、さっきあの方の話し方が遅かったんだ。)

第7章7.3節で説明したように、(3)の“了2”は「再肯定」義を表す。第7章7.2節で説明したように、「再肯定・再否定」義が指示する「再肯定・再否定」という主観的動態は、発話者の思考過程を暗に示す動態である。つまり、発話者が心理面における複数の「選択肢」に対して「逡巡」してからある「選択肢」を「再選択」という思考過程である。(3)において、その“了2”によって暗に示される思考過程は、『さっきあの方の話し方が遅かった』ということは本当かどうかと聞かれると、私は『速かった』、『通常の速さ』、『遅かった』という複数の『選択肢』を再考した後で、やはり『遅かった』という『選択肢』を『再選択』した」という思考過程を指す。「転換」スキーマの観点からみれば、(3)の“了2”によって暗に示されるその特定の思考過程は、図4の長方形の小枠に当たるが、(3)の“了2”によって明示される肯定的な態度、つまり“刚才她的语速很慢”(さっきあの方の話し方が遅かった)という言語形式に内包される肯定的な態度は、図4の正方形の小枠に当たるといえることが分かる。

察知範囲の観点からみれば、「転換」スキーマという認知様式全体は最大察知範囲なら、察知中心である「着点」と参照要素である「累加的スキャンニング過程」から構成される認知様式は直接察知範囲であるということが分かる。つまり、“了2”の「転換」義と「再肯定・再否定」義の関係は「最大察知範囲-直接察知範囲」関係である。具体的には、『転換』スキーマという最大察知範囲と『着点』と『累加的スキャンニング過程』から構成される直接察知範囲の関係を示す。

9.2.6 「転換」義と「要聴」義の関係

第8章8.4節で説明したように、“了2<言語>”の「要聴」義は、量的変化と質的变化という二重性を示す「着点」という部分を明示する他に、「事象進展方向」という部分も暗に示す。つまり、「転換」スキーマの観点からみれば、“了2<言語>”の「要聴」義に関する認知様式は、「着点」と「事象進展方向」から構成される認知様式であるということが分かる。次の図5において、重なっている2つの正方形の小枠と、1つの長方形の小枠が示すのが、「要聴」義に関する認知様式である。

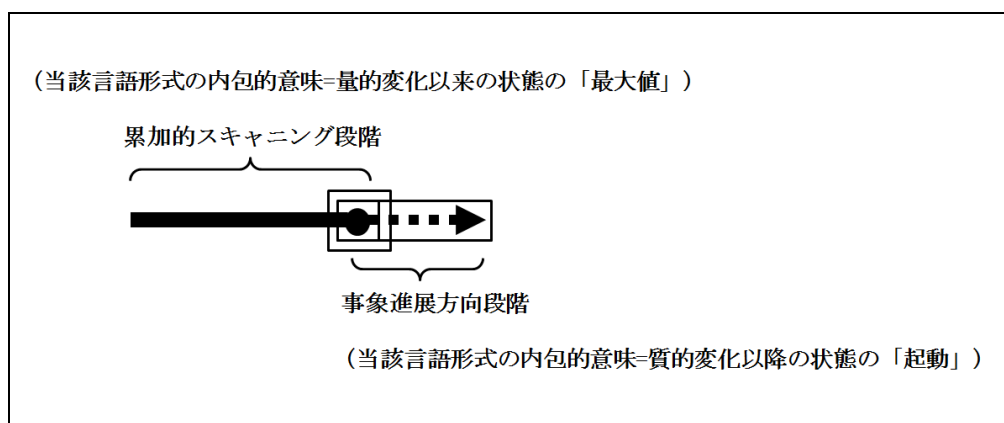


図5 “了2<言語>”の「要聴」義に関する認知様式

では、次の(4)を例にとって“了2”の「要聴」義に関する認知様式を簡単に説明する。

- (4) 谢谢你们，谢谢家声哥，有爱的剧组。谢谢，谢谢了! (BCC)
 (みんな、ありがとう。家声兄ちゃん、ありがとう。愛に満ちた映画スタッフの皆さん、ありがとう。ありがとう、ありがとうね。)

まず、第8章8.2節で規定した「あなたは私の発話を聞いてください」などの「要聴」義が示すように、「要聴」義は「私が話した内容」と「あなたが聞いた内容」を明示する。「私が話した内容」と「あなたが聞いた内容」は命題的には同様であり、完全に重なるが、属性的には異なる。前者は「私」という属性を示し、後者は「あなた」という属性を示すからである。第4章4.4節から4.6節までで論じたように、「転換」スキーマにおける「着点」の本質は「結節点」、つまり量的変化と質的变化の接点であり、状態の二重性を示す。そのため、「転換」スキーマの観点からみれば、「私が話した内容」と「あなたが聞いた内容」という両者に関する認知様式、すなわち“了2<言語>”で標記される内容に関する認知様式は、「着点」という部分の認知様式に対応するということが分かる。こうしてみれば、(4)においては、“了2<言語>”で標記される“谢谢”(ありがとう)という内容は、図5の重なっている2つの正方形の小枠が示す認知様式に当たるとということが分かる。また、論理的には、「あなたが聞いた“谢谢”」が「私が話した“谢谢”」に由来するのである。つまり、「私が話した“谢谢”」と「あなたが聞いた“谢谢”」という両者の関係において、「私が話した“谢谢”→あなたが聞いた“谢谢”」という属性変化方向が含意されるので

ある。その属性変化方向に関する認知様式は、図5の長方形の小枠が示す認知様式に当たる。

察知範囲の観点からみれば、「転換」スキーマという認知様式全体は最大察知範囲なら、察知中心である「着点」と参照要素である「事象進展方向」から構成される認知様式は直接察知範囲であるということが分かる。つまり、“了2”の「転換」義と「要聴」義の関係は「最大察知範囲-直接察知範囲」関係である。具体的には、『転換』スキーマという最大察知範囲と、『着点』と『事象進展方向』から構成される直接察知範囲の関係を示す。

9.3 文末助詞“了”の外延的意味間の「重なる」関係

肖治野・沈家煊(2009:518-527)によれば、1つの“了2”構文⁶における“了2”は1つの域の意味だけでなく、複数の域の意味を表す可能性もある。つまり、異なる域の意味が「重なる」(交叉)可能性がある。しかし、異なる域の意味はどのように「重なる」のか、もしくは、異なる域の意味はどのような「重なる」関係を表すのかについては、肖治野・沈家煊(2009:518-527)において明らかにされていない。9.3.1節から、まず、先行研究の成果を踏まえて“了2”の「変化」義、「出来事生起」義、「再肯定・再否定」義、「要聴」義という外延的意味間の「重なる」関係を明らかにする。また、その外延的意味間の「重なる」関係に基づいて文末助詞“了”を用いるための意味的条件を明らかにする。

9.3.1 先行研究の再整理を踏まえた結論

先行研究を再整理した結果、次の3点の結論を得ている。

第一に、実際の使用では、“了2<認識>”と“了2<言語>”はそれぞれ孤立的に存在せず、常に“了2<認識+言語>”の形で存在する。

まず、様々な先行研究で指摘されているように、どのような場合においても、“了2”は必ず「定着・定まった」という抽象的な語気を伴う⁷。また、第7章7.2節で“了2”の「定着・定まった」という抽象的な語気を意味化した結果、“了2<認識>”の意味を得ている。このように、どのような場合においても、“了2”は必ず“了2<認識>”の意味を表すということが分かる。

王洪君他(2009:312-333)は大量の言語データを調べた結果、口語体の特徴を持つ日常対話、小説、台詞劇などには“了2”がよく用いられるが、文章体の特徴を持つ新聞記事、社説、公開講演、学術論文、法律などには“了2”がめったに用いられないということを発見している。例えば、《编辑部的故事》という台詞劇における“了2”の字数は全体内容の字数の1.41%を占めているが、1996年の《人民日报》という中国政府の日刊新聞における“了2”の字数は全体内容の字数の0.068%しか占めていない(王洪君他 2009:319)。張立昌(2015:54)も言語データの調べに基づいて、「会話文においては、文末の“了”のほうが語尾の“了”より圧倒的に多いが、叙事文においては、語尾の“了”のほうがずっと多い」⁸と結論づけている。王洪君他(2009:319)、張立昌(2015:54)と同様の結論に達した研究も少なくない。例えば、Li 他(1982:117-138)、武果・吕文华(1998:13-21)、譚傲霜(1999:53-62)、王光全・柳英绿(2006:25-30)、王巍(2010:31-33)、何文彬(2013:10-18)、

陆方喆(2014:43-47)、夏炎青(2017:76)、王珏・黄梦迪(2020:3-13)などがある。また、王洪君他(2009:312-333)はナラトロジー理論で“了2”の用法を分析した結果、“了2”の背後には常に特定の語り手が隠れており、“了2”を語る語り手は常に聞き手の何らかの反応を期待しながら語ると結論づけている。この結論に基づいて、王洪君他(2009:312-333)は“了2”が「主観近距離対話式文体」であるということをはじめて明らかにした。“了2”が「主観近距離対話式文体」であるということは、“了2”がどのような場合においても「対話」関係などの間主観性を表すということの意味する。また、第8章8.2節で“了2”の「対話」関係などの間主観性を意味化した結果、“了2<言語>”の意味を得ている。そのため、どのような場合においても、“了2”は必ず“了2<言語>”の意味を表すということが分かる。

「どのような場合においても、“了2”は必ず“了2<認識>”の意味を表す」ということと、「どのような場合においても、“了2”は必ず“了2<言語>”の意味を表す」ということは、実際の使用において“了2”は“了2<認識>”と“了2<言語>”の意味を同時に表さなければならないということの意味する。言い換えれば、“了2<認識>”と“了2<言語>”はそれぞれ孤立的に存在せず、常に“了2<認識+言語>”の形、すなわちペアの形で存在する。

第二に、実際の使用では、“了2<行為>”は孤立的に存在せず、常に“了2<行為+認識+言語>”の形で存在する。

王力(1984:215-219、1985:228-231)、高顺全(2006:60-66)は、実際の使用では、“了2”は純粋に客観性を表さず、どのような場合においても必ず何らかの主観的語気を表すと指摘している。何文彬(2013:10-18)は、“了1”は「閉鎖的」(封闭性)であり、事象の内部のメカニズムだけを反映するので、純粋に客観的な事象を表すが、“了2”は「開放的」(開放性)であり、事象の内部のメカニズムだけでなく、事象の外部における発話者の態度や見方なども反映するので、純粋に客観的な事象を表さないと指摘している。こうしてみれば、実際には、命題的客観性を表す“了2<行為>”は孤立的に存在しないということが分かる。言い換えれば、客観的な“了2<行為>”は常に主観的な“了2<認識>”または間主観的な“了2<言語>”に依存するということになる。「了2<認識>”と“了2<言語>”はそれぞれ孤立的に存在せず、常に“了2<認識+言語>”の形、すなわちペアの形で存在する」ので、“了2<行為>”は常に“了2<行為+認識+言語>”の形で存在するしかない。

第三に、論理的には、“了2”の意味は「変化」義、「出来事生起」義、「再肯定・再否定」義、「要聴」義という4つの意味に分けられるが、実際には、“了2”は「変化+再肯定・再否定+要聴」義、「出来事生起+再肯定・再否定+要聴」義、「再肯定・再否定+要聴」義という3種類の複合的意味のいずれかを表す。

第一点と第二点の結論が示すように、実際の使用において、“了2”は“了2<行為+認識+言語>”の複合的意味または“了2<認識+言語>”の複合的意味を表すしかない。また、“了2<行為>”はもともと「変化」義と「出来事生起」義に分けられる。そのため、実際の使用では、“了2”は「変化+再肯定・再否定+要聴」義、「出来事生起+再肯定・再否定+要聴」義、「再肯定・再否定+要聴」義という3種類の複合的意味のいずれかを表す。では、本章の例文(1)-(4)の“了2”の意味を考え直してみよう。9.2節で説明したように、

(1)の下線部の“了2”は“了2<行為>”の「変化」義を表す。そのため、実際には“了2<行為+認識+言語>”の「変化+再肯定・再否定+要聴」義を表すしかない。また、9.2節で説明したように、(2)の下線部の“了2”は“了2<行為>”の「出来事生起」義を表す。そのため、実際には“了2<行為+認識+言語>”の「出来事生起+再肯定・再否定+要聴」義を表すしかない。(3)、(4)の下線部の“了2”は“了2<行為>”の「変化」義も「出来事生起」義も表さないで、“了2<認識+言語>”の「再肯定・再否定+要聴」義を表すしかない。

このように、“了2”の外延的意味間の「重なる」関係は次の表1でまとめられる。

表1 “了2”の外延的意味間の「重なる」関係

“了2<行為+認識+言語>”	「変化+再肯定・再否定+要聴」義 (聞いてください。……に変化した。はい。)
	「出来事生起+再肯定・再否定+要聴」義 (聞いてください。……という出来事が生起した。はい。)
“了2<認識+言語>”	「再肯定・再否定+要聴」義 (聞いてください。……。はい。)

表1が示すように、“了2”は少なくとも「再肯定・再否定+要聴」義というモダリティの意味を表す。この結論は劉綺紋(2006:191)の「文末の“了”は少なくともモダリティ機能は持っている」という観点を裏付けている。

9.3.2 文末助詞“了”を用いるための意味的条件

中国語文法書《現代汉语八百詞(増訂本)》(1999:351)で定義されている「変化」(変化)であろうと、中国語文法書《語法讲义》(1982:209)で定義されている「出現」(出現)であろうと、いずれも“了2”を用いるための十分条件でもなければ、必要条件でもないということが邹海清(2014:35)で指摘されている。それでは、次の(5)を考えよう。

(5) (预设:留学生曾提意見, 说她的語速太快了。)

其实, 刚才她的語速很慢了。 (= (3))

(前提:留学生たちは、あの方の話し方が速すぎたと文句を言った。)

(実は、さっきあの方の話し方が遅かったんだ。)

第7章7.3節で論じたように、(5)の“了2”は“了2<行為>”の意味を表さない。したがって、中国語文法書《現代汉语八百詞(増訂本)》(1999:351)で定義されている「変化」義、つまり本論文で規定する「変化」義も表さず、中国語文法書《語法讲义》(1982:209)で定義されている「出現」義、つまり本論文で規定する「出来事生起」義も表さない。こうしてみれば、「変化」義を伝えることも「出現」義を伝えることも、“了2”を用いるための十分条件でもなければ、必要条件でもない。前節で論じたように、「論理的には、“了2”

の意味は『変化』義、『出来事生起』義、『再肯定・再否定』義、『要聴』義という4つの意味に分けられるが、実際には、“了2”は『変化+再肯定・再否定+要聴』義、『出来事生起+再肯定・再否定+要聴』義、『再肯定・再否定+要聴』義という3種類の複合的意味のいずれかを表す。(5)の“了2”は“了2<行為>”ではないので、“了2<認識+言語>”の「再肯定・再否定+要聴」義を表すしかない。つまり、(5)が実際に表す意味は、次の(6)が示す意味でなければならない。

(6) 你听我说，其实，刚才她的语速很慢。是的。

(いいですか。実は、さっきあの方の話し方が遅かった。はい・そうなんだ。)

要するに、「変化」義を伝えることも「出来事生起」義を伝えることも“了2”を用いるための意味的条件になり難い。

また、次の(7)も考えよう。例えば、ある非中国語母語話者が「昨日母の手紙が届いて、とても嬉しかった」という新情報を誰かに伝えようとするれば、“了2”が付与されない(7a)を用いればよい。しかし、“了2”がもともと出来事の生起、過去時制⁹、新情報¹⁰などの意味や語気を表すという理由で“了2”構文を用いると、つい(7b)が示すような不自然な文を作ってしまう。趙立江(1997:115)から分かるように、(7b)は、あるイギリス人留学生が“了2”が出来事の生起や過去時制を表すという理由で作った例文である。

(7) a. 昨天收到妈妈的信，我很高兴。 (趙立江 1997:115)

(昨日母の手紙が届いて、とても嬉しかった。)

b. 昨天收到妈妈的信，?我很高兴了。 (趙立江 1997:114)

(昨日母の手紙が届いて、?とても嬉しかった。)

鈴木(1986:52-56、1987:83-89)から分かるように、もし「形容詞述語+“了2”」構文¹¹は客観的意味・命題的意味を表せば、つまり本論文で述べる“了2<行為>”の意味を表せば、必ず何らかの「変化」を表す。つまり本論文で述べる「変化」義を表すが、「出来事生起」義は表さない¹²。(7b)の下線部の“了2”構文の述語は形容詞“高兴”(嬉しい)であるので、本論文で述べる“了2<行為>”の意味を表す場合、「変化」義を表すのである。“了2”の外延的意味間の「重なる」関係が示すように、「変化」義を表すとしたら、(7b)の下線部の“了2”は「変化+再肯定・再否定+要聴」義という複合的意味を表すしかない。(7b)では、イギリス人留学生は「とても嬉しかった」という情報を表そうとする目的であり、「昨日少しだけ嬉しかったが、今はとても嬉しくなった」という「変化」的情報を表そうとする目的ではないので、“了2”を用いてはならない。もし、イギリス人留学生は「あのね、おととい父の手紙が届いて、少しだけ嬉しかったけど、昨日母の手紙が届いて、とても嬉しくなった。はい。」という「変化+再肯定・再否定+要聴」義を伝えようとする目的であれば、(7b)の“了2”の使用は自然になる。ところで、実際には、(7b)の下線部の“了2”は必ずしも“了2<行為>”の意味を表すとは限らない。もし、イギリス人留学生は“了2<行為>”の意味を表そうとする目的ではなく、単に“了2<認識+言語>”の「再肯

定・再否定+要聴」義だけを表そうとする目的であれば、つまり、「いいですか。昨日母の手紙が届いて、とても嬉しかった。はい・そうなんだ。」という意味だけを表そうとする目的であれば、(7b)の使用はまた自然になる。この目的である場合、(7b)の「形容詞述語+“了2”」構文の“了2”は、(5)の「形容詞述語+“了2”」構文の“了2”と同様の役割を果たす。つまり、両者とも単に“了2<認識+言語>”の意味だけを伝え、“了2<行為>”の意味は伝えない。

さらに、次の(8)も考えよう。

- (8) a. 蔬菜便宜了。 (＝(1))
(野菜が安くなった。)
b. 蔬菜已经变得便宜。
(野菜が安くなった。)
c. 蔬菜的价格已经下降。
(野菜の価格が下がった。)

(8a)は“了2”が付与される文であり、(8b)、(8c)は“了2”が付与されない文である。いずれも「野菜が高い価格から安い価格に変わった」という値段的变化を表す。通常、「野菜が高い価格から安い価格に変わった」という値段的变化を伝えようとする目的がある場合、(8a)-(8c)のいずれも使用可能である。しかし、新聞紙を通してその変化的情報を大衆に伝える場合、王洪君他(2009:312-333)から分かるように、(8b)、(8c)は用いられやすいが、“了2”構文としての(8a)は用いられ難い。“了2”の外延的意味間の「重なる」関係からその理由を説明することができる。(8a)の“了2”は「変化」義を表すので、実際の使用では「変化+再肯定・再否定+要聴」義という複合的意味を表さなければならない。つまり、実際の使用では、(8a)は次の(9)の意味に解釈されなければならない。

- (9) 请听我说，蔬菜已经变得便宜。是的。
(聞いてください・あのね。野菜が安くなった。はい・うん・そうなんだ。)

通常新聞紙などは客観的な情報を伝えるものであるが、新聞記者の何らかの主観的感情を伝える場でもなく、新聞記者と民衆の対話の場でもない。“了2”を用いると、「野菜が安くなった」という変化的情報を伝えると同時に、「はい・そう」、「聞いてください・あのね」などの主観的、間主観的な意味も伝える。そのため、新聞紙を通して「野菜が高い価格から安い価格に変わった」という情報を大衆に伝える場合、“了2”構文としての(8a)は用いられ難いのである。

総じていえば、“了2”を用いるための意味的条件は、「変化」義、「出来事生起」義、「再肯定・再否定」義、「要聴」義のいずれかを伝えるということではなく、「変化+再肯定・再否定+要聴」義、「出来事生起+再肯定・再否定+要聴」義、「再肯定・再否定+要聴」義のいずれかを伝えるということである。

9.4 終わりに

以上、“了2”の内包的意味と外延的意味の「最大察知範囲-直接察知範囲-察知中心」関係と、“了2”の外延的意味間の「重なる」関係を論じた。その結果、次の2点が明らかになった。

第一に、「転換」義と「変化」義の認知的関係、「転換」義と「再肯定・再否定」義の認知的関係、「転換」義と「要聴」義の認知的関係はいずれも「最大察知範囲-直接察知範囲」の関係であるが、「転換」義と「出来事生起」義の認知的関係は「最大察知範囲-察知中心」の関係である。

第二に、「変化」義、「出来事生起」義、「再肯定・再否定」義、「要聴」義という外延的意味の「重なる」関係は、「変化+再肯定・再否定+要聴」義、「出来事生起+再肯定・再否定+要聴」義、「再肯定・再否定+要聴」義という複合的意味が示す「重なる」関係である。

ところで、次章から論じていく“了2”の外延的意味について次の2点説明しておく。

第一に、次章から「変化+再肯定・再否定+要聴」義、「出来事生起+再肯定・再否定+要聴」義、「再肯定・再否定+要聴」義という3種類の複合的意味は考察せず、「変化」義、「出来事生起」義、「再肯定・再否定」義、「要聴」義という4種類の意味を別々で考察していく。なぜならば、まず、その3種類の複合的意味は「変化」義、「出来事生起」義、「再肯定・再否定」義、「要聴」義という4種類の意味に基づくものであるからである。また、「変化」義、「出来事生起」義、「再肯定・再否定」義、「要聴」義という4種類の意味は本論文において新たに規定されているものであり、それらの妥当性や実用性を検証し続ける必要があるからである。

第二に、次章から“了2<認識>”と“了2<言語>”の意味を生み出すための構文的条件は考察せず、“了2<行為>”の意味を生み出すための構文的条件だけを考察する。つまり、「再肯定・再否定」義と「要聴」義を生み出すための構文的条件は考察せず、「変化」義と「出来事生起」義を生み出すための構文的条件だけを考察するということである。本章で論じたように、どのような場合においても、“了2”は必ず「再肯定・再否定」義と「要聴」義を表す。言い換えれば、“了2”構文がどのような構文特徴を備えても必ず「再肯定・再否定」義と「要聴」義を表すということになる。この結論は、“了2”構文において、「再肯定・再否定」義と「要聴」義を生み出すための構文的条件は存在しないということの意味する。そのため、本論文は「変化」義と「出来事生起」義を生み出すための構文的条件だけを考察する。

<注>

1. 「認知意味論では、語が多義であることを言語の基本的事実として認識する」(松本 2003a:14)。ある語が指示する概念内容は単数や少数の物事ではなく、数えきれないほどの物事からなる概念群である(Langacker 2008:55-65)。その概念群が及ぶ範囲は認知領域(cognitive domain・domain)とも呼ばれ、フレーム(frame)とも呼ばれる(Clausner and Croft 1999:3-4、松本 2003b:65-71)。また、認知領域はある概念の背景知識として捉えられてもよい他(Clausner and Croft 1999:3)、特定の概念や意味が生じることのできる経験可能な領域として捉えられてもよい(Langacker 2008:56)。
2. Langacker(2008:86)では、これらの察知範囲はベース(base)とも呼ばれる。ベースは認知領域の1種でもある(Clausner and Croft 1999:4-6)。
3. 形式的意味は認知的意味に対して述べる意味である。本論文は何らかの認知様式、例えば、イメージ

(image)、イメージ・スキーマ(image schema)などを認知的意味と呼び、特定の言語形式によって表記される意味を形式的意味と呼ぶ。

4. (2)は、杉村(2009:5)の原文“那天晚上下雨了吗?”を書き換えたものである。
5. (3)は、彭小川・周芍(2005:141)の原文“刚才她的语速很慢了”を書き換えたものである。
6. 本論文は、“了2”が含まれる文を“了2”構文と呼ぶことにする。
7. 詳細については、吕叔湘(1982:261)、王力(1984:216-219、1985:228-232)、岳中奇(1997:14-17)、刘月华他(2001:384)、孙汝建(2005:76-80)、张兰英(2005:132-134)、高顺全(2006:60-66)、劉綺紋(2006:201-244)、胡建刚(2007:72-81)、張文青(2012:105-122)、彭小红・侯菲菲(2012:82-85)、陆方喆(2014:43-47)、叶琼(2014:85-91)などを参照のこと。これらの研究は「定着・定まった」という主観的動態を語気や語用論的機能の1種として捉える。一方で、守屋(1995:259)、吕叔湘(1999:351)、吴凌非(2002:23-27)、彭小川・周芍(2005:136-141)、张云秋・王赛(2009:119-124)、何文彬(2013:10-18)などは、「定着・定まった」という主観的動態を“了2”の言内の意味・言語的意味の1種として捉える。この2つの捉え方の相違に注意されたい。
8. 原文は、“会话语体中，句尾‘了’占绝大多数；叙事语体中(中略)词尾‘了’明显占多数”である。
9. 張文青(2012:105)が指摘しているように、「殆どの中国語初級段階の学習者は、(中略)過去に行われた動作ならば、習慣的にすべて“了”をつけるという誤りを犯しがちである。(中略)中国語においては“完成”、または“実現・完了”の表現に関して“了”を付けなくてもよい表現は多くあり、“了”を付けてしまうとかえって不自然で文法的にも不適切な表現になってしまう文が多い。“了2”が過去時制を表すと主張する研究には、金立鑫(1998:105-119)、刘勋宁(2002:70-79)、李铁根(2002:1-13)、张云秋・王赛(2009:123-124)、黄瓚辉(2016:47)などがある。
10. “了2”は新情報を伝えるという語気があると主張する研究には、Chao(1948:24-25、1968:354)、朱德熙(1982:209)、竟成(1993:52-57)、刘勋宁(1998:46)、刘月华他(2001:383)、王学群(2003:51-71、2008:75-90)、谭春健(2004:26-31)、肖治野・沈家焯(2009:518-527)、杉村(2009:1-12)、金立鑫・邵菁(2010:319-325)、張文青(2012:105-122)、周小兵・欧阳丹(2014:8-15)、陈前瑞・胡亚(2016:66-74)、黄瓚辉(2016:42-58)などがある。
11. 本論文は、形容詞述語が含まれる“了2”構文を「形容詞述語+“了2”構文と呼ぶことにする。
12. “了2”構文はその述語が形容詞であれば、「出来事生起」義でなく、「変化」義を表す理由については、第10章、第11章で詳しく説明する。

第10章 文末助詞“了”の行為域の外延的意味を生み出すための 構文的条件の提起

10.1 はじめに

第2章2.2節は、動相的意味、「瞬間」義、「過程」義、点的動相標識、線的動相標識、「静相」義、静相形式などの内容を規定した。動相的意味とは、述語における裸動詞という部分が指示する事象が、ある仮定の時間軸に沿って展開してから表す起動的段階、進行の段階、完了的段階、結果的段階、持続的段階などの異なる動的段階である。起動相標識、完了相標識、結果相標識は点的動相標識であり、点的動相標識によって表される動相的意味は「瞬間」義である。つまり、「瞬間」義は動詞的述語が指示する起動的意味、完了的意味、結果的意味からなる。進行相標識、持続相標識は線的動相標識であり、線的動相標識によって表される動相的意味は「過程」義である。つまり、「過程」義は動詞的述語が指示する進行的意味、持続的意味からなる。「静相」義とは、静相的意味であり、動相的意味に対して述べる意味である。具体的には、動詞的述語が示す内的属性、現象、態勢、また、動詞的述語以外の文成分が示す意味を指す。どの語でも本論文で規定する「静相」義を持つ。静相形式とは、「静相」義を表すことができる言語形式である。どの語でも本論文で規定する「静相」義を持つので、静相形式は固定されない。

第6章6.2節は、“了²”の行為域の外延的意味が「変化」義と「出来事生起」義であるということを論じた。「変化」(变化、become)義とは、何らかの内容から、“了²”構文¹の特定の文成分が指示する「静相」義にすでに変わったという意味である。具体的には、中国語の“已经变成……”、“已经成为……”、“已经变成……现象/态势”という意味に相当し、日本語の「……に変わった」、「……になった」、「……という現象/態勢になった」という意味に相当し、英語の“became……”、“changed into……”などの意味に相当する。「出来事生起」(事件发生、occur)義とは、“了²”構文の述語が指示する出来事(事件²、event)がすでに起こったという意味である。具体的には、中国語の“……事件已经发生”という意味に相当し、日本語の「……という出来事が生起した」、「……という出来事が起こった」、「……という出来事があった」という意味に相当し、英語の“(an event) occurred”、“(an event) happened”、“(an event) took place”という意味に相当する。

本章は、「瞬間」、「過程」、「静相」という3つの認知的概念と、焦点連結(association with focus)という形式意味論の概念を合わせて、“了²”の行為域の外延的意味としての「変化」義と「出来事生起」義を生み出すためのそれぞれの構文的条件を提起する。ところで、次章は、様々な事例や発話場面を合わせて本章で提起する構文的条件を検証する。

10.2 「瞬間形式」

ここで、「瞬間」義を表すことができる言語形式を「瞬間形式」と呼ぶことにする。

通常、動詞的述語が指示する起動的意味、完了的意味、結果的意味などの「瞬間」義は、

主に「裸動詞+点的動相標識」構造によって表される。そのため、「裸動詞+点的動相標識」構造は主な「瞬間形式」と捉えられる。

しかし、“了 2<行為>”構文は「裸動詞+点的動相標識」構造を持たなくても、「瞬間」義を表すことができる。この点について、第13章13.2節で詳しく説明するが、ここで次の(1)-(4)で簡単に説明する。

- (1) 牛牛参观故宫了, 他能跟你讲讲故宫里的情景。 (夏炎青 2017:55)
(牛牛さんが故宫を見学し終わったから、故宫のことについては彼に聞いてください。)
- (2) 牛牛参观故宫了, 等会他出来时叫他跟你讲讲里面的事情。 (夏炎青 2017:55)
(牛牛さんが故宫を見学し始めたから、故宫のことについては、彼が出たら、彼に聞いてください。)
- (3) 那天晚上下雨了³。 (杉村 2009:5)
(その夜に雨が{降り止んだ/降り出した}。)
- (4) 哟哟, 穿西装了。神气得咧。 (BCC)
(あら、背広を{着ている/着た}ね。格好いいね。)

例えば、(1)では、“参观故宫了”(故宫を見学した)の“参观”(見学)は“参观{完/过 1}” (見学し終わり)という完了的意味・「瞬間」義を表す。(2)では、“参观故宫了”(故宫を見学した)の“参观”(見学)は“参观起”(見学し始め)という起動的意味・「瞬間」義を表す。(3)では、場合によって、“下雨了”(雨が降った)の“下”(降る)は“下{过 1/完}”(降り{止み/終わり})という完了的意味・「瞬間」義を表す可能性もあり、“下起”(降り{出し/始め})という起動的意味・「瞬間」義を表す可能性もある。(4)では、場合によって、“穿西装了”(背広を着た)の“穿”(着る)は“穿上”(着た)という結果的意味・「瞬間」義を表す可能性がある。(1)-(4)で分析したように、“了 2<行為>”構文は「裸動詞+点的動相標識」構造を持たなくても、「瞬間」義を表す可能性がある。

また、(1)-(4)の下線部の動詞の形式面の特徴を考えよう。第一に、(1)と(2)の“参观”(見学する)、(3)の“下”(降る)、(4)の“穿”(着る)はいずれも動相標識を持たない裸動詞である。第二に、統語的には、それらの動詞はいずれも点的動相標識と共起することができる。例えば、上の段落で述べたように、起動相標識“起”、完了相標識“过 1/完”、結果相標識“上”などと共起することができる。第三に、統語的には、それらの動詞は程度副詞で修飾されることができない⁵。このように、裸動詞を持ち、「裸動詞+点的動相標識」構造を持たない“了 2<行為>”構文は、もしその裸動詞が点的動相標識と共起することができ、程度副詞で修飾されることができないとすれば、「瞬間」義を表す可能性がある。

10.3 「過程形式」

ここで、「過程」義を表すことができる言語形式を「過程形式」と呼ぶことにする。

通常、動詞的述語が指示する進行的意味、持続的意味などの「過程」義は、主に「裸動詞+線の動相標識」構造によって表される。そのため、「裸動詞+線の動相標識」構造は主な「過程形式」と捉えられる。

しかし、“了 2<行為>”構文は「裸動詞+線の動相標識」構造を持たなくても、「過程」義を表すことができる。次の(5)、(6)で簡単に説明する。まず、(5)を考えよう。

- (5) a. A: 小李在哪儿?他还在看电视吗?
B: 小李在厨房包着饺子了,你赶紧去帮他吧。⁶ (杉村 2009:4)
(A: 李さんはどこだ?まだテレビを見ているの?)
(B: 李さんはもう台所で餃子を包んでいるよ。はやく手伝いに行つてね。)
- b. A: 小李在哪儿?他还在看电视吗?
B: 小李包饺子了,你赶紧去帮他吧。
(A: 李さんはどこだ?まだテレビを見ているの?)
(B: 李さんはもう餃子を包んでいるよ。はやく手伝いに行つてね。)

(5a)のAさんの“他还在看电视吗?”(まだテレビを見ている?)という質問における“在”は、第2章2.2節で述べた進行的意味・「過程」義を表す広義動相標識である。したがって、Bさんは進行相標識“着”を持つ“了2”構文、つまり“小李包着饺子了”(李さんはもう餃子を包んでいるよ)でAさんの質問に答え、進行的意味・「過程」義を表す。しかし、(5b)においては、Bさんは進行相標識“着”を持たない“了2”構文、つまり“小李包饺子了”(李さんはもう餃子を包んでいるよ)という文でAさんの質問に答える。にもかかわらず、(5b)において、“小李包饺子了”(李さんはもう餃子を包んでいるよ)という文も進行的意味・「過程」義を表す。次の(6)も考えよう。

- (6) a. 我这次不去太鲁阁,因为,太鲁阁我去过了⁷。(劉綺紋 2006:135)
(私は今度太魯閣には行かない。太魯閣には行ったことがあるんだ。)
- b. 我这次不去太鲁阁,因为,太鲁阁我去了。
(私は今度太魯閣には行かない。太魯閣には行ったことがあるんだ。)

今度太魯閣に行く必要はない理由について、(6a)の発話者は持続相標識“过2”⁸を持つ“了2”構文、つまり“太鲁阁我去过了”(太魯閣には行ったことがあるんだ)で説明する。つまり、「太魯閣に行った経験がある」、「太魯閣に行ったことに伴って生じた『経験』が、行った当時から今までも持続している」ということを理由としている。一方、(6b)の発話者は持続相標識“过2”を持たない“了2”構文、つまり“太鲁阁我去了”(太魯閣には行ったことがあるんだ)で説明する。にもかかわらず、(6b)において、“太鲁阁我去了”(太魯閣には行ったことがあるんだ)という文も持続的意味・「過程」義を表す。

また、(5b)、(6b)の下線部の動詞の形式面の特徴を考えよう。第一に、(5b)、(6b)の下

線部の動詞は動相標識を持たない裸動詞である。第二に、統語的には、それらの動詞は線的動相標識と共起することができる。例えば、(5a)、(6a)が示すように、進行相標識“着”、持続相標識“过2”と共起することができる。第三に、統語的には、それらの動詞は程度副詞で修飾されることができない。このように、裸動詞を持ち、「裸動詞+線の動相標識」構造は持たない“了2<行為>”構文は、もしその裸動詞が線的動相標識と共起ことができ、程度副詞で修飾されることができないとすれば、「過程」義を表す可能性がある。

10.4 「相対静相形式」と「絶対静相形式」

ここで、「静相」義を表すことができる言語形式を「静相形式」と呼ぶことにする。「静相形式」を「相対静相形式」と「絶対静相形式」という2種類に分ける。

まず、「相対静相形式」を説明する。もともと「瞬間形式/過程形式」は「瞬間/過程」義と相性がよい言語形式であるので、通常「瞬間/過程」義を表しやすい。しかし、第2章2.2節で述べたように、どの語でも「静相」義を持つ。つまり、「瞬間形式/過程形式」であっても、特定の発話場面や文脈による制約を受けたら、「内的属性、現象、態勢」などの「静相」義を表す可能性がある。そのため、「瞬間形式」であれ、「過程形式」であれ、いずれも「静相形式」として捉えることが可能である。こうした理由から、本論文は、もともと「瞬間/過程」義を表しやすい「瞬間形式/過程形式」を「相対静相形式」として捉える。

次に、「絶対静相形式」を説明する。中国語には、「瞬間/過程」義・動相的意味が際立たず、「静相」義・静相的意味だけが際立つ言語形式がある。本論文は「静相」義・静相的意味だけが際立つ言語形式を「絶対静相形式」と呼ぶことにする。「絶対静相形式」は具体的に次の4種類がある。

第一に、統語的には、点的動相標識とも線的動相標識とも共起することができない裸動詞である。例えば、“是”(である)、“姓”(苗字は…という)、“等于”(等しい)、“属于”(属する)、“像”(似る)、“想要”(ほしい)、“希望”(願う)、能力を表す“能”(できる)、能力を表す“会”(できる)などの裸動詞である。点的動相標識とも線的動相標識とも共起することができないということは、「瞬間/過程」義・動相的意味が認知的に際立たないということを意味する。そのため、点的動相標識とも線的動相標識とも共起することができない裸動詞を「絶対静相形式」として捉える。

第二に、程度副詞で修飾されることができる裸動詞である。例えば、“爱”(愛する)、“有”(ある/持つ)、“喜欢”(好き)、“讨厌”(嫌い)、“懂”(分かる)、“了解”(分かる)、“疼”(痛い)、“痒”(かゆい)、“担心”(心配)、“高兴”(嬉しい)、“像”(似る)、“想要”(ほしい)、“希望”(願う)、能力を表す“能”(できる)、能力を表す“会”(できる)などである。これらの裸動詞は“很”(とても)、“太”(あまりにも)、“稍微”(ちょっと)、“有点”(少し)などの程度副詞で修飾されることができ、[-動態]、[+均質]、[-限界]などの形容詞的特徴を示す(孫英杰 2006:47)。形容詞的特徴はもともと「動詞的述語以外の文成分が示す意味」であるので、本論文で規定する「静相」義の1種であるということが分かる。そのため、程度副詞で修飾されることができる裸動詞を「絶対静相形式」として捉える。

第三に、「助動詞(+本動詞⁹)」構造である。例えば、「喜欢 + 吃」(食べるのが+好き)、会 + 去」(行くと+見込む)、「能 + 说」(話すことが+できる)、「可以 + 走」(行っても+いい)などの連語が本論文で規定する「助動詞+本動詞」構造である¹⁰。次に、(7)を考えよう。

(7) A: 我可以走了吗?

B: 你可以走了。/可以了。/#走了。¹¹ (彭利贞 2011:215)

(A: 私は行ってもいいですか?)

(B: あなたは行ってもいいです。/いいです。/#行きました。)

(7)が示すように、質問者が「助動詞+本動詞」構造の文で質問すれば、回答者は「助動詞+本動詞」構造の文を用いず、「助動詞」だけを用いてその質問に答えても構わない。しかし、「本動詞」だけを用いてその質問に答えてはならない。こうして、「助動詞+本動詞」構造において、「助動詞」は何らかの中核的な役割を果たして不可欠であり、「本動詞」は何らかの二次的な役割を果たして省略可能であるということが分かる。そのため、本論文は「助動詞+本動詞」構造を「助動詞(+本動詞)」という表記方法で表記する。また、徐晶凝(2008:244)が指摘するように、「助動詞(+本動詞)」構造の中核的要素としての「助動詞」は動相標識と共起しない。これは、「助動詞(+本動詞)」構造が動相的意味を際立たせないということの意味する。したがって、「助動詞(+本動詞)」構造を「絶対静相形式」として捉えても構わない。

第四に、動詞以外の品詞である。中国語の場合、動詞だけでなく、動詞以外の品詞も中国語の述語になることができる(朱德熙 1982:102-108)。動詞以外の品詞である述語が示す意味は、「動詞的述語以外の文成分が示す意味」という「静相」義に相当する。そのため、動詞以外の品詞を「絶対静相形式」として捉えるしかない。

10.5 「瞬間/過程/静相」義と「瞬間形式/過程形式/静相形式」の関係

10.2 節から 10.4 節までの分析に基づいて、「瞬間形式」、「過程形式」、「相対静相形式」、「絶対静相形式」は次の表 1 のようにまとめられる。

表 1 「瞬間形式」、「過程形式」、「相対静相形式」、「絶対静相形式」

「瞬間形式」/ 「相対静相形式」	①「裸動詞+点的動相標識」構造の複合動詞 ②程度副詞で修飾されることができず、点的動相標識と共起することができる裸動詞
「過程形式」/ 「相対静相形式」	①「裸動詞+線的動相標識」構造の複合動詞 ②程度副詞で修飾されることができず、線的動相標識と共起することができる裸動詞
「絶対静相形式」	①点的動相標識とも線的動相標識とも共起することができない裸動詞 ②程度副詞で修飾されることができる裸動詞 ③「助動詞(+本動詞)」構造 ④動詞以外の品詞

表1に基づいて、「瞬間/過程/静相」義と「瞬間形式/過程形式/静相形式」の関係は次の3点でまとめられる。

第一に、通常「瞬間形式」と「過程形式」はそれぞれ「瞬間」義と「過程」義を表すが、「瞬間形式」は必ずしも「瞬間」義を表すとは限らず、「過程形式」は必ずしも「過程」義を表すとは限らない。例えば、「瞬間形式」と「過程形式」は「絶対静相形式」として捉えられると、「静相」義を表す。また、「②程度副詞で修飾されることができず、点的動相標識と共起することができる裸動詞」である「瞬間形式」は「過程」義を表すこともでき、「②程度副詞で修飾されることができず、線的動相標識と共起することができる裸動詞」である「過程形式」は「瞬間」義を表すこともできる。なぜならば、「②程度副詞で修飾されることができず、点的動相標識と共起することができる裸動詞」と「②程度副詞で修飾されることができず、線的動相標識と共起することができる裸動詞」は、同一の裸動詞である場合もあるからである。

第二に、「絶対静相形式」は必ず「静相」義を表し、「瞬間/過程」義を表さない。

第三に、「瞬間/過程」義を表す言語形式は固定されるが、「静相」義を表す言語形式は固定されない。

10.6 焦点連結関係

Langacker (2008:74-95)において、ある範囲における複数の要素から選択された要素、または参照要素に対する要素などは際立ち(salience・prominence)と呼ばれる。要素の所属する範囲によって、「際立ち」というものは別の呼称で呼ばれることもある。例えば、ある語が指示する概念群あるいは認知領域(cognitive domain・domain)¹²において、際立っている概念はプロフィール(profile)とも呼ばれる(Dewell 1994:351-380、Clausner and Croft 1999:4-5、松本 2003b:67、Langacker 2008:74-95)。また、文、音節、情報などの範囲において、際立っている語、連語などは焦点(focus)とも呼ばれる(Langacker 2008:74-78)。

ところで、「焦点は、談話の構造を考えるうえで重要な概念の1つであり、これまで多くの研究がこの概念について論じてきた。しかし、必ずしも研究者の間で一致が見られるわけではない」(山田 2010:218)。にもかかわらず、どのような焦点であっても、「省略できない部分を際立たせる操作と、意識的かつ音韻的にストレスを際立たせる操作」¹³という特徴においてほぼ共通している(祁峰 2012:4-23)。

次に、徐烈炯(2017:172-190)に基づいて焦点の種類と定義を紹介する。焦点は情動的焦点(informational focus)、意味的焦点(semantic focus)、話題的焦点(topic focus)、対比的焦点(contrastive focus)に分けられる。ところで、本論文と関係がある焦点の種類は情動的焦点と意味的焦点であるので、ここで主に情動的焦点と意味的焦点を紹介する。情動的焦点は機能主義言語学による概念であり、文が伝える情報における新情報のことを指す。意味的焦点は真理条件意味論・形式意味論による概念であり、ある文において、焦点敏感演算子(focus-sensitive operator)と意味的に、統語的に連結する内容である。言い換えれば、ある文において、ある機能語が特定の内容と意味的に、統語的に連結することができ、別の内容と意味的に、統語的に連結することができないとしたら、その機能語

は焦点敏感演算子と呼ばれ、その特定の内容はその文の意味的焦点と呼ばれる。

意味的焦点と焦点敏感演算子という両者の意味上、統語上の連結関係は焦点連結 (association with focus) と呼ばれる (祁峰 2012:97、徐烈炯 2017:175)。祁峰 (2012:65、114)、徐烈炯 (2017:175-176、185) によれば、焦点敏感演算子は次の 2 つの特徴がある。第一に、焦点敏感演算子の有無は文の真理条件¹⁴・命題の意味に影響を与える。第二に、意味的焦点と焦点敏感演算子という両者は常に意味的に連結することから、統語的にも連結することができる。つまり、焦点敏感演算子は意味的焦点に隣接する箇所に移動することができるということである。この移動的特徴は焦点敏感演算子の「浮遊性」(floating) とも呼ばれる (徐烈炯 2017:185)。

先行研究において、“了 2<行為>” に新情報を伝える機能があるとされるので¹⁵、“了 2<行為>” はしばしば情報の焦点の標識として扱われる。では、焦点敏感演算子、すなわち意味的焦点の標識として扱われてもよいのであろうか。先行研究において、この問題はまだ説明されていない。第 6 章 6.2 節、6.3 節で論じたように、“了 2<行為>” の有無は“了 2<行為>” の直前の内容の真理条件・命題の意味に影響を与える。“了 2<行為>” のこの特徴は、上の段落で述べた焦点敏感演算子の特徴と共通している。こうしてみれば、“了 2<行為>” は情報の焦点の標識だけでなく、焦点敏感演算子、すなわち意味的焦点の標識として扱われてもよい。もし、“了 2<行為>” が焦点敏感演算子として扱われるとしたら、「浮遊性」を示すはずである。つまり、“了 2<行為>” が意味的焦点に隣接する箇所に移動することができるはずである。ただし、“了 2<行為>” はあくまでも文末助詞であるので、文末という 1 箇所に位置づけられるしかない。仮に、複数の文成分が含まれる“了 2<行為>” 構文を「意味的焦点である文成分+ “了 2<行為>” 」という構造の文に短縮すれば、“了 2<行為>” が文末に位置づけるという条件も満たされる他に、“了 2<行為>” が「浮遊性」を示すという条件も満たされる。実際には、複数の文成分が含まれる“了 2<行為>” 構文が「意味的焦点である文成分+ “了 2<行為>” 」という構造の文に短縮されるケースがよく見られる。例えば、彭利貞 (2011:215) は、次の (8a) の“你可以走了” という“了 2<行為>” 構文を (8b) の“可以” + “了 2<行為>” という構造の文に短縮しており、その両者は本質的に変わらないと指摘している。

- (8) a. A: 我可以走了吗?
B: 你可以走了。 (彭利貞 2011:215)
(A: 私は行ってもいいですか?)
(B: あなたは行ってもいいです。)
- b. B: 可以了。/#你了。/#走了¹⁶。 (彭利貞 2011:215)
(B: いいです。/#あなたです。/#行きました。)

(8b) の“可以” + “了 2<行為>” という構造の文は、“了 2<行為>” が文末に位置づけるという条件も満たしており、“了 2<行為>” が“可以” (いい) という焦点的文成分の隣接箇所に移動するという条件も満たしている。そのため、(8b) の“可以” + “了 2<行為>” という構造における“可以”の本質は、「意味的焦点である文成分+ “了 2<行為>” 」とい

う構造における「意味的焦点である文成分」である。

本論文は主に“了2”の意味的焦点を扱うので、具体的な説明がなければ、これから言及する「焦点」という概念は主に意味的焦点のことを指す。

10.7 「変化/出来事生起」義を生み出すための構文的条件

10.1 節から 10.6 節までで言及している「瞬間」義、「過程」義、「静相」義、「意味的焦点」などの概念を踏まえて、「変化」義と「出来事生起」義を生み出すためのそれぞれの構文的条件を次に提起する。それは、「“了2<行為>”構文は、焦点が『過程』義を表す述語または『静相』義を表す文成分に当てられるならば、『変化』義を生み出すが、焦点が『瞬間』義を表す述語に当てられるならば、『出来事生起』義を生み出す」ということである。

「変化」義、「出来事生起」義を生み出すためのそれぞれの構文的条件を表2で示す。

表2 “了2<行為>”の「変化」義、「出来事生起」義を生み出すための構文的条件

“了2<行為>”の意味	焦点になる文成分
「変化」義	焦点=「過程」義を表す述語/「静相」義を表す文成分
「出来事生起」義	焦点=「瞬間」義を表す述語

ところで、「『瞬間』義を表す述語」、「『過程』義を表す述語」、「『静相』義を表す文成分」はどのような形式的特徴の文成分であるのかについては、表1によって判断する。

10.8 終わりに

以上、“了2<行為>”の「変化」義、「出来事生起」義を生み出すための構文的条件を提起した。つまり、構文特徴の側面から「変化」義、「出来事生起」義を生み出すためのそれぞれの前提条件を提起した。ところで、次章は様々な実例や発話場面を合わせて本章で提起した構文的条件を検証する。

<注>

1. 本論文は“了2”が含まれる文を“了2”構文と呼ぶことにする。
2. ここの“事件”という用語は中国語表記であり、「事件」という日本語表記ではない。
3. (3)は、杉村(2009:5)の原文“那天晚上下雨了吗?”を書き換えたものである。
4. ここの“过1”は完了的意味を表す“过”のことを指すが、経験的意味を表す“过”もしくは“过2”ではない。
5. ここで述べている“参观”(見学する)、“下”(降る)、“穿”(着る)などの動詞は程度副詞で修飾されることができない動詞であるが、10.4 節で述べる“爱”(愛する)、“懂”(分かる)、“疼”(痛い)、“担心”(心配)、“像”(似る)などの動詞は程度副詞で修飾されることができる動詞である。両者の相違について注意されたい。
6. (5a)のB文は、杉村(2009:4)の原文“小李在厨房包饺子了,你赶紧去帮他吧”を書き換えたものである。
7. (6a)は、劉綺紋(2006:135)の原文“我这次不去太鲁阁,太鲁阁我去过了”を書き換えたものである。
8. 先行研究では、「……経験がある」や「……経験を持っている」という意味を表す“过”は、いわゆる経験相標識“过2”と見なされる。しかし、陈振宇(2006:275)は「経験相」という概念の妥当性に

異議を唱える。第2章2.2節は陳振宇(2006:275)の主張を踏まえて“过2”を持続相標識と位置づけている。

9. 叶友珍(2012:112-117)から分かるように、「本動詞」は「助動詞」に対して述べる動詞のことである。
10. もともと中国語は厳密な語形変化規則が乏しいので、特定の言語標識を中国語の品詞の分類基準とすることは無理である(陸俭明 2013:34)。例えば、中国語の「助動詞+本動詞」構造と「副詞+動詞」構造が紛らわしい。次に、本論文の主張として、「助動詞+本動詞」構造と「副詞+動詞」構造を見分ける方法を提示する。説明を分かりやすくするために、まず「助動詞+本動詞」構造の「助動詞」と「副詞+動詞」構造の「副詞」を「前者」と称し、「助動詞+本動詞」構造の「本動詞」と「副詞+動詞」構造の「動詞」を「後者」と称する。では、本論文は、「前者」と「後者」の統語的なつながりが緊密であるかどうかを基準に、「助動詞」と「副詞」を区別する。もし「前者」と「後者」のつながりが緊密であり、例えば、「前者」と「後者」の間に他の文成分が挿入され難いとすれば、「前者」を「助動詞」として扱う。もし「前者」と「後者」のつながりが緩やかであり、例えば、「前者」と「後者」の間に他の文成分が挿入されやすいとすれば、「前者」を「副詞」として扱う。例えば、「喜欢” + “吃”(食べるのが+好き)、「会” + “去”(行くと+見込む)、「能” + “说”(話すことが+できる)、「可以” + “走”(行っても+いい)などの連語は本論文で規定する「助動詞+本動詞」構造であるが、「可能” + “走”(たぶん+行く)という連語は本論文で規定する「助動詞+本動詞」構造ではない。「可能”(たぶん)という語は助動詞として扱われる研究もあれば、副詞として扱われる研究もあるが(徐晶凝 2008:240-255)、「可能”(たぶん)と“走”(行く)の間に主語や連用修飾語などの文成分が挿入されやすいので、本論文は「可能” + “走”(たぶん+行く)を「副詞+動詞」構造として扱う。
11. (7)のB文は、彭利贞(2011:215)の原文“可以了。(可以走了。/可以。/走吧!/走!/*走了。)”を書き換えたものである。
12. 「認知意味論では、語が多義であることを言語の基本的事実として認識する」(松本 2003a:14)。ある語が指示する概念内容は単数や少数の物事ではなく、数えきれないほどの物事からなる概念群である(Langacker 2008:55-65)。その概念群が及ぶ範囲は認知領域(cognitive domain・domain)とも呼ばれ、フレーム(frame)とも呼ばれる(Clausner and Croft 1999:3-4、松本 2003b:65-71)。また、認知領域はある概念の背景知識として捉えられてもよい他(Clausner and Croft 1999:3)、特定の概念や意味が生じることのできる経験可能な領域として捉えられてもよい(Langacker 2008:56)。
13. 原文は、“不可简省的突显和刻意重音的突显”である。
14. 形式意味論の立場では、文のモダリティの意味が除外されて残される命題の意味が文の真理条件として扱われる(Lakoff 1987:299-301、Langacker 2008:35、祁峰 2012:177-178、坂原 2015:56、峯島 2015:217、徐烈炯 2017:176)。場合によって、真理条件は、言外の意味、語用論的意味などに対して述べる言内の意味、明言される意味なども指す(陈新仁 2015:838-849、澤田他 2017:33-36)。
15. 詳細については、Chao(1948:24-25、1968:354)、朱德熙(1982:209)、竟成(1993:52-57)、刘勛宁(1998:46)、刘月华他(2001:383)、王学群(2003:51-71、2008:75-90)、谭春健(2004:26-31)、肖治野・沈家煊(2009:518-527)、杉村(2009:1-12)、金立鑫・邵菁(2010:319-325)、張文青(2012:105-122)、陆俭明(2013:238-239)、周小兵・欧阳丹(2014:8-15)、陈前瑞・胡亚(2016:66-74)、黄瓊辉(2016:42-58)などを参照のこと。
16. (8a)と(8b)のB文は、彭利贞(2011:215)の原文“可以了。(可以走了。/可以。/走吧!/走!/*走了。)”を書き換えたものである。

第11章 文末助詞“了”の行為域の外延的意味を生み出すための 構文的条件に関する検証

11.1 はじめに

第2章2.2節は、動相的意味、「瞬間」義、「過程」義、点的動相標識、線的動相標識、「静相」義、静相形式などの内容を規定した。動相的意味とは、述語における裸動詞という部分が指示する事象が、ある仮定の時間軸に沿って展開してから表す起動的段階、進行の段階、完了的段階、結果的段階、持続的段階などの異なる動的段階である。起動相標識、完了相標識、結果相標識は点的動相標識であり、点的動相標識によって表される動相的意味は「瞬間」義である。つまり、「瞬間」義は動詞的述語が指示する起動的意味、完了的意味、結果的意味からなる。進行相標識、持続相標識は線的動相標識であり、線的動相標識によって表される動相的意味は「過程」義である。つまり、「過程」義は動詞的述語が指示する進行的意味、持続的意味からなる。「静相」義とは、静相的意味であり、動相的意味に対して述べる意味である。具体的には、動詞的述語が示す内的属性、現象、態勢、また、動詞的述語以外の文成分が示す意味を指す。どの語でも本論文で規定する「静相」義を持つ。静相形式とは、「静相」義を表すことができる言語形式である。どの語でも本論文で規定する「静相」義を持つので、静相形式は固定されない。

第6章6.2節は、“了²”の行為域の外延的意味が「変化」義と「出来事生起」義であるということを論じた。「変化」(变化、become)義とは、何らかの内容から、“了²”構文¹の特定の文成分が指示する「静相」義にすでに変わったという意味である。具体的には、中国語の“已经变成……”、“已经成为……”、“已经变成……现象/态势”という意味に相当し、日本語の「……に変わった」、「……になった」、「……という現象/態勢になった」という意味に相当し、英語の“became……”、“changed into……”などの意味に相当する。「出来事生起」(事件发生、occur)義とは、“了²”構文の述語が指示する出来事(事件²、event)がすでに起こったという意味である。具体的には、中国語の“……事件已经发生”という意味に相当し、日本語の「……という出来事が生起した」、「……という出来事が起こった」、「……という出来事があった」という意味に相当し、英語の“(an event) occurred”、“(an event) happened”、“(an event) took place”という意味に相当する。また、「出来事生起」という意味概念における「出来事」は、[+動態]、[-均質]、[+限界]という意味特徴を備える「こと」であり、[-動態]という意味特徴を備える「もの」や、[+均質]の意味特徴を備える「属性」や、[-限界]の意味特徴を備える「過程」などではない。

第10章10.6節は、“了²<行為>”が焦点敏感演算子、すなわち意味的焦点の標識として扱われてもよいということを明らかにした。本章は主に“了²”の意味的焦点を扱うので、具体的な説明がなければ、これから言及する「焦点」という概念は主に意味的焦点のことを指す。

第10章10.7節は、“了²<行為>”の「変化」義、「出来事生起」義を生み出すためのそ

それぞれの構文的条件を提起した。それは、「了 2<行為>」構文は、焦点が『過程』義を表す述語または『静相』義を表す文成分に当てられるならば、『変化』義を生み出すが、焦点が『瞬間』義を表す述語に当てられるならば、『出来事生起』義を生み出す」ということである。その2つの構文的条件は次の表1でまとめられる。

表1 “了 2<行為>”の「変化」義、「出来事生起」義を生み出すための構文的条件

“了 2<行為>”の意味	焦点になる文成分
「変化」義	焦点=「過程」義を表す述語/「静相」義を表す文成分
「出来事生起」義	焦点=「瞬間」義を表す述語

ところで、「瞬間」義を表す述語、「過程」義を表す述語、「静相」義を表す文成分はどのような形式的特徴の文成分であるのかについては、第10章の表1によって判断すべきであるということも述べた。次の表2が第10章の表1である。

表2 「瞬間形式」、「過程形式」、「相対静相形式」、「絶対静相形式」

「瞬間形式」/ 「相対静相形式」	①「裸動詞+点的動相標識」構造の複合動詞 ②程度副詞で修飾されることができず、点的動相標識と共起することができる裸動詞
「過程形式」/ 「相対静相形式」	①「裸動詞+線的動相標識」構造の複合動詞 ②程度副詞で修飾されることができず、線的動相標識と共起することができる裸動詞
「絶対静相形式」	①点的動相標識とも線的動相標識とも共起することができない裸動詞 ②程度副詞で修飾されることができる裸動詞 ③「助動詞(+本動詞)」構造 ④動詞以外の品詞

本章は、様々な実例や発話場面を合わせて、第10章で提起した「変化」義、「出来事生起」義を生み出すためのそれぞれの構文的条件の妥当性を検証する。

11.2 「メタ発話場面」

どのような文でも一定の発話場面に用いられる。ある文の発話場面について、次の2種類が考えられる。1つは、ある文が示す意味情報だけでなく、その文以外の意味情報も含まれる発話場面である。もう1つは、ある文が示す意味情報だけが含まれ、それ以上の意味情報が含まれない発話場面である。本論文は後者の発話場면을「メタ発話場面」と呼ぶことにする。それでは、次の(1a)を例にとって“了 2<行為>”構文の「メタ発話場面」を簡単に説明する。

(1) a. A: 我可以走了吗?

B: 你可以走了。

(彭利贞 2011:215)

(A: 私は行ってもいいですか?)

(B: あなたは行ってもいいです。)

b. B: 可以了。 / #你了。 / #走了³。 (彭利贞 2011:215)

(B: いいです。 / #あなたです。 / #行きました。)

(1a)では、“你可以走了”という“了2”構文が示す意味情報は、“A这个人”(Aさん)、“可以”(いい)、“走”(行っても)という情報である。“你可以走了”という“了2”構文の発話場面は“我可以走了吗”と“你可以走了”という2つの文から構成されるが、この2つの文には“A这个人”(Aさん)、“可以”(いい)、“走”(行っても)という意味情報だけが含まれ、それ以上の意味情報は含まれない。そのため、(1a)が示す発話場面は“你可以走了”という“了2”構文の「メタ発話場面」である。

第10章10.6節で論じたように、(1b)の「“可以”+“了2<行為>”」という構造の本質は「意味的焦点である文成分+“了2<行為>”」という構造である。そのため、(1b)の“可以了”という文を“你可以走了”という文の焦点文と呼ぶことにする。本章は、“了2<行為>”構文の焦点文を見出すという方法、つまり(1)が示す短縮法で、“了2<行為>”構文の焦点位置を検証する。

11.3 「述語優先」原則と「焦点争奪」現象

黄瓚辉(2016:42-58)が指摘するように、“了2<行為>”構文は次の2種類の言語現象を示す。第一に、“了2<行為>”構文の言語形式が「简单形式」(简单形式)であれば、つまり、文成分が少なければ、“了2<行為>”構文の情動的焦点は述語という文成分に当てられる。第二に、“了2<行為>”構文の言語形式が「複雑形式」(复杂形式)であれば、つまり、文成分が多ければ、述語と述語以外の文成分が文の情動的焦点の位置を争う可能性がある。黄瓚辉(2016:42-58)は情動的焦点の立場から上述の2種類の言語現象を論証している。黄瓚辉(2016:42-58)と異なって、本論文は意味的焦点の立場から次の2点を主張する。第一に、“了2<行為>”構文の言語形式が黄瓚辉(2016:42-58)が述べている「简单形式」であれば、“了2<行為>”構文の意味的焦点は述語という文成分に当てられる。本論文はこの言語現象が映す原則を“了2<行為>”構文の「述語優先」原則と呼ぶことにする。つまり、“了2”構文の意味的焦点が特定できる発話場面は付与されない場合、その意味的焦点は優先的に述語に当てられるということである。第二に、“了2<行為>”構文の言語形式が黄瓚辉(2016:42-58)が述べている「複雑形式」であれば、述語と述語以外の文成分が文の意味的焦点の位置を争う可能性がある。この言語現象を“了2<行為>”構文の「焦点争奪」現象と呼ぶことにする。

ところで、どのような文成分が“了2<行為>”構文の述語の焦点位置を奪いやすいのかについては、黄瓚辉(2016:42-58)で説明されていないが、取り上げられている例文の構文特徴からみれば、非語尾的な補語⁴、連体修飾語、連用修飾語という3種類の文成分が述語という文成分と焦点位置を争いやすいということが分かる。では、黄瓚辉(2016:42-58)の問題点を次の3点でまとめる。第一に、連体修飾語、連用修飾語の種類は数多くあるが、どのような連体修飾語、連用修飾語が“了2<行為>”構文の述語の焦点位置を奪いやすい

のか。第二に、“了2<行為>”構文が「簡単形式」であれば、“了2<行為>”構文の焦点は必ず述語に当てられるのか。第三に、発話場面や文脈はどのように“了2<行為>”構文の焦点位置に影響を与えるのか。これらの問題については黄瓚輝(2016:42-58)でまだ考察されていない。11.5節から、“了2<行為>”の「変化」義、「出来事生起」義を生み出すための構文的条件を検証しながら、これらの問題点を明らかにする。

11.4 「瞬間形式/過程形式/絶対静相形式」の述語に基づく“了2<行為>”構文の分類

動相と静相に関する規定からみれば、動詞的述語は「瞬間」義、「過程」義、「静相」義のいずれかを表すが、非動詞的な述語⁵は「静相」義だけを表すということが分かる。つまり、中国語の述語が表す意味は網羅的に「瞬間」義、「過程」義、「静相」義という3種類に分けられる。「瞬間形式」、「過程形式」は「相対静相形式」として捉えられるので、中国語の述語の形式は網羅的に「瞬間形式」、「過程形式」、「絶対静相形式」という3種類に分けられる。ここで、「瞬間形式」の述語、「過程形式」の述語、「絶対静相形式」の述語が含まれる“了2<行為>”構文をそれぞれ「瞬間形式の述語+“了2<行為>”」構文、「過程形式の述語+“了2<行為>”」構文、「絶対静相形式の述語+“了2<行為>”」構文と呼ぶことにする。次節から、この3種類の構文のもとに、「変化」義と「出来事生起」義を生み出すためのそれぞれの構文的条件を検証する。

11.5 「瞬間形式の述語+“了2<行為>”」構文

11.5.1 「メタ発話場面」における「瞬間形式の述語+“了2<行為>”」構文

11.5.1.1 非語尾的な補語、連体修飾語、連用修飾語が付与されない場合

次の(2)-(4)は、非語尾的な補語、連体修飾語、連用修飾語が付与されない文であり、黄瓚輝(2016:42-58)が述べている「簡単形式」の“了2<行為>”構文である。

(2) 下雨了。 (陈小红 2007:58)
(雨が降った。)

(3) 他见到她了。 (陈小红 2007:58)
(彼は彼女を見かけた。)

(4) 他吃了饭了。 (陈小红 2007:56)
(彼はご飯を食べた。)

述語の焦点位置を奪いやすい文成分が付与されない(2)-(4)において、「述語優先」原則が働くことから、(2)-(4)の焦点は述語にだけ当てられるはずであり、「焦点争奪」現象は生じないはずである。次に、「メタ発話場面」のもとに、(2)-(4)を「意味的焦点である文成分+“了2<行為>”」という焦点文の形に短縮して、(2)-(4)の焦点は述語に当てられるかどうかを検証してみよう。

(5) <(2)の焦点検証>

A: 下雨了?

B: 下了。/#雨了。

(A: 雨が降ったか?)

(B: 降った。/#雨になった。)

(6) <(3)の焦点検証>

A: 他见到她了?

B: 见到了。/#他了。/#她了。

(A: 彼は彼女を見かけたのか?)

(B: 見かけた。/#彼になった。/#彼女になった。)

(7) <(4)の焦点検証>

A: 他吃了饭了?

B: 吃(了)了⁶。/#他了。/#饭了。

(A: 彼はご飯を食べたか?)

(B: 食べた。/#彼になった。/#ご飯になった。)

検証した結果、(2)-(4)の焦点は確かに述語に当てられるということが分かった。

また、陈小红(2007:54-60)は、(2)-(4)の“了²”は主に“实现”(実現)または“发生”(発生)を表しやすく、状態の“变化”(変化)は表し難いと指摘する。つまり、本論文で述べる「出来事生起」義⁷を表しやすく、「変化」義は表し難いということである。それでは、(2)-(4)は、「出来事生起」義を生み出すための構文的条件を満たすのか。次の2点で検証してみよう。第一に、上述の焦点検証の結果が示すように、(2)-(4)の焦点は確かに述語に当てられる。第二に、(2)の述語“下”(降る)は表2の「②程度副詞で修飾されることができず、点的動相標識と共起することができる裸動詞」という「瞬間形式」に相当し、(3)の述語“见到”(見かける)と(4)の述語“吃了¹”(食べてしまう)は両方とも表2の「①『裸動詞+点的動相標識』構造の複合動詞」という「瞬間形式」に相当するので、(2)-(4)の述語はいずれも「瞬間」義を表すことができる。このように、(2)-(4)は「焦点=『瞬間』義を表す述語」という「出来事生起」義の形成条件を満たすということが分かる。この結論は、陈小红(2007:54-60)の主張を裏付けている。

11.5.1.2 非語尾的な補語/連体修飾語/連用修飾語が付与される場合

“了²<行為>”構文の述語の焦点位置を奪いやすい文成分に関する問題に直接的もしくは間接的に触れる先行研究には、彭利贞(2009:506-517)、李文山(2011:104-108)、町田(2015:85-91)、黄瓚辉(2016:42-58)がある。しかし、彭利贞(2009:506-517)などにおいて、そのような文成分は何種類あるのかについては説明されていない。本論文は彭利贞(2009:506-517)などを踏まえて、“了²<行為>”構文の述語の焦点位置を奪いやすい文成分には非語尾的な補語、数量的連体修飾語、数量的目的語、様態的連用修飾語、時間的幅

が際立つ連用修飾語という5種類があると主張する。これから、この主張を具体的に論証する。

次の(8)-(11)は、それぞれ“(得)真好听”(うまく)という非語尾的な補語、“三年”(三年)という数量的連体修飾語、“一只”(一つ)という数量的目的語、“随随便便地”(勝手に)という様態的連用修飾語を伴っているため、黄瓚辉(2016:42-58)が述べている「複雑形式」の“了2<行為>”構文である。杨凯荣(2013:31-43)、王珊珊(2014:138-139)、黄瓚辉(2016:42-58)が指摘するように、(8b)、(9b)、(11b)は、文法的に適切であるにもかかわらず、(8b)、(9b)、(11b)以上の意味情報が付与されなければ、(8a)、(9a)、(11a)より理解され難く、容認度が低い。また、「メタ発話場面」における(10b)も(10a)より理解され難く、容認度が低い。

- (8) a. 他唱歌唱得真好听。 (王珊珊 2014:139)
(彼はうまく歌える。)
- b. ?他唱歌唱得真好听了。 (王珊珊 2014:139)
(?彼はうまく歌った。/?彼はうまく歌えるようになってきている。)
- (9) a. 她学了三年英语。
(彼女は英語を三年勉強していた。)
- b. ?她学三年英语了。 (黄瓚辉 2016:53)
(?彼女は英語を三年勉強していた。/?彼女が英語を勉強する年数は三年になった。)
- (10) a. 把手套丢了一只。 (朱德熙 1982:186)
(手袋を一つ落とした。)
- b. ?把手套丢一只了。
(?手袋を一つ落とした。/?落とした手袋の数はゼロから一つになった。)
- (11) a. 他随随便便地回答了我。 (杨凯荣 2013:33)
(彼に勝手に答えられた。)
- b. ?他随随便便地回答我了。 (杨凯荣 2013:33)
(?彼に勝手に答えられた。/?彼に勝手に答えられるようになってきた。)

本論文は、(8b)-(11b)の容認度が低い理由は本論文で述べる「焦点争奪」現象に関わると主張する。それでは、まず(8b)-(11b)の焦点位置を検証してみよう。

- (12) <(8b)の焦点検証>
- A: 他唱歌唱得真好听了⁸?
- B: 对的, #唱了。/对的, 真好听了。

- (A: 彼はうまく歌えるようになってきているの?)
 (B: そうよ、#歌ったよ。/そうよ、うまくなってきているよ。)

(13) <(9b)の焦点検証>

- A: 她学三年英语了?
 B: 对啊，#学(英语)了。/对啊，三年了。
 (A: 彼女は英語を三年も勉強していたの?)
 (B: そうよ、#(英語を)勉強していたよ。/そうよ、三年になったよ。)

(14) <(10b)の焦点検証>

- A: 把手套丢一只了?
 B: 是啊，#丢了。/是啊，一只了。
 (A: 手袋を一つ落としたの?)
 (B: そうよ、#落としたよ。/そうよ、一つになったよ。)

(15) <(11b)の焦点検証>

- A: 他随随便便地回答你了?
 B: 是的，#回答了。/是的，随随便便地了。
 (A: 彼に勝手に答えられるようになったのか?/彼に勝手に答えられたの?)
 (B: そう、#答えられた。/そう、勝手になった。)

上記の焦点検証の結果が示すように、(8b)の焦点は非語尾的な補語“(得)真好听”(うまく)に当てられやすいが、述語“唱”(歌う)には当てられ難い。(9b)の焦点は数量的連体修飾語“三年”(三年)に当てられやすいが、述語“学”(勉強する)には当てられ難い。(10b)の焦点は数量的目的語“一只”(一つ)に当てられやすいが、述語“丢”(落とす)には当てられ難い。(11b)の焦点は様態的連用修飾語“随随便便地”(勝手に)に当てられやすいが、述語“回答”(答える)には当てられ難い。要するに、(8b)-(11b)の焦点はすべて述語以外の文成分に当てられやすいということである。「述語優先」原則が働くことから、(8b)-(11b)の述語と述語以外の文成分が焦点位置を争う。つまり、(8b)-(11b)において「焦点争奪」現象が生じる。また、(8b)-(11b)の述語はいずれも「瞬間形式」であるが、非語尾的な補語、数量的連体修飾語、数量的目的語、様態的連用修飾語などの文成分はいずれも述語以外の文成分であり、「絶対静相形式」である。もし焦点が述語に当てられたら、(8b)-(11b)は「焦点=『瞬間』義を表す述語」という条件を満たし、「出来事生起」義を生み出すが、もし焦点が述語以外の文成分に当てられたら、(8b)-(11b)は「焦点=『静相』義を表す文成分」という条件を満たし、「変化」義を生み出す。(8b)-(11b)には「焦点争奪」現象が生じるので、聞き手は、(8b)-(11b)の“了2<行為>”が一体「出来事生起」義を伝えるのか、それとも「変化」義を伝えるのかという問題を明らかにすることはできない。つまり、聞き手は「メタ発話場面」から(8b)-(11b)の“了2<行為>”の使用意図を明らかにすることはできない。これが、(8b)-(11b)の容認度が低い理由につながる。

次に、“在”（ている）、“一边”（ながら）、“常常”（しばしば/よく）、“快要”（そろそろ）、“才”（予想以上に遅く）、“就”（予想以上に早く）、“又”（また）、“已经”（もう）、“终于”（やっと）、“那天晚上”（その夜に）、“在上海”（上海で）などの連用修飾語が含まれる“了2<行為>”構文を例に、時間的幅が際立つ連用修飾語が述語の焦点位置を奪いやすいという前述の主張を検証する。

(16) a. 外面在下雨。 (孙瑞 2012:44)
(外で雨が降っている。)

b. ?外面在下雨了。
(?外で雨が降っている。/?外は雨が降っていないという状態から降っているという状態に変わった。)

(17) a. 弟弟昨天一边看电视，一边做作业。 (杨凯荣 2013:41)
(弟は昨日テレビを見ながら、宿題をしていた。)

b. ?弟弟昨天一边看电视，一边做作业了。
(?弟は昨日テレビを見ながら、宿題をしていた。
/?弟は昨日からテレビを見ながら、宿題をするようになってきた。)

(18) a. 他常常喝啤酒。
(彼はよくビールを飲む。)

b. ?他常常喝啤酒了。
(?彼はよくビールを飲んだ。/?彼はよくビールを飲むようになってきた。)

“在”（ている）、“一边”（ながら）、“常常”（しばしば/よく）は、ある事象の過程性を表すので、時間的幅が際立つ連用修飾語である。王巍(2010:71-72)から分かるように、「メタ発話場面」の場合、“在”（ている）と“了2”は共起し難い。例えば、(16b)は(16a)より容認度が低い。また、杨凯荣(2013:41)、黄瓚辉(2016:48)が指摘するように、(17b)、(18b)は(17a)、(18a)より容認度が低い。(16b)-(18b)の容認度が低い理由を述べる前に、まず(16b)-(18b)の焦点位置を検証してみよう。

(19) <(16b)の焦点検証>

A: 外面在下雨了?

B: 对啊, #下了。/对啊, 在(下)了。

(A: 外で雨が降っているのか?)

(B: そう, #降った。/そう, (降つ)ているという新たな状態になった。)

(20) <(17b)の焦点検証>

A: 弟弟昨天一边看电视一边做作业了?

- B: 对, #看了, #做了。/对的, 一边(看电视)一边(做作业)了。
 (A: 弟は昨日からテレビを見ながら宿題をするようになってきたの?)
 (B: そう、#見た。また、#した。/そう、(テレビを見)ながら(宿題をするよう)に
なってきた。)

(21) <(18b)の焦点検証>

- A: 他常常喝啤酒了?
 B: 对, #喝了。/对, 常常了。
 (A: 彼はよくビールを飲むようになってきたか?)
 (B: そう、#飲んだ。/そう、よく(飲むように)なってきた。)

(16b)-(18b)の焦点位置を検証した結果、時間的幅が際立つ“在”(ている)、“一边”(ながら)、“常常”(しばしば/よく)が(16b)-(18b)の述語の焦点位置を奪いやすいということが分かった。したがって、(16b)-(18b)には「焦点争奪」現象が生じる。前述したように、「焦点争奪」現象が生じると、「了2<行為>」の使用意図は不明になる。このように、「メタ発話場面」に用いられる(16b)-(18b)は容認度が低い文として理解されやすい。

“快要”(そろそろ)、“快”(そろそろ)、“就”(そろそろ)などの副詞は、ある時間点に近づくという意味合いを含意するので、時間的幅が際立つ連用修飾語と捉えられる。“快要”(そろそろ)、“快”(そろそろ)、“就”(そろそろ)も“了2<行為>”構文の意味的焦点の位置を奪いやすいのか。まず、外国語教授法や第二言語教授法において、“快要”(そろそろ)、“快”(そろそろ)、“就”(そろそろ)が教授される際、常に“快要……了2”、“快……了2”、“就……了2”という固定されている組み合わせの形で教授される(守屋1995:304、張文青2012:116)。このような形は、“快要”(そろそろ)、“快”(そろそろ)、“就”(そろそろ)が常に“了2<行為>”と意味的に連結するということを反映する。「了2<行為>”と意味的に連結する」ということは、意味的焦点の定義に合う。つまり、“快要”(そろそろ)、“快”(そろそろ)、“就”(そろそろ)は“了2<行為>”構文の意味的焦点として捉えられる。したがって、時間的幅が際立つ連用修飾語の“快要”(そろそろ)、“快”(そろそろ)、“就”(そろそろ)は“了2<行為>”構文の意味的焦点の位置を奪いやすいということが分かる。また、(22)を例にとりて、“快要”(そろそろ)などが含まれる“了2<行為>”構文の意味的焦点の位置を検証してみよう。

- (22) 春天快要到了。 (刘月华2001:231)
 (春がそろそろ訪れる。/春がまだまだであるという段階から春がそろそろ訪れるという新たな段階に変わった。)

(23) <(22)の焦点検証>

- A: 春天快要到了?
 B: 是的, #到了。/是的, 快要了。

(A: 春がそろそろ訪れるのか?)

(B: はい、#訪れた。/はい、まだまだという段階からそろそろ(訪れる)という新たな段階に変わった。)

(23)の検証結果が示すように、(22)の焦点は連用修飾語“快要”(そろそろ)に当てられるが、述語“到”(訪れる)には当てられない。そのため、“快要”(そろそろ)などの時間的幅が際立つ副詞的連用修飾語が確かに“了 2<行為>”構文の焦点の位置を奪いやすいのである。ところで、“快要”(そろそろ)などの連用修飾語は副詞であり、「絶対静相形式」であるので、(22)は「焦点=『静相』義を表す文成分」という条件を満たす。そのため、(22)の“了 2<行為>”は「変化」義を生み出す。具体的には、「春が訪れる兆しさもない」という段階から、「春が訪れる兆しがある」という新たな段階に「変化」したという「変化」義を表す。

先行研究において、副詞“才”(予想以上に遅く)、副詞“就”(予想以上に早く)という2つの連用修飾語と“了 2<行為>”との共起問題がしばしば論じられてきた⁹。「メタ発話場面」の場合、“了 2<行為>”は“就”(予想以上に早く)と共起しやすく、“才”(予想以上に遅く)と共起し難いということがしばしば指摘される¹⁰。例えば、次の(24)は容認度が低い、(25)は容認度が高いと楊凱榮(2013:31-43)では考えられる。

(24) ?他 12 点才睡了。 (楊凱榮 2013:31)

(?彼はいつもより遅く 12 時に寝た。/?彼はいつもより遅く 12 時に寝るようになった。)

(25) 他 12 点就睡了。 (楊凱榮 2013:31)

(彼はいつもより早く 12 時に寝た。)

“了 2<行為>”が“才”(予想以上に遅く)と共起し難く、“就”(予想以上に早く)と共起しやすい理由については、先行研究で様々な観点から説明されてきたが、焦点という観点からも説明可能である。まず、(24)、(25)の焦点位置を検証してみよう。

(26) <(24)の焦点検証>

A: 他 12 点才睡了?

B: 对呀, #睡了。/对呀, (12 点)才(睡)了。

(A: 彼はいつもより遅く 12 時に寝るようになったのか?)

(B: そう、#寝た。/そう、いつもより遅く(12 時に寝るよう)になった。)

(27) <(25)の焦点検証>

A: 他 12 点就睡了?

B: 对, 睡了。/对, (12 点)就(睡)了。

(A: 彼はいつもより早く 12 時に寝たのか?)

(B: そう、寝た。/そう、いつもより早く(12 時に寝るように)なった。)

(26)の焦点検証の結果が示すように、(24)の焦点は連用修飾語“才”(予想以上に遅く)に当てられやすいが、述語“睡”(寝る)には当てられ難い。「述語優先」原則が働くことから、述語“睡”(寝る)と連用修飾語“才”(予想以上に遅く)の間には「焦点争奪」現象が生じる。そのため、別の情報が付与されなければ、(24)は容認度が低い文と理解されやすい。しかし、(27)の焦点検証の結果が示すように、(25)の焦点は、連用修飾語“就”(予想以上に早く)にも自然に当てられることができる他に、述語“睡”(寝る)にも自然に当てられることができる。「述語にも自然に当てられることができる」という結果は、「“了 2”構文の意味的焦点が特定できる発話場面は付与されない場合、その意味的焦点は優先的に述語に当てられる」という「述語優先」原則に反していない。そのため、聞き手は、「述語優先」原則にしたがって(25)の述語を優先に焦点として想定しても構わない。この想定は「述語優先」原則に反していないので、「焦点争奪」現象は引き起こさない。また、「瞬間形式」である述語“睡”(寝る)を焦点と想定すると、(25)は「焦点=『瞬間』義を表す述語」という条件を満たす。このように、聞き手は、(25)の“了 2<行為>”の使用意図を「出来事生起」義を伝えようとするのと理解しても構わない。“了 2<行為>”の使用意図が特定できるので、(25)は容認度が高い文として捉えられる。ところで、連用修飾語“才”は、「予想以上に遅い」という意味を表すので、「発話者は何らかの結果の生起を、予想した生起時間から予想外の生起時間までしばらく待っていた」という意味合いも表す。つまり、“才”(予想以上に遅く)は時間的幅が際立つ。(26)の焦点検証の結果が示すように、時間的幅が際立つ連用修飾語“才”(予想以上に遅く)は確かに述語の焦点位置を奪いやすい。しかし、連用修飾語“就”(予想以上に早く)で結ばれる前後の 2 項目の間の認知的距離は、「重なるほど限りなく短い」¹¹⁾ので(张莹 2012:39-45)、ある種の「切迫性」を際立たせるが(石井 2014:23)、時間的幅は際立たせない。また、“就”(予想以上に早く)は「予想以上に早い」という意味を表すので、「発話者は予想した生起時間まで待たずにすぐ何らかの結果を得た」という意味合いも表す。つまり、“就”(予想以上に早く)は時間的幅が際立たない。(27)の焦点検証の結果が示すように、時間的幅が際立たない連用修飾語“就”(予想以上に早く)は述語の焦点位置を奪い難い。総じていえば、時間的幅が際立つ連用修飾語は“了 2<行為>”構文の焦点を奪いやすいということである。

次の(28)-(32)は、“又”(また)、“已经”(もう)、“终于”(やっと)、“那天晚上”(その夜に)、“在上海”(上海で)などの連用修飾語を伴っているので、黄瓚辉(2016:42-58)が述べている「複雑形式」の“了 2<行為>”構文である。しかし、(28)-(32)はいずれも容認度が高い“了 2<構文>”である。なぜならば、時間的幅が際立たない連用修飾語としての“又”(また)、“已经”(もう)、“终于”(やっと)、“那天晚上”(その夜に)、“在上海”(上海で)は、(28)-(32)の述語の焦点位置を奪い難く、「焦点争奪」現象を引き起こさないからである。

- (28) 昨天他又看电视了。 (谭春健 2004:29)
 (昨日彼はまたテレビを見た。)
- (29) 她女儿已经结婚了。 (刘月华他 2001:229)
 (あの方の娘さんはもう結婚した。)
- (30) 那段可怕的日子终于结束了。 (CCL)
 (その恐ろしい日々がやっと終わった。)
- (31) 那天晚上下雨了¹²。 (杉村 2009:5)
 (その夜に雨が降った。)
- (32) 他在上海买礼物了。 (杨凯荣 2013:35)
 (彼は上海でお土産を買った。)

“又” (また)は「何回目か」という「回数」的意味合いを際立たせるが、時間的幅は際立たせない。“已经” (もう)は「ある事象が過去の何らかの時間点に生じた」という意味を表すので、「時間点」を際立たせるが、時間的幅は際立たせない。“终于” (やっと)は「やっと」、「結局」、「最後に」などの「結果」的意味合いを際立たせるが、時間的幅は際立たせない。“那天晚上” (その夜に)と“在上海” (上海で)はそれぞれ「出来事が生じた時間点」、「出来事の発生場所」を際立たせるが、時間的幅は際立たせない。次に、(28)-(32)の焦点位置を検証してみよう。

(33) <(28)の焦点検証>

- A: 昨天他又看电视了?
 B: 对, 看了。/是的, 又(看)了。
 (A: 昨日彼はまたテレビを見たのか。/昨日彼はまたテレビを見るようになってきたのか?)
 (B: そう、見た。/そう、また(見た)。)

(34) <(29)の焦点検証>

- A: 她女儿已经结婚了?
 B: 对, 结婚了。/是的, 已经(看)了。
 (A: あの方の娘さんはもう結婚したのか?)
 (B: はい、結婚した。/はい、もう(結婚した)。)

(35) <(30)の焦点検証>

- A: 那段可怕的日子终于结束了?

- B: 是的, 结束了。/是的, 终于(结束)了。
 (A: その恐ろしい日々がやっと終わったのか?)
 (B: はい, 終わった。/はい, やっと(終わった)。)

(36) <(31)の焦点検証>

- A: 那天晚上下雨了?
 B: 下了。/#那天晚上了。
 (A: その夜に雨が降ったのか?)
 (B: 降った。/#その夜になった。)

(37) <(32)の焦点検証>

- A: 他在上海买礼物了?
 B: 买了。/#在上海了。
 (A: 彼は上海でお土産を買ったのか?)
 (B: 買った。/#上海になった。)

(33)–(35)の検証結果が示すように、(28)–(30)の焦点は「瞬間形式」である述語の“看”(見る)、“结(婚)”(結婚する)、“结束”(終わる)にも当てられることができる他に、「絶対静相形式」である副詞的連用修飾語の“又”(また)、“已经”(もう)、“终于”(やっと)にも当てられることができる。そのため、(25)の分析と同様に、別の意味情報が付与されなければ、「述語優先」原則が働くことから、(28)–(30)の焦点は優先的に述語に当てられることができる。「焦点は優先的に述語に当てられる」としたら、(28)–(30)において「焦点争奪」現象は生じない。そのため、「メタ発話場面」に用いられる(28)–(30)は容認度が高い文として捉えられる。また、(36)、(37)の検証結果が示すように、(31)、(32)の焦点は「瞬間形式」である述語の“下”(降る)、“买”(買う)にだけ当てられ、「絶対静相形式」である体言的連体修飾語の“那天晚上”(その夜に)と前置詞的連体修飾語の“在上海”(上海で)には当てられない。この結果も「述語優先」原則に反していないので、「焦点争奪」現象は引き起こさない。そのため、「メタ発話場面」に用いられる(31)、(32)も容認度が高い文として捉えられる。ところで、杉村(2009:1–12)、楊凱榮(2013:31–43)によれば、(31)、(32)の“了2”は何らかの新状況が特定の時間や特定の場所に「出現」(出現)したということを表すが、何らかの内容が「変化」(変化)したということとは表さない。つまり、本論文で述べる「出来事生起」義を表し、「変化」義は表さないということである。(33)–(37)の焦点検証の結果が示すように、(28)–(32)の焦点は「瞬間形式」である述語に当てられることができる。この結果は、「焦点=『瞬間』義を表す述語」という「出来事生起」義の形成条件を満たす。「出来事生起」義の形成条件を満たすということは、杉村(2009:1–12)、楊凱榮(2013:31–43)の主張を裏付けている。

総じていえば、本節で分析したように、非語尾的な補語、数量的連体修飾語、数量的目的語、様態的連用修飾語、時間的幅が際立つ連用修飾語という5種類の文成分が“了2<行為>”構文の述語の焦点位置を奪いやすいのである。

11.5.2 「変化」的情報が明示される発話場面における「瞬間形式の述語+ “了 2<行為>”」 構文

一般的に言えば、「変化」的情報が明示される発話場面から、“了 2<行為>”構文における「変化」する文成分を特定することができる。“了 2<行為>”構文における「変化」する文成分というのは、“了 2<行為>”の「変化」義が指示する文成分であり、“了 2<行為>”の「変化」義と意味的に連結する文成分である。「了 2<行為>”の「変化」義と意味的に連結する」ということは、意味的焦点の定義に合う。つまり、“了 2<行為>”構文における「変化」する文成分は“了 2<行為>”構文の意味的焦点として捉えられる。そのため、「変化」的情報が明示される発話場面は、“了 2<行為>”構文の意味的焦点が特定できる発話場面の1種として理解されてもよい。

本節で述べる「瞬間形式の述語+ “了 2<行為>”」構文は、どのような文成分や構文特徴を持つのかという問題にかかわらず、「変化」的情報が明示される発話場面が付与されると、優先的に「変化」義を表す。次にこの主張を検証する。

「メタ発話場面」の場合、「瞬間形式」と「絶対静相形式」の間に生じる「焦点争奪」現象は次の(38)-(41)の容認度を低下させるということを11.5.1.2節で論じた。

(38) ?他唱歌唱得真好听了。 (= (8b))

(?彼はうまく歌った。/?彼はうまく歌えるようになってきている。)

(39) ?她学三年英语了。 (= (9b))

(?彼女は英語を三年勉強していた。/?彼女が英語を勉強する年数は三年になった。)

(40) ?他随随便便地回答我了。 (= (11b))

(?彼に勝手に答えられた。/?彼に勝手に答えられるようになった。)

(41) ?弟弟昨天一边看电视，一边做作业了。 (= (17b))

(?弟は昨日テレビを見ながら、宿題をしていた。/?弟は昨日からテレビを見ながら、宿題をするようになった。)

ところが、次の(42)-(45)が示すように、(38)-(41)は「変化」的情報が明示される発話場面に用いられると、それぞれの容認度がまた高くなる。

(42) 我对朋友说：“我听过小李的歌，唱得很难听。”朋友说：“他以前是不行，但现在不同了！”于是朋友让我听了小李最近的歌声录音。我听了之后连忙说道：“哎呀，果然真的不同了！他唱歌唱得真好听了。”朋友再次向我确认：“真的？我原以为你会说丝毫没变呢。”我肯定地说：“真的，真好听了。”

(私は友達に、「李さんの歌を聞いたことがある。下手だった。」と文句を言った。

友達は、「昔は確かに下手だったけど、今は違うよ。」と言り返して、また、李さん

の最近の歌の録音を私に聞かせた。聞くと、私は驚いて、「あら、確かに、彼はうまく歌えるようになってきている。」と言った。友達は、「本当?相変わらず下手だと言われるかなと思ったのに。」と言った。私は「本当だよ。うまくなってきているよ。」と確かめた。)

- (43) A: 那时候, 她的英语学习才刚起步呢。我记得, 她当时才学了两个月的英语而已。
B: 那到目前为止呢?
A: 到目前为止啊, 她学三年英语了。
B: 不知不觉都三年了呀?
A: 对啊, 三年了。
(A: その時、彼女は英語の勉強を始めたばかりだった。当時は確か二か月ぐらい勉強していた。
B: 今までは?
A: 今までは、彼女は英語を三年も勉強している。
B: 知らずのうちに三年も経ったね。
A: そうよ、三年になったよ。)

- (44) 我对闺蜜说:“我觉得最近我男朋友对我的态度变了。”闺蜜问:“怎么了?”我说:“你看, 以前, 无论我问他什么问题, 他都会很认真地回答我。但最近, 我问他问题时, 他随随便便地回答我了, 不像以前那么认真了。”闺蜜向我确认:“他的态度真的变成那样了吗?”我肯定地说:“真的, 随随便便地了。”
(私は親友に、「最近、何だか彼氏の態度がおかしくなってきた。」と訴えた。親友は「どうしたの?」と聞いた。私は、「ほら、この前は、彼に何のことを聞いても、すべてまじめに答えてもらっていたけれど、最近は、聞いてみたら、彼に勝手に答えられるようになった。この前のようなまじめな態度がもう見られなくなった。」と返事した。親友は「彼氏の態度が本当にそうなの?」と確認して、私は「そうよ、勝手(な態度)になった。」と答えた。)

- (45) 我和朋友聊天时, 说到自己弟弟最近的一些行为发生了一些变化。我说:“最近, 我弟弟变了。以前, 弟弟看电视的话就只看电视, 做作业的话就只做作业。但是, 弟弟昨天一边看电视, 一边做作业了。”
(私は、最近弟の習慣が変わったということについて友達にしゃべって、次のことを言った。「最近、何だか弟は変わった。昔、弟はテレビを見るならテレビを見るだけで、宿題をするなら宿題をするだけだった。しかし、弟は昨日からテレビを見ながら、宿題をするようになった。」)

(42)の発話場面は、(38)の“他唱歌唱得真好听了”において「“(得)很难听”(下手)→“(得)真好听”(うまく)」という補語の「変化」が生じたという情報を明示する。(43)の発話場面は、(39)の“她学三年英语了”において「“两个月”(二か月)→“三年”(三

年)」という数量的連体修飾語の「変化」が生じたという情報を明示する。(44)の発話場面は、(40)の“他随随便便地回答我了”において「“很认真地”(まじめに)→“随随便便地”(勝手に)」という様態的連用修飾語の「変化」が生じたという情報を明示する。(45)の発話場面は、(41)の“弟弟昨天一边看电视，一边做作业了”において「“只”(だけ)→“一边”(ながら)」という副詞的連用修飾語の「変化」が生じたという情報を明示する。(42)-(45)が示す「変化」的な発話場面から、聞き手は発話者の“了 2<行為>”の使用意図、つまり「変化」義を伝えようとする意図を特定することができる。そのため、(38)-(41)はそれぞれ(42)-(45)に用いられると、容認度が高くなる。

次の(46)が「メタ発話場面」において「出来事生起」義を表すということを 11.5.1.2 節で論じた。

- (46) 那天晚上下雨了。 (= (31))
 (その夜に雨が降った。)

ところが、(46)は次の(47)、(48)の発話場面に用いられると、「出来事生起」義ではなく、「変化」義を際立たせる。

- (47) A 和 B 住的地区有这样一个现象:每周三早上必定下雨, 而且都是周三的早上下雨, 周三其他时间段从来不下雨。这种现象持续了很多年。突然, 上周三的下雨时间出现了异常:早上没下雨, 反而变成了晚上下雨。由于 B 还不知道这个事, 于是 A 对 B 说: “上周三出现怪事了!那天虽然下雨了, 但不是早上下雨, 你知道是什么时间吗?” B 问: “不是早上还能是什么时候?” A 说: “那天晚上下雨了!晚上!”

(AさんとBさんが住んでいる地域にはおもしろい自然現象がある。毎週の水曜日の朝は雨が必ず降り、水曜日の朝以外の時間帯には必ず降らないのである。ところが、先週の水曜日の朝は雨が降らず、夜に降るという珍しいことがあった。Bさんがその珍しいことをまだ知らないで、AさんはBさんに教えている。Aさんは、「先週の水曜日は変なことがあったんだよ!その日は雨が降ったけど、降った時間が朝じゃなかったんだよ。」と言った。Bさんは、「朝じゃなかったの?いつのことだったの?」と聞いた。Aさんは、「その夜に雨が降ったよ。夜になったよ。」)

- (48) A 和 B 住的地区有这样一个现象:该地区几乎从来不下雨, 但是会经常下沙。不料, 上周三的深夜下雨了, 而不是下沙。由于 B 还不知道这个事, 于是 A 对 B 说: “上周三出现怪事了!那天晚上从天空飘下来的不是沙, 你知道是什么吗?” B 问: “不下沙那还能下什么?” A 说: “雨了!那天晚上下雨了!”

(AさんとBさんが住んでいる地域にはおもしろい自然現象がある。雨はめったに降らないが、砂はよく降るのである。ところが、先週の水曜日の深夜は砂の代わりに雨が降った。Bさんがその珍しいことをまだ知らないで、AさんはBさんに教えている。Aさんは、「先週の水曜日の夜は変なことがあったんだよ!その夜は降っ

たのが砂じゃなかったんだよ。」と言った。Bさんは、「砂じゃなかったら、何だったの?」と聞いた。Aさんは、「雨になったよ。その夜に雨が降ったよ。」)

(47)の発話場面は、(46)の“那天晚上下雨了”において「“早上”(朝)→“晚上”(夜)」という連用修飾語の「変化」が生じたという情報を明示する。(48)の発話場面は、(46)の“那天晚上下雨了”において「“沙”(砂)→“雨”(雨)」という目的語の「変化」が生じたという情報を明示する。そのため、(46)は、「変化」的情報が明示される発話場面としての(47)、(48)に用いられると、「出来事生起」義は際立たせないが、異なる文成分が示す対象、状態などの「変化」を際立たせる。

また、次の(49)-(51)も考えよう。「メタ発話場面」の場合、(49)-(51)は「出来事生起」義を表しやすい。

(49) 吃饭了。

(ご飯を食べた。)

(50) 打起来了。

(殴り出した。)

(51) 打死人了。

(あの人を殴り殺してしまった。)

(49)-(51)は「出来事生起」義を生み出すための構文的条件を満たすかどうかを考えよう。まず、(49)-(51)の焦点位置を検証してみよう。

(52) <(49)の焦点検証>

A: 吃饭了?

B: 吃了。/#饭了。

(A: ご飯を食べたのか?)

(B: 食べた。/#ご飯になった。)

(53) <(50)の焦点検証>

A: 打起来了?

B: 打起来了。

(A: 殴り出したのか?)

(B: 殴り出した。)

(54) <(51)の焦点検証>

A: 打死人了?

- B: 打死了。/#人了。
 (A: あの人を殴り殺してしまったのか?)
 (B: 殴り殺してしまった。/#あの人になった。)

(52)-(54)が示すように、「メタ発話場面」において、(49)-(51)の焦点は“吃”(食べる)、“打起来”(殴り出す)、“打死”(殴り殺してしまう)などの述語に当てられる。また、これらの述語は「瞬間形式」であり、「瞬間」義を表すことができる。そのため、(49)-(51)は「出来事生起」義を生み出すための構文的条件を満たす。

(49)-(51)は、次の(55)-(57)の発話場面に用いられると、焦点が同様に“吃”(食べる)、“打起来”(殴り出す)、“打死”(殴り殺してしまう)という「瞬間形式」に当てられるが、「……という出来事が起こった」、「……という出来事があった」などの「出来事生起」義は表さない。この結果は、本論文が主張する“了2<行為>”の意味を生み出すための構文的条件に反しているように見える。

- (55) 亲属: “来, 吃饭了!”
 病人: “好, 吃饭了。吃了。”¹³ (肖治野・沈家焯 2009:522)
 (家族: ね、ご飯を食べるぞ。)
 (病人: はいよ、ご飯を食べる。食べるから。)
- (56) 磊春紧紧攥住他(经理)的手: “不许动我的秤!” 经理圆睁双眼, 竭力挣扎。磊春咬紧牙, 不让他有脱手的机会。 “要打起来了!打起来了!快去叫经理女人来。” 顾客中不知谁喊了一声。 (BCC)
 (磊春さんはあの人(社長)の手を必死に掴んで、「私の秤に触るな!」と怒った。社長は眉をつり上げて、磊春さんから逃れようとあがいている。にもかかわらず、磊春さんは手放そうともしない。一人のお客さんが、「まもなく殴る!殴るよ!はやく社長の妻を呼びに行ってくれ。」と叫んだ。)
- (57) (近接未来に起きることを予想される事態を発話者が発話する)打死人了!打死了!
 别打了!¹⁴ (劉綺紋 2006:106)
 ((近接未来に起きることを予想される事態を発話者が発話する)あの人を殴り殺
してしまうぞ!殴り殺してしまうぞ!もうやめろ!)

第10章 10.5節で述べたように、通常「瞬間形式/過程形式」は「瞬間/過程」義を表すが、必ずしも「瞬間/過程」義を表すとは限らない。「瞬間形式/過程形式」は「相対静相形式」として捉えられたら「静相」義を表すからである。(55)-(57)の発話場面による制約を受けたら、(49)-(51)の“吃”(食べる)、“打起来”(殴り出す)、“打死”(殴り殺す)という「瞬間形式」はそれぞれ“吃”(食べる)の態勢、“打起来”(殴り出す)の態勢、“打死”(殴り殺す)の態勢を表す。「動詞的述語が示す内的属性、現象、態勢」は本論文で規定する「静相」義の1種であるので、“吃”(食べる)などは「瞬間」義ではなく、「静相」義こそを表

すということになる。つまり、もともと「瞬間形式」であった“吃”（食べる）などは、(55)などの発話場面において「相対静相形式」として捉えられるようになる。このように、「メタ発話場面」における(49)-(51)は、「焦点=『瞬間』義を表す述語」という「出来事生起」義の形成条件を満たすが、(55)-(57)の発話場面における(49)-(51)は、「焦点=『静相』義を表す文成分」という「変化」義の形成条件を満たすということである。(55)-(57)の発話場面に用いられると、(49)-(51)はそれぞれ「“吃”（食べる）の態勢に入っていない状態（例えば、遊んでいる状態）→“吃”（食べる）の態勢に入っている状態」、「“打起来”（殴り出す）の態勢に入っていない状態（例えば、和気あいあいである状態）→“打起来”（殴り出す）の態勢に入っている状態」、「“打死”（殴り殺してしまう）の態勢に入っていない状態（例えば、殴り合っている最中）→“打死”（殴り殺してしまう）の態勢に入っている状態」という態勢的「変化」を表す。このように、(55)-(57)の発話場面における(49)-(51)が「出来事生起」義を表さないという結果は、本論文が主張する“了2<行為>”の意味を生み出すための構文的条件に反していないのである。

11.6 「過程形式の述語+“了2<行為>”」構文

第10章10.5節で述べたように、「②程度副詞で修飾されることができず、点的動相標識と共起することができる裸動詞」という「瞬間形式」と、「②程度副詞で修飾されることができず、線的動相標識と共起することができる裸動詞」という「過程形式」は、両方とも裸動詞であるので、同一の裸動詞である場合もある。前節で述べる「瞬間形式の述語+“了2<行為>”」構文と本節で述べる「過程形式の述語+“了2<行為>”」構文の示差的特徴¹⁵を示すために、本節は、「過程形式の述語+“了2<行為>”」構文の「過程形式」を「①『裸動詞+線的動相標識』構造の複合動詞」という「過程形式」に絞って議論する。「①『裸動詞+線的動相標識』構造の複合動詞」が「瞬間」義を表さないので、本節で述べる「過程形式の述語+“了2<行為>”」構文は、「焦点=『瞬間』義を表す述語」という「出来事生起」義の形成条件を満たさない。そのため、本節で述べる「過程形式の述語+“了2<行為>”」構文は「変化」義を表すしかない。

まず、次の(58)-(60)を考えよう。(58)-(60)の述語にはそれぞれ動作の進行を表す“着”、経験的意味を表す“过2”、裸動詞に後続する“有”が含まれる。第2章2.2節で規定したように、(58)の“着”は進行相標識であり、(59)の“过2”と(60)の“有”は持続相標識である。

(58) 小李在厨房包着饺子了¹⁶。 (杉村 2009:4)

(李さんはもう(別のことをやっているのではなく)台所で餃子を包んでいるよ。)

(59) 太鲁阁我去过了。 (劉綺紋 2006:135)

((あの時は行ったことがなかったが、今なら)太魯閣に行ったことがあるんだ。)

(60) 他穿有夹克衫了。

((前はまだ着ていなかったが、今なら)彼はジャケットを着ているよ。)

次に、(58)-(60)の焦点位置を検証してみよう。

(61) <(58)の焦点検証>

A: 小李在厨房包着饺子了?

B: 是的, 包着了。/是的, #小李了。/是的, #饺子了。/是的, #在厨房了。

(A: 李さんはもう台所で餃子を包んでいるの?)

(B: はい, 包んでいる。/はい, #李さんになった。/はい, #餃子になった。/はい, #台所になった。)

(62) <(59)の焦点検証>

A: 太鲁阁你去过了?

B: 去过了。/#太鲁阁了。/#我了。

(A: あなたは太魯閣に行ったことがあるの?)

(B: 行ったことがある。/#太魯閣になった。/#私になった。)

(63) <(60)の焦点検証>

A: 他穿有夹克衫了?

B: 穿有了。/#他了。/#夹克衫了。

(A: 彼はジャケットを着ているの?)

(B: 着ている。/#彼になった。/#ジャケットになった。)

焦点を検証した結果、(58)-(60)の焦点は“包着”(包んでいる)、“去过”(行ったことがある)、“穿有”(着ている)という述語に当てられるということが分かった。また、“包着”(包んでいる)、“去过”(行ったことがある)、“穿有”(着ている)は表2の「①『裸動詞+線の動相標識』構造の複合動詞」という「過程形式」であり、「過程」義を表すことができる。そのため、(58)-(60)の“了2<行為>”構文は「焦点=『過程』義を表す述語」という「変化」義の形成条件を満たす。つまり、(58)-(60)の“了2<行為>”は「変化」義を表す。具体的には、「何らかの過程→“包着”(包んでいる)が示す動態持続の過程」、「何らかの過程→“去过”(行ったことがある)が示す経験持続の過程」、「何らかの過程→“穿有”(着ている)が示す存在持続の過程」という過程的「変化」を表す。

また、次の(64)-(66)も考えよう。

(64) 小李在厨房包着饺子。

(李さんはもう台所で餃子を包んでいる。)

(65) 太鲁阁我去过。

(太魯閣に行ったことがある。)

(66) 他穿有夹克衫。 (薛宏武 2008:104)

(彼はジャケットを着ている。)

(58)-(60)と(64)-(66)を比較すれば分かるように、何らかの動態、経験、静的存在が持続しているということを表そうとする場合、“了2<行為>”が付与されない(64)-(66)を用いればよい。もし“了2<行為>”が付与された結果としての(58)-(60)を用いると、語感的には、単純に何らかの動態、経験、静的存在が持続しているということを表すのではなく、表す意味は微妙になる。そのため、杉村(2009:4)と木村(2013:142)が指摘するように、別の意味情報が追加されなければ、つまり、「メタ発話場面」に用いられれば、(58)はやや不自然である。杉村(2009:4)は、(58)の容認度を高くさせるために次の(67)が示す発話場面を設定している。

(67) A: 小李在哪儿?他还在看电视吗?

B: 小李在厨房包着饺子了, 你赶紧去帮他吧!¹⁷ (杉村 2009:4)

(A: 李さんはどこだ?まだテレビを見ているの?)

(B: 李さんはもう台所で餃子を包んでいるよ。はやく手伝いに行ってね。)

なぜ(58)は(67)の発話場面に用いられると容認度が高くなるのかについて、杉村(2009:4)は発話意図推定という語用論的観点から説明しているが、本論文で規定する「変化」義からも説明可能である。本節で述べたように、(58)の“了2<行為>”は「何らかの過程→“包着”(包んでいる)が示す動態持続の過程」という「変化」義を表す。もし(58)は「メタ発話場面」に用いられると、「何らかの過程」が不明であるという語感を伝えやすい。そのため、不自然さももたらしかねない。もし、(58)が(67)の発話場面に用いられると、聞き手は、その「何らかの過程」を“在看”(見ている)と特定することができる。そのため、(58)は(67)の発話場面に用いられると、容認度が高くなる。

11.7 「絶対静相形式の述語+“了2<行為>”」構文

次の(68a)-(71a)は“了2<行為>”が付与されない文であるが、(68b)-(71b)は“了2<行為>”が付与される文であり、「絶対静相形式の述語+“了2<行為>”」構文である。

(68) a. 他大学校长。
(あの方は大学の学長だ。)

b. 他大学校长了。 (闫亚平 2016:58)
(あの方は大学の学長になった。)

(69) a. 他是战士。 (BCC)

(彼は戦士だ。)

- b. 他是战士了。 (BCC)
(彼は战士になった。)

- (70) a. 我怕老师。
(私は先生が恐ろしい。)

- b. 我怕老师了。 (卢英顺 2012:27)
(私は先生を恐れるようになった。)

- (71) a. 女儿会游泳。
(娘は泳ぐことができる。)

- b. 女儿会游泳了。 (BCC)
(娘は泳ぐことができるようになった。)

a 例と b 例を比較して分かるように、a 例は、何らかの安定している状態、静的状態を表し、状態の変化などは表さないが、b 例は、過去に存在していた何らかの状態から現在の状態に変化したという動的意味を表す。では、b 例の“了 2<行為>”構文は「変化」義を生み出すための構文的条件を満たすのか。次の 2 点で検証してみよう。第一に、(68b)-(71b)はいずれも黄瓚辉(2016:42-58)が述べている「簡単形式」の“了 2<行為>”構文であるため、「述語優先」原則が働くことから、(68b)-(71b)の焦点は述語に当てられるのである。第二に、(68b)-(71b)の述語はいずれも表 2 で規定している「絶対静相形式」である。例えば、(68b)の述語“大学校长”(大学の学長)は「④動詞以外の品詞」であり、(69b)の述語“是”(である)は「①点的動相標識とも線的動相標識とも共起することができない裸動詞」であり、(70b)の述語“怕”(恐ろしい/恐れる)は「②程度副詞で修飾されることができる裸動詞」であり、(71b)の述語“会游”は「③『助動詞(+本動詞)』構造」である。このように、(68b)-(71b)は「焦点=『静相』義を表す文成分」という「変化」義の形成条件を満たすのである。

ところで、「絶対静相形式の述語+“了 2<行為>”構文の文成分は、網羅的に主語、「絶対静相形式」の述語、目的語、連体修飾語、連用修飾語、補語という 6 種類に分けられる。「絶対静相形式の述語+“了 2<行為>”構文の焦点はこの 6 種類の文成分のどの文成分に当てられても、決して「瞬間形式」の述語という文成分には当てられない。「瞬間形式」の述語に当てられないと、「焦点=『瞬間』義を表す述語」という「出来事生起」義の形成条件は満たさず、「焦点=『静相』義を表す文成分」という「変化」義の形成条件を満たすしかない。ただし、「絶対静相形式の述語+“了 2<行為>”構文は具体的にどのような「変化」義を表すのかについて、発話場面や本章で述べている「述語優先」原則や鄧宇陽(2018:58-66)が提示している「静相形式+“了 2<行為>”構文の否定命題の観点¹⁸から判断しなければならない。

11.8 終わりに

以上、様々な実例や発話場面を合わせて、第10章で提起した「変化」義、「出来事生起」義を生み出すためのそれぞれの構文的条件の妥当性を検証した。ところで、第6章6.2節で述べたように、“了2”の「変化/出来事生起」義は“了2”の基本的意味である。したがって、「変化/出来事生起」義を生み出すための構文的条件を明らかにすることは、非中国語母語話者が容認度の高い“了2”構文を作るのに大きく役立つと考えられる。

<注>

1. 本論文は、“了2”が含まれる文を“了2”構文と呼ぶことにする。
2. ここの“事件”という用語は中国語表記であり、「事件」という日本語表記ではない。
3. (1a)のB文と(1b)のB文は、彭利貞(2011:215)の原文“可以了。(可以走了。/可以。/走吧!/走!/*走了。)”を書き換えたものである。
4. 本論文で述べている語尾的な補語は結果補語と方向補語である。詳細については、第2章2.3節の説明を参照のこと。
5. 中国語の場合、動詞だけでなく、動詞以外の品詞も中国語の述語になることができる(朱德熙1982:102-108)。
6. 朱德熙(1982:209-210)、王维贤(1997:171-187)、吕叔湘(1999:353-354)から分かるように、“了1”と“了2”が隣接すれば、形式的には1つだけの“了”で表記される。
7. 先行研究でしばしば言及される「出現」(出现)、「実現」(实现)、「発生」(发生)などの意味概念を「出来事生起」と呼ぶ理由については、第6章6.2節の説明を参照のこと。
8. (8b)の“他唱歌唱得真好听了。”という平叙文の冒頭には「?」を付けているが、(12)の“他唱歌唱得真好听了?”という疑問文の冒頭には「?」を付けていないという相違について注意されたい。本論文の「凡例」で説明したように、冒頭に「?」が付けられる文は、特定の発話場面が付与されなければ理解され難いが、もともと統語的には成立する文である。特定の発話場面が付与されない“他唱歌唱得真好听了。”という平叙文において、その“了2”がどの文成分と意味的に連結しやすいのかという問題を検討するためには、まず“他唱歌唱得真好听了。”という平叙文を「特定の発話場面で理解されやすい文」として想定しなければならないのである。ただし、(12)においては、“他唱歌唱得真好听了。”という平叙文の代わりに、“他唱歌唱得真好听了?”という疑問文を「特定の発話場面で理解されやすい文」として想定しているのである。そのため、(12)の疑問文の冒頭には「?」を付けない。
9. 詳細については、荒川(1981:70-79)、岳中奇(2000:19-27)、陈荣杰(2005:136-138)、顾阳(2007:22-38)、金立鑫・于秀金(2013:3-14)、金立鑫・杜家俊(2014:140-153)、王冬梅・姜炫先(2015:45-52)などを参照のこと。
10. 詳細については、岳中奇(2000:19-27)、黎莉・胡弢(2004:126-128)、陈荣杰(2005:136-138)、顾阳(2007:22-38)、金立鑫・于秀金(2013:3-14)、金立鑫・杜家俊(2014:140-153)などを参照のこと。
11. 原文は、“无限短暂，接近重合”である。
12. (31)は、杉村(2009:5)の原文“那天晚上下雨了吗?”を書き換えたものである。
13. (55)の対話内容は、肖治野・沈家煊(2009:522)の原文“亲属说:‘来，吃饭了!’病人最后说:‘好，吃饭了。’”を書き換えたものである。
14. (57)は、劉綺紋(2006:106)の原文“(近接未来に起きることを予想される事態を発話者が発話する)打死人了!别打了!”を書き換えたものである。
15. 示差的特徴という概念の詳細については、第7章7.2節の説明を参照のこと。
16. (58)は、杉村(2009:4)の原文“小李在厨房包饺子了。”を書き換えたものである。
17. (67)のB文は、杉村(2009:4)の原文は“小李在厨房包饺子了，你赶紧去帮他吧。”を書き換えたものである。
18. 鄧宇陽(2018:58-66)が論じたように、別の発話場面が付与されない場合、「静相形式+“了2<行為>”」構文が表す「変化」義は、「不+静相形式」という否定命題が指示する状態から「静相形式」が指示する状態へ変化したということである。

第12章 文末助詞“了”の外延的意味の意味機能拡張

12.1 はじめに

「“了”の問題を解決するための試みは“了”が指示する時間的關係、モダリティ、モードなどの側面から行われてきたが、行き詰まっている現状である」¹(張黎 2010:19)。“了”の諸問題は「“了”の基本的意味とその意味機能の拡張」²に由来する可能性が大きいと指摘されている(張黎 2010:18)。また、“了₂”の意味と機能を別々で孤立的に論じるべきではなく、“了₂”の意味と機能を結合した上で“了₂”の諸問題を検討し直す必要があるとも指摘されている(何文彬 2013:10-12)。本章は、“了₂”の一部の語用論的機能が“了₂”の外延的意味の意味機能の拡張、つまり「変化」義、「出来事生起」義、「再肯定・再否定」義、「要聴」義などの外延的意味を伝える機能の拡張に由来するということを論証する。

12.2 婉曲という語感を伝える機能

“了₂”に婉曲という語感を伝えるという語用論的機能がある³。肖治野・沈家煊(2009:518-527)は、次の命令文(1a)よりも、命令文(1b)のほうが婉曲であると指摘する。

- (1) a. 你把枪放下! (肖治野・沈家煊 2009:520)
(銃を置け!)
- b. 你把枪放下了! (肖治野・沈家煊 2009:520)
(銃を置けよ!)

(1b)のほうが婉曲である理由について、肖治野・沈家煊(2009:518-527)はモード(mood)の観点から次のように分析している。平叙文のモードは命令文のモードよりも婉曲であり、“了₂”は平叙文のモードを伝える傾向がある。そのため、“了₂”が含まれない命令文としての(1a)よりも、“了₂”が含まれる(1b)のほうが婉曲であると指摘されている。

蕭国政(2000:568-576)は、次の(2b)の下線部の発話“不了”((食べ)ないね)のほうが(2a)の下線部の発話“不”((食べ)ない)よりも婉曲であると指摘する。“不了”((食べ)ないね)と“不”((食べ)ない)は両方とも平叙文であるため、“不了”((食べ)ないね)が“不”((食べ)ない)よりも婉曲である理由について、肖治野・沈家煊(2009:518-527)で提起されているモード説では説明できない。

- (2) a. A: 大叔, 吃了饭再走!
B: 不。 (萧国政 2000:570)
(A: おじさん、ご飯を食べておいてから行こうよ!)
- b. A: 大叔, 吃了饭再走!
B: 不了。 (萧国政 2000:570)

(A: おじさん、ご飯を食べておいてから行こうよ!)

(B: 食べないね。)

劉綺紋(2006:201-244)は“了2”の「再選択」意識、つまり本論文で述べている“了2<認識>”の「再肯定・再否定」義の主観性から、命令文や平叙文の“了2”の婉曲的語感の形成要因を説明している。つまり、「了」を用いると、その事態は発話者が何らかの判断や確認を行った結果として述べられることになる。それが対人関係領域で用いられると、その発話はドライでクールな突き放した発話ではなく、発話者が内容を吟味をして述べた、より心を込めた発話となる」(劉綺紋 2006:241)。そのため、“了2”は婉曲という語感を伝えると主張されている。

“了2”の婉曲的語感の形成要因に関する説明は視点によって異なる。本論文は“了2”の「変化」義から説明する。まず、(1)を考えよう。彭利貞(2009:508)によれば、「何の命令文でも義務モダリティ(deontic modality)が内包されるものである」⁴ので、(1a)の“你把枪放下!”(銃を置け!)という命令文は、義務モダリティが内包される平叙文「あなたは今この場で銃を持ってはいけない」に解釈されてもよいということが分かる。(1a)は、「あなたは今この場で銃を持ってはいけない」という意味を端的に伝えるだけである。すなわち、「あなたは銃を持つ」ということを端的に否定するだけである。それに対して、(1b)の“你把枪放下了!”(銃を置けよ!)という命令文は、「変化」義で解釈されると、「あなたは今この場では銃を持ってはいけないという状態に変わった」という意味になる。このような「変化」的意味には、「あなたは特定の場合では銃を持ってもいい」という「変化」前の状態が含意される。すなわち、(1b)は、「あなたは銃を持つ」ということを端的に否定するのではなく、ある程度肯定した上で否定する、もしくは間接的に否定するということである。そもそも間接的に否定することが端的に否定することよりも婉曲的語感を伝えやすいので、“了2”が含まれる(1b)は(1a)よりも婉曲的語感を伝えやす。また、(2)も考えよう。(2a)は、BさんがAさんの意見を聞いてすぐ端的に否定するというイメージを伝える。(2b)は、「変化」義で解釈されると、「私は食べないで行くという考え方に変わった」という意味になる。このような「変化」的意味には、「私は食べておいてから行くと考えたことがあるけど」という「変化」前の考え方が含意される。すなわち、(2b)は、「食べておいてから行こう」というAさんの勧めを端的に否定するのではなく、ある程度考えて肯定した上で否定する、もしくは間接的に否定するということである。間接的に否定することは、「～する意志があったがやめた」という婉曲でより丁寧な断りを表す(張文青 2012:116)。

このように、“了2”の婉曲的語感は、“了2”の行為域の意味機能の拡張、つまり「変化」義を伝える機能の拡張に由来するということが分かる。

12.3 任意列挙する機能

“了2”に任意列挙という語用論的機能がある⁵。例えば、“了2”が付与される(3a)、(4a)は任意列挙の語感を伝えるが、“了2”が付与されない(3b)、(4b)は事物を網羅的に列挙するという語感を伝える。

- (3) a. 桌子了, 椅子了, 都齐备了。 (王维贤 1997:176)
 (机や椅子など、すべて揃った。)
- b. 桌子, 椅子, 都齐备了。
 (机と椅子がすべて揃った。)
- (4) a. 草莓了, 橘子了, 香蕉了, 糖分都很高⁶。 (張文青 2012:117)
 (いちごやミカン、バナナは皆糖分が高い。)
- b. 草莓, 橘子, 香蕉, 糖分都很高。
 (いちご、ミカン、バナナは皆糖分が高い。)

本論文は、“了2”の任意列举の語感の形成要因が“了2<認識>”の「再肯定・再否定」義に直結すると主張する。次に(3)を例にとって説明する。(3a)の“了2”は「変化」義も「出来事生起」義も表さないので、第9章9.3節で述べた「変化」義、「出来事生起」義、「再肯定・再否定」義、「要聴」義の「重なる」関係が示すように、(3a)の“了2”は「再肯定・再否定+要聴」義を表すしかない。つまり、(3a)の“了2”は“了2<行為>”ではなく、“了2<認識>”と“了2<言語>”である。第7章7.2節で述べたように、“了2<認識>”の「再肯定・再否定」義の形成メカニズムは、人間が「逡巡」という「心的スキニング」の過程を経てから何らかの結果を「再選択」という認知プロセスである。つまり、心理面における複数の「選択肢」からある「選択肢」を選び出した後、それらの「選択肢」に対して「逡巡」してから再び同一の「選択肢」を選び出すということである。(3a)の“桌子”(机)と“椅子”(椅子)が“了2<認識>”で標記されるので、その両者は何らかの複数の「選択肢」の集合から選び出された結果に過ぎないということが分かる。つまり、(3a)の“了2<認識>”構文は、何らかの「選択肢」の集合の存在を暗に含意する。論理的には、その集合に含まれる事物の数量は必ず“桌子”(机)と“椅子”(椅子)という両者より大きいかまたは等しい。つまり、その集合に含まれる事物の数量は、発話者に挙げられる事物の数量より大きいという可能性があくまでも存在する。このような可能性の存在こそが、(3a)が事物を網羅的に列举しないという語感を伝える要因、すなわち任意列举の語感を伝える要因につながる。ところで、以上の要因説明は加藤(2006:29-42)が提起している“了2”の意味機能の集合論モデルと合致する。“了2”の意味機能の集合論モデルとは、“了2”で標記される「量」という「部分」が、予測される「量」や想定される「量」を含んだ『可能な量』全体」という「集合」に属するという「部分集合」モデルである。“桌子”(机)と“椅子”(椅子)は、“了2”で標記されると、予測される「量」や想定される「量」を含んだ『可能な量』全体」という「集合」に属すると捉えられる。その『可能な量』全体」という「集合」が“了2”の任意列举の語感をもたらすのである。

(3b)には、“了2”が付与されないので、複数の「選択肢」の集合というものの存在が含意されない。そのため、(3b)から、聞き手は複数の「選択肢」の集合というものの存在は捉えず、発話者に挙げられる“桌子”(机)と“椅子”(椅子)の存在だけを捉える。つまり、“桌子”(机)と“椅子”(椅子)しかない想定しやすいため、“了2”

が付与されない(3b)は事物を網羅的に列挙するという語感を伝えやすい。

このように、“了2”の任意列挙という語用論的機能は、“了2”の認識域の意味機能の拡張、つまり「再肯定・再否定」義を伝える機能の拡張に由来するということが分かる。

12.4 指示・命令する機能

“了2”に指示・命令するという語用論的機能がある⁷。本論文は、この機能が“了2<言語>”の「要聴」義に関わると主張する。

通常、発話者が聞き手に何らかの指示・命令を実行してもらうための第一歩は、まず聞き手の、発話者の発話に対する関心を喚起することである。つまり、「何かをしてください」という指示・命令は、「まず次の発話内容をきちんと聞いてほしい。何かをしてください」という意味に解釈されてもよい。“了2<言語>”は、「あなたは私の発話を聞いてください」、「あなたは私の発話に注意してください」などの「要聴」義を表すため、聞き手の、発話者の発話に対する関心を喚起することができる。つまり、“了2<言語>”は何らかの指示・命令と意味的に相性がよい。したがって、次の(5b)が示すように、“了2”はしばしば命令文に用いられる。

- (5) a. 你把枪放下! (=(1a))
(銃を置け!)
- b. 你把枪放下了! (=(1b))
(銃を置けよ!)

このように、指示・命令するという“了2”の語用論的機能は、“了2”の言語域の意味機能の拡張、つまり「要聴」義を伝える機能の拡張に由来するということが分かる。

12.5 聞き手の反応を期待する機能

“了2”に聞き手の反応を期待するという語用論的機能がある⁸。本論文は、この機能が“了2<言語>”の「要聴」義に関わると主張する。

「あなたは私の発話を聞いてください」などの「要聴」義において、「聞き手が自分の発話を無視せず、きちんと耳を傾ける」という聞き手の反応を発話者が期待するという意味合いや、「聞き手が自分の発話にしたがって行動する」という聞き手の反応を発話者が期待するという意味合いが含意される。例えば、次の(6)が示す売り声に用いられる“了2”は、「お客様の注意、関心を喚起してから、お客様が自分のリンゴを買う価値について考えてくれたり、見に来てくれたり、対話してくれたり、買ってくれたりする」などの反応を販売者が期待するという意味合いを伝える。

- (6) (叫売声) 苹果了, 苹果了。 (周一民 2011:96)
((売り声) リンゴ、リンゴはいかがですか。)

また、王光全・柳英緑(2006:25-30)によれば、次の(7a)に用いられる“了2”は、「周り

の人々の注意、関心を喚起してから、周りの人々が適切な措置をとる」などの反応を発話者が期待するという意味合いを伝える。しかし、次の(7b)に用いられる“了1”はそのような意味合いを伝えないと指摘される。

- (7) a. 二楼着火了! (王光全・柳英緑 2006:27)
(二階は火事だよ!)
b. 二楼着了火! (王光全・柳英緑 2006:28)
(二階は火事だ!)

第8章8.4節で述べたように、“了2<言語>”の「要聴」義は聞き手指向性、相互性、「対話」意識などの間主観性を示す。聞き手の反応を期待するという語用論的機能は、まさに“了2<言語>”の間主観性が特定の発話場面によって具体化された結果である。

このように、聞き手の反応を期待するという“了2”の語用論的機能は、“了2”の言語域の意味機能の拡張、つまり「要聴」義を伝える機能の拡張に由来するということが分かる。

12.6 報告する機能と解説する機能

“了2”は報告するという語用論的機能⁹と、解説するという語用論的機能¹⁰がある。本論文は、この2つの機能が“了2<言語>”の「要聴」義に関わると主張する。

発話者が聞き手に新情報を報告したり、問題を解説したりするための第一歩は、聞き手が自分の発話を聞くことを確保することである。聞き手が聞くことを確保するための手段は様々あるが、「聞いてください」という指示を出すことがその1つである。「聞いてください」という意味はもともと“了2<言語>”の「要聴」義である。そのため、発話者は聞き手に何かを報告したり解説したりする際、しばしば“了2”を用いる。例えば、次の(8)では、発話者はリンゴ販売中という情報を周りの人々に報告するという意図があるので、「聞いてください」という「要聴」義を表す“了2”を用いる。

- (8) (叫売声) 苹果了, 苹果了。 (= (6))
((売り声) リンゴ、リンゴはいかがですか。)

また、次の(9)において、ナレーターは博物館のある模型が聴衆に分かってほしいという意図があるので、聴衆に詳しく解説する必要がある。そのため、「聞いてください」という「要聴」義を表す“了2”を用いる。

- (9) (博物館里馆员面对面为观众讲解) 对着我这边呢就是一个船首，船首呢坐了三个人，其中中间一位呢就是苏东坡先生了。(刘娅琼 2016:665)
((博物館でナレーターが聴衆に解説をしている場面) 私が直面しているのは船頭です。船頭には三人座っていますよね。 その真ん中の方が蘇軾です。)

第8章8.4節で述べたように、“了2<言語>”の「要聴」義は聞き手指向性、相互性、「対話」意識などの間主観性を示す。報告する機能と解説する機能は、まさに“了2<言語>”の間主観性が特定の発話場面によって具体化された結果である。

このように、報告するという語用論的機能も解説するという語用論的機能も、“了2”の言語域の意味機能の拡張、つまり「要聴」義を伝える機能の拡張に由来するということが分かる。

12.7 対話者共有情報を修正する機能

“了2”に対話者共有情報を修正するという語用論的機能がある¹¹。第9章9.3節で述べた「変化」義、「出来事生起」義、「再肯定・再否定」義、「要聴」義の「重なる」関係が示すように、実際の使用では、“了2”は単に“了2<行為>”の「変化」義、“了2<行為>”の「出来事生起」義、“了2<認識>”の「再肯定・再否定」義、“了2<言語>”の「要聴」義のいずれか一方のみを表すのではなく、「変化+再肯定・再否定+要聴」義、「出来事生起+再肯定・再否定+要聴」義、「再肯定・再否定+要聴」義という3種類の複合的意味のいずれかを表す。本論文は、対話者共有情報を修正する機能が、“了2<行為>”の「変化」義と“了2<言語>”の「要聴」義の相互作用によって生じるということを主張する。

まず、次の(10)を考えよう。(10)は、町で偶然に友達の李さんに会った王さんが、「昨日張さんにまじめに質問したけど、彼に勝手に答えられた」という新しい情報を李さんに伝えているという発話場面である。(10)が示す発話場面において、下線部の“了1”構文¹²の使用は自然であるが、下線部の“了2”構文¹³の使用は不自然である。

(10) 昨天老王在街上偶然碰到朋友小李，老王想告诉小李以下一个新信息：“我昨天很严肃地问小张一个问题，但是他回答我的态度显得很随便”。于是老王对小李说：“我昨天很严肃地问了小张一个问题，结果，{他随随便便地回答了我。/#他随随便便地回答我了。}”

(王さんは町で偶然に友達の李さんに会った。「昨日張さんにまじめに質問したが、彼に勝手に答えられた」という新しい情報を李さんに伝えようとするので、次の発話をした。「昨日張さんにまじめに質問したけどね、意外と、{彼に勝手に答えられた。/#彼に勝手に答えられた(+了2)。}」)

下線部の“了2”構文の使用が不自然である理由は、“了2”の対話者共有情報を修正する機能に関係しているのである。第11章11.5節で論じたように、(10)の下線部の“了2”構文は、第10章で提起された“了2<行為>”の「変化」義の形成条件を満たす。具体的には、「昔の何らかの態度から現在の“随随便便地”(勝手に)の態度に変わった」という「変化」義を表す。また、第9章9.3節で述べた「変化」義、「出来事生起」義、「再肯定・再否定」義、「要聴」義の「重なる」関係が示すように、実際の使用では、“了2”はどのような場合においても常に「あなたは私の発話に注意してください」などの「要聴」義を表す。このように、(10)の下線部の“了2”構文は「変化」義と「要聴」義を同時に表すということが分かる。つまり、(10)の下線部の“了2”構文は、「張さんは昔の何らか

の態度から現在の“随随便便地”（勝手に）の態度に変わった』という情報に『注意してください』という意味を表す。ところで、通常「張さんは昔の何らかの態度から現在の“随随便便地”（勝手に）の態度に変わった」という「変化」的信息を聞き手の李さんに伝えようとするれば、その「変化」的信息だけを口に出せば十分であるが、わざわざ聞き手の李さんを「注意」する必要はない。わざわざ聞き手を「注意」という意味を追加すれば、その「変化」的信息は何らかの形で聞き手にも関係しているというニュアンスも伝えるのである。それでは、もし、「張さんの昔の態度が発話者の王さんと聞き手の李さんの共有情報である」ということを想定すれば、その「変化」的信息は聞き手の李さんにも関係しているということが分かる。つまり、『張さんの昔の態度が変わった』という『変化』的信息は李さんがまだ知らないので、李さんを『注意』する必要がある」という形で、その「変化」的信息は聞き手の李さんに関係しているということである。しかし、(10)の発話場面においては、「張さんの昔の態度が王さんと李さんの共有情報である」という情報は開示されないので、下線部の“了2”構文の使用は不自然である。

次の(11)の発話場面においては、「張さんの昔の態度が王さんと李さんの共有情報である」という情報が開示される。そのため、(11)の下線部の“了2”構文の使用は自然である。

- (11) 朋友小李非常清楚，小张一直都很尊敬老王，对老王的提问总是会认真地回答。可是，昨天的一件事让老王感觉很意外。老王觉得有必要跟小李说说这个事情。老王说：“我昨天很严肃地问了小张一个问题。”小李说：“小张还是一如既往地很认真地回答了你的问题吧？”老王说：“没有，他的态度变了，他随随便便地回答我了。”
(張さんは王さんのことをいつも尊敬し、王さんの質問に対していつもまじめに答える。この事柄は友達の李さんもよく知っている。しかし、昨日意外なことがあった。王さんは昨日のことを李さんに伝えようと考えている。そして、王さんは、「昨日張さんにまじめに質問したけどね。」と李さんに言った。李さんは、「張さんはいつものとおりにまじめに答えてくれたらう？」と確認した。王さんは、「いや、彼の態度が変わった。彼に勝手に答えられたんだ。」と返事した。)

(11)において、王さんと李さんの共有情報である「張さんの昔の態度」が「変化」したので、王さんは、「変化」義と「要聴」義を同時に表すことができる“了2”を用いて、李さんの「注意」をその「変化」的信息に引き付ける。

このように、(10)と(11)の下線部の“了2”構文の容認度は、“了2”の対話者共有情報を修正する機能によって決められるということが分かる。また、対話者共有情報を修正するという語用論的機能は、“了2”の行為域と言語域の意味機能の拡張、つまり「変化+要聴」義を伝える機能の拡張に由来するということも分かる。

12.8 新情報を伝える機能と旧情報を伝える機能

先行研究では、“了2”に未知情報・新情報を伝えるという語用論的機能があるとよく指摘される¹⁴。しかし、郭穎侠(2003:215-232)、劉綺紋(2006:180-183)、刘娅琼

(2016:665-677)、饶宏泉(2018:77)は“了 2”が既知情報・旧情報を伝えるという語用論的機能もあると主張する。例えば、刘娅琼(2016:665-677)は、次の(12)と(13)の“了 2”が新情報ではなく、旧情報を伝えると指摘している。

(12) (博物館里馆员面对面为观众讲解)对着我这面呢就是一个船首，船首呢坐了三个人，其中中间一位呢就是苏东坡先生了。 (= (9))
((博物館でナレーターが聴衆に解説をしている場面) 私が直面しているのは船頭です。船頭には三人座っていますよね。その真ん中の方が蘇軾です。)

(13) (博物館里馆员面对面为观众讲解)那我们了解完船首部分，我们去看一下船中部分了。 (刘娅琼 2016:667)
((博物館でナレーターが聴衆に解説をしている場面) 船頭の部分についての説明が終わりました。船の中央部を見ましょう。)

(12)、(13)に用いられる“了 2”は、「教科書に記載される『事態の変化』という意味で捉えられれば、誤用であるように見えるが、現実的には、博物館などで、個別のナレーターではなく、多数のナレーターに用いられる。なお、聴衆にとって、それらの“了 2”の使用が不自然であることは感じられていない」¹⁵(刘娅琼 2016:665)。また、刘娅琼(2016:674)は、「もともと『蘇軾』は中国人にとってなじみのある有名人であるため、発話者は“了 2”を用いると、聞き手の注意を蘇軾のいる場所に引き付け、聞き手の既知情報を活性化させる」¹⁶というように、(12)の“了 2”の旧情報を伝える機能を説明している。もし、“了 2”に旧情報を伝える機能があるとすれば、その旧情報を伝える機能と新情報を伝える機能の矛盾をどのように解消すればよいのであろうか。

本論文は、新情報を伝える機能が、“了 2<行為>”の「変化/出来事生起」義と“了 2<言語>”の「要聴」義の相互作用によって生じるということを主張する。“了 2”に新情報を伝える機能があると主張する研究は、いずれも「変化/出来事生起」義を表す“了 2”を分析対象としたものである¹⁷。例えば、新情報を伝えると考えられる(14)と(15)は(張文青 2012:105-122、金立鑫・邵菁 2010:319-325)、それぞれ本論文で規定する“了 2<行為>”の「変化」義と“了 2<行為>”の「出来事生起」義を表す。

(14) 他二十岁了。 (張文青 2012:116)
(彼は二十歳になった。)

(15) 他突然回来取东西了。 (金立鑫・邵菁 2010:324)
(彼は突然自分のものを取りに戻ってきた。)

第 6 章 6.2 節で述べたように、「変化」義とは、「何らかの内容から、“了 2”構文の特定の文成分が指示する『静相』義¹⁸にすでに変わった」という意味であり、「出来事生起」義とは、“了 2”構文の述語が指示する出来事がすでに起こった」という意味である。こ

の2つの意味記述からみれば、「変化」義も「出来事生起」義も何らかの非現実性(irrealis)から現実性(realis)¹⁹へ「転換」したという認知様式を示すということが分かる。例えば、「変化」義は「変化」という動態が客観的、現実的な世界においてすでに生じたということを示し、「出来事生起」義はある「出来事」が客観的、現実的な世界においてすでに生じたということを示す。また、第9章9.3節で述べた「変化」義、「出来事生起」義、「再肯定・再否定」義、「要聴」義の「重なる」関係からみれば、(14)、(15)の“了2”は、“了2<行為>”の「変化/出来事生起」義だけでなく、“了2<言語>”の「要聴」義、つまり「聞いてください」、「注意してください」などの意味も表すということが分かる。したがって、(14)、(15)の“了2”は、「聞いてください。何らかの動態が客観的、現実的な世界においてすでに生じた」という意味を表すということが分かる。発話者がわざわざ聞き手の注意を「何らかの動態が客観的、現実的な世界においてすでに生じた」ということに引き付けるということは、発話者の次のような想定を伝えやすい。それは、「聞き手が、何らかの動態が客観的、現実的な世界において生じる前の状態を知っているかもしれないが、すでに生じたということは知らないのであろう」という想定である。このように、“了2<行為>”の「変化/出来事生起」義に内包される現実性、つまり「何らかの動態が客観的、現実的な世界においてすでに生じた」ということは、“了2<言語>”の「要聴」義と相互作用してから、聞き手にとっての未知情報・新情報として扱われやすくなるということが分かる。

一方、本論文は、“了2”の旧情報を伝える機能が“了2<認識>”の「再肯定・再否定」義に由来すると主張する。それはなぜであろうか。まず、“了2”に旧情報を伝える機能があると主張する研究には郭穎侠(2003:215-232)、劉綺紋(2006:180-183)、刘娅琼(2016:665-677)などがあるが、これらの研究で取り上げられる例文はいずれも本論文で規定する“了2<行為>”の「変化/出来事生起」義を表さないものである。例えば、旧情報を伝えると考えられる(12)と(13)は「変化/出来事生起」義を表さないものである。「変化/出来事生起」義を表さないので、第9章9.3節で述べた「変化」義、「出来事生起」義、「再肯定・再否定」義、「要聴」義の「重なる」関係からみれば、(12)と(13)の“了2”は“了2<認識>”の「再肯定・再否定」義と“了2<言語>”の「要聴」義を同時に表すということが分かる。つまり、(12)と(13)の“了2”は“了2<認識>”と見なされることができる。“了2<認識>”の「再肯定・再否定」義に内包される「再選択」意識が働くことから、“了2<認識>”で標記される内容は人間の知覚に2回現れるということが分かる。同一の内容が人間の知覚に2回現れると、既知情報・旧情報として捉えられやすくなる。要するに、“了2<認識>”の「再肯定・再否定」義に内包される「再選択」意識が、“了2”の旧情報を伝える機能の認知的根拠である。

このように、新情報を伝えるという語用論的機能は、“了2”の行為域と言語域の意味機能の拡張、つまり「変化/出来事生起+要聴」義を伝える機能の拡張に由来するが、旧情報を伝えるという語用論的機能は、“了2”の認識域の意味機能の拡張、つまり「再肯定・再否定」義を伝える機能の拡張に由来するということが分かる。

12.9 他のいわゆる語気や語用論的機能に関する説明

先行研究では、第5章で取り上げられた語用論的機能と、本章12.8節までで取り上げられた語用論的機能の他に、肯定・決定・確定・確認する機能²⁰、注意する機能²¹、相互作用する機能²²、強調・感嘆という語感を伝える機能²³などのいわゆる「語用論的機能」も指摘される。

まず、第7章7.2節で論じたように、文法化が進むにつれ、肯定・決定・確定・確認する機能はどのような場合においても常に表され、“了2”構文以外の発話場面や文脈から推論されなくても捉えられるようになっており、“了2”の言内の意味・言語的意味として定着している。そのため、第7章は、肯定・決定・確定・確認する機能を“了2”の認識域の「再肯定・再否定」義に「コード化」²⁴しており、“了2”の言内の意味・言語的意味の意味要素として位置づけている。言い換えれば、本論文は、肯定・決定・確定・確認する機能を“了2”の語用論的機能や語用論的意味としては扱わない。

また、第7章7.2節で述べたように、“了2”の認識域の言語的意味は「再肯定・再否定」義である。「再肯定・再否定」義とは、「発話者の思考過程を含意する動態として、発話者はある発話をした後、その発話で肯定・否定されている意味論的内容、統語論的内容、語用論的内容、音韻的内容などの任意のカテゴリーの内容に対して、再び肯定的・否定的な態度を示す」という意味である。具体的には、「ある発話の末尾に添えられる『はい』、『うん』、『そう(なんだ)』などの間投詞やフレーズの意味を指す」。ある発話で肯定・否定されている内容に対して、「はい」、「うん」、「そう(なんだ)」などの間投詞やフレーズを用いて再び肯定的・否定的な態度を示すということは、その発話で肯定・否定されている内容を強調したり感嘆したりするという事に相当する。そのため、強調・感嘆という語感を伝える機能は、“了2”の認識域の「再肯定・再否定」義の意味要素として見なされてもよい。このように、本論文は、強調・感嘆という語感を伝える機能を、“了2”の語用論的機能や語用論的意味としては扱わず、“了2”の言内の意味・言語的意味の意味要素として扱う。

さらに、第8章8.2節、8.4節で述べたように、“了2”の言語域の意味は「要聴」義である。「要聴」義は「あなたは私の発話を聞いてください」、「あなたは私の発話に注意してください」などの意味を指し、聞き手指向性、相互性、「対話」意識などの間主観性を示す。このように、第8章は、注意する機能と相互作用する機能を“了2”の「要聴」義に「コード化」しており、“了2”の言内の意味・言語的意味の意味要素として位置づけているということが分かる。そのため、本論文は、注意する機能と相互作用する機能を“了2”の語用論的機能や語用論的意味としては扱わず、“了2”の言内の意味・言語的意味の意味要素として扱う。

12.10 終わりに

以上、“了2”の語用論的機能と“了2”の外延的意味の関係を論じた結果、“了2”の一部の語用論的機能が“了2”の外延的意味の意味機能の拡張に由来するという事を明らかにした。

〈注〉

1. 原文は、“试图只在时体层面、模态层面或语态层面解决‘了’的问题的尝试是注定不会成功的”である。
2. 原文は“‘了’的基本语义及其语义功能的扩张”である。
3. 詳細については、蕭国政(2000:568-576)、刘月华他(2001:386)、胡清国(2003:99-104)、张兰英(2005:132-134)、劉綺紋(2006:201-244)、肖治野・沈家煊(2009:518-527)、李洁(2009:89-93)、邓隼(2010:74-77)、彭利贞(2011:211)、張文青(2012:105-122)、何文彬(2013:10-18)、李思沅(2019:64-68)などを参照のこと。
4. 原文は、“所有祈使句都是道义情态的载体”である。
5. 詳細については、吕叔湘(1999:358)、宋绍年・李晓琪(2000:562-567)、刘月华他(2001:427-428)、劉綺紋(2006:239-240)、張文青(2012:105-122)、何文彬(2013:10-18)、李思沅(2019:64-68)などを参照のこと。
6. (4)は、張文青(2012:117)の原文“什么草莓了，橘子了，香蕉了糖分都很高。”を書き換えたものである。
7. 詳細については、Chao(1968:354-356)、武果・吕文华(1998:13-21)、丁声树他(1999:211-212)、刘月华他(2001:383)、高顺全(2006:60-66)、肖治野・沈家煊(2009:518-527)、黄伯荣・廖序东(2011:31-32)、張文青(2012:105-122)、何文彬(2013:10-18)、叶琼(2014:85-91)などを参照のこと。
8. 詳細については、武果・吕文华(1998:13-21)、谭春健(2004:26-31)、Vandenberg and Wu(2006:100-137)、王光全・柳英绿(2006:25-30)、叶琼(2014:85-91)などを参照のこと。
9. 詳細については、王光全・柳英绿(2003:25-30)、金立鑫・邵菁(2010:319-325)、何文彬(2013:10-18)、金立鑫・于秀金(2013:3-14)、杨凯荣(2013:31-43)、陈前瑞・胡亚(2016:66-74)などを参照のこと。
10. 詳細については、刘娅琼(2016:665-677)を参照のこと。
11. 詳細については、Li 他(1982:117-138)、沈开木(1987:4-19)、刘勋宁(2002:70-79)、谭春健(2004:26-31)、劉綺紋(2006:207-208)、Vandenberg and Wu(2006:60-86、100-137、169-211)などを参照のこと。
12. 本論文は、“了1”が含まれる文を“了1”構文と呼ぶことにする。
13. 本論文は、“了2”が含まれる文を“了2”構文と呼ぶことにする。
14. 詳細については、Chao(1948:24-25、1968:354)、朱德熙(1982:209)、竟成(1993:52-57)、刘勋宁(1998:46)、刘月华他(2001:383)、王学群(2003:51-71、2008:75-90)、谭春健(2003:73-80、2004:26-31)、肖治野・沈家煊(2009:518-527)、杉村(2009:1-12)、金立鑫・邵菁(2010:319-325)、張文青(2012:105-122)、周小兵・欧阳丹(2014:8-15)、陈前瑞・胡亚(2016:66-74)、黄瓚辉(2016:42-58)などを参照のこと。
15. 原文は、“这些用在句尾的‘了’，很难用‘表示事态变化’进行理解或解释。按照教科书上的语法理解，这些‘了’的使用是多余甚至错误的。但是它们较为普遍地存在于博物馆多名讲解员的现场讲解词中，不是某个讲解员的独特语言特征。而且从听众的反应来看，并不觉得这类‘了’造成语法不通的问题”である。
16. 原文は、“‘苏东坡’是中国人耳熟能详的名字，因此说话人用‘其中中间一位就是苏东坡先生了’来激活听者的已知信息，并提示他们‘苏东坡就在那里’”である。
17. 詳細については、Chao(1948:24-25、1968:354)、朱德熙(1982:209)、竟成(1993:52-57)、刘勋宁(1998:46)、刘月华他(2001:383)、谭春健(2003:73-80、2004:26-31)、肖治野・沈家煊(2009:518-527)、杉村(2009:1-12)、金立鑫・邵菁(2010:319-325)、周小兵・欧阳丹(2014:8-15)、陈前瑞・胡亚(2016:66-74)、黄瓚辉(2016:42-58)を参照のこと。
18. 第2章2.2節で規定したように、「静相」義とは「動詞的述語が示す内的属性、現象、態勢、また、動詞的述語以外の文成分が示す意味」を指す。
19. ここで、彭利贞(2005:39)、陈振宇(2006:11-12)、邹海清(2014:34-45)、町田(2019:46-62)などに基づいて、現実性と非現実性という概念を簡単に説明する。現実性とは、客観的、現実的な世界において、ある物事がすでに現れたことや存在していることを指示する属性である。「了2<行為>」の「変化/出来事生起」義に関する規定からみれば、「了2<行為>」の「変化/出来事生起」義は何らの現実性を示すということが分かる。「変化/出来事生起」義の現実性は、「変化/出来事生起」という動態の現実性を指すが、「了2<行為>」構文における事象の現実性を指すわけではない。「了2<行為>」構文における事象の現実性は過去時制、現在時制に関係しているが(陈振宇 2006:11)、「変化/出来事生起」

という動態自身の現実性は必ずしも時制に関係しているとは限らない。この問題について、第 13 章 13.3 節で詳しく論じる。

20. 「肯定」、「決定」、「確定」、「確認」という主観的動態について、呂叔湘(1982:261)、王力(1984:216-219、1985:228-232)、岳中奇(1997:14-17)、刘月华他(2001:384)、史有為(2002:145-158)、孙汝建(2005:76-80)、张兰英(2005:132-134)、高顺全(2006:60-66)、王伟(2006:89-90)、劉綺紋(2006:201-244)、胡建刚(2007:72-81)、張文青(2012:105-122)、彭小红・侯菲菲(2012:82-85)、陆方喆(2014:43-47)、叶琼(2014:85-91)などでは、“了 2”の語気・語用論的機能の一部として扱われるが、守屋(1995:259)、呂叔湘(1999:351)、吴凌非(2002:23-27)、彭小川・周芍(2005:136-141)、张云秋・王赛(2009:119-124)、何文彬(2013:10-18)などでは、“了 2”の言内の意味・言語的意味の一部として扱われる。
21. 詳細については、边勤奋(1996:118-121)、武果・吕文华(1998:13-21)、丁声树他(1999:214)、刘月华他(2001:383)、高顺全(2006:60-66)、王光全・柳英绿(2006:25-30)、劉綺紋(2006:106-109)、張文青(2012:105-122)、叶琼(2014:85-91)、刘娅琼(2016:665-677)、张国华(2017:208-209)、饶宏泉(2018:74-82)などを参照のこと。
22. 詳細については、王洪君他(2009:312-333)、肖治野・沈家焯(2009:518-527)、乐耀(2011:121-132)、方梅(2016:67-79)、徐晶凝(2016:74-84)、刘娅琼(2016:665-677)、佟一・罗米良(2016:94-105)、夏炎青(2017:77-78)などを参照のこと。
23. 詳細については、太田(1958:351)、王力(1985:228-232)、张志公(1991:164)、金立鑫(1998:105-119)、萧国政(2000:568-576)、高顺全(2006:60-66)、卢英顺(2012:23-29)、张立昌(2015:51-59)、娄雅楠(2016:55-56)、刘珍秀(2020:92-93)などを参照のこと。
24. ある文の意味を捉える手段には、発話場面や文脈から推論して意味を得るという語用論的手段もあれば、ある文の言語形式の内部にコード化された真理条件などの言語的意味・言内の意味をデコード化して意味を得るという意味論的手段もある(陈新仁 2015:841)。

第13章 文末助詞“了”の内包的意味と外延的意味からみる動相問題と時制問題

13.1 はじめに

本章は、“了 2”の内包的意味としての「転換」スキーマと、外延的意味としての「変化」義、「出来事生起」義、「再肯定・再否定」義、「要聴」義に基づいて、“了 2”の動相問題と時制問題に統一的な説明を試みる。

13.2 文末助詞“了”の内包的意味からみる文末助詞“了”の動相問題

先行研究において、“了 2”は純粋な語気助詞であるという主張が見られる¹。つまり、“了 2”は専ら何らかの語気やモダリティだけを表し、動相的意味という命題的意味は表さないということである。このような主張の影響で、“了 2”の動相的意味に触れる研究は非常に少ない。“了 2”の動相的意味に触れる先行研究は、“了 2”の動相的意味は何かという問題の考察だけにとどまり、“了 2”の動相的意味の形成メカニズム²、つまり“了 2”の動相的意味はどのように表されるのかという問題にはまだ触れていない。また、動相の観点からの“了 2”と“了 1”の意味的相違と構文的相違についても先行研究においてまだ究明されていない。

13.2.1 中国語の動相という文法カテゴリーのイメージ・スキーマ

第2章2.2節では中国語の動相という文法カテゴリーを動相的意味と動相形式に分類した。まず、第2章2.2節で規定した動相的意味とは、述語における裸動詞という部分が指示する事象が、ある仮定の時間軸に沿って展開してから表す起動的段階、進行的段階、完了的段階、結果的段階、持続的段階という5種類の動的段階である。つまり、動相的意味は起動的意味、進行的意味、完了的意味、結果的意味、持続的意味という5種類の意味に分けられる。また、第2章2.2節で規定した動相形式とは動相標識のことである。通常、動相的意味は特定の動相形式によって表される。起動相標識には“了 1”³、“起”、“起来”などの標識があり、進行相標識には動作の進行を表す“着”があり、完了相標識には“了 1”、“完”、完了を表す“过 1”があり、結果相標識には“了 1”、“成”、“光”、“掉”、“好”、“到”、“死”、“上”、“进”などの標識があり、持続相標識には静的状態の持続を表す“着”、経験的意味を表す“过 2”、裸動詞に後続する“有”などの標識がある。また、朱継征(2000:7-28)から明らかのように、起動相、完了相、結果相の認知様式は「点」的認知様式の1種であり、進行相、持続相の認知様式は「線」的認知様式の1種である。以上の分析に基づいて、中国語の動相という文法カテゴリーのイメージ・スキーマを次の図1で図示する。

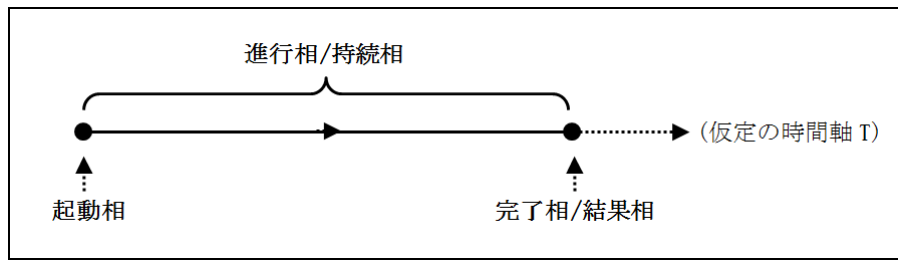


図1 中国語の動相のイメージ・スキーマ

中国語の動相のイメージ・スキーマには「点」、「線」、方向性などの認知的要素が含まれる。“了2”の「転換」スキーマにも「点」、「線」、方向性などの認知的要素が含まれるので、“了2”の「転換」スキーマは中国語の動相のイメージ・スキーマと類似している。この類似性について13.2.3節で詳しく説明する。

13.2.2 文末助詞“了”の動相的意味の語用論的特徴

動詞の語尾としての“了1”と異なって、“了2”はもともと語気助詞として位置づけられるので(刘月华他 2001:379)、通常典型的な動相標識と見なされない。例えば、Li 他(1982:135)が述べているように、動相という文法カテゴリーは動詞のカテゴリーに属するが、“了2”は文末助詞のカテゴリーに属し、動詞の語尾ではないので、なかなか動相標識と見なされ難い。ただし、刘月华他(2001:379)は、“了2”が動相的意味や時制的意味などの時間的意味を直接的には表さないが、間接的には表すと指摘している。つまり、もともと動相標識でない“了2”は直接的に動相的意味を表さないが、特定の発話場面に用いられると、特定の動相的意味を表すということである。特定の発話場面に用いられる“了2”はどのような動相的意味を表すのかについて、金立鑫(2003:38-48)、叶步青(2000:323-329)、方霁(2000:577-585)は起動的意味を表すと主張するが、陈平(1988:401-422)、劉綺紋(2006:92-93)、张黎(2010:18)、三宅(2011:123-140)、税昌锡(2012:44-58)、夏炎青(2017:52-71)、税昌锡・胡云晚(2020:192-206)は起動的意味と完了の意味を表すと主張する。また、別の主張もある。例えば、王维贤(1997:178-179)は少なくとも完了的意味、Lin(2003:259-311)は結果的意味、Li 他(1982:117-138)は起動的意味と進行的意思、杉村(2009:1-12)は将然的意味、起動的意味、進行的意思、完了的意味、朱繼征(2000:25)は本論文で規定するすべての動相的意味を主張する。

では、次の(1)-(4)を例にとって“了2”が表す動相的意味の種類を説明する。

- (1) a. “不好，下雨了。” 觉民正要回答弟弟，忽然觉得一滴水落到他的额上，便惊惶地说，一面加速脚步往前面走。(杉村 2009:3)
(弟に返事しようとしたところ、覚民さんは雨水が一滴頬に落ちたのを感じて、慌てて「大変だ。雨が降った。」としゃべりながら前へ急いでいる。)
- b. “不好，下起雨了。” 觉民正要回答弟弟，忽然觉得一滴水落到他的额上，便惊惶地说，一面加速脚步往前面走。
(弟に返事しようとしたところ、覚民さんは雨水が一滴頬に落ちたのを感じて、

慌てて「大変だ。雨が降り出した。」としゃべりながら前へ急いでいる。）

- (2) a. 呆在被窝一直不想起，好冷好冷呀，抬头看看窗外，原来下雨了呀。 (BCC)
(ずっと布団に入っていて、起きたくなかった。何でこんなに寒いのか。窓の外を見たら、なんと雨なんだ。)
- b. 呆在被窝一直不想起，好冷好冷呀，抬头看看窗外，原来下着雨了呀。
(ずっと布団に入っていて、起きたくなかった。何でこんなに寒いのか。窓の外を見たら、なんと雨が降っているんだ。)
- (3) a. 原来下雨了，我错过了那场雨，错过了就错过了，我很喜欢下雨天。 (BCC)
(さっき雨が降ったんだ。雨を眺めるチャンスを逃しちゃった。まあいいか。雨が大好きなのに。)
- b. 原来下{过1/完}雨了，我错过了那场雨，错过了就错过了，我很喜欢下雨天。
(さっき雨が降り{止んだ/終わった}んだ。雨を眺めるチャンスを逃しちゃった。まあいいか。雨が大好きなのに。)
- (4) a. 哟哟，穿西装了。神气得咧。 (BCC)
(あら、背広を着たね。格好いいね。)
- b. 哟哟，穿{着/上}西装了。神气得咧。
(あら、背広を{着ている/着た}わね。格好いいね。)

(1a)-(4a)の下線部の“了”構文⁴の述語はいずれも動相標識が付与されない裸動詞である。にもかかわらず、それぞれの文脈から分かるように、(1a)の“下”(降る)は(1b)の“下起”(降り出す)という起動的意味を表し、(2a)の“下”(降る)は(2b)の“下着”(降っている)という進行的意思を表し⁵、(3a)の“下”(降る)は(3b)の“下过”(降り止む)、“下完”(降り終わる)などの完了的意思を表し、(4a)の“穿”(着る)は(4b)の“穿着”(着ている)という持続的意思か、または“穿上”(着た)という結果的意思を表す。つまり、(1a)-(4a)と(1b)-(4b)の下線部の“了”構文は同様の動相的意思を表す。そのため、語気助詞と呼ばれる“了”は発話場面や文脈に応じて、本論文で主張するすべての動相的意思を表すということが分かる。ところで、発話場面や文脈から推論して得られる意味は語用論的意味の1種であるので(何自然・吳亞欣 2001:10-16)、“了”が表す動相的意思を“了”の語用論的意味として位置づけるべきである⁶。

13.2.3 文末助詞“了”の動相的意思の形成メカニズム

なぜ“了”が起動的意味、進行的意思、完了的意思、持続的意思、結果的意思などの動相的意思を表すのか。つまり、“了”の各種類の動相的意思の形成メカニズムは何であろうか。この問題について、本論文は概念メタファー(conceptual metaphor)という認知的観点から説明する。概念メタファーとは、「ある概念を別の概念と関連づけることによって、一方を他方で理解するという認知プロセス」でもあり(靱山・深田 2003a:90)、2

つの認知領域間⁷の対応関係でもある(高尾 2003:204)。概念メタファーという対応関係の働き方は写象(mapping)である(Lakoff 1987:333、1993:202-251)。写象とは、「たどるものが存在する領域、すなわち起点領域(source domain)」の要素が「たとえられるものが存在する領域、すなわち目標領域(target domain)」へ認知的に移行するというものである(靱山・深田 2003a:92-93)。認知意味論の観点によれば、認知領域間の写象の生起を促す要因は認知領域間の類似性である(高尾 2003:210-216、王伟 2006:16-17、束定芳 2008:167-173)。認知領域間の類似性はスキーマ的類似性、命題的類似性などの種類に分けられる⁸(高尾 2003:206-214)。

まず、“了 2”に関する認知領域と中国語の動相という文法カテゴリーに関する認知領域という両者のスキーマ的類似性を考えよう。

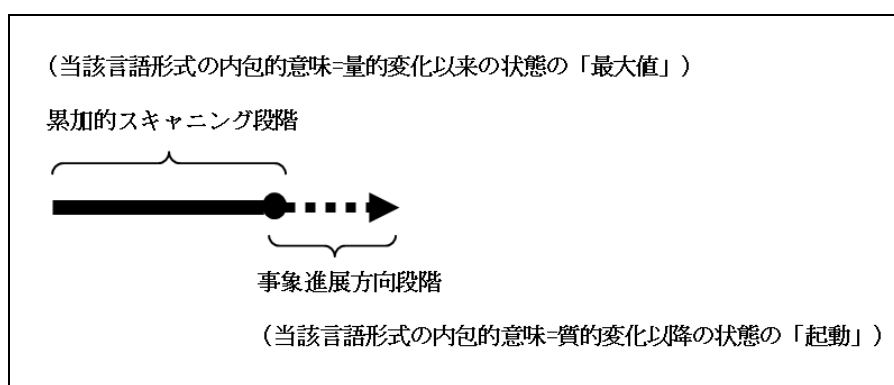


図2 “了 2”の「転換」スキーマ

図2は第4章4.5節で提示した“了 2”のイメージ・スキーマである。図1と図2を比較すれば分かるように、“了 2”のスキーマ的構造と中国語の動相のスキーマ的構造は、点的特徴、線の特徴、方向性などの方面において類似している。このような類似性が働くことから、“了 2”のスキーマ的構造は、「不変性の原則」(invariance principle)にしたがって(Lakoff 1993:215)⁹動相に関する認知領域へ写象する。写象すると、“了 2”も動相的意味を表す。

また、“了 2”に関する認知領域と中国語の動相という文法カテゴリーに関する認知領域という両者の命題的類似性、つまり“了 2”の外延的意味と中国語の動相的意味の類似性も考えよう。行為域、認識域、言語域において、認識域と言語域は行為域という基本域から派生するものである(Sweetser 1990:146、肖治野・沈家煊 2009:524)、ここでは主に“了 2”の行為域の外延的意味と中国語の動相的意味という両者の類似性を説明する。第6章6.2節で述べたように、「出来事生起」義は“了 2”の行為域の外延的意味の1つであり、[+動態]、[-均質]、[+限界]という意味特徴を持つ。このような意味特徴は、「出来事生起」義が瞬間性が際立つ意味であるということを反映する。朱繼征(2000:7-28)が指摘するように、中国語の動相的意味としての起動的意味、完了的意味、結果的意味という三者も瞬間性が際立つ意味である。このように、瞬間性という特徴において、「出来事生起」義は起動的意味、完了的意味、結果的意味と類似している。また、第6章6.2節で述べたように、「変化」義は“了 2”の行為域のもう1つの外延的意味であり、「何らかの

内容から、“了 2” 構文の特定の文成分が指示する『静相』義にすでに変わった」という意味を指す。この意味記述が示すように、「変化」義は、「変化」前の状態から「変化」後の状態へ移行するまで何らかの「変化」的過程を経ていたという認知様式を暗に示す。朱継征(2000:7-28)が指摘するように、中国語の動相的意味としての進行的意味、持続的意味という両者とも過程性が際立つ意味である。このように、過程性という特徴において、「変化」義は進行的意味、持続的意味と類似している。このような命題的類似性が働くことから、「出来事生起」義と「変化」義は動相に関する認知領域へ写象する。写象すると、“了 2<行為>” は動相的意味を表す。

要するに、語気助詞と呼ばれる“了 2”の動相的意味の形成メカニズムは、“了 2”に関する認知領域から中国語の動相に関する認知領域へ写象するプロセスである。

13.2.4 動相の視点からみる文末助詞“了”と語尾“了”の相違

まず、“了 2”と“了 1”が表す動相的意味の相違を考えよう。馬希文(1982:1-30)、木村(1983:22-30)、王维贤(1997:171-187)、郭锐(2015:435-449)などによれば、“了 1”、すなわち語尾“了”は、時制を表す“了 1”と結果的意味を表す“了 1”に分けられる。また、劉綺紋(2006:45-51、92-93)、税昌锡(2012:44-58)、陆俭明(2013:238-239)、张立昌(2014:86-98)などによれば、時制を表す“了 1”は起動的意味と完了的意味を表す。つまり、“了 1”は起動的意味、完了的意味、結果相的意味という 3 種類の動相的意味を表すということが明らかにされてきた。例えば、次の(5)-(8)を考えよう。

- (5) a. 红了脸说。 (劉綺紋 2006:40)
 (顔を赤らめて話をする。)
 b. 红起了脸说。
 (顔を赤らめてから話をする。)
- (6) a. 我吃了一碗饭。 (劉綺紋 2006:181)
 (私は一杯のご飯を食べた。)
 b. 我吃完了一碗饭。
 (私は一杯のご飯を食べきった。)
- (7) a. 吃了才觉着有点儿香味。 (劉綺紋 2006:40)
 (食べた後、少し香りを感じた。)
 b. 吃{起来了/完了}才觉着有点儿香味。
 (食べ{始めた/終わった}後、少し香りを感じた。)
- (8) a. 李贵杀了人。 (王光全・柳英绿 2006:27)
 (李貴さんは人を殺した。)
 b. 李贵杀死了人。

(李貴さんは人を殺してしまった。)

(5a)の複合動詞“红了 1”(赤らめた)の動相的意味は(5b)の複合動詞“红起”(赤らめ始める)の動相的意味に相当する。(6a)の複合動詞“吃了 1”(食べきる)の動相的意味は(6b)の複合動詞“吃完”(食べきる)の動相的意味に相当する。(7a)の複合動詞“吃了 1”の動相的意味は、場合によって、(7b)の“吃起来”(食べ始める)という動相的意味を表す可能性もあれば、(7b)の“吃完”(食べ終わる)という動相的意味を表す可能性もある。(8a)の複合動詞“杀了 1”(殺してしまう)の動相的意味は(8b)の複合動詞“杀死”(殺してしまう)の動相的意味に相当する。要するに、“了 1”は起動的意味、完了的意味、結果相的意味という 3 種類の動相的意味を表す。一方、前節で論じたように、“了 2”は本論文で主張するすべての動相的意味を表す。このように、“了 2”の動相的意味の種類が“了 1”の動相的意味の種類よりも多いということが分かる。この点において“了 2”と“了 1”は互いに異なる。

次に、動相標識との共起関係から“了 2”と“了 1”の構文的相違を考えよう。上記の(1b)-(8b)の波線が示すように、“了 2”も“了 1”も起動相標識、完了相標識、結果相標識と共起する。しかし、次の(9)、(10)の波線が示すように、“了 2”はまた進行相標識、持続相標識とも共起するが、“了 1”は進行相標識、持続相標識とは共起しない。

- (9) a. 吃着饭了 2。
(ご飯を食べているよ。)
- b. *吃着了 1 饭。

- (10) a. 穿{着/过 2¹⁰}旗袍了 2。
(チャイナドレスを着{ている/たことがある}よ。)
- b. *穿{着了 1/过 2¹¹了 1}旗袍。

要するに、動相の視点からみれば、“了 2”と“了 1”の構文的相違は、“了 2”はすべての動相標識と共起するが、“了 1”は起動相標識、完了相標識、結果相標識としか共起しないという点にある。

ところで、上述の構文的相違が生じる理由は何であろうか。朱繼征(2000:7-28)が主張するように、起動相、完了相、結果相に関するイメージ・スキーマが何らかの「点」であり、進行相、持続相に関するイメージ・スキーマが何らかの「線」である。第 4 章 4.5 節で述べたように、“了 1”のイメージ・スキーマは何らかの独立した「点」であるが、「線」ではない。イメージ・スキーマの観点からみれば、“了 1”の「点」的スキーマという認知的意味¹²は、起動相標識、完了相標識、結果相標識の「点」的スキーマという認知的意味と矛盾しないが、進行相標識、持続相標識の「線」的スキーマという認知的意味と矛盾する。そのため、“了 1”は起動相標識、完了相標識、結果相標識と共起するが、進行相標識、持続相標識とは共起しない。一方、第 4 章 4.5 節で述べたように、“了 2”のイメ

ージ・スキーマは独立した「点」ではなく、「点」、「線」などの認知的要素から構成される「転換」スキーマである。イメージ・スキーマの観点からみれば、“了 2”の「転換」スキーマという認知的意味は、いずれの動相標識の認知的意味とも矛盾しない。そのため、“了 2”はすべての動相標識と共起する。

13.3 文末助詞“了”の外延的意味からみる文末助詞“了”の時制問題

事象時間(point of event)、参照時間(point of reference)、発話時間(point of speech)という 3 つの要素を時制(tense)の研究に初めて取り入れたのは Reichenbach(1947)である(片岡 2010:153、張立昌 2014:36)。事象時間というのは文の述語が指示する事象が生じる時間である。参照時間というのは文の述語以外の内容から特定できる時間であり、事象時間に対して述べる時間である。Reichenbach(1947)の研究成果を踏まえた Comrie(1985)は中国語学の時制研究に多大な影響をもたらしている(陳振宇 2006:47、93-103)。例えば、中国語の時制研究においてしばしば引用されている陳平(1988:401-422)がその例である(陳振宇 2006:47、93-103)。本論文で用いる時制という概念も主に Comrie(1985:122-125)に基づく。

13.3.1 時制の構成と分類

もともと時制とは、一定の標識や語形変化¹³によって表される、事象時間、参照時間、発話時間の前後関係を指す¹⁴。「一定の標識や語形変化」は時制の形式上の特徴を示し、時間要素の「前後関係」は時制の意味上の特徴を示す。このように、時制という文法カテゴリーは形式上の特徴と意味上の特徴から構成されるということが分かる。そのため、本論文は時制を時制的意味と時制形式に分ける。本論文で述べる時制的意味とは、事象時間、参照時間、発話時間の前後関係を指す¹⁵。時制形式とは、事象時間、参照時間、発話時間の前後関係を指す一定の標識や語形変化などの言語形式を指す。

時制は相対時制(relative tense)と絶対時制(absolute tense)に大別される(Comrie 1985:122-125)。相対時制とは、一定の標識や語形変化によって表される、時間軸における事象時間と参照時間の位置関係である。絶対時制とは、一定の標識や語形変化によって表される、時間軸における事象時間と発話時間の位置関係である。一般に時制というのは絶対時制のことを指す(劉綺紋 2006:25)。本論文で扱う時制もこの絶対時制のことである。また、絶対時制は過去時制、未来時制、現在時制という 3 種類に細別される(Comrie 1985:122-125、劉綺紋 2006:25)。過去時制とは、一定の標識や語形変化によって表される、事象時間が発話時間より早いという時間関係である。未来時制とは、一定の標識や語形変化によって表される、事象時間が発話時間より遅いという時間関係である。現在時制とは、一定の標識や語形変化によって表される、事象時間が発話時間に等しいという時間関係である。本論文は「事象時間が発話時間より早いという時間関係」を「過去時制の意味」、「事象時間が発話時間より遅いという時間関係」を「未来時制の意味」、「事象時間が発話時間に等しいという時間関係」を「現在時制の意味」と呼ぶことにする。

ところで、どの言語であっても、事象時間、参照時間、発話時間という 3 つの時間要素の前後関係、つまり本論文で述べる時制的意味を表すことができるということは否定でき

ない¹⁶。中国語もそうである(盛文淵他 2006:608-611、張文青 2012:105)。仮に、中国語の時制的意味が一定の標識や語形変化によって表されるとすれば、つまり、中国語が一定の時制形式を持つとすれば、中国語は時制という文法カテゴリーを持つと言っても問題ない。しかし、中国語の時制的意味が一定の標識や語形変化などの時制形式によって表されるかどうかという問題について統一的な見解はない。つまり、中国語が時制という文法カテゴリーを持つかどうかについて定論はない。何伟・马瑞芝(2011:19-27)から明らかのように、この問題をめぐる論争は2種類の主張に分かれている。1つは中国語が時制という文法カテゴリーを持つという主張である。例えば、張秀(1957:166-168)、龍果夫(1958:115-145)、陳平(1988:401-422)、李臨定(1990:10-30)などがある¹⁷。もう1つは中国語が時制という文法カテゴリーを持たないという主張である。例えば、王力(1984:203)、高名凱(1986:186-190)、戴耀晶(1997:6、31-32)、Lin(2005:1-53)などがある¹⁸。本論文は、“了2”が時制形式としての資格を持つかどうかという問題には触れずに、“了2”が時制的意味を表すかどうか、表せばどのような時制的意味を表すかなどの時制的意味に関する問題だけを考察する。

13.3.2 文末助詞“了”の過去時制の意味に関する問題

金立鑫(1998:105-119)は次の(11)-(13)の複文を例示して、「“了2”は(中略)事象が発話以降に生じるということを表すのではなく、発話以前に生じるということを表す」¹⁹と主張する。これは、“了2”が過去時制の意味を表すということを意味する。

(11) 昨天我吃饭前去找你了，你不在。 (金立鑫 1998:112)

(昨日私にご飯を食べる前に君の家に行ったけど、留守だった。)

(12) ?明天我吃饭前去找你了，你不在。 (金立鑫 1998:112)

(?明日私にご飯を食べる前に君の家に行くけど、留守だ。)

(13) ?过一会儿我去找你了，你不在。 (金立鑫 1998:112)

(?しばらくしたら私は君の家に行くけど、留守だ。)

(12)、(13)が不自然である理由は、過去時制の意味を表す“了2”が未来時制の意味を表す文に用いられているからであると金立鑫(1998:112)では主張されている。しかし、次の(14)、(15)が示すように、(12)、(13)の“了2”が省略されても依然として不自然である。そのため、(12)、(13)が不自然である理由は“了2”と関わらないということが分かる。

(14) ?明天我吃饭前去找你，你不在。

(?明日私にご飯を食べる前に君の家に行くけど、留守だ。)

(15) ?过一会儿我去找你，你不在。

(?しばらくしたら私は君の家に行くけど、留守だ。)

本論文は、(12)、(13)が不自然である理由は“了2”に関わらず、(12)、(13)の複文自体に含まれる単文同士がもともと意味的に矛盾するという点に関わると主張する。例えば、(13)において、1つ目の単文の“过一会儿”(しばらくして)と2つ目の単文の“你不在”(留守だ)がもともと意味的に矛盾するため、(13)は不自然である。

李鉄根(2002:1-13)は中国語の時制を既然時制と未然時制に分けている。既然時制は過去時制と現在時制のことを指し、未然時制は未来時制のことを指す。李鉄根(2002:1-13)は“了”、“着”、“过”という助詞を既然時制標識として位置づけた上で、次の(16)を例示して、「絶対時制の立場からみれば、“了”、“着”、“过”などの既然時制標識は未来の事柄を表す文に用いられない」²⁰と主張する。

- (16) *他将出席了这次会议。 (李鉄根 2002:7)
(*あの方はこれから今度の会議に出席した。)

ただし、“了”を既然時制標識と捉える李鉄根(2002:1-13)は、“了”を“了1”と“了2”に分けないままの分析であった。非条件文の平叙文に用いられる“了1”を既然時制標識と見なしても構わないが(郭鋭 2015:435-449)、“了2”を既然時制標識と見なしては不適切である。例えば、劉月華他(2001:383)が正しく指摘するように、実際には、“了2”と共起しない言語形式はほとんど見られないのである。つまり、未来の事柄を表す語、フレーズ、文などであっても、“了2”と共起するはずである。劉月華他(2001:383)のこの観点は、李鉄根(2002:1-13)の“了”、“着”、“过”などの既然時制標識は未来の事柄を表す文に用いられない」という主張に対する反論である。例えば、次の(17)、(18)が示すように、“了2”は未来の事柄を表す文にも用いられる。

- (17) 就要下雨了。 (金立鑫 2003:41)
(雨が降りそうだ。)

- (18) 火车快要到了。 (金立鑫 2003:41)
(電車がまもなく来る。)

“了2”がもともと過去時制の意味を表すと主張する金立鑫(2003:41)は、(17)、(18)が表す未来時制の意味は「“了2”に由来するのではなく、“快要”、“就要”などの時間的副詞に由来する」²¹と論じている。また、金立鑫(2003:41)の主張に近い黄瓚輝(2016:47)は、「もし時間的意味を表すマーカーが付与されなければ、“了2”は必ず過去時制の意味、すなわち事象が発話時間より早く生じるということを表す」²²と主張している。要するに、金立鑫(2003:41)と黄瓚輝(2016:47)の主張は、“了2”がもともと過去時制の意味を表すが、別の時間的意味の語による干渉作用を受けるならば、必ずしも過去時制の意味を表すとは限らないという点において一致している。ところが、次の(19)-(21)は、(17)、(18)

の“快要”、“就要”などの未来の事柄を表す語が付与されないが、いずれも未来時制の意味を表す。

(19) 开饭了, 开饭了! (刘勋宁 2002:77)
(ご飯を食べる時間だよ。ご飯を食べる時間だよ!)

(20) 上车了, 上车了! (刘勋宁 2002:77)
(車に乗って、乗って!)

(21) 来了!来了!我这就来了。 (陈前瑞 2005:67)
(来るよ!来るよ!今来るから。)

刘勋宁(2002:77、2010:34-35)も“了2”が過去時制の意味を表すと主張する。(19)-(21)の未来時制の意味の形成要因について、刘勋宁(2002:77)は英語の現在進行形との比較を通して、次のように説明している。「(“了2”は過去時制の枠から未来時制の枠へ逸脱する可能性がある。)英語もそのような逸脱作用がある。例えば、“I am going to do something.”という現在進行形の文は、“do”という事象が現実的に進行しているのではなく、近いうちに進行するという未来時制の意味を表す。つまり、英語には、現在進行形が現在時制の枠から未来時制の枠へ逸脱するという言語現象がある」²³。しかし、陈前瑞(2005:66-73)、肖治野・沈家焯(2009:518-527)、邹海清(2014:34-45)などは、刘勋宁(2002:77)の説明が曖昧であり、未来時制の意味を表す文に用いられる“了2”がいわゆる逸脱作用に由来するかどうか疑問があると反論を唱えている。

张云秋・王赛(2009:123-124)は子供を対象とした心理学の実験を行った結果、次の結論を得た。「子供が最初に身につける“了1”と“了2”はいずれも過去時制の意味を表すものである。(中略)目下、中国語教育において、“了1”と“了2”は、それぞれ動相標識と語気助詞と呼ばれているため、時制と無関係であると主張されている。ところが、本実験の結果は、“了1”も“了2”も時制と緊密な関係があることを示している。ただし、その関係は複雑であり、簡単な対応関係ではない」²⁴。また、钟晓路(2020:58-64)は中国語版のスペイン語教科書における“了1”と“了2”のスペイン語訳を整理した結果、张云秋・王赛(2009:123-124)と同様の結論を得た。もし、“了2”と過去時制の意味は「簡単な対応関係」でなければ、一体どのような関係を持つのか。

13.3.3 文末助詞“了”の未来時制の意味に関する問題

陈前瑞(2005:66-73)をはじめ、陈前瑞・王继红(2012:158-174)、叶琼(2014:85-91)、陈前瑞・胡亚(2016:66-74)、生为・刘振前(2019:127-134)などは“了2”が未来時制の意味を表すこともできると主張する。しかし、王伟(2006:99-100)と彭利贞(2011:198-218)は、“了2”構文が示す未来時制の意味は“了2”に由来するのではなく、特定の文脈に由来するのであると反論を唱えている。

13.3.4 文末助詞“了”の「現在関連性」に関する問題

“了2”が現在時制の意味を表すと主張する先行研究は一部であるが²⁵、“了2”が常に「現在関連性」(currently relevant state)を表すという主張がほとんどである²⁶。発話時現在がもともと絶対時制という文法カテゴリーの重要な構成要素であるので、本論文は「現在関連性」における「現在」という時間要素に関する問題も“了2”の時制問題の1種として扱う。

“了2”が常に「現在関連性」を表すという主張を最初に提起したのはLi 他(1982:117-138)である。もともと「現在関連性」というのはパーフェクト(perfect)²⁷の時間的特性である(Li 他 1982:117-138、邹海清 2014:34-45、夏炎青 2017:46、饶宏泉 2018:74-82)。つまり、事象の生起に伴って生じた何らかの効果や影響が何らかの参照時間まで持続しているが、もし具体的な参照時間がなければ、その効果や影響が発話時現在を参照時間として、発話時現在まで持続しているという時間的特性である。パーフェクトの時間的特性としての「現在関連性」は、参照時間を絶対的な基準とするが、発話時現在を絶対的な基準としないのである。パーフェクトの時間的特性において、発話時現在はただ何らかのデフォルト値や省略時値に過ぎない。そのため、本論文は、パーフェクトの時間的特性としての「現在関連性」を“了2”の相対的な「現在関連性」と呼ぶことにする²⁸。一方、先行研究において、具体的な参照時間の有無にかかわらず、“了2”構文が常に何らかの形で発話時現在に関係しているという主張もよく見られる。本論文は、このような「現在関連性」を“了2”の絶対的な「現在関連性」と呼ぶことにする。では、“了2”は一体どのような形で発話時現在に関係しているのか。この問題について、立場によって意見は異なる。例えば、王光全・柳英绿(2006:25-30)、陈小红(2007:54-60)、张黎(2010:12-21)、武村(2016:28-35)は、“了2”構文が臨場感、つまり発話当時における発話現場を認知的に際立たせると主張する。三宅(2010:62)は、“了2”構文において、「行為の完了によって、現在がどうなっているかという話者の意識が含まれる」と主張する。孔令达(1990:101-108)、邹海清(2014:34-45)は、“了2”構文が事象時間が発話時間に近いという語感を伝えやすいと主張する。卢英顺(1993:22-24、2012:23-29)、张济卿(1998b:18-26)、夏炎青(2017:52-71)は、“了2”構文において具体的な参照時間があるかどうかにかかわらず、“了2”構文は常に発話時現在を参照時間とするということを主張する。これらの先行研究から分かるように、“了2”は必ず何らかの形で発話時現在に関係している。

ところで、饶宏泉(2018:74-82)が論証するように、“了2”はある程度パーフェクトの時間的意味を表すにもかかわらず、パーフェクト標識とされては不適切である。そのため、本章は“了2”の相対的な「現在関連性」を考察せず、“了2”の絶対的な「現在関連性」を考察する。次に“了2”の絶対的な「現在関連性」の形成要因を検討する。

“了2”の絶対的な「現在関連性」の形成要因について、劉綺紋(2006:174-175)、Vandenberg and Wu(2006:60-86)、何文彬(2013:10-18)は異なる立場から説明を与えているが、いずれも問題点が残されている。

まず、劉綺紋(2006:174-175)によると、“了2”はモダリティ助詞であり、モダリティが「発話時点における発話者の心的態度」のことであるので、その「発話時点における発話者の心的態度」こそが“了2”を「現在関連性」と関係づける。しかし、実際には、モ

ダリティという「発話者の心的態度」は必ずしも「発話時点」にだけ現れると限らず、「発話時点」以外の時間に現れる可能性もある。例えば、次の(22)が示すように、モダリティ助詞“能”(できる)は過去という「発話時点」以外の時間にも現れる。このように、劉綺紋(2006:174-175)のモダリティ説を通して“了2”の「現在関連性」の形成要因を説明することは難しい。

- (22) 小时候能一口气吃下二十个饺子。 (BCC)
(子供のころは二十個の餃子を一気に食べることができたのだが。)

また、Vandenberg and Wu(2006:60-86、100-137、212-239)は対話者の「共通認識の場」(common ground)という観点から“了2”の絶対的な「現在関連性」の形成要因を説明している。対話者の「共通認識の場」は人間のコミュニケーションの成立を確保するための認知的基盤の1つであり、常に「現在」(current)の状態に「更新」(update)することを要求する。Vandenberg and Wu(2006:60-86、100-137、212-239)によれば、“了2”は対話者の「共通認識の場」のその要求に応えるのである。つまり、“了2”は「現時点において対話者の共通認識の場をリセットして一致させる」(co-ordinate now)という機能を果たすか、または、現時点の「共通認識の場」に生じた変化の部分聞き手に伝える機能を果たす²⁹。このように、“了2”は「常に『現在』の状態に『更新』する」という要求に応えるので、何らかの「現在関連性」を常に示す。しかし、楊素英・黄月圆(2009:72)は次の(23)を通して、「共通認識の場」という観点に疑問を出している。

- (23) a. 我最爱吃鱼。 (楊素英・黄月圆 2009:72)
(私の一番好きな料理は魚だ。)
b. 我最爱吃鱼了。 (楊素英・黄月圆 2009:72)
(私の一番好きな料理は魚だ。)

“我最爱吃鱼”(私の一番好きな料理は魚だ)という文はただ何らかの静的な状態だけを表し、「共通認識の場」の変化などを表さない。そのため、(23a)が示すように、“我最爱吃鱼”(私の一番好きな料理は魚だ)という文に“了2”を付与する必要はない。ところが、“我最爱吃鱼”(私の一番好きな料理は魚だ)という文に“了2”を付与した結果としての(23b)は、(23a)と同様の命題的意味を表す。つまり、“了2”が含まれない(23a)と同様に、“了2”が含まれる(23b)は「共通認識の場」の変化なども表さない。したがって、「共通認識の場」という観点では(23b)の“了2”の使用動機を説明し難い。実は、(23b)の“了2”は本論文で規定する“了2<認識>”と“了2<言語>”である。このように、「共通認識の場」という観点では“了2<認識>”と“了2<言語>”の「現在関連性」を説明し難いということが分かる。

さらに、“了2”の絶対的な「現在関連性」の形成要因について、何文彬(2013:10-18)は次のように説明している。“了2”はもともと新情報を伝えるので、発話者は“了2”を用いると、発話時間において聞き手の知識構造を変えた上で聞き手にインパクトを与える。

そのインパクトが発話当時の状況を際立たせる。そのため、発話時間も際立たせる。以上は何文彬(2013:10-18)の説明であった。しかし、第12章12.8節で論じたように、“了2”はもともと新情報を伝えるのではなく、むしろ、“了2<行為>”と“了2<言語>”こそが新情報を伝え、“了2<認識>”は旧情報を伝えると言ったほうがさらに適切である。また、第9章9.3節で述べた“了2<行為>”、“了2<認識>”、“了2<言語>”の意味間の「重なる」関係が示すように、どのような場合においても“了2”は必ず“了2<行為>”の意味を表すのではない。しかし、どのような場合においても“了2”は必ず絶対的な「現在関連性」を表す。そのため、何文彬(2013:10-18)の新情報説では“了2”の「現在関連性」を説明し難いということが分かる。

13.3.5 文末助詞“了”の時制問題の解決策

第6章6.2節で述べたように、「出来事生起」義とは、「了2」構文の述語が指示する出来事がすでに起こった」という意味である。具体的には、「……という出来事が生じた」、「……という出来事が起こった」、「……という出来事があった」という意味に相当する。これらの意味記述は、「出来事生起」義を表す“了2”構文の述語が指示する事象が発話時間より早く生じるという時間関係を反映する。この時間関係は本論文で述べる過去時制の意味に相当する。そのため、「出来事生起」義を表す“了2”は過去時制の意味を表すということが分かる。

ところで、Lin(2003:259-311、2005:1-53)は、中国語の時制的意味は欧米言語のように一定の標識や語形変化によって表されるものではなく、動相の意味から推論して得られるものであると主張する。推論して得られる意味は語用論的意味の1種であるため(何自然・吳亞欣 2001:10-16)、黄瓚輝(2016:42-58)は中国語の時制的意味を語用論的意味の1種として位置づけている。しかし、この主張は次の2点から受け入れ難いものである。まず、上の段落で説明したように、“了2”の過去時制の意味は“了2<行為>”の「出来事生起」義に伴う時間的意味である。また、第3章3.5節で述べたように、“了2<行為>”の「出来事生起」義は“了2”の言内の意味・言語的意味である。このように、“了2”の過去時制の意味は“了2”の言内の意味・言語的意味と位置づけられるが、“了2”の言外の意味・語用論的意味とは位置づけられないということが分かる。

第6章6.2節で述べたように、「変化」義とは、「何らかの内容から、“了2”構文の特定の文成分が指示する『静相』義³⁰にすでに変わった」という意味である。具体的には、「……に変わった」、「……になった」、「……という現象/態勢になった」という意味に相当する。これらの意味記述は、「2つの要素の間の変化」という動態自体が発話時間より早く生じるという時間関係を反映するが、“了2”構文における述語が指示する事象が発話時間より早く生じるという時間関係は反映しない。次の(24)、(25)を例にとって簡単に説明する。

- (24) 来了!来了!我这就来了。 (陈前瑞 2005:67)
(来るよ!来るよ!今来るから。)

(25) 这个会长是轮流当的。去年他当了会长，明年我当会长了。

(みんな順番で会長を務める。去年彼が会長を務めたから、来年会長を務める候補者は私に変わった。)

(24)の“来了”(来るよ)という“了2”構文は、『来る兆しまでもない』という状態・『静相』義から『来る態勢』という『静相』義への『変化』が発話時間よりも早く生じるということを表すが、“了2”構文における述語“来”(来る)が指示する事象が発話時間よりも早く生じるということは表さない。また、(25)の“明年我当会长了”(来年会長を務める候補者は私に変わった)という“了2”構文は、『彼』という主語・『静相』義から『私』という主語・『静相』義への『変化』が発話時間よりも早く生じるということを表すが、“了2”構文における述語“当”(務める)が指示する事象が発話時間よりも早く生じるということは表さない。要するに、“了2”の「変化」義が扱う時間関係は、“了2”構文の任意の文成分が指示する対象・「静相」義が「変化」する時間と発話時間の関係であるが、“了2”構文の述語が指示する事象の生起時間と発話時間の関係ではない。これは、「事象時間、参照時間、発話時間の前後関係」という時制の定義に合わない。そのため、「変化」義を表す“了2”は時制的意味を表さない。

第7章7.2節で述べたように、「再肯定・再否定」義とは、「発話者の思考過程を含意する動態として、発話者はある発話をした後、その発話で肯定・否定されている意味論的内容、統語論的内容、語用論的内容、音韻的内容などの任意のカテゴリーの内容に対して、再び肯定的・否定的な態度を示す」という意味である。具体的には、ある発話の末尾に添えられる「はい」、「うん」、「そう(なんだ)」などの間投詞やフレーズの意味を指す。つまり、「再肯定・再否定」義が扱う時間関係は、発話者の再肯定・再否定の態度の生起時間と発話時間の関係であり、“了2”構文の述語が指示する事象の生起時間と発話時間の関係ではない。これは、「事象時間、参照時間、発話時間の前後関係」という時制の定義に合わない。そのため、「再肯定・再否定」義を表す“了2”は時制的意味を表さない。例えば、次の(26)、(27)の下線部の“了2”を考えよう。

(26) 走了，走了，不能再等了。 (张伯江 2018:38)

(行く。はい・うん・そう。行く。もう待てないから。)

(27) A: 这本书我看(kang)了三天。

B: 你的发音怎么那么奇怪?这本书我看(kan)了三天了。“看(kan)”了!不是“看(kang)”。

(A: この本を私は三日間読んで(yonte)きた。

(B: あの発音はおかしくない?この本を私は三日間読んで(yonde)きたと言うべきだよ。はい・そうよ。「読んで(yonde)」だよ!「読んで(yonte)」じゃないよ。)

第7章7.3節で説明したように、(26)、(27)の下線部の“了2”は“了2<認識>”の「再肯定」義を表す。また、(26)の下線部の“了2”は、「走”(行く)という命題的内容に関

する再肯定の態度が発話時間において生起した」という時間関係を表し、(27)の下線部の“了2”は、「“看(kan)”(読んで(yonde))という発音に関する再肯定の態度が発話時間において生起した」という時間関係を表す。つまり、(26)、(27)の下線部の“了2”が扱う時間関係は、発話者の再肯定の態度の生起時間と発話時間の関係である。そのため、(26)の“了2”構文が表す未来時制の意味と、(27)の“了2”構文が表す過去時制の意味は、それぞれの下線部の“了2”によって決められるのではないということが分かる。

第8章8.2節で述べたように、「要聴」義とは、「発話を聞くようにと発話者は指示・命令を聞き手に伝える」という意味である。具体的には、「あなたは私の発話を聞いてください」、「あなたは私の発話に注意してください」、「いいですか」、「あのう」、「ねえ」などの意味である。このように、「要聴」義が扱う時間関係は、発話者が「聞いてください」という指示・命令を口に出す時間と発話時間の関係であり、“了2”構文の述語が指示する事象の生起時間と発話時間の関係ではないということが分かる。そのため、「要聴」義を表す“了2”は時制的意味を表さない。例えば、次の(28)、(29)の下線部の“了2”を考えよう。

(28) 谢谢你们，谢谢家声哥，有爱的剧组。谢谢，谢谢了! (BCC)
(みんな、ありがとう。家声兄ちゃん、ありがとう。愛に満ちた映画スタッフの皆さん、ありがとう。ありがとう。ねえ・いいですか・私の話をぜひ聞いてください。ありがとう。)

(29) 你明天开学了，要加油噢。 (BCC)
(ねえ・いいですか・聞いてください。明日新学期が始まる。 頑張ってね。)

第8章8.3節で説明したように、(28)、(29)の下線部の“了2”は“了2<言語>”の「要聴」義を表す。また、(28)、(29)の下線部の“了2”は両方とも「『ねえ・いいですか・聞いてください』という指示・命令が発話時間において発せられた」という時間関係を表す。つまり、(28)、(29)の下線部の“了2”が扱う時間関係は、発話者が「ねえ・いいですか・聞いてください」という指示・命令を口に出す時間と発話時間の関係である。そのため、(28)の“了2”構文が表す非未来時制の意味と、(29)の“了2”構文が表す未来時制の意味は、それぞれの下線部の“了2”によって決められるのではないということが分かる。

“了2”の「要聴」義から“了2”の絶対的な「現在関連性」の形成要因を説明することができる。まず、ある会話において、発話者が「聞いてください」という指示・命令を発する時間は発話時現在でなければならない。つまり、「要聴」義には必ず発話時現在という時間的要素が含意される。また、第9章9.3節で“了2”の外延的意味間の関係で論じたように、実際には、どのような場合においても“了2”は必ず「要聴」義を表す。このように、どのような場合においても、“了2”は必ず発話時現在という時間的要素を際立たせるとということが分かる。つまり、“了2”の絶対的な「現在関連性」は“了2”の「要聴」義から派生的に生じるとということが分かる。

13.3.6 終わりに

以上、「了2」の「転換」スキーマという内包的意味と、「変化」義、「出来事生起」義、「再肯定・再否定」義、「要聴」義などの外延の意味から「了2」の動相問題と時制問題を考察した。その結果、次の5点が明らかになった。第一に、「了2」の動相的意味の形成メカニズムは、「了2」に関する認知領域から中国語の動相という文法カテゴリーに関する認知領域へ写象するプロセスである。第二に、動相の視点からみれば、「了2」と「了1」の意味的相違は、「了2」はすべての動相的意味を表すが、「了1」は起動的意味、完了的意味、結果的意味だけを表すという点にある。第三に、動相の視点からみれば、「了2」と「了1」の構文的相違は、「了2」はすべての動相標識と共起するが、「了1」は起動相標識、完了相標識、結果相標識とだけ共起するという点にある。第四に、「了2」はどのような場合でも時制的意味を表すとは限らず、特定の意味条件を満してはじめて時制的意味を表す。つまり、「了2」は「出来事生起」義を表してはじめて時制的意味を表す。具体的には過去時制の意味を表す。第五に、「了2」の絶対的な「現在関連性」という時間特性は「了2」の言語域の「要聴」義から派生的に生じる。

<注>

1. 詳細については、吳凌非(2002:23-27)、彭小川・周芍(2005:136-141)、石定栩・胡建华(2006:94-112)、彭利貞(2011:198-218)などを参照のこと。
2. 本論文で述べる「形成メカニズム」とは、ある事物がどのように形成するかを示す仕組み、過程、プロセスである。
3. ここで述べる「了1」は語尾「了」である。馬希文(1982:1-30)、木村(1983:22-30)、王維賢(1997:171-187)、郭銳(2015:435-449)などによれば、「了1」は時制を表す「了1」と結果的意味を表す「了1」に分けられる。また、劉綺紋(2006:45-51、92-93)、税昌錫(2012:44-58)、陸俊明(2013:238-239)、張立昌(2014:86-98)などによれば、時制を表す「了1」は起動的意味と完了的意味を表す。つまり、「了1」は起動的意味、完了的意味、結果相的意味という3種類の動相的意味を表すということが明らかにされてきた。
4. 本論文は、「了2」が含まれる文を「了2」構文と呼ぶことにする。
5. Li 他(1982:127)は、「下雨了」という「了2」構文は「下着」(降っている)という進行的意味を表すことができると指摘する。また、清代の《子弟書》において、助詞「了」を用いて助詞「着」の進行的意味を表すという用法も見られる(王継紅・陳思佳 2017:36-50)。
6. この結論は、王學群(2003:65、2008:83)の主張にも合致する。王學群(2003:51-71、2008:75-90)は、「了2」の動相的意味を語用論的意味として論じてはいないが、「了2」の動相的意味が発話場面や文脈に制約され、語用論的特徴を備えると指摘しているからである。
7. 高尾(2003:204)は「概念メタファーは2つの概念領域間の対応関係」であると述べている。「概念領域」(conceptual domain)、「フレーム」(flame)、「認知領域」(cognitive domain・domain)などの概念は本質的に共通している(鍋島 2006:258)。そのため、王伟(2006:16)はメタファーに関わっている「概念領域」を「認知領域」(認知域)と呼んでいる。本論文も「概念領域」を「認知領域」と呼ぶことにする。
8. 認知領域間の類似性は、学者によって異なる基準で分類されている。例えば、束定芳(2008:167-173)は形的類似性、機能的類似性、心理的類似性、創造的類似性などに分けている。
9. Lakoff(1993:215)の「不変性の原則」とは、「メタファーによる写象は、目標領域が内面的にもつ構造と矛盾を起こさない限り、起点領域のイメージ・スキーマ構造を保持する」(高尾(2003:227)訳)ということである。
10. (10)の“过2”はいわゆる経験的意味を表す“过”である。つまり、第2章2.2節で規定した持続相標識の“过2”である。
11. “了1”は完了相標識の“过1”と共起するが、いわゆる経験相標識の“过2”、つまり第2章2.2節

で規定した持続相標識の“过2”とは共起しない。

12. 本論文において、形式的意味に対する意味は認知的意味と呼ばれる。本論文は、特定の言語形式によって表記される意味を形式的意味と規定し、何らかの認知様式、例えば、イメージ(image)、イメージ・スキーマ(image schema)などを認知的意味と規定している。
13. ここで述べている「一定の標識や語形変化」は屈折接辞、屈折とも呼ばれる(長屋 2015:54)。一般的に言えば、中国語は孤立語として扱われ、屈折語が示す屈折という文法手段を持たないとされる。しかし、先行研究において、中国語は屈折という文法手段があるという説も見られる(李亚辉 2010:26-28)。
14. 詳細については、陈平(1988:401-422)、龚千炎(1994:1-6)、顾阳(2007:22-38)、何伟・马瑞芝(2011:19-27)、石塚(2015:161)、陈国良(2015:129-130)などを参照のこと。
15. 本論文で述べている「時制的意味」という概念は王伟(2006:12, 38)で述べている「テンポラリティ」(temporarily)という概念に相当する。
16. ここで、時制と時制的意味という両者に関する理解を深めるために、曾宪正(1997:47-48)に基づいて英語の時制と時制的意味も簡単に説明する。英語の場合、事象時間が発話時間より早いという過去時制の意味と、事象時間が発話時間に等しいという現在時制の意味は、一定の標識や語形変化によって表されるが、事象時間が発話時間より遅いという未来時制の意味は一定の標識や語形変化によって表されず、“will”、“be going to”などの単語やフレーズによって表される。そのため、英語は過去時制と現在時制という文法カテゴリーを持つが、未来時制という文法カテゴリーは持たないということが分かる。にもかかわらず、実際には、英語は事象時間が発話時間より遅いという未来時制の意味を表すことができる。要するに、「英語には形態論的に見て現在時制形式と過去時制形式がある一方で、意味論的には現在・過去・未来という3つの時制があると言える」(片岡 2010:151)。
17. 他には、王松茂(1981:65-76)、张济卿(1998a:17-25, 1998b:18-26)、陈立民(2002:14-31)、李铁根(2002:1-13)、顾阳(2007:22-38)、朴珉娥・袁毓林(2019:438-450)なども挙げられる。
18. 他には、宋绍年・李晓琪(2000:562-567)、杨国文(2000:594-601)、尚新(2004:39-43)、井上(2010:5-8)、王亚新(2011:254)、曹道根・许凌春(2017: 93-121)なども挙げられる。
19. 原文は、“‘了2’ (中略)所表示的行为意义只允许发生在说话之前, 不允许发生在说话之后”である。
20. 原文は、“如‘了、着、过’作为已然语法标记, 在绝对句中不能与未然标记同句共现, 即它们都不能用于绝对未然句中”である。
21. 原文は、“并不是‘了’赋予的, 而是句子中的副词性成分‘快要’、‘就要’等赋予的”である。
22. 原文は、“可以认为‘了2’的无标记用法是用于表示绝对过去事件, 即事件相对于说话时间已经发生”である。
23. 原文は、“这(‘了2’从过去时的范畴挪用到未来时的范畴)使我们想起英语的‘I am going to do something’的句型。这种句型都是要说明即将进行的一个行动。这相当于让进行体提前挪用。正是这种挪用, 才表现了动作的随即发生”である。
24. 原文は、“早期儿童习得的‘了’, 无论是 Le2 还是 Le1 都基本表达过去时意义。(中略)在目前的对外汉语教学和大学里的现代汉语教学中, 大多认为 Le1 是体标记, Le2 是语气词, 与时间无关, 但本文的研究表明, 体标记和事态变化标记与时间意义有很大的关系, 只不过它们不是简单的对应关系”である。
25. “了2”が現在時制の意味を表すことができると主張する先行研究には李铁根(2002:1-13)、张黎(2010:12-21)がある。
26. 本論文で用いられる「現在関連性」という術語は劉綺紋(2006:174)の日本語訳に従うものである。“了2”の「現在関連性」に触れる先行研究には、Li 他(1982:117-138)、孔令达(1990:101-108)、卢英顺(1993:22-24, 2012:23-29)、张济卿(1998b:18-26)、望月(2000:12-16)、Lin(2003:259-311)、彭小川・周芍(2005:136-141)、劉綺紋(2006:174-175)、Vandenberg and Wu(2006:60-86)、陈小红(2007:54-60)、张黎(2010:12-21)、張文青(2012:105-122)、何文彬(2013:10-18)、邹海清(2014:34-45)、张立昌(2014:73)、武村(2016:28-35)、陈前瑞・胡亚(2016:66-74)、夏炎青(2017:52-71)がある。
27. パーフェクトとは、事象時間が参照時間より早いという時間関係である。英語の場合、「have/had+動詞の過去分詞形」という形式によって表される(劉綺紋 2006:27-30)。日本語では「一般には『完了相』や『完了形』と称されている」が(劉綺紋 2006:27)、中国語では“已然体”や“完成体”と称されている(王洪君他 2009:313-314)。パーフェクトの和訳としての「完了相」は本論文で述べる「完了相」とは異なる概念である。
28. “了2”の相対的な「現在関連性」に触れる先行研究には、Li 他(1982:117-138)、望月(2000:12-16)、Lin(2003:259-311)、王学群(2003:51-71, 2008:75-90)、彭小川・周芍(2005:136-141)、张立昌(2014:73)、

- 陈前瑞・胡亚(2016:66-74)がある。
29. Vandenberg and Wu (2006:100-137)において、「共通認識の場」に生じた変化の部分は「際立ちの状況」(peak situation)とも呼ばれている。
 30. 第2章2.2節で規定したように、「静相」義とは「動詞的述語が示す内的属性、現象、態勢、また、動詞的述語以外の文成分が示す意味」を指す。

第 14 章 文末助詞“了”の意味体系の最終確立と先行研究の問題点の振り返り

14.1 はじめに

第 1 章で述べたように、本論文の研究目的は“了 2”の意味体系を原理的に明らかにして非中国語母語話者の“了 2”の習得を促進することである。また、第 2 章は、意味、形式、語用論的機能という 3 つの側面からこれまでの先行研究の問題点を全面的に洗い出した。本章は、まず、第 3 章で提起した“了 2”の意味体系の様式に基づいて、“了 2”の具体的な意味体系を最終的に確立する。また、第 2 章で洗い出した先行研究の問題点をすべて解決したかどうかを再確認する。

14.2 文末助詞“了”の意味体系の最終確立

第 3 章 3.5 節は、“了 2”の意味体系の様式を次の表 1 が示すように提起した。

表 1 “了 2”の意味体系の様式

言語的意味(言内の意味)	語用論的意味(言外の意味)
①内包的意味	(「肯定・決定・確定・確認」義)
「転換」義	「聞き手の反応の期待」義 「対話者共有情報修正」義
②外延的意味	「強調・感嘆」義 「指示・命令」義 「相互作用」義 「話題終了」義 「事象継続」義 「任意列挙」義
(「肯定・決定・確定・確認」義) ¹ 「変化」義 「出現」義 「実現」義 「発生」義	「新情報」義 「旧情報」義 「注意」義 「充足」義 「過度」義 「前提」義 「結論」義 「婉曲」義 「報告」義 「解説」義

第4章から第13章までは、“了2”の行為域、認識域、言語域の意味に関する意味概念、意味属性、意味関係を論じた。

本章は、第3章から第13章までの論述に基づいて、表1の内容を直して充実させた上で、“了2”の意味体系を改めて次の表2が示すように確立する。

表2 “了2”の意味体系

言語的意味(言内の意味)		語用論的意味(言外の意味)
①内包的意味		①内包的意味から派生する語用論的意味
「転換」義・「転換」スキーマ (量的変化以来の状態の「最大値」と 質的变化以降の状態の「起動」)		「話題終了」義 「事象継続」義 「充足」義 「過度」義 「前提」義 「結論」義
②外延的意味	⇨	②外延的意味から派生する語用論的意味
「変化」義		「対話者共有情報修正」義 進行相の意味 持続相の意味 「新情報」義 「婉曲」義
「出来事生起」義 (過去時制の意味 ²⁾)		起動相の意味 完了相の意味 結果相の意味 「新情報」義
「再肯定・再否定」義		「任意列挙」義 「旧情報」義
「要聴」義		「対話者共有情報修正」義 「聞き手の反応の期待」義 「指示・命令」義 「新情報」義 「報告」義 「解説」義

また、表2の言語的意味に関する具体的な規定、例えば、意味記述、意味属性、意味関係、

構文的条件などを、次の表3から表6まででまとめる。

表3 “了2”の言語的意味に関する意味記述

	意味記述
「転換」義	<p>①過程性と方向性が内包される「結節点」であり、「起点」、「累加的スキヤニング過程」、「着点・結節点」、「事象進展方向」などの認知的要素から構成される総合的な認知図式である。</p> <p>②具体的には、量的変化以来の状態の「最大値」と質的变化以降の状態の「起動」という2つの意味に分けられる。</p>
「変化」義	<p>①何らかの内容から、“了2”構文³の特定の文成分が指示する「静相」義にすでに変わったという意味である。</p> <p>②具体的には、「……に変わった」、「……になった」、「……という現象/態勢になった」という意味に相当する。</p>
「出来事生起」義	<p>①“了2”構文の述語が指示する出来事がすでに起こったという意味である。</p> <p>②具体的には、「……という出来事が生起した」、「……という出来事が起こった」、「……という出来事があった」という意味に相当する。</p>
「再肯定・再否定」義	<p>①発話者の思考過程を含意する動態として、発話者はある発話をした後、その発話で肯定・否定されている意味論的内容、統語論的内容、語用論的内容、音韻的内容などの任意のカテゴリの内容に対して、再び肯定的・否定的な態度を示すという意味である。</p> <p>②具体的には、ある発話の末尾に添えられる「はい」、「うん」、「そう(なんだ)」などの間投詞やフレーズの意味に相当する。</p>
「要聴」義	<p>①発話を聞くようにと発話者は指示・命令を聞き手に伝えるという意味である。</p> <p>②具体的には、「あなたは私の発話を聞いてください」、「あなたは私の発話に注意してください」、「いいですか」、「あのう」、「ねえ」などの意味に相当する。</p>

表4 “了2”の言語的意味に関する意味属性

	意味属性
「転換」義	①内包性 ②認知的属性 ③「着点」の明示性と「起点」、「累加的スキヤニング過程」、「事象進展方向」の暗示性
「変化」義	①外延性 ②「着点」の明示性と「起点」の暗示性 ③任意文成分指向性 ④省略不可能性 ⑤客観性(命題性・文成分指向性)
「出来事生起」義	①外延性 ②「着点」の明示性 ③述語指向性 ④省略不可能性 ⑤客観性(命題性・文成分指向性)
「再肯定・再否定」義	①外延性 ②「着点」の明示性と「累加的スキヤニング過程」の暗示性 ③省略可能性 ④主観性(モダリティ性・発話者指向性や「再選択」意識)
「要聴」義	①外延性 ②「着点」の明示性と「事象進展方向」の暗示性 ③省略可能性 ④間主観性(モダリティ性・聞き手指向性・相互性や「対話」意識)

表5 “了2”の言語的意味に関する意味関係

外延的意味間の関係	「重なる」関係
	「変化+再肯定・再否定+要聴」義 (聞いてください。……に変化した。はい。)
	「出来事生起+再肯定・再否定+要聴」義 (聞いてください。……という出来事が生起した。はい。)
内包的意味と外延的意味の関係	「再肯定・再否定+要聴」義 (聞いてください。……。はい。)
	「最大察知範囲-直接察知範囲-察知中心」関係
	「転換」義と「変化」義は、最大察知範囲(「転換」スキーマ)と直接察知範囲(「着点」と「起点」)の関係である。
	「転換」義と「出来事生起」義は、最大察知範囲(「転換」スキーマ)と察知中心(「着点」)の関係である。
	「転換」義と「再肯定・再否定」義は、最大察知範囲(「転換」スキーマ)と直接察知範囲(「着点」と「累加的スキヤニング過程」)の関係である。
	「転換」義と「要聴」義は、最大察知範囲(「転換」スキーマ)と直接察知範囲(「着点」と「事象進展方向」)の関係である。

表6 “了2”の行為域の外延的意味を生み出すための構文的条件⁴

	構文的条件
「変化」義	“了2<行為>”構文は、焦点が「過程」義を表す述語または「静相」義を表す文成分に当てられるならば、「変化」義を生み出す。
「出来事生起」義	“了2<行為>”構文は、焦点が「瞬間」義を表す述語に当てられるならば、「出来事生起」義を生み出す。

14.3 先行研究の問題点の振り返り

第2章で洗い出した21の問題点は多岐にわたる。意味に関する問題点もあり、形式に関する問題点もあり、語用論的機能に関する問題点もある。次に、それらの問題点をすべて解決したかどうかを1つずつ再確認する。

問題(1)と問題(19)は本章14.2節で、問題(2)は第3章3.4節で、問題(4)は第6章から第8章までで、問題(5)は第9章で、問題(6)は第4章4.6節、第6章6.3節、第7章7.4節、第8章8.4節で、問題(9)、問題(10)と問題(18)は第13章13.2節で、問題(11)と問題(12)は第13章13.3節で、問題(14)と問題(17)は第10章10.6節で、問題(15)は第11章11.3節、11.5節で、問題(20)は第5章、第12章、第13章13.2節で、問題(21)は第12章12.8節で詳しく説明した。一方、問題(3)、問題(7)、問題(8)、問題(13)、問題(16)という5つの問題はまだ詳しく説明していない。次に、第3章から第13章までの論述に基づいてこの5つの問題を説明する。

問題(3)は「“了2”が[+変化]の意味特徴を表すための前提条件は何であろうか」である。この問題について、第3章3.4節、第10章10.7節の論述に基づいて説明する。第3章3.4節では、“了2”の[+変化]の意味特徴を“了2”の「変化」義と規定した。そのため、問題(3)は、「“了2”が『変化』義を表すための前提条件は何であろうか」という問題に言い換えられる。第10章10.7節では、構文特徴の側面から“了2”が「変化」義を生み出すための前提条件を提起した。それは、「“了2<行為>”構文は、焦点が『過程』義を表す述語または『静相』義を表す文成分に当てられるならば、『変化』義を生み出す」ということである。

問題(7)は「過去時制の意味を表す目的で“了2”を用いると、なぜ文の容認度を低下させる可能性があるのか」である。2つの理由が考えられる。まず、第13章13.3節で論じたように、“了2”は“了2<行為>”の「出来事生起」義を表さないと、過去時制の意味も表さない。また、第10章で述べたように、“了2<行為>”構文の焦点が「瞬間」義を表す述語に当てられないと、その“了2”は「出来事生起」義を表さない。このように、“了2<行為>”は、「瞬間」義を表す述語が含まれない文に用いられると、「出来事生起」義を表さないので、過去時制の意味も表さないということが分かる。そのため、「過去時制の意味を表す目的で“了2”を用いる」場合、「瞬間」義を表す述語が含まれない文に“了2”を用いると、その“了2”は過去時制の意味を表さないので、「文の容認度を低下させる」。以上は1つ目の理由であると考えられる。次に、2つ目の理由について説明する。まず、第13章13.3節で論じたように、“了2”は“了2<行為>”の「出来事生起」義を表さないと、過去時制の意味も表さない。また、第10章で述べたように、“了2<行為>”構文の焦点が述語に当てられないと、その“了2”は「出来事生起」義を表さない。さらに、第11章で論じたように、“了2<行為>”構文の述語の焦点位置を奪いやすい文成分がある。こうしてみれば、“了2<行為>”は、述語の焦点位置を奪いやすい文成分が含まれる文に用いられると、「出来事生起」義を表し難くなり、過去時制の意味も表し難くなるということが分かる。そのため、「過去時制の意味を表す目的で“了2”を用いる」場合、述語の焦点位置を奪いやすい文成分が含まれる文に“了2”を用いると、その“了2”は過去時制の意味を表し難くなるので、「文の容認度を低下させる」。

問題(8)は「非中国語母語話者にとって、もし“了2”構文以外の文脈的要素を考慮せずに“了2”を用いて過去時制の意味を表そうとすれば、何に注意しなければならないのか」である。「“了2”を用いて過去時制の意味を表そうとすれば」、問題(7)を分析したように、“了2”構文には「瞬間」義を表す述語が含まれるということを確認する必要がある。他、述語の焦点位置を奪いやすい文成分が含まれないということを確認する必要がある。この2つの確保に注意しなければならない。

問題(13)は「“了2”の三域の意味を生み出すための構文的条件は何であろうか」である。第9章9.3節で論じたように、どのような場合においても“了2”は必ず認識域と言語域の意味を同時に表す。言い換えれば、“了2”構文がどのような構文特徴を備えても必ず認識域と言語域の意味を同時に表す。この結論は、“了2”構文において、認識域と言語域の意味を生み出すための構文的条件は存在しないということの意味する。そのため、問題(13)は、“了2”の行為域の意味である『変化』義と『出来事生起』義を生み出すための構文的条件は何であろうか」という問題に言い換えられる。その構文的条件は第10章10.7節で提起して、第11章で検証した。

問題(16)は『複数の文成分+“了2”』構文が短縮された結果としての『特定の文成分+“了2”』構文において、その『特定の文成分』は一体何によって決められるのであろうか』である。第10章10.6節で論じたように、その「特定の文成分」は意味的焦点(semantic focus)である。そのため、問題(16)は、“了2”構文の意味的焦点は一体何によって決められるのであろうか」という問題に言い換えられる。この問題について、第11章で詳しく説明した。つまり、“了2”構文の意味的焦点は、主に「述語優先」原則、述語の焦点位置を奪いやすい文成分、発話場面という3つの要件によって決められる。

14.4 終わりに

以上、第3章3.5節で提起した“了2”の意味体系の様式に基づいて“了2”の具体的な意味体系を最終的に確立した。また、本論文で構築した“了2”の意味体系は“了2”の諸問題の解決に有効であるということを確認した。

<注>

1. 第3章では、「肯定・決定・確定・確認」義を“了2”の言内の意味・言語的意味として位置づけるか、それとも、“了2”の言外の意味・語用論的意味として位置づけるかはまだ未確定であった。そのため、第3章ではとりあえず()をつけてその特殊性を示した。
2. 第13章13.3節は、時制という文法カテゴリーを時制的意味と時制形式に分けている。時制的意味とは、時間軸における事象時間、参照時間、発話時間の位置関係である。過去時制の意味とは、事象時間が発話時間より早いという時間関係を指す。
3. 本論文は、“了2”が含まれる文を“了2”構文と呼ぶことにする。
4. “了2”の認識域と言語域の外延的意味を生み出すための構文的条件を考察しない理由について、第9章9.4節の説明を参照のこと。

第15章 結論

15.1 文末助詞“了”の意味体系を構築することの重要性

「特別な機能」(特別本领)を持つ助詞“了”は(沈开木 1987:19)、『馬氏文通』から百余年を経てなお多くの研究者を悩ませ続けている」(武村 2016:28)。「“了”の問題を解決するための試みは“了”が指示する時間的關係、モダリティ、ムードなどの側面から行われてきたが、行き詰まっている現状である」¹(张黎 2010:19)。“了”の諸問題は「“了”の基本的意味とその意味機能の拡張」²に由来する可能性が大きいと指摘されている(张黎 2010:18)。また、“了²”の機能や用法などは“了²”の意味と緊密な關係を持つとも指摘されている(何文彬 2013:10-12)。例えば、何文彬(2013:10-12)は次のように説明している。

学者らは特定の側面に絞って“了²”の意味や用法を考察して、ある程度の研究成果を収めているが、全面的な分析が少なく、誤った場合もよくある。そのため、“了²”に対する認識はばらばらであり、食い違った意見も多くある。(中略)また、“了²”の意味と機能を統合して論じるのではなく、(中略)その両者を別々に孤立的に論じる学者がよくいる。そのような論じ方は、“了²”の意味と機能の間に何の關係もなさそうなイメージを与えかねない。例えば、“了²”は何の意味も表さず、単にある文を終止させるために用いられるだけであるという主張がある。このような主張は“了²”の意味と機能の内在的関係を切り離す傾向を示している。(中略)実は、孤立的に“了²”の機能の問題を論じるのではなく、意味と合わせて論じなければならないのである。(中略)なぜならば、ある言語形式の機能、用法、特徴などはその言語形式の主観的意味、客観的意味と密接な關係があるからである³。(何文彬 2013:10-12)

そこで、“了²”の研究現状を打開するに、本論文は意味論の立場から“了²”の各種類の問題を再検討した。本論文は次の筋道で議論を展開した。第1章では、「“了²”の意味体系を原理的に明らかにして非中国語母語話者の“了²”の習得を促進する」という研究目的を述べた。第2章では、1955年から2020年までの“了²”の研究成果とその問題点を全面的に整理した。第2章で洗い出した問題点は多岐にわたる。例えば、動相的問題、時制的問題、焦点的問題、命題的問題、モダリティ的問題、文脈的問題、品詞的問題、文成分的問題、多義的問題、機能的問題、認知的問題、教授法の問題などをカバーしている。第3章では、“了²”の意味体系の様式を提起した。第4章から第13章まででは、第3章で提起した“了²”の意味体系の様式に基づいて“了²”の先行研究の諸問題点を明らかにした。第14章では、“了²”の具体的な意味体系を最終的に確立し、先行研究の諸問題点を解決したかどうかを再確認した。ところで、第3章から第14章までの議論は、本論文で構築した“了²”の意味体系が“了²”の諸問題の説明に有効であるということを示している。そのため、“了²”の意味体系を構築するということが、“了²”の研究現状を打開することに役立つだけでなく、中国語の学習や教育を促進することにも役立つと

考えられる。

15.2 今後の課題

本論文は“了2”の意味体系を構築したが、“了2”に関する研究を深めるために次の5つの課題を今後の研究課題とする必要があると考えられる。

第一に、「出来事生起」義を表す“了2”が「想像文」に用いられることに関する課題である。ここで述べる「想像文」とは、条件文、仮定文、未来のことを想定する文などである。また、ここで「出来事生起」義を表す“了2”を“了2<出来事生起>”と呼ぶことにする。第13章13.3節では、“了2<出来事生起>”は過去時制の意味を表すということを説明したが、その説明は“了2<出来事生起>”が非「想像文」に用いられるという条件のもとに行われたのである。“了2<出来事生起>”は条件文、仮定文、未来のことを想定する文などの「想像文」に用いられると、必ずしも過去時制の意味を表すとは限らない。次の(1)-(3)を考えよう。

- (1) 明天7点的话，我都已经起床了。
(明日の7時なら、私はもう起きているだろう。)
- (2) 待会要是起床了，先个洗澡吧。
(もししばらくしてから起きたら、まずシャワーを浴びてください。)
- (3) 但愿明天7点前我已经起床了。
(明日の7時までにもう起きていることを願う。)

(1)-(3)の“了2”構文⁴はいずれも「起床という『出来事』が『生起』したということを想定した」という意味を伝える。(1)-(3)において、「起床という『出来事』が『生起』した」ということは、あくまでも想定されたことであるので、現実的には「事象時間が発話時間より早い」という時間関係、つまり本論文で述べる過去時制の意味を表さない。英語にも類似的な言語現象がある。次の(4)を考えよう。

- (4) If I were a boy, ……
(もし私が男の子だったら、……)

“were”はもともと過去時制の意味を表す言語形式であるが、(4)が示す仮定文に用いられると、過去時制の意味は表さない。ところで、「想像文」に内包されるモダリティがもともと発話者の認知に直結するものである。そのため、認知意味論や認知類型論の観点から“了2<出来事生起>”と「想像文」の関係を検討することは、“了2”に関する研究を深めることに役立つと考えられる。

第二に、“了2”の文終止の機能に関する課題である⁵。例えば、次の(5a)-(7a)が示すように、「まもなく」という意味を表す助動詞“要”、「とても」という意味を表す副詞“可”、

ポジティブな属性の形容詞を修飾する副詞“太”(とても/なんと)は、常に“要……了”構文、“可……了”構文、“太……了”構文という形で現れる。

- (5) a. 飞机要起飞了。 (守屋 1995:304)
(飛行機はまもなく離陸いたします。) (守屋 1995:304)
b. ?飞机要起飞。
(?飛行機はまもなく離陸いたしまして、……。)
- (6) a. 这本教材可难了! (卢福波 2000:78)
(この教科書はとても難しい!)
b. *这本教材可难。
(*この教科書はとても難しく。)
- (7) a. 太及时了。 (卢福波 2000:76)
(なんとタイミングがちょうどいい。)
b. ?太及时。
(?なんとタイミングがちょうどよくて、……。/?タイミングがよすぎた。)

“了 2”が付与されない(5b)は“飞机要起飞，……。”という不完全な文法形式として扱われやすい。“了 2”が付与されない(6b)は非文として扱われやすい。“了 2”が付与されない(7b)は“太及时，……。”という不完全な文法形式として扱われるか、または、「タイミングがよすぎて、よくない」というネガティブな意味合いを伝える文として扱われる。また、次の(8)が示すように、「動詞+“了 1”+目的語」構文は、構文以外の発話場面が付与されなければ、言い切りにならないという語感を伝えやすいが、“了 2”が付与されれば、言い切りになるという語感を伝えやすいということはしばしば指摘される⁶。

- (8) a. 小王吃了了饭了。 (井上 2010:7)
(王さんはご飯を食べた。)
- b. ?小王吃了了饭。 (井上 2010:7)
(?王さんはご飯を食べたが。)

以上、(5a)-(8a)と(5b)-(8b)を比較すれば分かるように、“了 2”が付与される(5a)-(8a)は文終止するという語感を伝える。ところで、朱庆祥(2019:203-211)は“了 2”の文終止の機能に疑問を抱いている。それでは、“了 2”は果たして文終止の機能を持つのか。また、“了 2”のいわゆる文終止の機能は統語的機能であろうか、それとも語用論的機能であろうか。これらの問題については未だに統一的な説明が与えられていない。そのため、中国語学において、“了 2”の文終止の機能に関する問題は「文終止の謎」とされる(井上 2010:5)。

第三に、談話標識(discourse marker)の構成要素としての“了 2”に関する課題である。

談話標識とは、語用論的標識(pragmatic markers)の1種として、「話し手が主に伝達しようとする発話メッセージ[命題内容]の周辺に位置し、聞き手がその内容を正しく理解するように意味解釈の仕方を合図する標識である」(廣瀬 2020:1, 6)。「談話標識は単一の品詞範疇に収まらず、副詞、前置詞句、接続詞、間投詞(say や look のような動詞由来のもの、okay や right のような形容詞由来のものも含む)、レキシカルフレーズ(I mean のような‘主語+動詞’型、if you like のような節など)と多種多様である」(松尾 2016:11)。例えば、中国語の“好了”(もういい/じゃ)、“对了”(そうだ/あほう)、“算了”(まあいいか)などが談話標識の1種である(李慧敏 2016:88-97)。それでは、“好了”(もういい/じゃ)、“对了”(そうだ/あほう)、“算了”(まあいいか)などの談話標識における“了2”はどのような役割を果たすのか。“了2”の語用論的機能はどのように“好了”(もういい/じゃ)、“对了”(そうだ/あほう)、“算了”(まあいいか)などの談話標識の語用論的機能に関係しているのか。これらの問題に関する研究はまだ深く展開されていない。

第四に、“了2”と“了1”の相違に関する課題である。“了2”と“了1”の使い分けを明らかにすることの難しさについて、武村(2016:28)は次のように述べている。「そもそも同形態の複数種の“了”が存在すること自体、通常の言語学の常識を超えている。時に一文中に複数個の“了”が現れ、時に一個の“了”になり、時に姿を見せなくなる、その神出鬼没ぶりがまず研究者を悩ませる。また、それら“了”の文法的な働きを捉えようとすると、母語話者の語感に照らしても、時に限りなく近似したものとして、時に違ったものとして感じられる、その捉え難さがまた研究者を悩ませる」。本論文は動相という側面から“了2”と“了1”の意味的相違と構文的相違を考察したが、時制、命題的意味、モダリティ的意味、語用論的機能などの側面から“了2”と“了1”の相違を考察する必要もある。

第五に、中国語の“了2”と日本語の「(て)いる」、「た」、「の(だ)」、「から」の比較研究に関する課題である。王学群(2003:51-71、2008:75-90)、高橋(2017:220-245)が指摘するように、中国語の“了2”はしばしば日本語の「(て)いる」、「た」で訳されるが、大竹(2009:306-307)、高橋(2017:220-245)から明らかのように、日本語の「の(だ)」、「から」で訳される場合もある。このように、言語類型論的な視野から中国語の“了2”と日本語の「(て)いる」、「た」、「の(だ)」、「から」の類似点や相違点を考察することは、“了2”に関する研究を深めることに役立つ他に、日本語母語話者の“了2”の習得にも大きく役立つと考えられる。

<注>

1. 原文は、“试图只在时体层面、模态层面或语态层面解决‘了’的问题的尝试是注定不会成功的”である。
2. 原文は、“‘了’的基本语义及其语义功能的扩张”である。
3. 原文は、“学者们多观察和研究‘了2’在特定范围内的意义和用法，取得了很多研究成果，但也因各执一端，或以偏概全，我们对它的认识还是零散的、片面的，甚至是分歧的。(中略)有些学者一方面概括‘了2’的意义，另一方面指出它有什么功能，(中略)但往往没有将二者结合起来，好像那些功能与意义无关一样，经常说有的‘了2’没什么意义，只是为了完足一个句子才用它，似乎完句是说话人的目的。这种做法其实是将意义和功能割裂开来。(中略)不能孤立地讨论‘了2’的功能问题，而要与意义分析结合起来，(中略)一个符号形式有什么功能，用法上有什么特点，不是天生的，而是与其主客观

意义密切相关的”である。

4. 本論文は、“了2”が含まれる文を“了2”構文と呼ぶことにする。
5. 詳細については、Li 他(1982:117-138)、大石(1982:32-36)、吕文华(1983:30-39)、王艾录(1987:13-15)、竟成(1993:52-57)、卢英顺(1993:22-24)、守屋(1995:260)、武果・吕文华(1998:13-21)、吕叔湘(1999:351)、刘月华他(2001:384-386)、下地(2002:77-96)、卢福波(2002:109-118)、劉綺紋(2006:173-195)、井上(2010:5-8)、黄伯荣・廖序东(2012:32)、何文彬(2013:10-18)などを参照のこと。
6. 詳細については、吕文华(1983:30-39)、卢英顺(1993:22-24)、守屋(1995:260)、吕叔湘(1999:351-353)、劉綺紋(2006:173-195)、井上(2010:5-8)などを参照のこと。

参考文献

1 中国語の文献(アルファベット順)

- 毕娇娇(2015),〈句法格式“NP了”和“都NP了”之比较〉,兰州文理学院学报编辑委员会(編),《兰州文理学院学报》第4期,74-78页。
- 毕罗莎(2017),〈再论现代汉语动词前后处所介词词组的句法关系〉,中国人民解放军外国语学院学报编辑委员会(編),《解放军外国语学院学报》第5期,55-62页。
- 边勤奋(1996),〈关于“了1”和“了2”〉,浙江师范大学学报编辑委员会(編),《浙江师范大学学报》第3期,118-121页。
- 曹道根·许凌春(2017),〈“真”无时态语言研究〉,中国社会科学院语言研究所(編),《当代语言学》第1期,93-121页。
- 陈国良(2015),〈浅论汉语时制问题的纷争〉,吉林省教育学院学报编辑委员会(編),《吉林省教育学院学报》第4期,129-130页。
- 陈莉·潘海华(2017),〈现代汉语“不”和“没”的对立关系研究〉,同济大学学报编辑委员会(編),《同济大学学报》第1期,104-113页。
- 陈立民(2002),〈汉语的时态和时态成分〉,华中科技大学语言研究编辑委员会(編),《语言研究》第3期,14-31页。
- 陈鹏飞(2007),〈组合功能变化与“了”语法化的语音表现〉,河南省社会科学界联合会(編),《河南社会科学》第2期,138-140页。
- 陈平(1988),〈论现代汉语时间系统的三元结构〉,中国社会科学院语言研究所(編),《中国语文》第6期,401-421页。
- 陈前瑞(2005),〈句尾“了”将来时间用法的发展〉,北京语言大学语言教学与研究编辑委员会(編),《语言教学与研究》第1期,66-73页。
- 陈前瑞·胡亚(2016),〈词尾和句尾“了”的多功能模式〉,北京语言大学语言教学与研究编辑委员会(編),《语言教学与研究》第4期,66-74页。
- 陈前瑞·王继红(2012),〈从完成体到最近将来时——类型学的罕见现象与汉语的常见现象〉,世界汉语教学学会(編),《世界汉语教学》第2期,158-174页。
- 陈前瑞·吴继章(2019),〈从方言语音看“了”的功能演化〉,华中师范大学汉语学报编辑委员会(編),《汉语学报》第2期,48-60页。
- 陈荣杰(2005),〈副词“就”和“才”之比较〉,和田师范专科学校学报编辑委员会(編),《和田师范专科学校学报》第3期,136-138页。
- 陈小红(2007),〈“了1”、“了2”语法意义辨疑〉,北京语言大学语言教学与研究编辑委员会(編),《语言教学与研究》第5期,54-60页。
- 陈小红(2010),〈论“了2”不独现〉,延边大学汉语学习编辑委员会(編),《汉语学习》第3期,54-63页。
- 陈小红(2011),〈“了1”、“了2”的句法位置〉,南阳师范学院学报编辑委员会(編),《南阳师范学院学报》第4期,48-51页。
- 陈新仁(2015),〈语义学与语用学的分界:一种新方案〉,北京外国语大学外语教学与研究编辑委员会(編),《外语教学与研究》第6期,838-849页。
- 陈振宇(2006),《现代汉语时间系统的认知模型与运算》,上海復旦大学博士学位論文。
- 戴耀晶(1997),《现代汉语时体系统研究》,浙江:浙江教育出版社。
- 邓隽(2010),〈语境制约 顺势而用——从语用学视角管窥“了2”意义〉,黑龙江大学外语学刊编辑委员会(編),《外语学刊》第4期,74-77页。

- 邓思颖(2013),〈再谈“了2”的行、知、言三域——以粤语为例〉,中国社会科学院语言研究所(編),《中国语文》第3期,195-200页。
- 邓宇阳(2019a),〈重新探讨行域层面的句末助词“了”的语义及其生成机制〉,新潟大学大学院现代社会文化研究科「言語研究」プロジェクト(編),『言語研究』第4号,42-54頁。
- 邓宇阳(2019b),〈“了2(知)”的语义及其相关的语用功能〉,日本中国語学会(編),『日本中国語学会第69回全国大会予稿集』,297-301頁。
- 邓宇阳(2020a),〈从行、知、言三域的角度看句末助词“了”的时态问题〉,新潟大学大学院现代社会文化研究科「言語研究」プロジェクト(編),『言語研究』第5号,27-33頁。
- 邓宇阳(2020b),〈“了2”的内涵义及其意象图式〉,中国語文法研究会(編),『中国語文法研究』第9期,136-153頁。
- 邓宇阳(2021),〈言域句末助词“了”的语义表述〉,北京国际汉字研究会(編),《汉字文化》,(掲載決定)。
- 丁声树·吕叔湘·李荣·孙德宣·管燮初·傅婧·黄盛璋·陈治文(編)(1999),《现代汉语语法讲话》,北京:商务印书馆。
- 杜世洪·Cummins(2011),〈连贯是一个语言哲学问题——四十年连贯研究的反思〉,上海外国语大学学报编辑委员会(編),《外国语》第4期,83-92頁。
- 方霁(2000),〈“了1”、“了2”的定位〉,陆俭明(編),《面临新世纪挑战的现代汉语语法研究》,577-585頁,山东:山东教育出版社。
- 方梅(2016),〈北京话语气词变异形式的互动功能——以“呀、哪、啦”为例〉,北京语言大学语言教学与研究编辑委员会(編),《语言教学与研究》第2期,60-66頁。
- 高名凯(1986),《汉语语法论》,北京:商务印书馆。
- 高顺全(2006),〈从语法化的角度看语言点的安排——以“了”为例〉,北京语言大学语言教学与研究编辑委员会(編),《语言教学与研究》第5期,60-66頁。
- 龚千炎(1994),〈现代汉语的时间系统〉,世界汉语教学学会(編),《世界汉语教学》第1期,1-6頁。
- 顾阳(2007),〈时态、时制理论与汉语时间参照〉,徐州师范大学语言所(編),《语言科学》第4期,22-38頁。
- 郭春贵(2010),〈“了”的病句倾向——日本学习者常见的错误——〉,中国語教育学会(編),『中国語教育』第8号,39-45頁。
- 郭锐(2008),〈语义结构和汉语虚词语义分析〉,世界汉语教学学会(編),《世界汉语教学》第4期,5-15頁。
- 郭锐(2015),〈汉语谓词性成分的时间参照及其句法后果〉,世界汉语教学学会(編),《世界汉语教学》第4期,435-449頁。
- 何洪峰(1998),〈论“NA了”结构〉,黄冈师范学院学报编辑委员会(編),《黄冈师专学报》第2期,63-66頁。
- 何伟·马瑞芝(2011),〈现代汉语时间系统研究综述〉,北京科技大学学报编辑委员会(編),《北京科技大学学报》第1期,19-27頁。
- 何文彬(2013),〈论语气助词“了”的主观性〉,华中科技大学语言研究编辑委员会(編),《语言研究》第1期,10-18頁。
- 何自然·吴亚欣(2001),〈语用学概略〉,中国人民解放军国际关系学院外语研究编辑委员会(編),《外语研究》第4期,10-16頁。
- 洪波(1995),〈从方言看普通话“了”的功能和意义〉,安庆师范大学学报编辑委员会(編),

- 《安庆师范大学学报》第1期, 10-22页。
- 胡建刚(2007), 〈主观量度和“才”“都”“了2”的句法匹配模式分析〉, 世界汉语教学学会(编), 《世界汉语教学》第1期, 72-81页。
- 胡清国(2003), 〈“不V了”格式的句法语义分析〉, 内蒙古师范大学学报编辑委员会(编), 《内蒙古师范大学学报》第6期, 99-104页。
- 黄伯荣·廖序东(2011), 《现代汉语(增订五版下册)》, 北京:高等教育出版社。
- 黄瓚辉(2016), 〈“了2”对事件的存在量化及标记事件焦点的功能〉, 世界汉语教学学会(编), 《世界汉语教学》第1期, 42-58页。
- 贾红霞(2003), 〈口语结构“NP+时量短语+了”语义分析〉, 教育部语言文字应用研究所(编), 《语言文字应用》第4期, 112-119页。
- 金立鑫(1998), 〈试论“了”的时体特征〉, 北京语言大学语言教学与研究编辑委员会(编), 《语言教学与研究》第1期, 105-119页。
- 金立鑫(1999), 〈现代汉语“了”研究中“语义第一动力”的局限〉, 延边大学汉语学习编辑委员会(编), 《汉语学习》第5期, 1-5页。
- 金立鑫(2003), 〈“S了”的时体意义及其句法条件〉, 北京语言大学语言教学与研究编辑委员会(编), 《语言教学与研究》第2期, 38-48页。
- 金立鑫·杜家俊(2014), 〈“就”与“才”主观量对比研究〉, 徐州师范大学语言所(编), 《语言科学》第2期, 140-153页。
- 金立鑫·邵菁(2010), 〈Charles N. Li等“论汉语完成体标记词‘了’的语用驱动因素”中某些观点商榷〉, 中国社会科学院语言研究所(编), 《当代语言学》第4期, 319-325页。
- 金立鑫·于秀金(2013), 〈“就/才”句法结构与“了”的兼容性问题〉, 延边大学汉语学习编辑委员会(编), 《汉语学习》第3期, 3-14页。
- 竟成(1993), 〈关于动态助词“了”的语法意义问题〉, 山西省社会科学院语文研究编辑委员会(编), 《语文研究》第1期, 52-57页。
- 木村英樹(1983), 〈关于补语性词尾“着/zhe/”和“了/le/”〉, 山西省社会科学院语文研究编辑委员会(编), 《语文研究》第2期, 22-30页。
- 孔令达(1990), 〈“了1”句与“了2”句的语义比较——兼论现代汉语动态助词研究的方法〉, 安徽师范大学学报编辑委员会(编), 《安徽师范大学学报》第1期, 101-108页。
- 黎莉·胡弢(2004), 〈试析“V+了1+NP”和“V+了1+NP+了2”的时间性特征〉, 江西教育学院学报编辑委员会(编), 《江西教育学院学报》第6期, 126-128页。
- 黎天睦(1987), 《现代外语教学法理论与实践》, 北京:北京语言学院出版社。
- 李大忠(1996), 《外国人学汉语语法偏误分析》, 北京:北京语言大学出版社。
- 李福印(2007), 〈意象图式理论〉, 四川外语学院学报编辑委员会(编), 《四川外语学院学报》第1期, 80-85页。
- 李慧敏(2016), 〈影响话语标记功能及其主观性构建的因素研究——以“X了”类话语标记为例〉, 北京语言大学语言教学与研究编辑委员会(编), 《语言教学与研究》第5期, 88-97页。
- 李洁(2009), 〈具有延续义的“S+了2”句式及相关问题〉, 绍兴文理学院学报编辑委员会(编), 《绍兴文理学院学报》第2期, 89-93页。
- 李临定(1990), 《现代汉语动词》, 北京:中国社会科学出版社。
- 李思沅(2019), 〈“了”的准触发状态标记分析〉, 曲阜师范大学现代语文编辑委员会(编), 《现代语文》第10期, 64-68页。
- 李铁根(2002), 〈“了”、“着”、“过”与汉语时制的表达〉, 华中科技大学语言研究编辑委员

- 会(編),《语言研究》第3期,1-13页。
- 李文山(2011),〈焦点敏感副词与“了2”同现的语义条件〉,北京语言大学语言教学与研究编辑委员会(編),《语言教学与研究》第5期,104-108页。
- 李亚辉(2010),〈从 Talmy 的认知语义学看汉语的屈折变化〉,牡丹江大学学报编辑委员会(編),《牡丹江大学学报》第8期,26-28页。
- 刘晨(2015),〈语境对“NP了”句式的影响——是否任意的NP都可进入“NP了”句式〉,淮海工学院学报编辑委员会(編),《淮海工学院学报》第1期,51-53页。
- 刘丹青(1995),〈语义优先还是语用优先〉,山西省社会科学院语文研究编辑委员会(編),《语文研究》第2期,10-15页。
- 刘晋(2014),《英汉形容词的概念化及其对句法的影响》,湖南師範大学博士学位論文。
- 刘珍秀(2020),〈浅析“了1”“了2”的意义及用法〉,中国民族文化艺术基金会(編),《中国民族博览》第8期,92-93页。
- 刘勋宁(1998),《现代汉语语言研究》,北京:北京语言文化大学出版社。
- 刘勋宁(2002),〈现代汉语句尾“了”的语法意义及其解说〉,世界汉语教学学会(編),《世界汉语教学》第3期,70-79页。
- 刘勋宁(2010),〈一个“了”的教学方案〉,中国語教育学会(編),『中国語教育』第8号,18-38页。
- 刘娅琼(2016),〈现场讲解中用于交互的句尾“了”〉,中国社会科学院语言研究所(編),《中国语文》第6期,665-677页。
- 刘月华·潘文娉·故鞞(2001),《实用现代汉语语法》,北京:商务印书馆。
- 龙果夫(1958),《现代汉语语法研究》,北京:科学出版社。
- 娄雅楠(2016),〈浅谈现代汉语语气词“了”〉,内蒙古师范大学语文学刊编辑委员会(編),《语文学刊》第9期,55-56页。
- 卢福波(2002),〈重新解读汉语助词“了”〉,南开大学文学院语言学刊编辑委员会(編),《南开语言学刊》第1期,109-118页。
- 卢英顺(1993),〈试论“这本书我看了三天了”的延续性问题〉,延边大学汉语学习编辑委员会(編),《汉语学习》第4期,22-24页。
- 卢英顺(2012),〈从凸显看“了”的语法意义问题〉,延边大学汉语学习编辑委员会(編),《汉语学习》第2期,23-29页。
- 陆方喆(2014),〈基于语料库的助词“了”研究〉,宁波大学学报编辑委员会(編),《宁波大学学报》第4期,43-47页。
- 陆俭明(2013),《现代汉语语法研究教程(第四版)》,北京:北京大学出版社。
- 陆士宇(2007),〈“N了”句式的认知解释〉,四川职业技术学院学报编辑委员会(編),《四川职业技术学院学报》第1期,45-46页。
- 吕叔湘(1982),《中国语法要略》,北京:商务印书馆。
- 吕叔湘(1999),《现代汉语八百词(增订本)》,北京:商务印书馆。
- 吕叔湘(2002),《吕叔湘语文论集第7卷》,辽宁:辽宁教育出版社。
- 吕为光(2007),〈“了”的“有界”功能〉,湖北经济学院学报编辑委员会(編),《湖北经济学院学报》第3期,147-149页。
- 吕文华(1983),〈“了”与句子语气的完整及其它〉,北京语言大学语言教学与研究编辑委员会(編),《语言教学与研究》第3期,30-39页。
- 吕文华(2010),〈“了”的教学三题〉,世界汉语教学学会(編),《世界汉语教学》第4期,548-556页。
- 马希文(1982),〈关于动词“了”的弱化形式/·lou/〉,《中国语言学报》第1期。[吉川雅

- 之·張勤(記)(2001),「動詞『了』の弱化形式/·lou/について」,于康·張勤(編),『テンスとアスペクト(II)』,1-30頁,東京:好文出版社。]
- 三宅登之(2011),〈试析“V了O”、“VO了”与“V了O了”在语料中的分布情况〉,東京外国語大学紀要編集委員会(編),『東京外国語大学論集』第82号,123-140頁。
- 望月圭子(2000),〈汉语里的“完成体”〉,延边大学汉语学习编辑委员会(編),《汉语学习》第1期,12-16頁。
- 年玉萍(2009),〈探析“NP了”的语法、语义、语用特征〉,宝鸡文理学院学报编辑委员会(編),《宝鸡文理学院学报》第2期,79-81頁。
- 庞加光(2014),〈论“NP了”格式:构式的视角〉,北京语言大学语言教学与研究编辑委员会(編),《语言教学与研究》第2期,52-60頁。
- 彭兰玉·吴青峰(2006),〈从语言习得文本看“了”的语法限制〉,大庆师范学院学报编辑委员会(編),《大庆师范学院学报》第1期,102-105頁。
- 彭利贞(2005),《现代汉语情态研究》,上海復旦大学博士学位論文。
- 彭利贞(2009),〈论一种对情态敏感的“了2”〉,中国社会科学院语言研究所(編),《中国语文》第6期,506-517頁。
- 彭利贞(2011),《从语义到语法》,北京:中国社会科学出版社。
- 彭淑莉(2011),〈单音节光杆动词“被”字句的习得考察及教学建议〉,洛阳理工学院学报编辑委员会(編),《洛阳理工学院学报》第6期,89-92頁。
- 彭小川·周芍(2005),〈也谈“了2”的语法意义〉,黑龙江省社会科学界联合会(編),《学术交流》第1期,136-141頁。
- 彭小红·侯菲菲(2012),〈说汉语儿童早期“了”字句习得个案研究〉,哈尔滨学院学报编辑委员会(編),《哈尔滨学院学报》第4期,82-85頁。
- 朴珉娥·袁毓林(2019),〈汉语是一种“无时态语言”吗?〉,中国社会科学院语言研究所(編),《当代语言学》第3期,438-450頁。
- 祁峰(2012),《现代汉语焦点研究》,上海復旦大学博士学位論文。
- 齐沪扬(2003),〈语气词“的”、“了”的虚化机制及历时分析〉,忻州师范学院学报编辑委员会(編),《忻州师范学院学报》第2期,30-36頁。
- 饶宏泉(2018),〈从篇章时间推进看句末“了”的时体属性〉,延边大学汉语学习编辑委员会(編),《汉语学习》第3期,74-82頁。
- 任永军(2010),〈汉语意合问题研究述略〉,延边大学汉语学习编辑委员会(編),《汉语学习》第3期,64-71頁。
- 尚新(2004),《语法体的内部对立与中立化——英汉语对比研究》,華東師範大学博士学位論文。
- 邵敬敏(2020),〈创建语义分析为主的汉语语法国际教学新体系〉,暨南大学华文教育研究所(編),《华文教学与研究》第2期,1-5頁。
- 沈家煊(2003),〈复句三域“行、知、言”〉,中国社会科学院语言研究所(編),《中国语文》第3期,195-204頁。
- 沈家煊(2008),〈三个世界〉,北京外国语大学外语教学与研究编辑委员会(編),《外语教学与研究》第6期,403-408頁。
- 沈开木(1987),〈“了2”的探索〉,北京语言大学语言教学与研究编辑委员会(編),《语言教学与研究》第2期,4-19頁。
- 沈彤彤(2018),〈“不”与程度副词在形容词前共现情况的分析〉,曲阜师范大学现代语文编辑委员会(編),《现代语文》第8期,73-77頁。
- 生为·刘振前(2019),〈论现代汉语“了2”的时制功能——从“NP了”的“推移性”谈起〉,

- 湖北大学学报编辑委员会(編),《湖北大学学报》第6期,127-134页。
- 石定栩·胡建华(2006),〈“了2”的句法语义地位〉,中国语文杂志社(編),《语法研究和探索(第13辑)》,94-112页,北京:商务印书馆。
- 石毓智(2015),《汉语语法》,北京:商务印书馆。
- 史冠新(2011),〈再论“了2”不是语气词〉,山东省社会科学界联合会(編),《山东社会科学》第12期,157-160页。
- 史有為(2002),〈对“了1”的再認識〉,日中对照言語学会(編),『日本語と中国語のAspect』,145-158頁,東京:白帝社。
- 史有為(2016),〈围绕“了”的方法论思考——兼议二语教学方法〉,上海师范大学对外汉语研究编辑委员会(編),《对外汉语研究》第2期,109-129页。
- 束定芳(2008),《认知语义学》,上海:上海外语教育出版社。
- 税昌锡(2012),〈基于事件过程结构的“了”语法意义新探〉,华中师范大学汉语学报编辑委员会(編),《汉语学报》第4期,44-58页。
- 税昌锡·胡云晚(2020),〈“完结”与“起始”——“了”到底表示什么时体义?〉,徐州师范大学语言所(編),《语言科学》第2期,192-206页。
- 宋绍年·李晓琪(2000),〈汉语动态助词“了”研究的回顾与前瞻〉,陆俭明(編),《面临新世纪挑战的现代汉语语法研究》,562-567页,山东:山东教育出版社。
- 杉村博文(2009),〈事件脚本和“了2”的用法表述〉,上海师范大学对外汉语研究编辑委员会(編),《对外汉语研究》第1期,1-12页。
- 孙大星(2018),〈现代汉语句末语气词“了”的研究历程〉,贵州工程应用技术学院学报编辑委员会(編),《贵州工程应用技术学院学报》第1期,93-102页。
- 孙宏林(1996),〈由“V有”构成的存在句〉,世界汉语教学学会(編),《世界汉语教学》第2期,21-29页。
- 孙汝建(2005),〈句末语气词的四种语用功能〉,南通大学学报编辑委员会(編),《南通大学学报》第2期,76-80页。
- 孙瑞(2012),〈副词“在”与助词“着”语义分析〉,郑州大学语文知识编辑委员会(編),《语文知识》第4期,44-46页。
- 孙英杰(2006),《现代汉语体系统研究》,北京語言大学博士学位論文。
- 谭傲霜(1999),〈汉语虚词隐现的制约因素〉,世界汉语教学学会(編),《世界汉语教学》第2期,53-62页。
- 谭春健(2003),〈如何体现“变化”——关于句尾“了”理论语法与教学语法的接口〉,北京语言大学语言教学与研究编辑委员会(編),《语言教学与研究》第3期,73-80页。
- 谭春健(2004),〈句尾“了”构成的句式、语义及语用功能〉,延边大学汉语学习编辑委员会(編),《汉语学习》第2期,26-31页。
- 谭春健·赵刚(2005),〈“NP+了”的解释及教学策略〉,云南师范大学学报编辑委员会(編),《云南师范大学学报》第1期,16-20页。
- 町田茂(2019),〈现代汉语中[直接性][当场性][现实性]特征与语法规则的相互作用〉,現代中国語研究会(編),《現代中国語研究》第21期,46-62页。
- 佟福奇(2015),〈论“都+NP+了”构式的语义实现〉,云南师范大学学报编辑委员会(編),《云南师范大学学报》第6期,46-51页。
- 佟一·罗米良(2016),〈运用舞台模型理论试论汉语“了”的功能〉,华东理工大学出版社汉日语言对比研究论丛编辑委员会(編),《汉日语言对比研究论丛》第1期,94-105页。
- 王艾录(1987),〈说“了2”〉,延边大学汉语学习编辑委员会(編),《汉语学习》第6期,13-15页。

- 王灿龙(2012),〈再论“没(有)”与“了”共现的问题——“没下雨了”与“不下雨了”之比较分析〉,延边大学汉语学习编辑委员会(編),《汉语学习》第1期,15-24页。
- 王冬梅·姜炫先(2015),〈从肯定和叙述的角度看副词“就、才”和句末“了、的”的共现〉,北京语言大学语言教学与研究编辑委员会(編),《语言教学与研究》第6期,45-52页。
- 王光全·柳英绿(2006),〈同命题“了”字句〉,延边大学汉语学习编辑委员会(編),《汉语学习》第3期,25-30页。
- 王洪君·李榕·乐耀(2009),〈“了2”与话主显身的主观近距交互式语体〉,北京大学汉语语言学研究中心(編),《语言学论丛(第40辑)》,312-333页,北京:商务印书馆。
- 王会琴(2009),〈“NP+了”结构语义分析〉,平顶山学院学报编辑委员会(編),《平顶山学院学报》第6期,101-104页。
- 王继红·陈思佳(2017),〈清代子弟书时体助词“了”“着”及其混用现象〉,北京外国语大学中国语言文学学院人文丛刊编辑委员会(編),《人文丛刊》第1期,36-50页。
- 王力(1980),《汉语史稿》,北京:中华书局。
- 王力(1984),《中国语法理论》,山东:山东教育出版社。
- 王力(1985),《中国现代语法》,山东:山东教育出版社。
- 王珊珊(2014),〈陈述句末“了”能否省略情形考察〉,河北教育出版社教育教学论坛编辑委员会(編),《教育教学论坛》第31期,138-139页。
- 王松茂(1981),〈汉语时体范畴论〉,齐齐哈尔师范学院学报编辑委员会(編),《齐齐哈尔师范学院学报》第3期,65-76页。
- 王伟(2006),《现代汉语“了”的句法语义定位》,中国社会科学院研究生院博士学位論文。
- 王巍(2010),《语气词“了”的隐现规律研究》,吉林大学博士学位論文。
- 王维贤(1997),《现代汉语语法理论研究》,北京:语文出版社。
- 王学群(2003),〈說“了”〉,大東文化大学語学教育研究所(編),『語学教育研究論叢』第20号,51-71頁。
- 王学群(2008),〈試論“了”的共性語法義和語气性〉,大東文化大学語学教育研究所(編),『語学教育研究論叢』第25号,75-90頁。
- 王珏·黄梦迪(2020),〈“了1”和“了2”成句能力的制约因素〉,延边大学汉语学习编辑委员会(編),《汉语学习》第1期,3-13页。
- 王媛(2011),〈“了”的使用机制及教学策略〉,北京语言大学语言教学与研究编辑委员会(編),《语言教学与研究》第3期,17-21页。
- 武果·吕文华(1998),〈“了2”句句型场试析〉,世界汉语教学学会(編),《世界汉语教学》第2期,13-21页。
- 吴凌非(2002),〈论“了1”和“了2”〉,华中科技大学语言研究编辑委员会(編),《语言研究》第1期,23-27页。
- 夏炎青(2017),《现代汉语句末助词“了”的句法语义属性及其对语序的影响》,上海外国语大学博士学位論文。
- 萧国政(2000),〈现代汉语句末“了”意义的析离〉,陆俭明(編),《面临新世纪挑战的现代汉语语法研究》,568-576页,山东:山东教育出版社。
- 肖治野·沈家煊(2009),〈“了2”的行、知、言三域〉,中国社会科学院语言研究所(編),《中国语文》第6期,518-527页。
- 邢福义(1984),〈说“NP了”句式〉,山西省社会科学院语文研究编辑委员会(編),《语文研究》第3期,21-26页。
- 徐晶凝(2008),《现代汉语话语情态研究》,北京:昆仑出版社。
- 徐晶凝(2014),〈叙事语句中“了”的语篇功能初探〉,延边大学汉语学习编辑委员会(編),

- 《汉语学习》第1期, 29-38页。
- 徐晶凝(2016), 〈主观近距交互式书面叙事语篇中“了”的分布〉, 延边大学汉语学习编辑委员会(编), 《汉语学习》第3期, 74-84页。
- 徐烈炯(2017), 〈焦点的不同概念及其在汉语中的表现形式〉, 现代中国語研究会(编), 《现代中国語研究(中国語版)》第2期, 172-190页。
- 薛宏武(2008), 〈对现代汉语“V有”结构的认识问题〉, 华中科技大学学报编辑委员会(编), 《华中科技大学学报》第4期, 103-106页。
- 闫亚平(2016), 〈构式视角下看“X+N/NP+了”中“N/NP”述谓义的获得〉, 西南科技大学学报编辑委员会(编), 《西南科技大学学报》第3期, 57-62页。
- 杨国文(2000), 〈也谈表体助词“了/着/过”及句尾“了”和“呢”〉, 陆俭明(编), 《面临新世纪挑战的现代汉语语法研究》, 594-601页, 山东: 山东教育出版社。
- 杨凯荣(2013), 〈从表达功能看“了”的隐现动因〉, 延边大学汉语学习编辑委员会(编), 《汉语学习》第5期, 31-43页。
- 杨素英·黄月圆(2009), 〈《汉语语气词“了”: 汉语的语篇构造和语用标记》介绍〉, 中国社会科学院语言研究所(编), 《当代语言学》第1期, 69-72页。
- 叶步青(1999), 〈“了”的语法功能及其真实含义〉, 国际汉语教学讨论会(编), 《第六届国际汉语教学讨论会论文选》, 323-329页。
- 叶琼(2014), 〈“第1人称+V+了2”格式的将然语义解读〉, 暨南大学华文教育研究所(编), 《华文教学与研究》第3期, 85-91页。
- 叶友珍(2012), 〈情态助动词的句法结构研究〉, 延安大学学报编辑委员会(编), 《延安大学学报》第2期, 112-117页。
- 于康(1996), 〈命题内成分与命题外成分——以汉语助动词为例〉, 世界汉语教学学会(编), 《世界汉语教学》第1期, 26-33页。
- 乐耀(2011), 〈从人称和“了2”的搭配看汉语传信范畴在话语中的表现〉, 中国社会科学院语言研究所(编), 《中国语文》第2期, 121-131页。
- 岳中奇(1997), 〈“V(了1)-Ct了2”中“了2”的时体功能及其相关动词〉, 延边大学汉语学习编辑委员会(编), 《汉语学习》第3期, 14-17页。
- 岳中奇(2000), 〈“才”、“就”句中“了”的对立分布与体意义的表述〉, 山西省社会科学院语文研究编辑委员会(编), 《语文研究》第3期, 19-27页。
- 臧晓艳(2013), 〈“NP了”的认知构式剖析〉, 曲阜师范大学现代语文编辑委员会(编), 《现代语文》第2期, 60-62页。
- 曾宪正(1997), 〈现代英语动词体系为什么没有将来时〉, 菏泽师范专科学校学报编辑委员会(编), 《菏泽师专学报》第3期, 47-48页。
- 张宝胜(2011), 〈也说“了2”的行、知、言三域〉, 中国社会科学院语言研究所(编), 《中国语文》第5期, 427-429页。
- 张伯江(2018), 《什么是句法学》, 上海: 上海外语教育出版社。
- 张国华(2017), 〈“NP+了”句式表“过程”新探〉, 河北教育出版社教育教学论坛编辑委员会(编), 《教育教学论坛》第17期, 208-209页。
- 张济卿(1998a), 〈论现代汉语的时制与体结构(上)〉, 山西省社会科学院语文研究编辑委员会(编), 《语文研究》第3期, 17-25页。
- 张济卿(1998b), 〈论现代汉语的时制与体结构(下)〉, 山西省社会科学院语文研究编辑委员会(编), 《语文研究》第4期, 18-26页。
- 张杰(2014), 〈助词“了”的语法意义浅析〉, 黑龙江生态工程职业学院学报编辑委员会(编), 《黑龙江生态工程职业学院学报》第4期, 133-134页。

- 张兰英(2005),〈谈谈句末的“了”〉,山东社会科学院东岳论丛编辑委员会(編),《东岳论丛》第6期,132-134页。
- 张黎(2010),〈现代汉语“了”的语法意义的认知类型学解释〉,延边大学汉语学习编辑委员会(編),《汉语学习》第6期,12-21页。
- 张立昌(2014),《汉语完整体“了”结构的时体合成模型》,上海復旦大学博士学位論文。
- 张立昌(2015),〈汉语体标记“了”的话语功能分布研究〉,延边大学汉语学习编辑委员会(編),《汉语学习》第3期,51-59页。
- 张雪辰(2018),〈汉语作为第二语言教学中体标记“了”的研究综述〉,南京师范大学文教委料编辑委员会(編),《文教资料》第23期,30-31页。
- 张秀(1957),〈汉语动词的“体”和“时制”系统〉,《语法论集》第1集。[中川裕三・張勤(訳)(2000),「中国語動詞の『アスペクト』と『テンス』の体系」,于康・張勤(編),『テンスとアスペクト(I)』,1-38頁,東京:好文出版社。]
- 张莹(2012),〈认知视角下的“就”、“才”主观性溯源——兼论“就”、“才”句中“了”的隐现〉,厦门大学海外华文教育编辑委员会(編),《海外华文教育》第1期,39-45页。
- 张豫峰(1996),〈光杆动词句的考察〉,三明大学学报编辑委员会(編),《三明大学学报》第2期,52-56页。
- 张元武・姚漓洁(2018),〈语篇的衔接与连贯性分析〉,安徽科学技术出版社海外英语编辑委员会(編),《海外英语》第3期,176-179页。
- 张云秋・王赛(2009),〈汉语早期儿童时间意识的开始——“了”的习得意味着什么?〉,首都师范大学学报编辑委员会(編),《首都师范大学学报》第1期,119-124页。
- 张志公(1991),《张志公文集(1)汉语语法》,广东:广东教育出版社。
- 赵立江(1997),〈留学生“了”的习得过程考察与分析〉,北京语言大学语言教学与研究编辑委员会(編),《语言教学与研究》第2期,112-124页。
- 中国社会科学院语言研究所词典编辑室(編)(2017),《现代汉语词典(第7版)》,北京:商务印书馆。
- 钟晓路(2020),〈析西班牙语国家汉语学习者“了”的偏误原因〉,六盘水师范学院学报编辑委员会(編),《六盘水师范学院学报》第1期,58-64页。
- 周小兵・欧阳丹(2014),〈日本学习者句末助词“了2”的习得情况考察〉,暨南大学华文教育研究所(編),《华文教学与研究》第4期,8-15页。
- 周一民(2011),〈“NP了”的构式类型和成句条件〉,玉林师范学院学报编辑委员会(編),《玉林师范学院学报》第6期,93-97页。
- 朱德熙(1982),《语法讲义》,北京:商务印书馆。
- 朱庆祥(2019),〈从叙事语篇视角看“了2”的结句(段)问题〉,学林出版社汉语言学新视界编辑委员会(編),《汉语言学新视界》第4期,203-211页。
- 朱彦(2016),〈意象图式与多义体系的范畴化——现代汉语动词“赶”的多义研究〉,中国社会科学院语言研究所(編),《当代语言学》第1期,38-50页。
- 邹海清(2014),〈句尾“了”的语法意义〉,乐山师范学院学报编辑委员会(編),《乐山师范学院学报》第11期,34-45页。

2 日本語の文献(アルファベット順)

- 荒川清秀(1981),「“了”のいる時といらぬ時」,日本中国語学会(編),『中国語学』第228号,70-79頁。
- 荒川清秀(2010),「“了”をいかに教えるか」,中国語教育学会(編),『中国語教育』第8

- 号, 1-17 頁。
- 鄧宇陽(2017), 「必要条件を成立させる機能を果たす文末の“了”について」, 日本中国語学会(編), 『日本中国語学会第 67 回全国大会予稿集』, 243-247 頁。
- 鄧宇陽(2018), 「否定命題“不 V”の視点からみる文末の“了”の使用条件」, 新潟大学大学院現代社会文化研究科「言語研究」プロジェクト(編), 『言語研究』第 3 号, 58-66 頁。
- 鄧宇陽・謝珍(2018), 「“N了”構文における“了”の動的意味及びその語用論的意味について」, 日本中国語学会(編), 『日本中国語学会第 68 回全国大会予稿集』, 233-237 頁。
- 鄧宇陽(2019), 「“了 2”の意味の種類と意味間の関係」, 新潟大学大学院現代社会文化研究科紀要編集委員会(編), 『現代社会文化研究』第 69 号, 117-133 頁。
- 鄧宇陽(2020a), 「現代中国語の文末助詞“了”の研究—行為域における文末助詞“了”の意味の形成メカニズムに関する検証—」, 新潟大学大学院現代社会文化研究科「言語の普遍性と個別性」プロジェクト(編), 『言語の普遍性と個別性』第 11 号, 63-90 頁。
- 鄧宇陽(2020b), 「文末助詞“了”のイメージ・スキーマの確立」, 東アジア文化研究会(編), 『東アジア文化研究』第 9 号, 61-77 頁。
- 鄧宇陽(2020c), 「文末助詞“了”の先行研究の検証」, 新潟大学大学院現代社会文化研究科紀要編集委員会(編), 『現代社会文化研究』第 71 号, 119-136 頁。
- 鄧宇陽(2020d), 「言語域の文末助詞“了”の意味記述に関する精緻化」, 日本中国語学会(編), 『日本中国語学会第 70 回全国大会予稿集』, 102-106 頁。
- 鄧宇陽(2021), 「現代中国語の文末助詞“了”の研究—認識域における文末助詞“了”の意味記述の精緻化—」, 新潟大学大学院現代社会文化研究科「言語の普遍性と個別性」プロジェクト(編), 『言語の普遍性と個別性』第 12 号, 75-90 頁。
- 郭穎侠(2003), 「“是…的”構文の焦点と時制の問題」, 新潟大学大学院現代社会文化研究科紀要編集委員会(編), 『現代社会文化研究』第 27 号, 215-232 頁。
- 廣瀬浩三(2020), 「談話標識研究のエッセンス」, 島根大学外国語教育センター(編), 『島根大学外国語教育センタージャーナル』第 15 号, 1-10 頁。
- 井上優(2010), 「文終止の謎」, 中日理論言語学研究会(編), 『中日理論言語学研究会第 23 回研究会発表論文集』, 5-8 頁。
- 石井友美(2014), 「未来表現“就要～了”“快要～了”について」, お茶の水女子大学中国文学会(編), 『お茶の水女子大学中国文学会報』第 33 巻, 21-38 頁。
- 石塚政行(2015), 「テンス(時制)」, 斎藤純男・田口善久・西村義樹(編), 『明解言語学辞典』, 161 頁, 東京:三省堂。
- 片岡宏仁(2010), 「時制とアスペクト」, 澤田治美・高見健一(編), 『ことばの意味と使用』, 149-160 頁, 東京:鳳書房。
- 加藤宏紀(2006), 「現代中国語の“了 2”の意味機能の集合論モデル」, 神奈川大学言語研究センター(編), 『神奈川大学言語研究』第 29 号, 29-42 頁。
- 木村英樹(2013), 『中国語文法の意味とカタチ—「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究—』, 東京:白帝社。
- 劉綺紋(2006), 『中国語のアスペクトとモダリティ』, 大阪:大阪大学出版会。
- 町田茂(2015), 「現代中国語『動詞+名詞+時間量+“了 2”』構造について」, 山梨大学教育人間科学部紀要編集委員会(編), 『山梨大学教育人間科学部紀要』第 17 巻, 85-91 頁。
- 松本曜(2003a), 「認知意味論とは何か」, 松本曜(編), 『認知意味論』, 3-16 頁, 東京:大修館書店。

- 松本曜(2003b), 「語の意味」, 松本曜(編), 『認知意味論』, 17-72 頁, 東京:大修館書店。
- 松村明(編)(1988), 『大辞林』, 東京:株式会社三省堂。
- 松尾文子(2016), 「『英語談話標識用法辞典 43 の基本ディスコース・マーカー』をめぐって—談話標識をどう記述するか—」, 梅光学院大学国際言語文化学会(編), 『梅光言語文化研究』第7号, 1-18 頁。
- 峯島宏次(2015), 「命題」, 斎藤純男・田口善久・西村義樹(編), 『明解言語学辞典』, 217 頁, 東京:三省堂。
- 三宅登之(2010), 「“了1”と“了2”の相違点とその認知的解釈」, 中国語教育学会(編), 『中国語教育』第8号, 46-66 頁。
- 靱山洋介・深田智(2003a), 「意味の拡張」, 松本曜(編), 『認知意味論』, 73-134 頁, 東京:大修館書店。
- 靱山洋介・深田智(2003b), 「多義性」, 松本曜(編), 『認知意味論』, 135-186 頁, 東京:大修館書店。
- 守屋宏則(1995), 『やさしくくわしい中国語文法の基礎』, 東京:東方書店。
- 鍋島弘治郎(2006), 「認知メタファー理論における知覚レベルと概念レベル:プライマリー・メタファーおよびアナロジーとの関連から」, 日本認知言語学会(編), 『日本認知言語学会論文集』第6巻, 256-265 頁。
- 長屋尚典(2015), 「屈折・派生」, 斎藤純男・田口善久・西村義樹(編), 『明解言語学辞典』, 54 頁, 東京:三省堂。
- 新島淳良(1955), 「“了”について」, 日本中国語学会(編), 『中国語学』第39号, 229-241 頁。
- 野田高広(2015), 「アスペクト(相)」, 斎藤純男・田口善久・西村義樹(編), 『明解言語学辞典』, 4-6 頁, 東京:三省堂。
- 大石敏之(1982), 「“了”と『文終止』について」, 日本中国語学会(編), 『中国語学』第229号, 32-36 頁。
- 大竹芳夫(2009), 『の(だ)に対応する英語の構文』, 東京:くろしお出版。
- 太田辰夫(1958), 『中国語歴史文法』, 東京:江南書院。[蒋绍愚・徐昌华(訳)(2003), 《中国語歴史文法》, 北京:北京大学出版社。]
- 坂原茂(2015), 「形式意味論」, 斎藤純男・田口善久・西村義樹(編), 『明解言語学辞典』, 56 頁, 東京:三省堂。
- 澤田淳・小野寺典子・東泉裕子(2017), 「周辺部研究の基礎知識」, 小野寺典子(編), 『発話のはじめと終わり:語用論的調節のなされる場所』, 3-51 頁, 東京:ひつじ書房。
- 澤田治美(2009), 『モダリティ』, 東京:開拓社。
- 盛文淵・吉本啓・佐藤滋(2006:608-611), 「中国語におけるテンスの解釈—アスペクトとテンスの相関性から—」, 言語処理学会(編), 『言語処理学会年次大会発表論文集』第12巻, 608-611 頁。
- 下地早智子(2002), 「現代中国語におけるアスペクト助詞“了”と『文終止』問題について」, 神戸市外国語大学神戸外大論叢編輯所(編), 『神戸外大論叢』第1号, 77-96 頁。
- 鈴木義昭(1986), 「現代漢語における形容詞+『了』について(1)」, 早稲田大学語学教育研究室(編), 『ILT NEWS』第80号, 52-56 頁。
- 鈴木義昭(1987), 「現代漢語における形容詞+『了』について(2)」, 早稲田大学語学教育研究室(編), 『ILT NEWS』第81号, 83-89 頁。
- 高橋弥守彦(2017), 『中日対照言語学概論—その発想と表現—』, 東京:日本僑報社。

- 高倉克己(1955),『着』『了』について,大阪市立大学文学会(編),『人文研究』第6号,367-376頁。
- 高尾享幸(2003),「メタファー表現の意味と概念化」,松本曜(編),『認知意味論』,187-249頁,東京:大修館書店。
- 武村朝吉(2016),「“了2”について」,沖縄キリスト教学院大学紀要編集委員会(編),『沖縄キリスト教学院大学論集』第12号,28-35頁。
- 鳥井克之(2003),「再論 中国語の統語成分について(下)—中国語教学文法の再構築を目指して—」,関西大学外国語教育研究機構(編),『外国語教育研究』第6号,75-86頁。
- 藤堂明保・相原茂(1985),『中国語概論』,東京:大修館書店。
- 王亜新(2011),『中国語の構文』,東京:アルク。
- 山田陽子(2010),「新情報・旧情報と焦点」,澤田治美・高見健一(編),『ことばの意味と使用』,211-221頁,東京:鳳書房。
- 山本信也(1985),「数学教育における概念形成論の批判的検討」,中国四国数学教育学会(編),『数学教育学研究紀要』第11号,41-46頁。
- 山崎直樹(2010),「“了”の導入—教科書における提示法の検討—」,中国語教育学会(編),『中国語教育』第8号,67-79頁。
- 張文青(2012),「“了”の教授法に関する試み」,立命館アジア太平洋大学立命館アジア太平洋研究センター(編),『ポリグロシア』第22巻,105-122頁。
- 朱継征(2000),『中国語の動相』,東京:白帝社。

3 欧文の文献(アルファベット順)

- Barthes, Roland (1957). *Mythologies*. Paris: Éditions du Seuil. [怀宇(訳)(2005),《罗兰巴特随笔选》,北京:百花文艺出版社。]
- Beeching, Kate and Detges, Ulrich (2014). *Discourse Functions At the Left and Right Periphery: Crosslinguistic Investigations of Language Use and Language Change*. Leiden: Brill Academic Publishers.
- Chang, Vincent Wu-Chang (1987). *The Particle LE in Chinese Narrative Discourse: An Integrative Description*. PhD Dissertation. University of Florida.
- Chao, Yuenren (1948). *Mandarin Primer: An Intensive Course in Spoken Chinese*. Massachusetts: Harvard University Press. [李荣(訳)(1952),《北京口语语法》,北京:开明书店。]
- Chao, Yuenren (1968). *A Grammar of Spoken Chinese*. Berkely: University of California Press. [吕叔湘(訳)(1979),《汉语口语语法》,北京:商务印书馆。]
- Clausner, Timothy and Croft, William (1999). Domains and image schemas. In De Gruyter (Ed.). *Cognitive Linguistics*. No. 1. 1-31.
- Comrie, Bernard (1985). *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Deng, Yuyang (2019). Re-exploring the Sentence-final Particle “LE” in the Propositional Domain, Epistemic Domain and Dialogic Domain. In David Publishing Company (Ed.). *Journal of Literature and Art Studies*. No. 1. 63-68.
- Dewell, Robert (1994). Over again: Image-schema Transformations in Semantic Analysis. In De Gruyter (Ed.). *Cognitive Linguistics*. No. 4. 351-380.
- Engels, Friedrich (1878). *Anti-Dühring*. Leipzig: Vorwärts. [Burns, Emile(訳)(1987). *Anti-Dühring*. Moscow: Progress Publishers.]

- Estes, William (1994). *Classification and Cognition*. Oxford: Oxford University Press.
- Huang, Lillian Meei-jin (1987). *Aspect: A General System and Its Manifestation in Mandarin Chinese*. PhD Dissertation. Rice University.
- Lakoff, George (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press. [池上嘉彦他(訳)(1993), 『認知意味論——言語から見た人間の心』, 東京:紀伊國屋書店。]
- Lakoff, George (1993). The Contemporary Theory of Metaphor. In Ortony, Andrew (Ed.). *Metaphor and Thought*. 202-251. Cambridge: Cambridge University Press.
- Langacker, Ronald (1987). *Foundations of Cognitive Grammar*. California: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald (2008). *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press. [山梨正明(監訳)(2012), 『認知文法論序説』, 東京:研究社。]
- Li, Charles. Thompson, Sandra and Thompson, McMillan (1982). The Discourse Motivation for the Perfect Aspect: The Mandarin Particle LE. In Hopper, Paul (Ed.). *Tense-aspect: Between Semantics & Pragmatic*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. [徐赳赳(訳)(1994), 〈已然体的话语理据:汉语助词“了”〉, 戴浩一·薛凤生(編), 《功能主义与汉语语法》, 117-138 页, 北京:北京语言学院出版社。]
- Lin, Jowang (2003). Temporal Reference in Mandarin Chinese. In Springer Netherlands (Ed.). *Journal of East Asian Linguistics*. No. 3. 259-311.
- Lin, Jowang (2005). Time in a Language Without Tense: The Case of Chinese. In Oxford University Press (Ed.). *Journal of Semantics*. No. 23. 1-53.
- Mandler, Jean (1992). How to Build a Baby: II. Conceptual Primitives. In American Psychological Association (Ed.). *Psychological Review*. No. 4. 587-604.
- Reichenbach, Hans (1947). *Elements of Symbolic Logic*. New York: Free Press.
- Sweetser, Eve (1990). *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantics Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tai, James (1985). Temporal Sequence and Chinese Word Order. In Haiman, John (Ed.). *Typological Studies in Language: Iconicity in Syntax*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. [黄河(訳)(1988), 〈时间顺序和汉语的语序〉, 中国社会科学院语言研究所(編), 《国外语言学》第1期, 10-20 页。]
- Tai, James (1989). Toward a Cognition-based Functional Grammar of Chinese. In Tai, James (Ed.). *Functionalism and Chinese Grammar*. Hong Kong: The Chinese University of Hong Kong Press [叶蜚声(訳)(1991), 〈以认知为基础的汉语功能语法当议(下)〉, 中国社会科学院语言研究所(編), 《国外语言学》第1期, 25-33 页。]
- Traugott, Elizabeth (2003). From Subjectification to Intersubjectification. In Hickey, Raymond (Ed.). *Motives for Language Change*. 124-139. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth (2017). A Constructional Exploration into “clausal periphery” and the Pragmatic Markers that Occur There. 小野寺典子(編), 『発話のはじめと終わり:語用論的調節のなされる場所』, 55-73 頁, 東京:ひつじ書房。
- Vandenberg, Marinus and Wu, Guo (2006). *The Chinese Particle Le: Discourse Construction and Pragmatic Marking in Chinese*. London: Routledge.

謝辞

はじめに、中国語の文末助詞“了”に関する研究を展開している際、主指導先生の朱継征先生から認知言語学的なご指導やご示唆をいただき、副指導先生の大竹芳夫先生と山田陽子先生から本論文の細部までの様々なご指導やご修正をいただき、心より感謝の意を表します。本論文作成中にご意見を賜った他の先生の方々にも心より感謝の意を表します。

また、ロータリー米山奨学会の方々と、兄の鄧宇亮に私の日本留学生生活を経済的に支えていただき、心より感謝の意を表します。

さらに、広東外国語外貿大学日本語学院の陳多友先生に新潟大学留学のチャンスを提供していただき、心より感謝の意を表します。

本論文の作成は自分の力のみでなく、先生の方々、ロータリー米山奨学会の方々、友人のみなさん、家族などの力にも頼ったのであります。将来、学術の道で活躍するという形で恩返ししようと精一杯頑張っていきます。

